令和５年度業務実績報告書

令和６年６月

独立行政法人国立美術館

目　　次

Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置 1
1　美術振興の中心的拠点としての多彩な活動の展開 1
（1）多様な鑑賞機会の提供 1
①　所蔵作品展 1
②　企画展 3
③　国立映画アーカイブの映画上映会・展覧会 6
④　国立西洋美術館本館の活用・公開 7
⑤　地方巡回展等 7
（2）美術創造活動の活性化の推進 9
①　公募団体等への展覧会会場の提供等 9
②　国が顕彰・育成してきた芸術家のための発表機会の提供 9
③　新しい美術の動向や現代作家の積極的な紹介 9
④　国際発信拠点として機能するための運用の見直し 10
（3）美術に関する情報の拠点としての機能の向上 11
①　国立アートリサーチセンターにおける国内美術館所蔵作品等の情報の国内外への発信 11
②　国立美術館所蔵作品等のデジタル化・データベース化、所蔵作品検索システムの充実 12
③　美術情報・資料の収集、レファレンス機能の充実 15
④　我が国現代美術やメディア芸術の国際発信の推進、現存作家の国際発信支援等 17
（4）教育普及活動の充実 18
①　幅広い学習機会の提供及びラーニングコンテンツ等の開発 18
②　ボランティアや支援団体との相互協力等による教育普及事業及び企業や地域等との連携による事業の開発・実施等 21
③　映画フィルム・資料の所蔵作品の活用 23
（5）調査研究の実施と成果の反映・発信 23
①　調査研究一覧 23
②　調査研究成果の発信 26
（6）快適な観覧環境の提供 29
①　高齢者、障がい者、外国人等を含めた入館者本位の快適な観覧環境の形成 29
②　入場料金、開館時間等の弾力化 31
③　キャンパスメンバーズ制度の実施 33
④　ミュージアムショップ、レストラン等の充実 33

2　我が国の近現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示し得るナショナルコレクションの形成・活用・継承 36
（1）作品の収集 36
①　ナショナルコレクションの形成 36
②　所蔵作品の収集に係る取組状況 37
（2）所蔵作品の保管・管理 41
①　収蔵庫等の狭隘・老朽化への対応 41

② 防災対策の推進・充実 42
（３）所蔵作品の修理・修復 43
（４）所蔵作品の貸与 45

３ 我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与 47
（１）国内外の美術館等との連携・協力等 47
① 国内外の研究者の招へいによるシンポジウムの開催等 47
② 我が国の作家、美術作品による展覧会開催のための海外の美術館との連携・協力 48
③ 全国の美術館等との人的ネットワークの形成等 48
④ 国立アートリサーチセンターによる連携・協力 50
（２）ナショナルセンターとしての人材育成 53
① 美術教育の一翼を担うナショナルセンターとしての活動 53
② 今後の美術館活動を担う中核的人材の育成 55
③ 映画保存のニーズに対応した人材育成 57
（３）国内外の映画関係団体等との連携等 58
① 映画フィルム及び映画関連資料の収集 58
② 映画フィルム及び映画関連資料の保管・修復・復元 59
③ 映画フィルム及び映画関連資料の貸与等 60
④ 所蔵フィルム検索システムにおける公開実績 61
⑤ 国内外の映画関係団体等との連携・調整に係る取組状況 61
⑥ 我が国の映画助成システムの改善等に関する協力 61
⑦ 非フィルム資料のアーカイブ化に関する取組 61
⑧ ロケーションデータベースの運営 62
⑨ 情報発信、人材育成に係る機能強化 62

Ⅱ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置 63
１ 業務運営の取組 63
２ 組織体制の見直し 63
３ 契約の点検・見直し 64
４ 共同調達等の取組の推進 65
５ 給与水準の適正化等 65
６ 情報通信技術を活用した業務の効率化 66

Ⅲ 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画等 66
１ 自己収入の確保 66
２ 保有資産の有効利用・処分 66
３ 予算 67
４ 収支計画 68
５ 資金計画 68
６ 貸借対照表 69
７ 短期借入金 69

８　重要な財産の処分等 69
９　剰余金 70

Ⅳ　その他主務省令で定める業務運営に関する事項 71
１　内部統制・ガバナンスの強化 71
２　施設・設備に関する計画 73
３　人事に関する計画 73
４　関連公益法人 75
５　国立アートリサーチセンターの設置 75

別　表 76
凡　例 77
別表１　所蔵作品展 78
別表２　企画展 80
別表３　映画上映会（国立映画アーカイブ） 83
別表４　展覧会（国立映画アーカイブ） 84
別表５　地方巡回展・巡回上映等 84
別表６　公募展示室における展覧会毎の入場者数 85
別表７　展覧会毎の批評・レビューの状況（掲載数及び掲載媒体数） 90
別表８　企画展示室における現代作家を採り上げた展覧会の実施回数及び採り上げた作家の人数 ... 90
別表９　調査研究一覧 91
別表 10　展覧会図録における執筆 102
別表 11　研究紀要における執筆 106
別表 12　館ニュースにおける執筆 107
別表 13　館外の学術雑誌、学会等における調査研究成果の発信 110
別表 14　美術作品購入一覧 142
別表 15　所蔵作品等に関するセミナー・シンポジウムの開催 157
別表 16　シンポジウムの開催等による国内外の優れた研究者等とのネットワークの構築 159

（別紙）独立行政法人国立美術館の役職員の報酬・給与等について

Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1　美術振興の中心的拠点としての多彩な活動の展開

（1）多様な鑑賞機会の提供

第５期（令和３年度～令和７年度）中期目標に定める指標	
指標	・所蔵作品展及び企画展並びに国立映画アーカイブの上映会・展覧会の満足度調査を実施し、「良い」以上の回答率を、前中期目標期間実績と同程度の水準を維持するものとする。 ・国立美術館巡回展の満足度調査を実施し、「良い」以上の回答率を８割程度とする。 ・国立映画アーカイブの優秀映画鑑賞推進事業の満足度調査を実施し、「良い」以上の回答率を８割程度とする。
関連指標	・所蔵作品展及び企画展の入館者数 ・国立映画アーカイブの上映会及び展覧会の入館者数 ・国立美術館巡回展の入館者数／巡回先美術館数 ・国立映画アーカイブの優秀映画鑑賞推進事業の入館者数

※上記指標に係る実績は別表１～５を参照のこと。

多様な鑑賞機会の提供にあたっては、研究成果、利用者のニーズ等を踏まえ、国立美術館ならではの多様な美術作品鑑賞機会を提供するため、魅力ある質の高い所蔵作品展・企画展等を実施した。

①　所蔵作品展

所蔵作品展は、各館の特色を生かし、小企画展・テーマ展として行うものを含め、別表１のとおり積極的に実施した。

各館の取組の特徴は以下のとおりである。

ア　東京国立近代美術館

（本館）

19 世紀末から今日に至る日本の近現代美術の流れをわかりやすく伝えるとともに、部屋ごとにテーマを設けて各時代の美術を新鮮な切り口から提示するよう心がけた。

時宜に適った企画としては「女性と抽象」、「関東大震災から 100 年」、「生誕 100 年大辻清司」などが挙げられ、いずれも好評を得た。またパウル・クレー《黄色の中の思考》、池田蕉園《かえり路》、ジェルメーヌ・リシエ《蟻》など新収蔵作品をいち早くお披露目する特集を組むことで、美術館が生き生きと変化を続ける組織であることを印象づけた。一方で、東山魁夷や芹沢銈介といった重要、人気作家の作品をまとめて小個展形式で紹介する企画、鑑賞プログラムでの長年の実践を活かした企画、継続的に開催してきたアーティスト・トークの記録映像を用いた企画など、長い歴史と蓄積を活かした試みも多数行った。変化と継続性、双方を意識した企画により、当館コレクションの厚みをひろくアピールすることができた。

（国立工芸館）

令和５年度の所蔵作品展は「水」をテーマに、工芸・デザイン作品に表現された水や、水を容れる器の形に注目して国立工芸館所蔵品を中心に紹介した「水のいろ、水のかたち」展を開催した。水は不定形でありながら我々の生活に欠かすことが出来ないものであるため、古来より芸術作品において海や川を始め様々な形や色で描かれ、多くの作家に着想を与え、多岐にわたる技で表現されてきた。とらえどころのないものだからこそ、作家の観察眼によって個性が表れる水の表現を提示した構成であった。さらに花瓶、水差しなど水をいれるために制作された器も展示することで用途とその形にも改めて注目した。また重要文化財《伊賀塁座水指 銘 破袋》の出品がかなったことは館としての経験の蓄積になった。

イ　京都国立近代美術館

令和５年度は京都国立近代美術館開館 60 周年記念ということもあり、多岐にわたる内容で開催した。まずは、京都国立近代美術館が開館時から定期的に開催していた現代美術の動向シリーズを取り上げた企画展に合わせて、「現代美術の動向」展に関連する所蔵作家や作品を紹介した「所蔵品にみる「現代美術の動向」展」や、京都国立近代美術館開館年に開催した「北大路魯山人」展を振り返る「特集：北大路魯山人」と題した展示を行った。走泥社展の会期には走泥社と関わりの深い歴程美術協会を紹介する展示を行い、所蔵作品を中心とした日本画の企画展の会期には国立アートリサーチセンターの事業を活用して東京国立近代美術館から福田平八郎や徳岡神泉らの代表作を借用し、所蔵作品とともに企画展に合わせた内容で展示した。また、2023 年は関東大震災から 100 年の節目に当たるため、関東大震災に関連する作品を特集展示し、2023 年に亡くなった所蔵作家である野村仁の追悼展示も行った。さらに、60 周年企画として、京都国立近代美術館に関する思い出を募集し、それらの投稿に関連する展示も行った。

近年では、京都国立近代美術館の企画展とコレクション展の内容が関連していることへの認識が広まりつつある。

ウ　国立西洋美術館

令和４年度に引き続き、年代順を基本としつつテーマ性も兼ね備えた所蔵作品展示を行うとともに、小展示コーナーCollection in FOCUS を複数設け、令和４年度同様に好評を博した。

常設展示室内では、24～209 点の作品を用いた小企画展を４回開催した。うち１回の「もうひとつの 19 世紀―ブーグロー、ミレイとアカデミーの画家たち」は国内コレクターから極めて良質なブーグロー作品４点の寄託を受けたことが契機となって実現したものであり、国内に所蔵されるコレクションの有効活用という点からも、意義のある展示となった。

エ　国立国際美術館

国立国際美術館の所蔵作品展は、いわゆる所蔵作品が常設展示化されたものではなく、企画展の会期にほぼ応じた会期設定のもと展示替えを行いながら実施している。近年はこれまで以上にテーマ設定を強化し、新たに購入した作品のお披露目や近年の新収作品の積極的な活用を心がけた展示を行なっている。令和５年度は、令和４年度から続いたコンセプチュアル・アートの旗手メル・ボックナーの所蔵作品による特集展示、村上隆の新収作品《727 FATMAN LITTLE BOY》を核にして 80 年代以降の現代美術動向を示す「コレクション１ 80/90/00/10」、同じく新収蔵作品であるルイーズ・ブルジョワの《カップル》を含め身体表現をテーマにした「コレクション２　身体―身体」など、その企画性と構成力により大きな評価を受けることが出来た。また「コレクション１ 80/90/00/10」の開催に際しては、東京国立近代美術館が所蔵する村上隆作品の貸与を受けるなど、法人内での所蔵作品活用の視点からも積極的に行なった。

② 企画展

企画展では、世界の美術の新たな動向を紹介する展覧会や我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介し、国際的な美術動向に位置付ける展覧会、メディアアート等の先端的な展覧会、作家・作品の再発見・再評価、我が国に所在するコレクションの積極的活用を目指した展覧会を、以下の点に留意し、別表２のとおり実施した。

イ　国際的視野に立ち、アジア諸地域を含め海外の主要美術館と連携し、確固たる評価を得ている世界の美術や海外の美術の新たな動向を紹介するとともに、我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介し、国際的な美術動向に位置付ける展覧会等に積極的に取り組む。

ロ　展覧会テーマの設定や他の芸術文化との連携による展示方法等について方向性を提示することに取り組む。

ハ　メディアアート、アニメ、マンガ、デザイン、建築など我が国が世界から注目される新しい領域の芸術表現を積極的に取り上げ、最先端の現代美術への関心を促す。

ニ　国内の美術館と連携し、我が国に所在するコレクションの積極的活用を図る。

ホ　過去の埋もれていた作家・作品・動向の発見や再評価に取り組み、国際的な美術動向に位置付ける展覧会に積極的に取り組む。

各館の取組の特徴は以下のとおりである。

ア　東京国立近代美術館

（本館）

「生誕120年　棟方志功展　メイキング・オブ・ムナカタ」は、ヴェネチア・ビエンナーレのグランプリ受賞作家として、改めて棟方の世界的受容や業績を検証すると共に、木版画の代表作、肉筆襖絵、本の装丁、映像メディア、商業デザインまでを含む広範な分野を一堂に集めた大回顧展となった。富山、青森、東京を軸にした丹念な調査により、棟方志功のローカルかつ国際的な活動を跡付け、日本の近代木版画の拡張と棟方のユニークで多面的な作品の魅力を紹介した。ほぼ門外不出とされている寺院蔵の肉筆襖絵や、約60年ぶりの公開となる3mの大型屏風など、希少性の高い鑑賞機会を提供し、インターネットでも会場画像が広く拡散された。一方、積極的に印刷物と版画の関係を紹介することで、従来の高齢層のみならず、すでに棟方を知らない若年層まで認知を広げることができ、回顧展としての役割を果たすことができた。青森・富山・東京の活動にフォーカスした充実した展覧会カタログを作成し、好評を得た。会期中、国際交流基金のキュレーター研修生や、ジャパン・ソサエティからも来訪があり、その他にも海外の著名なアーティストや美術館長が棟方展の会場写真をSNSに投稿するなど、再び棟方の国際的な評価を高める機会となった。専門家・一般鑑賞者、双方からこの展覧会が高い評価を得たことは成果である。

「中平卓馬　火―氾濫」は、日本写真史における重要性に比べ、現存作品の少なさなどにより、これまで展覧会という形式では十分に検証されてこなかった写真家中平卓馬の没後初の回顧展として、その全体像を示すとともに、今後の中平研究に資する基盤の構築を目指した。展示構成においては、特に展覧会前半部において、当時中平の主要な発表の場であった雑誌等に焦点を当て、時系列に沿って可能な限り網羅的に、実際の刊行物を展示することにより、時代背景を含めた提示を試みた。こうした構成は、展評等においても、あらためて中平の実像に迫るものとして評価を得るとともに、来館者によるSNSを通じた発信でも、多くが充実した展示として言及するなど話題を呼び、会期後半の来館者増へとつながった。またカタログには雑誌等の展示物の多くを収録するとともに、館外の三名の専門家の寄稿を得、文献リスト等の資料編とあわせ、今後の中平研究の基礎的な資料となるべく内容の充実を図った。くわえて、本展は当館が数次にわたって収集してきた中平作品を、構成上重要な位置づけを占める出品物として展示し、これまでの収集活動の成果を示す機会ともなった。

（国立工芸館）

「皇居三の丸尚蔵館収蔵品展　皇室と石川　―麗しき美の煌めき―」は、皇室ゆかりの美術工芸品などを収蔵・展示する皇居三の丸尚蔵館の収蔵品を通じて、皇室と石川とのつながりを紹介し、皇室文化に親しんでいただくことを主眼とした展覧会で、全５章で構成し、石川県立美術館

では、旧加賀藩主前田家から皇室に献上された名品をはじめ、江戸から近代を中心に、県ゆかりの絵画や彫刻、書、刀剣を第1章～3章で展示、国立工芸館では、明治時代以降の工芸を第４章と第５章で特集した。特に国立工芸館では、皇室に伝わった石川県ゆかりの工芸品が多数展示され、なかには献上されてから初めて制作地で公開された作品もあった。いまだ研究が進んでいない分野の名品・優品が公開され、明治期工芸の研究の広がりを具体的な作品をもって示すよい機会となった。

「印刷／版画／グラフィックデザインの断層 1957-1979」は、1957 年から 1979 年まで、東京国立近代美術館や京都国立近代美術館などを会場に開催された「東京国際版画ビエンナーレ展」の出品作や関連資料など 70 点で構成した展覧会となった。同時代の多様な視覚表現のなかに交錯した版画とグラフィックデザインの様相を通して、印刷技術がもたらした可能性と今日的意義を改めて検証するものである。出品作品はすべて国立美術館のコレクションによるもので、歴代の展覧会ポスターなど初めて展示する作品も含んでおり、所蔵館ならではの充実した内容を実現できた。本展では、これまで領域横断的に取り上げることの少なかった版画とグラフィックデザインを包括的に紹介するために、近接し重なり合いながらも決定的なズレのある「印刷」、「版画」、「グラフィックデザイン」の関係性を〈断層〉というキーワードで示した。それぞれの領域の違いを積極的にとらえ直して自在に接続しながら、その差異を強調するような実践が展開された東京国際版画ビエンナーレ展とその時代を広く紹介するとともに、自館で開催した展覧会の意義とその役割を自己検証的に見直す機会ともなった。

イ　京都国立近代美術館

京都国立近代美術館では 1963 年から 1970 年まで「現代美術の動向」展を定点観測的なグループ展シリーズとして 9 回にわたり開催した。これらの展覧会は、国内の美術館が日本の現代美術に焦点をあてて中堅・若手作家を取り上げた先駆的事例であり、当時大きな注目を集めた。日本の戦後現代美術は国内外で注目が高まっており作家の再評価・発掘が進んでいるが、京都や関西を拠点に活動する作家については未だ再検証が進んでいない。「開館 60 周年記念　Re: スタートライン 1963－1970/2023　現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係」では、かつての「現代美術の動向」展出品作を中心に 66 作家で構成し、戦後美術史において重要な位置づけにある作品だけでなく、これまで紹介される機会の少なかった作家や作品を積極的に取り上げた。展覧会の図録には、当時の図録の再録と会場写真や批評記事などアーカイブ資料を多数盛り込んだ。また展覧会終了後に、作家略歴・展示風景のほか、会期中のアーティストトークや講演会の抜粋を収録した記録集を刊行した。これらの展示・刊行物を通して、京都・関西を中心とした 1960 年代美術動向のさらなる研究を促し、東京を中心に進められてきた戦後美術史の記述に対する別の見方を提供することができた。

「開館 60 周年記念　京都画壇の青春―栖鳳、松園につづく新世代たち」では、京都国立近代美術館日本画コレクションを特徴づけている明治末から大正、昭和初めにかけての京都画壇の若手の作品を中心に、中堅・ベテランの作品も交えて紹介した。2020 年に若手研究者による近代京都画壇を総覧する本が出版されるなど、この時代の作家や作品の研究が活発になっている時期に、実作品を見せることにより、更に研究が進展するものと思われる。実際、若手研究者からは喜びの声が聞かれた。また、京都市京セラ美術館で近代京都画壇の第一世代を代表する竹内栖鳳の回顧展が同時期に開催されたため、双方を鑑賞することで、理解が深まったという感想も寄せられた。コレクション展も含め、近隣館と情報交換を行い連携することは、来館者にも有効だと思われる。章解説、全作品カラー図版入りリストをバイリンガルにした小冊子を作成し、低価格設定及び手頃なサイズが好評を得、会期終盤で売り切れた。4 か国語対応の音声ガイドを作成し、海外からの来館者にも、近代京都画壇の流れを平易な言葉で知っていただくことが出来た。国立アートリサーチセンターの法人内相互貸与制度を利用して東京国立近代美術館から近代京都画壇の名作を借用した。コレクション展会場にて、より充実した企画展に関連する特集展示が出来、近代京都画壇への理解を深めてもらえたと考える。

ウ　国立西洋美術館

「憧憬の地　ブルターニュ―モネ、ゴーガン、黒田清輝らが見た異郷」は、19 世紀後半から 20 世紀初めに日欧の画家が描いた仏ブルターニュ地方を主題とする作品約 160 点を一堂に集め、近代美術と同地の関係を多角的に検証した。これまで看過されてきた日本出身美術家の同地での滞在・制作を、16 作家の作品や旧蔵資料によってまとまった形で紹介したのは国内外でも初めての試みであり、ブルターニュ研究および日本近代美術研究の進展に貢献するものだった。フランスから借用した３点を除く全出品作品を、松方コレクション含む国内所蔵作品で構成したことで、自館コレクションの活用、国内作品の再認識・再評価につながった。全体で 57 作家を扱い、絵画のほかに素描、版画やポスター、40 点（19 件）の関連資料（文学書、ガイドブック、絵葉書など）を展示することで、鑑賞者がこれまで認知度の低かった画家の魅力を発見し、ブルターニュ地方の歴史文化に対する理解を深める機会が提供できた。他の国立機関より受託中の資料も出品し、それらの活用・情報公開にも寄与した。図録は外部の専門家も含め７名の著者による論考・コラムを日英バイリンガルで所収、出品作家のブルターニュ滞在歴を集約した地図も編纂するなど、内容の充実と学術性が確保された。

「パリ ポンピドゥーセンター　キュビスム展―美の革命　ピカソ、ブラックからドローネー、シャガールへ」は、パリのポンピドゥーセンター／国立近代美術館の改修を目前に控えて実現した。同館の比類のないコレクションから、キュビスムの歴史を語る上で欠くことのできない重要な作品が多数来日し、そのうち 50 点以上が日本初出品となる貴重な機会となった。日本でキュビスムを正面から取り上げる本格的な展覧会はおよそ 50 年ぶりとなり、その間に蓄積された最新の研究成果を最大限に盛り込みつつ、20 世紀美術の真の出発点とも言える同運動の豊かな展開とダイナミズムを最大限示すことができた。常設展示の核となる 19 世紀フランス美術やオールド・マスターの企画展が主流である国立西洋美術館において、キュビスムの展覧会の開催ははじめてのことであり、国立西洋美術館の展示の可能性を大きく広げるとともに、従来の鑑賞者層よりも若年の鑑賞者の関心を広く集めることができた。また、国内外のキュビスム及び 20 世紀美術の専門家が多く参加した展覧会カタログも、学術的に優れた成果として大きな評判を得た。

エ　国立国際美術館

「ホーム・スイート・ホーム」は、国内、及び世界各国で活躍する作家を「ホーム」の表象というテーマに基づいて選定、構成したものである。コロナ禍を経て「ステイホーム」等、日常でも多数見聞したホームという言葉がどのような意を含むのか。歴史、記憶、アイデンティティ、私たちの居場所、役割等をキーワードに表現された作品群から、私たちにとっての「ホーム」―家そして家族とは何か、私たちが所属する地域、社会の変容、普遍性を浮かび上がらせることを試みた。出品作品には、映像表現やパフォーマンス、またそれらを組み合わせたインタスタレーションも含め、先端的な動向を紹介する内容としても有効であった。特に作家選定に際しては、すでに評価を獲得して活躍している海外の作家たちに、比較的若手の国内作家も加えることにより、国内の現代美術作家たちの振興も図ることができるように心掛けた。また、会期中には作家によるトークイベントやパフォーマンスレクチャーなどを多数開催することも心掛け、現存作家による出品という機会を活かし、鑑賞者が直接に作家の声や活動に触れる環境を設けた。

「古代メキシコ ーマヤ、アステカ、テオティワカン」は、古代メキシコ文明の中でも、とりわけ高度に発達したマヤ、アステカ、テオティワカンの３つの文明に焦点を当て、それぞれの文明の特異で独創的な展開を 141 点もの豊富な資料によって紹介した。あわせて、遺跡の発掘現場や特徴的な文化を紹介する資料映像、地図や年表等の解説パネル、音声ガイド等による補足説明によって、地理的な背景や歴史の流れを分かりやすく説明した。また、会期中には本展監修者のアリゾナ州立大学研究教授杉山三郎氏による講演会やメキシコ民族音楽の演奏会、子ども向けのワークショップなど、幅広い来館者層に対応したイヴェントを開催し、メキシコ文化への理解の促進に努めた。こうした事業に加えて、ショップでのメキシコ関連グッズの販売や、レストランでのメキシコ料理の提供など、今回の展覧会をきっかけに、多くの来館者に対して、美術館を舞台とした異文化交流の一場面を体験してもらえたのではないかと考える。

オ　国立新美術館

「ルーヴル美術館展　愛を描く」について、「愛」は古代以来、西洋美術において普遍的な題材の一つであったといえるが、これをテーマにした展覧会の前例は国内だけでなく海外でも非常に少ない。本展では、ルーヴル美術館の絵画部門の所蔵品から「愛」と関連づけて解釈できる絵画 73 点を選出し、テーマ・時代によって５つのセクション（プロローグと４章）に分類し紹介した。「愛」という普遍的かつ馴染みやすいテーマは、これまで美術館に来たことがない若い世代にもアピールすることができた。１章は古代ギリシア・ローマ神話で語られる神々や人間たちの恋愛・性愛を題材にした絵画、２章はキリスト教の考え方を特徴づける犠牲的な愛や親子の愛の表現が見いだされる絵画、３章は 17 世紀オランダと 18 世紀フランスで展開された現実世界における人間たちの愛の表象、４章は 19 世紀前半のフランス絵画に特徴的な牧歌的恋愛とロマン主義の悲恋を主題とする絵画を取り上げ、愛の物語・概念のどのような側面が西洋絵画に視覚化されたのか、丁寧に跡付けた。いくつかのサブセクションのテーマ設定と作品選定、およびカタログの論文には、2000 年代以降のジェンダー史学の成果を踏まえた美術史研究の最新動向を反映し、男性優位の社会のなかで評価が定められてきた芸術作品に対する新しい視点や知見を伝えることに寄与した。

「大巻伸嗣　Interface of Being　真空のゆらぎ」について、大巻伸嗣は日本を代表するインスタレーション作家として、日本はもとより、近年ではアジア地域でも活発に個展を開催している。そのなかでも最大の規模で実現した本展は、SNS でも話題を呼び、48 日という短い開催日数のあいだに 13 万人を超える来場者を迎えた。人間の意識や存在に新たな視線を向けさせる喚起力に満ちたインスタレーションは、これまでにない大規模なものであり、身体的感覚を強く刺激する。一方で、そうしたダイナミックなインスタレーションを生み出す原動力としての繊細なドローイングも数多く紹介し、作品が生まれる思索と実践のプロセスも示すことができた。展示には、コラボレーションした関口涼子の詩のほか、映像や音響も取り入れ、また会期中には、会場で数多くのダンスパフォーマンスも行うことで、現代の総合芸術として大巻の作品世界を提示した意義は大きい。一方カタログでは、これまでにない学術的かつ文化史的な観点から、大巻の創作を新しく解釈しなおし、この作家の新たな評価にも寄与した。日本博の助成を得た本展覧会では、入場無料とすることで現代美術の裾野を広げた。また、海外メディアの招聘や外国人向けアンケート、英語校閲を入れたバイリンガル図録の刊行など、海外発信やインバウンド対策にも力を入れた。

③　国立映画アーカイブの映画上映会・展覧会

国立映画アーカイブの映画上映会・展覧会は、別表３及び別表４のとおり実施した。

そのうち特色ある上映会・展覧会として、上映会は「返還映画コレクション（1）――第一次・劇映画篇」を開催した。東京国立近代美術館が 1968 年に「返還映画」を冠した特集上映を組んで以来、55 年ぶりの開催となった本企画では、戦前・戦中期に心理・情報戦の資料として、米国内外の各地で収集されてきた「第一次返還映画」の中から、『進軍』（1930）から『乙女のゐる基地』（1945）までの劇映画 31 本と、当初から返還を希望したにも拘わらず、唯一後送された劇映画『鴛鴦歌合戦』（1939）を加えた計 32 本を 27 プログラムに組んで紹介した。無声映画の上映に際しては伴奏付きの上映回を、また近年、映画史的に再評価の進んだ『月夜鴉』（1939）と『かくて神風は吹く』（1944）に関しては、研究者による講演付きの上映回を設け、戦前・戦中期に公開された映画の光と影に新たな視線を注ぐ機会となった。

展覧会「没後 10 年 映画監督 大島渚」は、巨匠監督大島渚の没後 10 年の機会を捉えて開催した、同監督作品の上映会との連動企画である。若き日に松竹撮影所で生み出された鮮烈な『青春残酷物語』（1960 年）や『日本の夜と霧』（1960 年）、自らのプロダクション「創造社」を基盤に送り出された『絞死刑』（1968 年）、『少年』（1969 年）、『儀式』（1971 年）といった問題作、そして国際的大作『愛のコリーダ』（1976 年）や『戦場のメリークリスマス』（1983 年）は日本の映画界ばかりか世界的にセンセーションを巻き起こした。監督が自ら体系的に遺した膨大な作品資料や個人資料をベースに、その挑戦的な知性と行動の多面体に迫るもので、企画の監修には、それら資料を明るみに出した『大島渚全映画秘蔵資料集成』の編著者樋口尚文氏を迎え、同書の構成を踏襲しつつ、大島の残した名言集や監督作関連の音楽展示など当館独自のコーナーも加えて大島の映画人生を俯瞰した。

④　国立西洋美術館本館の活用・公開

デジタルコンテンツ「ゆびさきでめぐる世界遺産－ぐるぐる国立西洋美術館－」を、2023 年７月４日（火）より公開した。空間再現ディスプレイで実在感のある３次元モデルを没入感や立体感とともに裸眼で鑑賞することができるコンテンツとスマートフォンで館内を歩くように体験できるコンテンツの２種類により、非公開となっている部分を中心に建物内をめぐる体験ができる取り組みを実施した。ル・コルビュジエの設計理念や創建部材が多く残る部分をデジタル公開することで建築作品の理解が深まる機会を提供した。

⑤　地方巡回展等

国立美術館の所蔵作品を効果的に活用し、地方における鑑賞機会の充実及び美術の普及を図るとともに全国の公私立美術館等の活動の充実と作品活用の促進に資するため、全国の公私立美術館等と連携して、国立美術館巡回展を実施した。

令和５年度は担当館である東京国立近代美術館が、熊本県立美術館及び高松市美術館を会場として、両館の協力を得て３館のコレクションにより日本と西洋の近現代美術の流れを一望する展示を実施した。展示作品は東京国立近代美術館のコレクションを中心に構成されたが、とりわけ藤田嗣治による戦争記録画《アッツ島玉砕》の反響は大きく、アンケートにも多数の声が寄せられた。また、コレクションを様々な視点から理解してもらうための取り組みとして、東京国立近代美術館教育普及担当者による対話型鑑賞が、対面およびオンラインで行われた。参加者からの好評はもちろんのこと、対話型鑑賞のスキルを巡回先の学芸員と共有できたことも特筆すべき点である。

また、国立映画アーカイブにおいて、「優秀映画鑑賞推進事業」を全国各地で実施した。平成元年度から実施している本事業は、広く国民に優れた日本映画の鑑賞の機会を提供し、映画保存への理解を深めることを目的に、全国各地の教育委員会、公共文化施設等と連携・協力して開催している 35㎜フィルムによる日本映画の巡回上映事業である。本年度も上映会場の大半は映画館が無くなった地域の公共ホールであり、開始時は北海道から沖縄まで全国 103 会場でスタートしたが、映写機や会場設備の故障などで２会場が中止となった。また、令和５年度も令和４年度に引き続き、本事業の継続に向けて各地の会場から長い間要望されていたデジタルプログラムの導入を試行的に行い、東宝株式会社と東映株式会社の協力を得て黒澤明監督作品の１プログラムと東映時代劇の１プログラムを DCP（デジタルシネマパッケージ）でも提供可能とした。５会場が DCP 上映を実施し、デジタルプログラムの導入に向けた様々な課題を明らかにしたと同時に、導入に向けて歩みを進めることができた。他にも、地元の映画祭との連携など、各会場が本事業を活用して映画文化の醸成等に成果をあげている。

令和５年度の地方巡回展及び巡回上映等は、別表５のとおりである。

さらに、国立アートリサーチセンターにおいて、以下の取組を行った。

全国の公私立美術館等の活動の充実と作品活用の促進に資する取組として、各地の美術館のコレクションの活性化も視野に入れた新しい事業として、（1）国立美術館１館と、地方の美術館１館とが協働し、両者のコレクションを特定のテーマのもとに企画構成した展覧会「国立美術館 コレクション・ダイアローグ」、（2）地方の美術館のコレクション展示に、関連する国立美術館コレクションを１点ないし数点加えることで、地方美術館のコレクションの魅力を引き出す特集展示「国立美術館コレクション・プラス」の２つの事業を立案し、（1）については令和７年度事業、（2）については令和６年度事業の募集を行ってそれぞれ開催館を決定した。また、募集にあわせて（2）のプレ事業を長崎県美術館で実施し、同館の所蔵する鴨居玲の作品に、国立西洋美術館の所蔵するジュゼペ・デ・リベーラの作品を加えて展示した。

また、令和７年度から実施する「国立美術館 コレクション・ダイアローグ」、令和６年度から実施する「国立美術館 コレクション・プラス」とも、国立美術館と各地の開催美術館との協働に主眼を置いた事業として構想されている。従来の「国立美術館巡回展」では主に所蔵する国立美術館の研究員が講演会を行うことが多かったが、新しい両事業においては、開催館のコレクションも活用されるため、国立美術館と開催館の、双方の学芸員の連続講演会や座談会、シンポジウム等のより多彩な展覧会関連事業を行うことが可能になる。また、国立アートリサーチセンターにおいて展覧会レビュ

一記事を発信する等、開催地における広報にとどまらず、全国規模で注目されるよう周知に努めることを検討している。

（２）美術創造活動の活性化の推進

第５期（令和３年度～令和７年度）中期目標に定める指標	
指標	・国立新美術館（国立アートセンター）の公募展示室の予約率は、展覧会の国際的な評価の向上を図りつつ100%を目指すものとする。
関連指標	・国立新美術館（国立アートセンター）における全国的な活動を行っている美術団体等への展覧会会場の提供に係る取組状況。（公募展団体数） ・公募展示室における展覧会毎の入場者数 ・展覧会毎の批評・レビューの状況（掲載数及び掲載媒体数） ・新聞社・テレビ局・公募展以外の主体への展示室貸し出し件数 ・企画展示室において現代作家を採り上げた展覧会の実施回数及び採り上げた作家の人数 ・国が顕彰・育成してきた芸術家の展覧会の実施件数

※本項目はすべて国立新美術館に関する指標である。
※関連指標の２、３、５点目は別表６～８参照。

①　公募団体等への展覧会会場の提供等

公募展団体数	82 団体	年間予約室数	3,500 室／年	予約率	100.0%
公募展事業収入	312,574,160 円	入館者数	1,082,300 人		

全国的な活動を行っている美術団体等への展示室の提供を上記のとおり行った。また、令和７年度に公募展示室を使用する 81 団体（野外展示場のみ使用団体を含む。）3,486 室を決定したほか、美術に関する新たな創造活動の展開や国際発信、芸術家の育成等を支援し、我が国の美術創造活動の活性化に資するため、令和９年度以降の貸出運営見直しに係る、団体へのアンケート、ヒアリングを実施した。

②　国が顕彰・育成してきた芸術家のための発表機会の提供

国が顕彰・育成してきた芸術家のための発表機会の提供として、展覧会を６件実施した。主な成果は以下のとおりである。

・「大巻伸嗣　Interface of Being 真空のゆらぎ」では、文化庁芸術家在外研修員（2002-04 年）を経て、日本を代表するインスタレーション作家として活動する大巻の総合芸術の世界を、詩、映像、ダンスパフォーマンスなど異分野とのコラボレーションを採り入れながら、過去最大規模で紹介した。日本博の助成を得て入場無料を実現し、かつ海外向け広報に注力したことにより、現代美術の裾野の拡大と海外発信に大きく貢献した。なお、大巻伸嗣氏は本展により令和５年度（第 74 回）芸術選奨文部科学大臣新人賞に選出された。
・パブリックエリアを活用した無料の小企画シリーズ「NACT View」では、文化庁メディア芸術祭アニメーション部門で新人賞（2020 年）を受賞した築地のはら及び新進芸術家海外留学制度（2008 年）を経てベルリンを拠点に活動する和田礼治郎を取り上げ、幅広い層の来館者に鑑賞機会を提供した。

③　新しい美術の動向や現代作家の積極的な紹介

・「蔡國強　宇宙遊 ―〈原初火球〉から始まる」では、中国出身で、日本、次いでアメリカを拠点として国際的に活躍してきた現代美術家・蔡國強の芸術を、原点となる作品〈原初火球〉から最新作まで通観する構成で紹介した。蔡の個展は国内各地で開催されてきたが、東京では本展が初の大規模個展であり極めて大きな意義があった。本展により蔡國強氏は令和５年度（第 74 回）芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した。
・「テート美術館展 光ーターナー、印象派から現代へ」では、「光」をテーマとして 19 世紀から今日までの芸術表現の諸相を跡付けるなかで、現代作家の作品を多数紹介した。

・「イヴ・サンローラン展　時を超えるスタイル」については、ファッションデザイナー、サンローランの活動を包括的に跡付けた内容の充実度に加えて、60 年代のサファリルックやパンタロンの出品により、女性の装いを変革した功績に光を当てたことも特筆される。
・5 年ぶりとなる現代作家のグループ展「遠距離現在　Universal/Remote」では、コロナ禍を経て顕在化した社会の諸問題に向き合う内外の 8 名＆1 組の作家たちの表現を「Pan- の規模で拡大し続ける社会」、「リモート化する個人」の 2 テーマを軸に紹介した。時事性を踏まえたテーマで現代の表現を検証する優れた企画である。
・令和４年度に若手・中堅の現代作家支援を目途としてスタートしたパブリックスペースでの小企画展シリーズ「NACT View」では、第 2 回築地のはら（1994 年生）、第 3 回渡辺篤（1978 年生）、第 4 回和田礼次郎（1977 年生）の３作家を取り上げた。全ての来館者が無料で気軽に鑑賞できるパブリックスペースを展示に活用することで、現代美術に関心の薄い客層へのアプローチを可能にする意義深い企画となった。
・新聞社・テレビ局・公募展以外の主体への展示室等貸し出し件数については、280 件であった。

④　国際発信拠点として機能するための運用の見直し

国立新美術館が国際発信拠点として機能するため、公募展示室の使用の在り方について見直しを行っている。今年度は、令和９年度以降の展示室使用希望等を調査するため、全 82 団体にアンケートとヒアリングを行った。今後、東京都美術館の公募展に係る現状や、公募団体へのアンケートとヒアリングの結果をもとに、令和９年度以降の展示室の使用基準の見直しについて、引き続き検討を行う。

（3）美術に関する情報の拠点としての機能の向上

第５期（令和３年度～令和７年度）中期目標に定める指標	
指標	・ホームページアクセス件数の合計は、前中期目標期間の実績以上とする。 ・デジタル化した所蔵作品データの公開率（画像データ）は、前中期目標期間の実績以上とする。 ・デジタル化した所蔵作品データの公開率（テキストデータ）は、前中期目標期間の実績以上とする。 ・アートライブラリーの利用者数（オンライン利用含む） ・現代美術やメディア芸術の国際展等へ出展・参加する作家等に対する支援等の件数は、27 件程度とする。 ・美術に関する重要な文献の翻訳・国際発信件数は、40 件程度とする。 ・全国美術館収蔵品サーチへの登録件数は、30 館、85,000 件程度とする。 ・メディア芸術データベースの登録件数は、60,000 件程度とする。
関連指標	・国際アートフェスティバルへの出展等、メディア芸術作品等の国際発信に向けた取組件数

①　国立アートリサーチセンターにおける国内美術館所蔵作品等の情報の国内外への発信

・全国美術館収蔵品サーチ登録件数

＜登録館数＞

新規登録館数	第 5 期新規 登録館累計	目標登録館数 （第 5 期）	前年度末 登録館累計	本年度 登録館累計
35	46	30	163	198

＜登録件数＞

新規登録件数	第 5 期新規 登録累計	目標登録件数 （第 5 期）	前年度末 登録累計	本年度 登録累計
126,286	140,167	85,000	161,021	287,307

国立アートリサーチセンターが令和４年度末に文化庁アートプラットフォーム事業の「全国美術館収蔵品サーチ」を継承したことで、同システムの持続的・長期的発展を展望できる基盤が整ったことから、データ拡充に関する指針・中長期的目標をロードマップとしてまとめた。

また、全国の都道府県・市町村立・私立美術館等の施設に収蔵品データ・目録提供の協力を呼びかけたところ、計 35 館の新規協力館を得、これを含む総計 198 館よりデータの提供を受けて、データの追加公開を行った。

・メディア芸術データベース登録件数

登録件数	第 5 期新規 登録累計	目標件数 （第 5 期）	前年度末 登録累計	本年度 登録累計
40,890	40,890	60,000	1,028,896	1,069,786

文化庁により平成 27 年３月以来運営されてきたメディア芸術データベースを令和５年４月、国立アートリサーチセンターが継承した。その際に同一ドメインの維持が不可とされたため、ドメイン変更等の作業を実施した。複雑なデータ構造をわかりやすく検索・表示するための機能向上とユーザーインターフェイス改善に取り組み、令和６年１月 31 日、正式版を公開した。国立国会図書館、明治大学米沢嘉博記念図書館・現代マンガ図書館（マンガ）、特定非営利活動法人アニメ特撮アーカイブ機構（アニメーション）、一般社団法人コンピュータエンターテインメント協会（ゲーム）、山口芸術情報センター（メディアアート）から提供を受けてデータ新規公開を行った。

② 国立美術館所蔵作品等のデジタル化・データベース化、所蔵作品検索システムの充実

・ホームページアクセス件数

館名	アクセス件数（ページビュー）	
	実績	目標※
本部	1,723,457	1,329,241
国立アートリサーチセンター	145,870	－
東京国立近代美術館（本館・国立工芸館）	9,449,624	5,951,959
京都国立近代美術館	2,013,411	4,243,023
国立映画アーカイブ	1,919,436	1,385,168
国立西洋美術館	5,452,378	16,108,316
国立国際美術館	2,659,863	2,810,293
国立新美術館	16,507,881	14,564,307
合計	39,871,920	46,392,307

※　目標値は前中期目標期間の平均値である。

・所蔵作品データ等のデジタル化と公開

館名	画像データ					テキストデータ				
	デジタル化件数		累積公開	公開率		デジタル化件数		累積公開	公開率	
	新規	累計	件数	実績	目標	新規	累計	件数	実績	目標
東京国立近代美術館（本館）	34	11,912	8,296	60.3%	56.7%	66	12,876	12,426	90.3%	87.1%
東京国立近代美術館（国立工芸館）	217	5,434	4,140	99.5%	87.2%	51	5,773	4,988	119.9%	114.6%
京都国立近代美術館	150	10,240	9,496	70.2%	60.1%	244	16,561	15,817	116.9%	118.4%
国立映画アーカイブ	－	－	－	－	－	6,216	306,290	－	－	－
国立西洋美術館	40	4,692	4,692	72.7%	71.8%	40	5,129	5,129	79.4%	76.6%
国立国際美術館	31	8,884	5,098	62.1%	61.6%	45	9,667	8,762	106.8%	103.8%
合計	472	41,162	31,722	68.8%	63.4%	6,662	356,296	47,122	102.2%	100.0%

【注1】「デジタル化件数」は、各館のローカルシステムにおける画像及びテキストデータの登録件数である（国立映画アーカイブについては、ローカルシステムであるNFADへの映画フィルム及び映画関連資料のテキストデータ登録件数を掲載している。）。

【注2】「累計公開件数」は、「独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システム」（http://search.artmuseums.go.jp/）における画像及びテキストデータの公開件数である。

【注3】上表のほか、東京国立近代美術館ではホームページ内「作品検索」（https://www.momat.go.jp/collection）において作品のテキストデータ12,219件及び画像データ11,270件、国立工芸館ではホームページ内「作品検索」（https://www.momat.go.jp/craft-museum/collection）において作品のテキストデータ2,516件及び画像データ1,212件、京都国立近代美術館では「京都国立近代美術館収蔵品データベース」（https://jmapps.ne.jp/momak/）において作品のテキストデータ15,817件及び画像データ14,065件、国立映画アーカイブでは「国立映画アーカイブ所蔵映画フィルム検索システム」（http://nfad.nfaj.go.jp/）において日本劇映画のテキストデータ8,045件、国立西洋美術館では「国立西洋美術館所蔵作品データベース」（http://collection.nmwa.go.jp/artizeweb/）において作品のテキストデータ6,362件及び画像データ6,624件、国立新美術館では「ANZAÏフォトアーカイブ」（http://db.nact.jp/anzai/）においてアーカイブズ資料のテキストデータ3,217件を公開している。

※　国立工芸館、京都国立近代美術館、国立国際美術館では、複数で一揃いの作品を個別に掲載している場合等があるため、テキストデータの公開率が高くなっている。

特記事項

ア　法人全体・国立アートリサーチセンター

法人ホームページでは、リニューアルにより各美術館サイトへの回遊性が向上し、アクセス拠点としての利用が増加し、海外からの利用も増加した（全体の５％）。また入札や求人案件の増加により利用が増加した。

各館における所蔵作品のデジタル化・データベース化の取組みのもと、国立アートリサーチセンターを中心に「所蔵作品総合検索システム」に収録する収蔵作品の著作権調査等を行い、同システムの収録画像の充実を図った。また、国立アートリサーチセンターにおいて運用する「全国美術館収蔵品サーチ」との連携推進のため、国立美術館収蔵品データ・画像データの追加作業を手動ながら実施し、我が国に所在するコレクションの国内外への発信の強化に努めた。前年度末に試験公開した国立美術館の公開情報資源を一元的に検索・閲覧できるシステム「国立美術館サーチ（試験公開版）」について、機能向上策を検討し、その一環としてインターフェース等の改善を行った。

イ　東京国立近代美術館

（本館）

情報通信技術（ICT）の活用事例として、以下を継続的に行った。平成８年以来、国立情報学研究所（NII）が提供するNACSIS-CATに参加し、展覧会カタログを中心とする美術資料の書誌データ流通に貢献した。平成16年以来、当館をはじめとする在京国立美術館、国立博物館、東京都歴史文化財団の美術館、博物館等で構成される美術図書館連絡会（ALC：The Art Library Consortium）への加盟を継続し、同会が維持管理する美術図書館横断検索（ALC Search）への情報連携に務めた。ミュージアム・アーカイブの整備を進め、法人文書ファイル管理簿等との整合性が図れるよう関係部署と調整し、図書検索システムでの情報管理を継続した。過年度より継続して「JAIRO Cloud」（令和５年度、大規模なシステム改修に対応）を用いて「東京国立近代美術館リポジトリ」の整備に努めた。さらに「ERDB-JP」（電子リソース管理データベース）への登録を引き続き行ない、Cinii Research と連動した電子コンテンツへのアクセス向上に寄与するとともに、当館の活動を広く周知するのに役立てた。また、アートライブラリ所蔵資料の中から貴重書「岸田劉生資料（原稿等）」（600コマ）、「展覧会関係写真（ネガフィルム）」（4,504件）、自館刊行の展覧会カタログ（163冊）のデジタル化に取り組んだ。

（国立工芸館）

所蔵作品総合検索システム等における作品情報・画像の公開については、令和４年度に引き続き、モノクロ画像のカラー画像への差替え作業を行った。加えて、画像のない作品に関しても撮影できたものから順次登録・公開を進めることができた。

また、東京国立近代美術館と国立工芸館のウェブサイトのリニューアルを行い、４月からは新しいウェブサイトが公開された。国立工芸館所蔵作品の検索ページや作家一覧ページ、作品解説や作家インタビューなどの動画が見られる「見る・聞く・読む」といった新たなウェブサイトコンテンツも加わり、より充実した内容の情報提供が可能となった。現在公開されている作品情報については、データ整備を行いながら進めており、今後も順次追加していく予定である。

ウ　京都国立近代美術館

国立アートリサーチセンターが推進する総合検索システム整備の一翼を担うべく、所蔵作品データベース整備とともに、作品画像のデジタル化や新規のデジタル撮影を進めている。データベース整備においては、年々増加し続ける新収蔵作品等のデータ入力だけではなく、過去に入力されたデータの見直しを行い、最新研究成果に基づく修正や充実を行うとともに、利用者のための利便性の向上も図っている。また、データベースの整備や修正からその公開までの間には現行システム上タイムラグが生じていたことから、それを解消するため美術作品管理システムを既存のクラウド型データベースへ移行させ、既に京都国立近代美術館ホームページにおいて公開している。

エ　国立映画アーカイブ

ウェブサイト「関東大震災映像デジタルアーカイブ」は、令和３年９月に開設されて以来、全ての関東大震災関連記録映画を公開することを目標に更新を続けて来たが、令和５年９月１日の更新をもって完結した。

また、令和４年度に開設した、国立映画アーカイブのフィルム・コレクションのより大規模な公開を行う新たなプラットフォーム「フィルムは記録する －国立映画アーカイブ歴史映像ポータルー」の拡充を行った。

さらに、令和６年３月 27 日には、当館所蔵の歌舞伎関連の映画や資料を公開するウェブサイト「はじまりの日本劇映画 映画 meets 歌舞伎」を開設した。

映画関連資料については、「みそのコレクション」の映画館プログラム、映画技術資料など、今後のウェブ公開に向けたデータ整理などの作業を実施した。

令和５年５月 10 日には所蔵する映画関連資料を包括的に公開するための WEB サイト「映画遺産―国立映画アーカイブ映画資料ポータル―」を開設し、第１弾として映画機材 181 点の高精細な画像と詳細なテクニカルデータを公開した。

オ　国立西洋美術館

令和４年度の日英版につづき、公式ホームページの中韓サイトのリニューアル作業が完了したほか、継続して館内情報のデジタル化を進め、QR コードを活用し常設展・企画展内の作品解説等を他言語で提供した。また CMS 機能を活用し、運営・事業に係る情報を即時発信した。

公式 SNS では、四媒体(Facebook、X(旧 Twitter)、YouTube、Instagram)にて、国立西洋美術館の事業・活動や収蔵品について積極的な情報発信（日英バイリンガル）に努めた。投稿内容は、収蔵品・建築・歴史や常設・自主展紹介の定期投稿に加え、新たな試みとして、企画展に関連したコンテンツ制作・配信（例、「スペインのイメージ展」音声ガイドや動画シリーズ「Chat Room SEIBI」）や他機関と連携したリレー企画や共同投稿をおこなったほか、東京の美術館・博物館との協働キャンペーン「#tokyomuseums」や女性作家に関する国際キャンペーン「#5WomenArtists」に参加し、更なるファン獲得と来館訴求に繋げた。令和５年度の投稿数は 447 件(2023 年４月１日～2024 年３月 31 日の Facebook データ)、令和４年度の投稿数と比較し 372.5%増となったほか、リーチ数は 83.4 万と、令和４年度と比較し 6.8%増だった。またフォロワー数は、Facebook で 35,985（2023 年３月 31 日）から 36,424（2024 年３月 31 日）、X(旧 Twitter)で 77,595 から 93,543、Instagram で 12,677 から 27,804、YouTube で 4,725 から 6,040 といずれも増加した。

カ　国立国際美術館

所蔵作家及び作品、さらには過去の展覧会や刊行物ほか資料など、国立国際美術館の活動に関する種々の情報を横断的に検索できるシステム「NMAO サーチ」を公開した。2004 年に移転する前の展覧会情報も多く含む本システムにより、国立国際美術館の活動に対する理解が深まり、ひいては、我が国の戦後美術に関する調査研究も促進されるはずである。また、本システムにて公開するための、機関アーカイブズ資料のデジタル化も昨年度に引き続き進めているところで、令和５年度はとりわけ、過去展カタログの撮影に重点を置いた。表紙だけでなく、厚みも含めた「物」としてカタログを提示している点が、通常の書影とは一線を画したものになっていると考える。

キ　国立新美術館

所蔵するときわ画廊関係資料の紙焼き写真 485 点および山岸信郎関係資料に含まれる音声テープ 57 本のデジタル化を行った。また、ヤシャ・ライハート旧蔵「蛍光菊」関係資料のデジタル画像（５点）を「イメージと記号 1960 年代の美術を読みなおす」展（神奈川県立近代美術館 鎌倉別館、2023 年 12 月９日～2024 年２月 12 日）の会場パネル及びカタログに掲載し、情報発信に努めた。また、研究論文、展覧会準備、作品制作のための調査等を目的とする特別資料閲覧７件においてデジタル画像（355 点）及び映像資料（１点）を提供した。

③　美術情報・資料の収集、レファレンス機能の充実

ア　美術情報・資料の収集及び情報サービスの提供

館名	収集件数（冊）	累計件数（冊）	図書室等利用者数（人）	図書室等のオンライン利用数（件）
東京国立近代美術館（本館）	3,130	161,354	4,698	2,694,136
国立工芸館	2,169	35,131	2,118	693,621
京都国立近代美術館	911	37,347	1	100,387
国立映画アーカイブ	1,072	54,903	1,979	2,153,160
国立西洋美術館	821	55,867	155	285,032
国立国際美術館	2,120	59,100	5	108,059
国立新美術館	2,509	168,020	30,329	2,540,468
合計	12,732	571,722	39,285	8,574,863

【注１】上記の図書室等のほか、東京国立近代美術館は本館４階（令和２年度より新型コロナウイルス感染防止のため停止していたが、令和４年 10 月にリニューアルし再開した）、京都国立近代美術館は４階、国立西洋美術館は１階、国立国際美術館は地下１階に図録等を閲覧できる情報コーナーを設けている。

【注２】平成 30 年 11 月３日より京都国立近代美術館及び国立国際美術館では事前予約制による資料閲覧を開始したため、予約閲覧利用者数を「図書室等利用者数」の欄に記載している。

【注３】「図書室等のオンライン利用数」は蔵書検索（OPAC）のアクセス数又は検索数、リポジトリ閲覧件数、パスファインダー閲覧数のうち該当するものの合計値である。

特記事項

（ア）東京国立近代美術館

（本館）

企画展、所蔵作家・作品、近現代美術に関する資料の収集（寄贈交換事業を含む）を積極的に行い、展覧会活動の推進に役立てた。引き続き、「NACSIS-ILL（図書館間相互利用サービス）」に参加し、遠隔による文献複写サービスに取り組み、76 件対応した。ウェブサイト内で連載企画「研究員の本棚」「アートライブラリ所蔵資料の紹介」等を公開し、美術資料に関する情報発信に努めた（これらは『現代の眼』（638 号）に収録）。アートライブラリ内において、企画展ごとに関連資料の特集展示を行った。「Family Day こどもまっと」（９月 24 日）において、試験的に所蔵作品に関わる絵本の読み聞かせイベントに取り組んだ。当館開催の MOMAT コレクション展や企画展、また、国立工芸館、京都国立近代美術館、国立映画アーカイブ、国立西洋美術館、慶應義塾ミュージアムコモンズで開催された展覧会への所蔵資料の貸出を行った。令和４年度に引き続き、書架の狭隘化対策として民間倉庫を継続的に利用した。休館期間を活用し、閉架書庫の図書・カタログエリアを対象に、大規模な蔵書点検や、閉架書庫の老朽化に伴う電動書架（計６か所）の内２か所目の改修工事を行うなどのメンテナンスに取り組んだ。

（国立工芸館）

令和４年度に引き続きライブラリ内の閲覧資料と開催する展覧会関連資料の収集を行った。令和５年度は「皇居三の丸尚蔵館収蔵品展皇室と石川　一麗しき美の煌めきー」が開催されたが、展示作品の所蔵館である三の丸尚蔵館から過去に開催された展覧会の図録をまとめて寄贈いただいたため、それらを参考図書として会期中ライブラリ内に配架した。普段、東京の展覧会を観に行くことのない利用者からは、今回展示していない作品についても図録で見ることができたと好評を博した。

展覧会毎にテーマに合わせた参考図書を用意することで、それぞれ異なった利用者をライブラリへ呼び込み、新たな利用者を得ることが出来ている。

また、個人収集家や所蔵作家の関係者からのまとまった資料の寄贈に関しても申し出が続いている。これら資料の受入や整理についても引き続き進めていき、工芸研究に役立てていきたい。

（イ）京都国立近代美術館

図書資料は主に寄贈により増加し続けているが、保管場所に限界があること、隣接する京都府立図書館や各機関リポジトリを活用できることから、近現代の美術・工芸に関するものに限定して収蔵することとしている。寄贈のほかにも、京都国立近代美術館新収蔵作品研究に資する資料として『AKI INOMATA: Significant Otherness』などを購入、また雑誌『視覚障害：その研究と情報』を定期購入し、教育普及事業における「障害当事者と協働した鑑賞プログラム開発」に活用した。

図書データベースの整備も引き続き推進し、画集・書籍のデータ公開の準備を図った。特に未登録状態となっている上野伊三郎氏旧蔵資料(一部 約 160 点)を登録した。なお当資料に関しては約 240 点の資料整備を行い、また保存用の資材を購入して保管状況改善を図った。図書閲覧サービスは、1 件の申込みに対応した。

（ウ）国立映画アーカイブ

図書室では、映画文献に関する一定の網羅性を目指して、映画関連の新刊書と雑誌を収集するとともに、未所蔵の古書や戦前の雑誌など貴重な映画文献の購入、さらに一般の書籍流通ルートには乗らない刊行物の収集にも努めている。令和５年度もそうした未収蔵の文献を購入したが、中でも古書店からの購入として特筆すべきは戦前･戦後期の教育映画･記録映画文献などであり、雑誌欠号の入手にも努めた。

図書所蔵情報の公開については新着書籍の登録を例年通り行えただけでなく、映画雑誌の遡及登録も進めることができた。

図書室運営についても、新型コロナウイルス感染症の影響を脱したことから、令和５年７月１日より週３日開室から週 4 日開室（火・木・金・土曜）に変更した。また潤滑な図書室運営の観点から、これまでは複写作業を職員が行っていたが、貴重書や状態の悪い書籍を除いて利用者が複写を行うようにした。

（エ）国立西洋美術館

松方コレクション関連の資料について積極的に収集を進めていくという方針のもと、松方コレクションの形成に関係する書簡資料を購入した。本書簡資料は令和６年度の展覧会において展示公開する予定となっている。本資料は加えて、今後研究資料センターでの閲覧公開など多義的な活用が期待できるものである。

研究資料センターを通じて館外の研究者へ学術情報を提供したほか、大学の授業（見学会）にも協力した。また、７件(137枚)の遠隔複写に対応し、情報サービスを広く提供することに努めた。

令和４年度に公開した林忠正宛書簡群のデジタル公開サイトには、新たに書簡の翻刻テキスト437通を追加公開した。当館が所蔵する研究資料の情報整備を推し進め、国内外に向けて広く発信した。

開館当初から1985年までの、当館展覧会ポスター約200点のデジタル化を完了した。館史料のデジタル保存を推進すると同時に、ホームページ等への掲載を予定しており、館史料を広く情報発信していくことを目指している。

（オ）国立国際美術館

所蔵作家、作品、及び特別展に関連する文献資料を中心に収集を行い、展覧会場内で閲覧に供した。また、新収候補の作家や作品に関する文献資料を集め、補完することで、質量ともに充実した作家・作品情報の構築を可能ならしめたと考える。他方、令和５年度はアーカイブズ資料の収集に向けても動き始めた。逝去した日本の現代美術作家や、関西に拠点を置く現代美術画廊の旧蔵資料群を預かり、整理しつつ、現在は正式に受贈するための道筋を整えているところである。アーカイブズ資料は、研究者の調査に資するのみならず、展覧会等において、展示物としても大いに活用されるだろう。今後はより積極的に、アーカイブズ資料の受入れに注力したい。

（カ）国立新美術館

近現代美術および隣接領域に関する図書・逐次刊行物・展覧会カタログの収集を行った。特に日本の展覧会カタログについては網羅的、遡及的収集に努め、国内約 400、国外約 100 の美術館・博物館・図書館と展覧会カタログの相互寄贈関係を維持している。新たな取り組みとして、オンラインイベント「Museum Week 2023」に合わせ、OPAC の「Web 企画」にて「世界遺産」と美術館という切り口から、2019 年に世界遺産に登録された国立西洋美術館の建築にちなんだ所蔵資料を紹介した（６月８日～10 月３日）。また、アートコモンズのクラウド化およびアクセシビリティの向上のため、2024 年度にリニューアルを計画し、準備を進めた。

大学との連携事業として、慶應義塾大学アート・センターの「アート・アーカイヴ特殊講義」を春学期・秋学期の２回実施し、春学期は６月 14 日に慶應義塾大学アート・センターで講義を行い、秋学期は 12 月 21 日に当館で所蔵資料を用いた授業を行った。

イ　東京国立近代美術館アートライブラリと国立新美術館アートライブラリーの在り方の見直し

東京国立近代美術館アートライブラリと国立新美術館アートライブラリーの在り方について、両館の担当者間で下記の内容を中心に検討を進めた。令和４年度より継続して、図書室運営に関する情報共有を行うとともに、両館の利用者層や所蔵資料の性質について確認し、両館の特性を踏まえたライブラリ運営の将来的な在り方に関する意見交換を行った。令和６年度以降も継続して、利用者の利便性向上を目的に、相補的な活動を促進するための協議を重ねていくこととなった。

④　我が国現代美術やメディア芸術の国際発信の推進、現存作家の国際発信支援等

ア　現代美術やメディア芸術の国際展等へ出展・参加する作家等に対する支援等

件数	第５期累計	目標件数（第５期）
18	18	27

日本現代美術のアーティストが海外で開催される国際展等に出品するに際して、ビエンナーレ、トリエンナーレなど主要な国際展に対する支援を行う。日本のアーティストの国際発信を支援することにより、日本の現代アートの海外における存在を強化し、価値向上を目的とする。国立アートリサーチセンターは令和５年度には７件の国際展に出品した 18 名について支援した。

イ　美術に関する重要な文献の翻訳・国際発信

日本の現代アートの理解を促進し海外における研究を促進するため、日本の現代アートに関する主要文献を英訳しホームページにて発表する。国立アートリサーチセンターにおいて、令和５年度は各文献の翻訳に必要な著作権等権利処理を行い、令和６年６月末までに６件の翻訳に着手しているほか、令和７年２月末までに９件の翻訳を行う予定。

ウ　国際アートフェスティバルへの出展等、メディア芸術作品等の国際発信に向けた取組件数

件数	29	うちメディア芸術に関するもの（件）※	7

※ 国立アートリサーチセンターにおける、国際アートフェスティバルへの出展支援、翻訳、シンポジウム等を含む国際発信に向けた取組件数。海外で開催された国際展への出展を支援した作家のうち、映像、サウンドインスタレーション等メディア芸術に分類される作品展示した作家をメディア芸術に関するものとしてカウントした。

（4）教育普及活動の充実

第５期（令和３年度～令和７年度）中期目標に定める指標	
指標	・講演会等のイベントの満足度調査を実施し、「良い」以上の回答率を８割程度とする。 ・教材化された素材の活用件数
関連指標	・教育普及事業参加者数

①　幅広い学習機会の提供及びラーニングコンテンツ等の開発

ア　幅広い学習機会の提供（講演会、ギャラリートーク、アーティスト・トーク等）

新型コロナウイルス感染症の感染状況を見ながら、オンラインも活用し、年齢や理解の程度に応じたきめ細かい多様な事業を展開した。

館名	事業実施回数(回)	参加者数(人)	満足度調査実績
東京国立近代美術館（本館）	375	7,689	94%
国立工芸館	112	3,261	97%
京都国立近代美術館	70	3,482	89%
国立映画アーカイブ	188	12,996	93%
国立西洋美術館	315	9,134	96%
国立国際美術館	159	4,685	98%
国立新美術館	107	11,046	97%
合計	1,326	52,293	95%

【注】満足度調査実績は、「良い」「普通」「悪い」のうち「良い」と回答した者の割合である。

特記事項

（ア）東京国立近代美術館

（本館）

学校対象のプログラムは、ガイダンス、ギャラリートーク、オリエンテーション、先生のための鑑賞日、先生のための鑑賞講座と多岐にわたり、全 57 回、3,216 人の参加者があった（うちオンライン２回）。特別支援学校の受け入れを 3 校おこない、次年度以降に定例的に受け入れるための試行とした。MOMAT コレクション展の特集展示「修復の秘密」「女性と抽象」のトークイベント、特集「関東大震災から 100 年の展示に関連するワークショップをはじめ、企画展関連の講演会、トークイベントなど展示に関連する事業が増えたことは特筆したい。サマーフェスの事業では、ガイドスタッフによる特別プログラムとしてフライデーナイトトーク（30 分）、所蔵作品に関連する「カタチシート」を作成して配布した。春まつりでは、英語トークや所蔵品ガイドに加えて、教育普及室職員による鑑賞プログラム（30 分）を実施した。

（国立工芸館）

石川県内外の学校教育機関との連携に加えて社会教育施設の主事等を対象とした研修を実施した。社会教育機関は学校とは異なる幅広い層を対象とするため、これを継続的に行うことができればより広い波及効果に期待が持てる。今後も学校や社会教育機関との連携を展開するために、定期的なアナウンスを行い、柔軟に受け入れを実施していくことを検討している。

（イ）京都国立近代美術館

学校との連携においては、個別のニーズに合わせたきめ細かな学習支援を行うことを念頭に置き、担当教員や指導主事らとの関係を築きながら、鑑賞プログラムを共に検討することを心掛けた。

令和４年度に引き続き、各企画展においてアーティストや外部講師や担当研究員による講演会を実施し、展覧会の内容をより深く紹介するほか、多様な視座で作家・作品の意義を考える機会を設けることができた。令和５年度はすべての展覧会で講演会、もしくはギャラリートークのいずれかをオンライン配信することで、遠方の方や、足を運べない方など、幅広い層へ展覧会を知っていた

だく機会を提供した。また講演会に限らず、展覧会と関連した音楽コンサートを実施することで、音楽と美術の両文化への関心層に向けて広く展覧会のアピールをすることができた。

（ウ）国立映画アーカイブ

ラーニングコンテンツの提供として令和４年度末に作成した常設展のセルフガイド２種類を活用した結果、小中学生の展示室入場者数が昨年度の 158 人から２倍超（365 人）に増える成果をあげることができた。令和５年度も映写機構を学べるセルフガイドを作成した。

教育普及事業の成果物を研究・教育教材用として提供する活動では、東京国際映画祭との共催「映画教育国際シンポジウム 2023～海外の事例から次のステップにむけて」の収録ビデオを東京国際映画祭公式 YouTube にて公開し、「ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント」の上映と講演、資料も配信サイト「映画 meets 歌舞伎」にて公開、「映画製作専門家養成講座」の採録テキストも HP から公開することができた。

また、八重洲・日本橋・京橋で毎秋開催されている屋外型国際写真祭『T3 PHOTO FESTIVAL TOKYO 2023』に初めて参画し、写真家・映像作家の山崎博の写真展（10 月 3 日～29 日）を 1F ロビーにて、作品上映会（10 月 21 日）を小ホールにて、同祭主催の（一社）TOKYO INSTITUTE of PHOTOGRAPHY と共催した。展示では 6,297 人、上映は 92 人の鑑賞者を得ることができ、当館の存在とアーカイブの意義を広くアピールすることができた。

（エ）国立西洋美術館

学校団体向けプログラムには多くの申込みがあり（84 件）、特別支援学校からの依頼も増えた（８件）。特に聴覚特別支援学校向けには、都内の聴覚特別支援学校からヒアリングを行ったほか、明晴学園の研究協力の下、プログラム開発を行った。

新らたに「ふかぼり Collection in FOCUS」を実施し、展示を企画した当館研究員の視点から、多様な研究活動を紹介した。講演会と並び、リピーターの参加者であってもより深く学ぶことのできる専門性の高いプログラムとなった。同時に、初めて来館する方も楽しめる美術トーク、建築ツアーなども数多く行い、ヴァリエーションに富んだ事業を展開することができた。

（オ）国立国際美術館

展覧会開催に際して実施している担当研究員によるギャラリー・トークにおいては、展覧会内容がより深まるよう心掛けた。また、国立国際美術館の特徴でもある現代美術作品を特別展やコレクション展で紹介する際は、現存作家を招聘し、アーティスト・トークやパフォーマンス、レクチャー・プログラムを実施した。令和５年度は、アンドロ・ウェクア、マリア・ファーラ、リディア・ウラメンといった海外在住で世界的に活躍する作家をはじめ、国内在住作家によるトーク及びレクチャーを実施するとともに、竹村京による展示室でのパフォーマンスも実施した。作家の生の声を聞きたいと希望する鑑賞者の要請は高く、こうしたイベントの実施による作家の制作意図や姿勢の理解につながった。

（カ）国立新美術館

「蔡國強　宇宙遊 ―〈原初火球〉から始まる」の開幕記念トークセッションを、蔡氏のほか国内外からキュレーターらを招いて開催した。「大巻伸嗣　Interface of Being　真空のゆらぎ」では、大巻氏の壮大なインスタレーション空間の中でアーティスト・トークやパフォーマンスを実施し、国内外より訪れた観覧者から好評を博した。また、現代美術に関する学術分野に関心のある層へ向けた企画として、専門家を招き「アートをめぐる場の設計」がテーマの連続講座を４回開催した。トークイベントや講演会は、来館できない利用者も視聴できるよう、オンラインによるアーカイブ配信を行った。

これまで年間１回開催していた学校招待デー「かようびじゅつかん」を、令和５年度は企業の支援により２回実施し、近隣地域の学校に通う子どもたちの鑑賞機会をさらに拡充することができた。

イ　幅広い人々を対象としたラーニングコンテンツの開発・提供

・教材化された素材の活用件数

館名	教材化された素材の活用件数	内訳
東京国立近代美術館（本館）	3	・MOMAT コレクション展では、来館した小・中学生（学校団体での来館含む）に「MOMAT コレクション こどもセルフガイド」、幼児に「MOMAT コレクション セルフガイドプチ＆みつけてビンゴ！（日・英）」を無料配布した。 ・小中学生向けセルフガイドのデジタル版である「MOM@T Home こどもセルフガイド」を配信し、展示室内外から、大人を含む誰でもがアクセスできる環境を整えた。
国立工芸館	3	・「水のいろ、水のかたち展」セルフガイドを会期中に配布した。 ・「親子でミッション」ワークシートを作成し、金沢市との連携によるミュージアムツアー参加者に配布した。 ・「詩人探偵」トークプログラムフォーマットを作成し、河北郡市教育課程研究会図工部会研究授業、石川県図工・美術研究大会研究授業及び同会検討会、金沢市公民館指導主事研修にて活用した。
京都国立近代美術館	3	・視覚障害のある方に向けた鑑賞ツールとして、所蔵作品についての触察ツール「さわるコレクション」を継続的に制作している。現在 10 種類あり、年間を通じて、盲学校やライトハウス、希望する個人への無料配布を行っている。令和５年度は新たに２種類（各 1,000 部）を新規制作、配布した。
国立映画アーカイブ	3	『こども映画館』では、入場時に令和４年度に作成した「NFAJ セルフガイド」（２種類）をこどもたち全員に配布し、上映前後の解説で、セルフガイドを利用して常設展を楽しめる旨の説明も行った。その結果、例年終映後に常設展見学を希望するこどもは平均 16.5 人だったが、令和５年度は参加者の８割以上の 67 名の参加となった常設展ではセルフガイドに書き込みながら家族で展示を楽しむ光景がみられ、こどもたちが積極的に研究員をつかまえて質問するなど、例年とは異なる活況を呈した。本企画については国立アートリサーチセンターとともに特徴的な教育普及プログラムとして紹介動画にまとめた。「NFAJ セルフガイド」が効果を発揮したことから、令和５年度も新たな「NFAJ セルフガイド」を１種作成した。
国立西洋美術館	4	・「国立西洋美術館　展示・触地図ガイドブック」（令和３年度作成）をプログラム参加者や視覚特別支援学校に配布するとともに、近隣の図書館などに送付した。また当館のインフォメーションでも配布を開始し、ウェブサイトでその旨告知した。 ・小中学生向けのセルフガイドである「ジュニア・パスポート」（「スペインのイメージ展」「キュビスム展」「ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？展」）を作成し、各企画において観覧券として配布する他、「スペインのイメージ展」、「ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？」展においては、国立西洋美術館ウェブサイトにも掲載した。

国立国際美術館	5	アクティヴィティ・ブック、アクティヴィティ・シート、ジュニアセルフガイド、びじゅつかんまるごと発見シート、アートカードを活用した。 アートカードは、令和５年度も小中高大からアートカード利用の申込みがあり、特に特別支援学校による活用が目立った。作品を見るだけではなく、ゲームを通して、作品を見ることを楽しめたようであった。今後は、特別支援学校による来館前のアートカード活用も促進していきたい。『アクティヴィティ・ブック』等鑑賞サポートツールに関しては、団体鑑賞時に児童生徒が自ら作品鑑賞と向き合うツールとして、令和５年度も有効活用できた。
国立新美術館	4	学校等を対象に実施している「鑑賞ガイダンス」及び「施設ガイダンス」において、企画展にあわせて制作した鑑賞ガイド『ルーヴル美術館展　愛を描く　ジュニアガイド』や『蔡國強　宇宙遊 ―〈原初火球〉から始まる　ジュニアワークシート』、『遠距離現在 Universal / Remote　〇才のためのミニガイド』、子ども向け施設ガイド『てくてくマップ』を事前または当日配布し、学校での事前学習や当日の鑑賞活動において活用した。

国立アートリサーチセンターでは、「国立美術館アートカード・セット」を直接貸し出しができるよう、ウェブサイトに申込フォームを設定した。また聴覚障害のある児童生徒をはじめ、幅広い人々が国立美術館の所蔵作品を鑑賞できるよう、日本手話による作品鑑賞動画を作成した。さらに、誰もがアートに親しみ、美術館を利用することができるよう、法人内各館の教育普及室と連携して以下の取組を実施した。

・各館で実施している特徴的な教育普及プログラムの紹介動画を作成した（東京国立近代美術館、国立工芸館、国立映画アーカイブ、国立西洋美術館、国立国際美術館、国立新美術館）。
・令和４年度に制作した教育プログラムの担当者・関係者インタビューを行い、国内美術館ではまだ少ないアクセシブルな事業や中高生プログラムを行う際の参考を示した。

また、令和４年度に、主に発達障害のある方とその家族に向けた、やさしい文章と写真による来館案内冊子「ソーシャルストーリー」全７館分を国立アートリサーチセンターと法人内各館の教育普及室と連携して作成し、ウェブサイトに掲載している。

②　ボランティアや支援団体との相互協力等による教育普及事業及び企業や地域等との連携による事業の開発・実施等

ア　ボランティアや支援団体との相互協力等による教育普及事業

館名	ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ登録者数(人)	参加者数(人)	ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ参加者数(人)
東京国立近代美術館（本館）	49	3,808	494
国立工芸館	35	264	87
京都国立近代美術館	16	－	－
国立西洋美術館	56	5,271	911
国立国際美術館	15	－	－
国立新美術館	62	642	18
合計	233	9,985	1,510

特記事項

（ア）東京国立近代美術館

（本館）

新型コロナウイルス感染症が５類感染症に移行したことを受け、ガイドスタッフの対面の活動が活発化し、49 人のボランティアが、304 回の事業実施にかかわり、3,649 人の参加者に鑑賞プ

ログラムを実施した。ボランティアの延べ活動人数は 494 人だった。今年度はフォローアップ研修の機会を増やし、外部講師による講座も交えて合計４回実施した。また、ボランティアが実施する鑑賞プログラムの内容をよりよいものにするための個人面談を行った。

（国立工芸館）

石川県近在のボランティアスタッフ（石川メンバー）を新規に募集し、研修を行った。石川メンバーは 10 月から当館イベントの運営スタッフとして活動を始めており、今後はトークプログラムに参加すべく、さらなる養成研修を進めている。同研修には東京以来のガイドスタッフ（東京メンバー）に蓄積された知見を活用し、今後も両者の交流をはかりながらガイドプログラムの充実を目指す予定である。

（イ）京都国立近代美術館

京都市内博物館施設連絡協議会及び京都市教育委員会が主催する「京都市博物館ふれあいボランティア養成講座」を受講・修了された方が所属する、京都市博物館ふれあいボランティア「虹の会」からボランティアを受け入れ、来館者へのアンケート調査回収、集計に携わってもらうことで、ボランティアの経験、知識の向上等に協力できた。

（ウ）国立映画アーカイブ

恒例の小中学生対象の「こども映画館」及び V4 各国大使館および文化センターとの共催企画「V4 中央ヨーロッパ子ども映画祭」を開催し、「こども映画館」では弁士の語りと生演奏によるライブパフォーマンス付きで無声映画を鑑賞するプログラムを、「V4 中央ヨーロッパ子ども映画祭」では各作品の上映前に大使館員が解説するトークイベント付きのプログラムを行い、教育事業の充実をはかることができた。また、協同組合日本映画・テレビ録音協会、協同組合日本映画・テレビ編集協会との共催セミナーを開催し、職能団体との相互協力によって、当館所蔵作品をもとに映画技術・表現に関する検証を行い、その記録を教材として残すことができた。

（エ）国立西洋美術館

６期ボランティアの採用を行い、31 名を候補生として採用し、2023 年７月～2024 年３月まで 31 回の養成研修を行った。当館の設立の経緯、研究員による所蔵作品や各部署の活動内容についてのレクチャー、トーク・ツアーのスキルアップのための演習（模擬ツアーも含む）などを含めた内容で、候補生全員が必要な研修を受け、2024 年度よりスクール・ギャラリートーク、ファミリープログラム　どようびじゅつ、美術トーク、建築ツアーで活動を開始する予定である。なお、2016 年度に候補生として研修を受け、2017 年度より活動してきた４期ボランティア・スタッフは 2023 年度をもって任期終了となった。

（オ）国立国際美術館

小学生とその保護者対象プログラム「びじゅつあーすぺしゃる」全６回において、ボランティアが準備、運営に関わることによって、プログラムの全体像を掴み、プログラム当日により主体的に関われる態勢をとった。その結果、ボランティアの学びを育むとともに、プログラム内容の充実を図れた。

（カ）国立新美術館

三菱商事株式会社との協働により、「ルーヴル美術館展　愛を描く」展において「障がいのある方のための特別鑑賞会」を開催した。

株式会社日本設計のボランティア有志と協働し、「建築ツアー　歩く・見る・知る美術館」のマスターコース、および「こどもたんけんツアー2023」を実施した。

「視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ」では、任意団体と協働し、「テート美術館展光　― ターナー、印象派から現代へ」をグループで対話しながら鑑賞した。

子どもの学習支援や食事支援活動を行うNPOとの連携により、「子どもたちの美術館デビュー応援プログラム」を実施した。

また、教育普及資料（全国美術館のワークシート、鑑賞ガイドなど）の整理をサポート・スタッフと継続的に行った。

イ　企業や地域等との連携による事業の開発・実施等

国立アートリサーチセンターにおいて、超高齢社会における孤独孤立や、認知症といった社会的課題に対応する「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」（JST COI-NEXT事業）に参画し、東京藝術大学はじめ研究機関・企業・地方自治体等と連携して研究を推進した。10月には、国立アートリサーチセンターと東京藝術大学の主催、ブリティッシュカウンシルの共催で国際シンポジウムを開催し、英国から招聘した４名の実践者による先進的な事例紹介の他、基礎資料２冊の日本語訳を刊行した。日英同時通訳、手話、文字支援も行ったことから、オンラインを入れると25ヶ国、800名ほどの参加者を得た。

また社会的課題となっている、Diversity（多様性）、Equity（公平性）、Accessibility（アクセシビリティ）、Inclusion（包摂性）についての研究会「DEAIリサーチラボ」を発足させ、ミュージアムの合理的配慮について調査研究を行い、『ミュージアムの合理的配慮ハンドブック』を刊行した。

③　映画フィルム・資料の所蔵作品の活用

国立映画アーカイブでは、児童生徒を対象とした「こども映画館」において、令和４年度に作成した常設展セルフガイド及び教材用に令和５年度作成した「映画コマしおり」の活用を前提とし、セルフガイドのトピックや映画コマしおりと関連性の高い作品を上映し、トークでも説明した結果、参加者の８割以上がセルフガイドを利用して常設展見学をする成果をおさめた。また、京都国立近代美術館との共催「MoMAK Films」に加え、山形国際ドキュメンタリー映画祭との共催で「特集プログラム　野田真吉特集：モノと生の祝祭」にて、38作品を上映する初の本格的な野田真吉大回顧上映を、当館所蔵20作品の提供によって実現した。

京都国立近代美術館では、国立映画アーカイブとの共催による映画上映会「MoMAK Films」を４回、計８日間実施した。令和５年度は京都国立近代美術館が開館60周年を迎え、開館と同年に公開された作品をはじめ、戦後の日本映画を振り返る作品を上映した。５月は開館と同年の1963年に公開された映画を２作品、８月は五所平之助監督の作品、11月は西城秀樹のツアー密着ドキュメンタリーと、薬師丸ひろ子主演の作品、２月は「動く美術、動かす技術」と題して人形劇映画と『山中常盤』の絵巻を撮影した作品を上映した。なお、11月の西城秀樹のツアー密着ドキュメンタリーの上映については８月に発売した直後から反響が大きくすぐに完売となったため、10月に追加上映を決定し、11月25日の上映に加え11月26日にも上映を行った。

（５）調査研究の実施と成果の反映・発信

第５期（令和３年度～令和７年度）中期目標に定める指標	
指標	・調査研究活動の成果に基づき、所蔵作品展において、前中期目標期間実績程度の展示替えを実施する。
関連指標	・調査研究活動の成果の多様な方法による公開に係る取組状況。（調査研究成果の公開方法・公開件数） ・映画のデジタル保存・活用等に関する調査研究の取組状況（調査研究の取組件数）

①　調査研究一覧

国立美術館における美術作品の収集・展示・保管、教育普及、情報の収集・提供その他の美術館活動の推進を図るため、各館において調査研究を実施し、その成果を美術館活動の充実に生かした（計184件）。個々の調査研究については別表９を参照。また、展示替えについては別表１を参照。

特記事項

ア　国立アートリサーチセンター

・稲庭彩和子（主任研究員）が中心となって開催した『共創フォーラム英国編・ミュージアムでウェルビーイングになる』及び英国の基礎資料２冊の日本語訳刊行は、アートと医療・福祉に関して先進的に取り組む英国の事例を日本で初めて本格的に紹介するもので、今後、日本でも同様の取組が広がっていくための布石となった。

・鈴木智香子（研究員）が中心となって運営した『DEAI リサーチラボ』は、国内のミュージアムにおける「合理的配慮」の事例を 20 件近く調査。研究成果を『合理的配慮ハンドブック』にまとめ、今後はミュージアムに従事する者にとって「合理的配慮」の概念の理解促進と行動変容に繋がることが見込まれる。

・原泉（任期付研究員）が編集した『指導者研修報告書』は、過去 18 年間のアンケート分析や、鑑賞教育のための基礎用語解説も含まれ、研修に参加していない層にも理解されやすい内容となった。

イ　東京国立近代美術館

（本館）

・花井久穂（主任研究員）が中心となって編集・執筆した『生誕 120 年記念 棟方志功展 メイキング・オブ・棟方』図録（2023 年３月 17 日発行）が第 65 回全国カタログ展（一般社団法人日本印刷産業連合会）図録部門で日本マーケティング協会賞を受賞した。論文・資料・年譜など最新の研究成果を豊富に収録し、棟方の板画から商業デザイン、装丁に至るまでの膨大なデータをまとめたもので、屏風装や軸装といった棟方板画特有の展示形式を視覚的に示した図版と写真資料は、版画展の図録としては新機軸であった。

（国立工芸館）

・中尾優衣（主任研究員）が牧口千夏（京都国立近代美術館主任研究員）と共同で編集、執筆した『印刷／版画／グラフィックデザインの断層 1957－1979』は、その境界が曖昧な印刷、版画、グラフィックデザインについて、東京国際版画ビエンナーレ出品作品を中心に丁寧にまとめたもので、DNP 文化振興財団の研究助成を受けて出品作家にも改めてインタビューするなど充実した内容となっている。今後の研究における基本文献となった。

・人間国宝・鈴木藏の卒寿を記念して展覧会を開催し刊行した図録では、唐澤昌宏（国立工芸館長）が 70 年にわたる鈴木の陶歴を丁寧に追い時代ごとの特徴を明確に示しており、今後の鈴木藏および志野焼の研究の基準となることが見込まれる。

ウ　京都国立近代美術館

・牧口千夏（主任研究員）が中心となって刊行した『Re：スタートライン 1963-1970/2023 現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係』展図録は、京都国立近代美術館開館当初の現代美術展シリーズを調査・検証したもので、今後の展覧会史・美術館史研究の貴重な資料となった。

・大長智広（主任研究員）が中心となって刊行した『走泥社再考 前衛陶芸が生まれた時代』展図録は、1948 年に京都で結成された走泥社の活動前半について、その前史および同時代の別団体の活動との関係性の検証などを含め網羅的に調査研究した初めての文献として、今後の陶芸史研究に欠くべからざる資料となった。

・池田祐子（副館長・学芸課長）が中心となって刊行した『小林正和とその時代：ファイバーアート、その向こうへ』展図録は、小林正和に関する初めての包括的モノグラフとしてのみならず、同時代作家との関係性にも目配りしたテキスト編、展覧会場の写真を用いたヴィジュアル編の二部構成で、京都国立近代美術館が先駆的に注目してきたファイバーアートを今後研究するにあたっての基本文献となった。

エ　国立映画アーカイブ

・国立映画アーカイブが長年にわたり収集してきた関東大震災の記録映像を広く公開することを目的に、国立情報学研究所との共同研究により令和３年に開設し、令和５年９月１日に完結したウェブサイト「関東大震災映像デジタルアーカイブ」が評価され、第５回デジタルアーカイブ学会賞実践賞を受賞した。また、完成を迎え、令和５年８月 23 日にはプレイベントと記者発表会が行われた。

オ　国立西洋美術館

・田中正之（館長）と久保田有寿（特定研究員）が中心となって編集・執筆した『パリ ポンピドゥーセンター キュビスム展―美の革命　ピカソ、 ブラックからドローネー、 シャガールへ』展カタログは、キュビスムに関する論考を日仏バイリンガルで多数収録し、今後のキュビスム研究の基本文献となることが見込まれる。

・山枡あおい（任期付研究員）による論文「ギュスターヴ・クールベ〈狩人のための連作〉解釈の試み」は、クールベ作品における動物の主題が多様な社会的・文化的要因と結びつくことを明らかにし、作品の着想源や意味内容の解明を通じて、クールベの自己イメージの形成を試みた可能性を提示した。

カ　国立国際美術館

・橋本梓（主任研究員）は、日本の現代美術を代表する作家のひとり、村上隆の作品《727 FATMAN LITTLE BOY》を購入により収蔵したことにちなみ、所蔵作品の中から、1980 年代以降の日本の現代美術の動向を 10 年毎に探る所蔵作品展「コレクション１ 80/90/00/10」を企画開催した。展覧会の実施に際しては、各章構成の小論考を掲載した小冊子も発行した。これによりコレクションにおける 80 年代以降の日本の現代美術の動向を俯瞰できる基本研究となった。

・植松由佳（学芸課長）は、韓国国立現代美術館で開催された「Korean Artist Prize 2023」の審査員を務めた。この賞は同館で 1995 年から開始された「Artist of the Year」が 2012 年に形式を変えて毎年実施されている。若手作家を顕彰する最も重要な賞であり、同賞の審査に加わることで東アジア圏における国立美術館同士の連携を深めることにもつながった。

キ　国立新美術館

・令和４年度に国立新美術館で開催された展覧会に基づく連続講座「今、絵画について考える」に招いた研究者４名と、国立新美術館の職員４名による論考８本を所収した書籍『今、絵画について考える』を刊行した。新しい知見を含む専門的な内容と、それを平易に伝える論述により、幅広い読者に絵画の魅力を伝えることができた。

② 調査研究成果の発信

ア 館の刊行物による調査研究成果の発信

各館において、以下のとおり展覧会図録、研究紀要、館ニュース等を刊行し、研究成果を発信した。また、京都国立近代美術館においては所蔵作品目録を1件作成した。

それぞれの項目における研究員の執筆事項については別表10～12を参照。

（冊）

館名	展覧会図録	研究紀要	館ニュース	パンフレット・ガイド等	
				パンフレット・ガイド	その他
国立アートリサーチセンター	0	0	0	2	3
東京国立近代美術館（本館）	4	1	1	3	0
国立工芸館	2			5	1
京都国立近代美術館	3	1	5	0	3
国立映画アーカイブ	1	0	4	20	12
国立西洋美術館	3	1	3	3	1
国立国際美術館	1	0	4	1	2
国立新美術館	6	1	0	3	2
合計	20	4	17	37	24

イ 館外の学術雑誌、学会等における調査研究成果の発信

各館において、以下のとおり学会、学術雑誌等において研究成果を発信した。それぞれの項目における研究員の執筆事項については別表13を参照。

（件）

館名	学会等発表	論文等発表件数			
		学術書籍、研究報告書等の発行	論文掲載（査読有り）	論文掲載（査読無し）	その他
国立ｱｰﾄﾘｻｰﾁｾﾝﾀｰ	15	2	0	5	18
東京国立近代美術館（本館）	35	7	0	23	45
国立工芸館	8	0	0	9	30
京都国立近代美術館	14	0	0	17	24
国立映画アーカイブ	48	4	5	2	12
国立西洋美術館	19	5	2	6	16
国立国際美術館	12	3	0	4	21
国立新美術館	1	7	0	3	7
合計	152	28	7	69	173

ウ インターネットによる調査研究成果の発信

（ア）国立アートリサーチセンター

国立アートリサーチセンターウェブサイトに下記の記事を掲載した。

- 【シンポジウム開催報告】国立アートリサーチセンター設立記念シンポジウム 「ナショナル・アートミュージアムのいま」（センター長 片岡真実）
- 香港、M+美術館の保存修復施設を見学して（主任研究員 鳥海秀実）
- 酵素を用いた日本画のクリーニングの寄稿紹介（主任研究員 鳥海秀実）
- ICOM-CC「保存修復専門家: 職業の定義」の和訳（主任研究員 鳥海秀実）
- E.C.C.O.「専門的ガイドライン（1）職業」の和訳（主任研究員 鳥海秀実）
- E.C.C.O.「専門的ガイドライン（3）教育」の和訳（主任研究員 鳥海秀実）
- 【保存修復ワークショップ開催報告】文化財修復処置に関するワークショップーナノセルロースの利用について 実技フォローアップー（主任研究員 鳥海秀実）

・【保存修復ワークショップ開催報告】文化財修復処置に関するワークショップーモジュラー・クリーニング・プログラムの利用についてー（主任研究員　鳥海秀実）
・【保存修復講演会動画】近現代美術の保存修復ージャクソン・ポロック作品の事例からー（主任研究員　鳥海秀実）
・『DEAI リサーチラボ発足と「合理的配慮」について』（研究員　鈴木智香子）
・『共創フォーラム開催報告３　深堀り！セッション参加レポート』（京都国立美術館研究員　松山沙樹）
・『令和５年度美術館を活用した鑑賞教育のための指導者研修ウェブ報告書』編集（任期付研究員　原泉）
・『共創フォーラム開催報告２ 英国のミュージアムが取り組む健康とウェルビーイング』（特定専門職員　高田麻央）
・『ミュージアムと合理的配慮―耳が聞こえない当事者の事例から』（客員研究員　伊東俊祐）
・『ミュージアムと合理的配慮―重度・重複障害のある人が美術館へ行く』（DEAI リサーチラボメンバー　亀井幸子）

（イ）東京国立近代美術館（本館・国立工芸館）

『研究紀要』及び美術館ニュース『現代の眼』の収録論文を、ホームページ上及びインターネット上の東京国立近代美術館リポジトリを通じて公開した。

（ウ）京都国立近代美術館

「小林正和とその時代―ファイバーアート、その向こうへ」展に際し、小林正和の作品やアーティストとしての意義そして 1970 年代以降のファイバーアートの動向やその意味などについて、当事者たちの意見を聞いて将来に向けた議論をするために、作品展示作家 12 名ならびに川嶋啓子氏（Office G2 主宰）、英国からレスリー・ミラー氏（University for the Creative Arts, Textile Culture 名誉教授）を招き、4 回にわたるラウンド・テーブルを開催した。貴重な時代の証言であるそれらを館の YouTube アカウントから配信し、HP 上でのアーカイブ化を行った。

（エ）国立映画アーカイブ

・令和３年度に開設した配信サイト『関東大震災映像デジタルアーカイブ』について、令和５年９月１日に新たに７作品を加えたほか、時間と地域ごとに映像一覧を閲覧できる「震災タイムマップ」や専門家によるコラムを公開することにより、サイトを完結した。また令和４年度に開設した「フィルムは記録する ―国立映画アーカイブ歴史映像ポータル―」サイトに新たに 89 作品を加えて拡充を行った。さらに初期日本劇映画を対象とした新しい配信サイト『はじまりの日本劇映画 映画 meets 歌舞伎』を立ち上げ、関連資料と共に４作品を公開した。これらサイトで配信する映画作品等のデータ利用(有料)について、令和６年度中の実施に向けてシステム構築と規定整備を実施した。
・映画関連資料のデジタル画像を公開する新しいウェブサイト「映画遺産 ―国立映画アーカイブ映画資料ポータル―」を令和５年５月 10 日に開設し、第１弾として映画機材 181 点の高精細な画像と詳細なテクニカルデータを公開した。
・「NFAJ デジタル展示室」において、以下のデジタル展示を公開した。
「第 29 回 スチル写真で見る「失われた映画たち」― 小津安二郎監督篇(1)(R6.1.24)
「第 30 回 スチル写真で見る「失われた映画たち」― 小津安二郎監督篇(2)(R6.2.7)
・望ましい映画資料アーカイブの構築に向けて、地域連携をテーマにしたシンポジウム、映画館にまつわる資料アーカイブや映画分野の展覧会キュレーションに関する発表など多様なプログラムにより「全国映画資料アーカイブサミット 2024」(R6.1.26)をオンラインで開催した。
・小ホールにて開催した東京国際映画祭との共催「映画教育国際シンポジウム 2023～海外の事例から次のステップにむけて」を東京国際映画祭公式 YouTube チャンネルで公開した。

・「ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント 旧劇映画の大スター 澤村四郎五郎再考　講演×『五郎正宗孝子伝』[デジタル復元版]特別上映」の上映と講演を、館の公式YouTubeチャンネルおよび配信サイト『はじまりの日本劇映画　映画 meets 歌舞伎』にて公開した。また、尾上松之助と澤村四郎五郎のフィルモグラフィーおよび関連資料も同サイトにて公開した。
・常設展ジュニア向けセルフガイドに新しい冊子が加わり、４月11日より配布し、セルフガイドについて研究員が解説する動画を国立映画アーカイブ公式YouTubeチャンネルで活用法を紹介した。
・NCAR予算による特色ある教育普及プログラムとして、紹介動画「サイレント映画上映@こども映画館」を作成し、サイレント映画の色彩、音について紹介した。
・過去の教育事業「映画製作専門家養成講座」で実施した第７回2003（平成15）年度「撮影技術～伝承のかたち」の計４回の講座、第８回2004（平成16）年度「撮影技術～伝承のかたち２」の計４回の講座、合計８講座の採録を当館HPからPDFにて公開した。

（オ）国立西洋美術館
・インターネット上の「国立西洋美術館出版物リポジトリ」（自館ホームページにもリンク）を通じて『国立西洋美術館研究紀要』収録の研究論文ならびに『国立西洋美術館報』最新号を公開した。
・東京文化財研究所から寄託を受けている「林忠正宛書簡群」のデジタル公開サイト（自館ホームページにもリンク）に、書簡翻刻文を437件追加掲載した。

（カ）国立国際美術館
令和５年度は歩行者デッキ架設工事の影響により長期休館となったため、公式 SNS を活用して、国立国際美術館の代表的所蔵作品や休館終了後にコレクション展にて展示予定の作品を選び、各作品、作家の解説文を掲載した。これにより所蔵作家、作品への理解が深まるとともに、画像もあわせて掲載をすることでSNS上での拡散効果もあり、広報的な効果も大いに見られた。また、国立国際美術館のデータベースを横断検索するシステム「NMAOサーチ」を公開した。これまでの所蔵作品情報に加えて、国立国際美術館で過去に開催された展覧会情報（展覧会風景写真や印刷物含む）も検索対象になったことで、当館事業、所蔵作品及び作家に関する館外の調査研究にも寄与することが可能となった。

（キ）国立新美術館
・当館ホームページにおいて『令和４年度活動報告』を公開した。
・企画展「宇宙遊―〈原初火球〉から始まる」展のオープニングイベントとして、作家本人と国内外から研究者・専門家を招いたトークセッションを開催し、アーカイブ動画（和英）を当館YouTubeチャンネルで公開した。
・企画展「大巻伸嗣　Interface of Being　真空のゆらぎ」の関連イベントとして、作家本人と、本展カタログおよび展示で詩作により大巻氏とコラボレーションした詩人・関口涼子氏とのクロストークを開催し、アーカイブ動画（和英）を当館YouTubeチャンネルで公開した。
・連続講座「アートをめぐる場の設計」において研究者を招いたレクチャーを４回実施し、各回とも終了後にアーカイブ動画を当館ホームページで公開した。
・令和４年度の連続講座の記録集（PDF版）『国立新美術館連続講座記録集　美術館を考える2022』をホームページで公開した。

（6）快適な観覧環境の提供

第５期（令和３年度～令和７年度）中期目標に定める指標	
指標	・快適な観覧環境の提供に係る取組状況。（入館者に対する満足度調査の「良い」以上の回答率を、前中期目標期間実績と同程度の水準を維持するものとする。）
関連指標	・サインや作品解説等の多言語化に向けた取組件数。

館名	観覧環境に対する満足度調査における「良い」以上の回答率	目標（第４期中期目標期間実績）
東京国立近代美術館	80.7%	78%
国立工芸館	87.1%	
京都国立近代美術館	84.5%	
国立映画アーカイブ	84.8%	
国立西洋美術館	88.0%	
国立国際美術館	78.9%	
国立新美術館	83.3%	

【注】満足度調査は、回答を「良い」「普通」「悪い」のいずれかに分類し、集計している。

国民に親しまれる美術館を目指し、各館において、動線の改善や鑑賞しやすさ、理解のしやすさに配慮するための工夫を行った。

また、子ども連れで来館しやすい美術館を目指し、各館にて子ども連れ来館者のための特別開館や会館前１時間の特別開館、また子ども向けの特別企画など、周囲を気にせず楽しんでいただける環境を用意するとともに、「こどもファスト・トラック」（小学生以下の子ども連れ来館者の優先入場）を実施した。

①　高齢者、障がい者、外国人等を含めた入館者本位の快適な観覧環境の形成

※多言語化に向けた取組件数は 70 件である。以下、多言語化に向けた取組には下線を付する。（第４期中期目標期間中の平均件数は 60 件である。）

＜各館共通実施事項＞

- 多言語による館案内表示
- 多言語による館内リーフレット、ミュージアムカレンダー等の配布
- 英語による館内放送の実施（一部の放送を除く）
- 所蔵作品展・企画展における展示解説（章解説パネル・キャプション・作品リスト等）の多言語化（原則として日本語のほか英語・中国語・韓国語に対応）
- 所蔵作品展・企画展における音声ガイドの多言語化（原則として日本語のほか英語・中国語・韓国語に対応）（国立映画アーカイブを除く）
- 多言語対応の案内用デジタルサイネージの設置（国立新美術館を除く）
- QR コード読み取り式の電子アンケート（日本語・英語）を導入（国立映画アーカイブを除く）
- クレジットカード及び電子マネー（Suica 及び PASMO 等）による観覧券の窓口販売（館により対応は異なる）
- 多目的トイレ、エレベータ・エスカレータ、スロープの設置
- 車椅子の貸出、ベビーカーの貸出
- 身体障がい者用駐車スペースの提供（国立国際美術館を除く）
- 盲導犬、介助犬の同伴による観覧
- インフォメーションカウンターに筆談ボードを設置
- 主に発達障害のある方とその家族に向けた、やさしい文章と写真による来館案内冊子「ソーシャルストーリー」を各館ウェブサイトに掲載
- オストメイト対応の設備を設置
- 自動体外式除細動器（AED）の設置

・観覧者の休憩のための椅子を展示室に配置
・授乳室の設置
・無料Wi-Fiの提供

＜各館ごとの実施事項＞
・電話による展覧会情報案内（ハローダイヤル）の多言語化（日本語・英語・中国語・韓国語・ポルトガル語・スペイン語）【東京国立近代美術館（本館・国立工芸館）、国立映画アーカイブ、国立西洋美術館、国立新美術館】
・多言語による所蔵作品展チケットのオンライン販売を実施【東京国立近代美術館（本館・国立工芸館）、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館】
・QR コード決済サービス（訪日外国人向け）による観覧券の窓口販売を開始【東京国立近代美術館（本館）、国立西洋美術館、国立国際美術館、国立新美術館】
・東京都が実施する「ウェルカムカード」に参加し、外国人来館者の所蔵作品展観覧料を割引【東京国立近代美術館（本館）、国立映画アーカイブ、国立西洋美術館】
・地下鉄の対象の乗車券の提示により割引等を実施するサービス「ちかとく」の英語版に参加【東京国立近代美術館（本館）、国立西洋美術館】
・国立美術館６館紹介パンフレットの多言語化（日本語・英語・中国語・韓国語）【法人本部】
・館内サインの拡大、所蔵作品展における「重要文化財」のキャプション表示の追加、ホームページ上の重要文化財作品の特設解説ページ設置、所蔵作品展における小中学生向けこどもセルフガイドの配布、自主企画展における無料音声ガイドアプリの提供、所蔵作品展におけるスマートフォンアプリによる４ヶ国語（日本語・英語・中国語・韓国語）の章解説・作品解説の提供、訪日外国人に向けた、英語による鑑賞・異文化交流プログラム「Let’s Talk Art！」の実施【東京国立近代美術館（本館）】
・作品名・作家名にふりがなを入れた会場キャプションの設置及び作品リストの配布、夏季所蔵作品展における児童生徒を対象とした「セルフガイド」（日本語・英語）・一般観覧者向けリーフレット（日本語・英語）及び冬季所蔵作品展における一般観覧者向けリーフレット（日本語）の作成・配布、スマートフォンアプリによる章解説・作品解説の多言語での提供【東京国立近代美術館（国立工芸館）】
・美術館ニュース『視る』の配布、免震装置付有機 EL 照明による展示ケースの設置、自主企画展チケットのオンライン販売の実施【京都国立近代美術館】
・特集展示「NFAJ コレクションでみる 日本映画の歴史」における児童生徒向けの「ジュニア・セルフガイド」の配布、所蔵作品上映におけるバリアフリー上映を実施（視覚障がい者向け音声ガイドの使用、聴覚障がい者向け字幕投影及び磁気ループシステム使用）、企画上映について、前売券の販売【国立映画アーカイブ】
・企画展における児童生徒向けの「ジュニア・パスポート」を配布、館広報物（館ニュース『Zephyros』の最新号及びバックナンバー）の配布及びホームページ掲載、「世界遺産パンフレット」（日本語・英語・中国語・韓国語）の配布、グーグル「Arts&Culture」アプリによる主要所蔵作品解説（日本語・英語・中国語・韓国語）の無料配信の実施、建築デジタルコンテンツの多言語化（英語・中国語・韓国語）、企画展における QR コードを活用した３ヶ国語（英語・中国語・韓国語）の章解説・作品解説の提供【国立西洋美術館】
・各階のトイレに点字案内板を設置、安全仕様のキッズルーム（地下１階）の設置及び同所における幼児向け絵本の常設【国立国際美術館】
・点字ブロック（正門から正面入口、地下鉄口から西入口（インターホンを設置））及び点字表示（エレベータ内ほか）の設置、補聴器等への磁気誘導無線システムの講堂内への設置（専用受信機 10 台）、託児サービスの実施、文字を大きくし見易くしたフロアガイド「大きな文字の利用案内」の館内配布、企画展における児童生徒向け鑑賞ガイドの配付及び子ども向け施設ガイド『てくてくマップ』の配布及びホームページ掲載、地域の学校を対象として休館日の展示室を無料で開放する「かようびじゅつかん」を実施、外国人来館者向けの翻訳サービス「ポケトーク」を導入、講演会・シンポジウム等における手話通訳の導入、利用者がスマートフォン等の端末で

視聴できるウェブアプリ「国立新美術館建築ガイドアプリ CONIC」を配信、QR コードを活用した作品解説キャプションの多言語化（日英中韓）【国立新美術館】

② 入場料金、開館時間等の弾力化

＜各館共通実施事項＞

・国際博物館の日（５月 18 日）に関連し、所蔵作品展及び国立映画アーカイブの展覧会の観覧料を無料化（当日休館日であった館を除く）
・文化の日（11 月３日）における所蔵作品展及び国立映画アーカイブの展覧会の観覧料を無料化（当日休館日であった館を除く）
・所蔵作品展、自主企画展及び国立映画アーカイブの展覧会における高校生以下及び 18 歳未満の観覧料を無料化
・所蔵作品展及び企画展における夜間開館（原則として毎週金曜・土曜日 20 時まで）を実施

＜各館ごとの実施事項＞

ア　東京国立近代美術館

（本館）

・東京都が実施する「家族ふれあいの日」に参加し、毎週土曜、日曜に優待券を提示した高校生以下の子どもを連れた家族に所蔵作品展の観覧料割引を実施
・東京メトロ、都営地下鉄ワンデーパスによる所蔵作品展の観覧料割引を実施
・JAF 会員券の提示による所蔵作品展の観覧料（個人一般）割引を実施（企画展も展覧会により割引実施）
・企画展（「東京国立近代美術館 70 周年記念展　重要文化財の秘密」、「ガウディとサグラダ・ファミリア展」、「生誕 120 年　棟方志功展　メイキング・オブ・ムナカタ」）において、各種観覧料割引を実施
・所蔵作品展については引き続き「５時から割引」（夜間割引）を実施
・通訳案内士の所蔵作品展・企画展（展覧会による）の無料観覧
・「アートフェア東京 2024」の特別協力美術館として、令和６年３月７日～10 日について、当該イベントの参加者に対し、中平卓馬展及び所蔵作品展観覧料を無料又は割引とした。
・一般社団法人コンテンポラリーアートプラットフォームが主催するイベント「アートウィーク東京」に協力し、令和５年 11 月２日～５日について、当該イベント参加者に対し、棟方志功展及び所蔵作品展観覧料を無料又は割引とした。

（国立工芸館）

・通訳案内士の所蔵作品展・企画展（展覧会による）の無料観覧
・所蔵作品展及び企画展において各種観覧料割引を実施
・いしかわ文化の日（10 月 16 日）における観覧料を無料化
・学生のまちパスポート『学パス』（いしかわ・かなざわ文化施設入館証）により、石川県内の高等教育機関に在学する１年生を対象に、観覧料無料を実施

イ　京都国立近代美術館

・自主企画展チケットのオンライン販売を実施
・企画展を開催しない土曜日における所蔵作品展の観覧料を無料化
・「関西文化の日」（11 月 18 日，19 日）における所蔵作品展の観覧料を無料化
・京都国立博物館、京都市京セラ美術館、京都文化博物館と組織する「京都ミュージアムズ・フォー」において、各館の友の会と相互割引を実施
・奈良国立博物館、国立民族学博物館及び MIHO MUSEUM の友の会と相互割引を実施
・近隣の京都市京セラ美術館、細見美術館と連携し、相互割引を実施
・京都伝統産業ミュージアムと相互割引を実施
・JAF 会員証提示による企画展及び所蔵作品展の観覧料（個人一般）割引を実施

・朝日新聞グループ 朝日友の会，京都新聞トマト倶楽部，阪急阪神カード及び京阪カードの情報誌・ホームページに展覧会情報を掲載するとともに観覧料割引を実施
・企画展（「開館 60 周年記念　甲斐荘楠音の全貌―絵画、演劇、映画を越境する個性」「開館 60 周年記念　Re: スタートライン 1963－1970/2023 現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係」「開館 60 周年記念　走泥社再考 前衛陶芸が生まれた時代」「開館 60 周年記念　京都画壇の青春―栖鳳、松園につづく新世代たち」「開館 60 周年記念　京都画壇の青春―栖鳳、松園につづく新世代たち」「開館 60 周年記念　小林正和とその時代―ファイバーアート、その向こうへ」）において、各種観覧料割引を実施
・第 1 回～第 4 回コレクション展及び企画展「開館 60 周年記念　Re:スタートライン 1963－1970/2023 現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係」「開館 60 周年記念　小林正和とその時代―ファイバーアート、その向こうへ」において、金曜日の 18 時以降の入館者に対して、夜間割引を実施

ウ　国立映画アーカイブ
・東京都が実施する「家族ふれあいの日」に参加し、毎週土曜、日曜に優待券を提示した高校生以下の子どもを連れた家族に７階展示室の観覧料割引を実施
・「東京・ミュージアムぐるっとパス 2023」に参画し、７階展示室の観覧料無料化を実施
・７階展示室の毎月末の金曜日(プレミアムフライデー)の 20 時までの開館延長。

エ　国立西洋美術館
・東京都が実施する「家族ふれあいの日」に参加し、毎週土曜、日曜に優待券を提示した高校生以下の子どもを連れた家族に所蔵作品展の観覧料割引を実施
・東京メトロ、都営地下鉄ワンデーパスによる所蔵作品展の観覧料割引を実施
・京成電鉄株式会社が実施する都内フリー乗車券「下町日和きっぷ」に参加し、所蔵作品展の観覧料割引を実施
・北総鉄道株式会社が実施する「北総・下町めぐりきっぷ」に参加し、所蔵作品展の観覧料割引を実施
・「東京・ミュージアムぐるっとパス 2023」に参画し、所蔵作品展の観覧料割引を実施
・「Kawasaki Free Sunday」（原則毎月第２日曜日）に所蔵作品展の観覧料を無料化
・「にぎやかサタデー」（8 月 26 日）に所蔵作品展及び自主企画展の観覧料を無料化
・有効期間中何回でも常設展を観覧できる「国立西洋美術館常設展パスポートチケット」の作成・発売
・5 月 1 日（ゴールデンウィーク）、8 月 14 日（お盆期間）、3 月 25 日（桜花期）に臨時開館を実施

オ　国立国際美術館
・所蔵作品展及び自主企画展における夜間開館時の観覧料割引を実施
・原則毎月第一土曜日における所蔵作品展の観覧料を無料化
・大阪観光局が発行する「大阪周遊パス」による所蔵作品展の観覧料無料化及び企画展観覧料割引を実施
・「ミュージアムぐるっとパス・関西」に参加し、所蔵作品展の観覧料無料化及び企画展観覧料割引を実施
・京都国立博物館、奈良国立博物館及び国立民族学博物館の友の会等と相互割引を実施
・近隣の大阪市立東洋陶磁美術館と連携し、相互割引を実施
・朝日新聞グループ 朝日友の会、大阪市高速電気軌道株式会社、OSAKA メセナカード、京阪カード及びみずほプレミアムクラブの情報誌・ホームページに展覧会情報等を掲載するとともに観覧料割引を実施
・近隣ホテルとの連携を強化し、ホテル利用者に入場割引券を配布し、展覧会広報を行うとともに観覧料割引を実施。また、提携ホテルでの展覧会の半券持参等による特典を提供

・ゴールデンウイーク期間中に臨時開館を実施【５月１日（月）】

カ　国立新美術館
・六本木アート・トライアングル参加館との観覧料の相互割引及び共通マップの作成・配布
・公募団体展と企画展の観覧料の相互割引を実施したほか、企画展において、各種観覧料割引を実施
・「東京・ミュージアム ぐるっとパス」に参加し、企画展観覧料割引を実施
・東京ミッドタウンと連携し、東京ミッドタウン内対象ショップへの展覧会の半券持参による特典提供を実施
・六本木アートナイトにおいて、開館時間の延長、オールナイトでの野外展示を実施
・共催展・自主企画展において、しおり型割引引換券、コースター型割引引換券を作成
・「アートウィーク東京」の参加施設として、令和５年 11 月１日（水）～11 月５日（日）の期間中、当該イベントの参加者に対し、「イヴ・サンローラン展　時を超えるスタイル」の観覧料を無料又は割引対応した。
・「アートフェア東京 2024」の特別協力美術館として、令和６年３月７日（木）～３月 17 日（日）の期間中、当該イベントの参加者に対し、「マティス　自由なフォルム」、「遠距離現在　Universal / Remote」の観覧料を割引対応した。

③　キャンパスメンバーズ制度の実施

国立美術館全体の事業として平成 18 年 12 月から実施している、大学、短期大学、高等専門学校及び専修学校等を対象とした会員制度「国立美術館キャンパスメンバーズ」については、令和５年度は７校の新規加盟があり、合計 106 校となった。これは制度開始以来最高の加盟校数である。（利用者数 129,117 人）

平成 29 年度から実施している外部媒体（マイナビ「学生の窓口」）を活用した広報では、「“魅力”を身につけるのに最適なのは『美術館』だった!?　先輩に学ぶ感性の磨き方」と題した記事を掲載し、学生に対する広報活動を引き続き強化した。同記事は、令和４年度のページビュー数 10,643 回を上回る 11,807 回閲覧された。

④　ミュージアムショップ、レストラン等の充実

ミュージアムショップについては、企業との連携等により各館所蔵作品の図版等を活用したオリジナルグッズの開発に努め、ホームページにおいて展覧会図録やグッズの情報を紹介するなどの広報宣伝を行った。レストランについては、企画展にちなんだ特別メニュー等を提供した。各館の特徴的な取組は以下のとおりである。

ア　東京国立近代美術館

（本館）
・「美術館の春まつり」期間中、通常のショップに加えてポップアップショップを設置、花にちなんだ作品をモチーフとした商品等を販売し、好評だった。
・「美術館の春まつり」期間中、前庭に桜を眺めながら休憩ができる床几台を設置した。
・レストラン「ラー・エ・ミクニ」が「MOMAT サマーフェス」の期間中、各種ドリンクや軽食の提供に加え、夜はビアバーとしても楽しんでもらえるようにした。「美術館の春まつり」期間中はキッチンカーを前庭に配置し、特製お花見弁当や軽食を提供し、イベントを盛り上げた。

（国立工芸館）

国立美術館唯一の直営ミュージアムショップとして、販売活動を通じて「日本のものづくり」の魅力を国内外に発信することを目指し、管理・研究部門協働によって各地の工芸やデザインの優品を選び、商品解説や制作者紹介の充実にも努めた。また、北陸地域や工芸にゆかりのある企業との連携によるオリジナルグッズを制作したり、展覧会内容に合わせたグッズを収集したりすることに

より、利用者の工芸に対する関心を持つ深めるきっかけを作った。令和５年度は新規で２社とグッズ制作を行った。

20 ㎡にも満たない小さな売場でありながらも、11 月の月間売上高は 2,385 千円（前年同月比 267%）を達成するなど、自己収入増加に寄与した。

イ　京都国立近代美術館

・ミュージアムショップにおいて、展覧会関連書籍及びグッズのコーナーを設け、「開館 60 周年記念走泥社再考前衛陶芸が生まれた時代」、「開館 60 周年記念京都画壇の青春―栖鳳、松園につづく新世代たち」ではオリジナルグッズを企画・製作し販売した。また、京都国立近代美術館開館 60 周年記念品として、トートバッグ、布缶バッジ、塩芳軒和三盆を製作協力した。
さらに京都国立近代美術館の創造推進事業『CONNECTs__』では、障害のある方が制作した商品を集めた特設コーナーを設けた。

・OK パスポートをお持ちの来館者に対し、開催中の展覧会図録、コレクション作品のオリジナルポストカードの 10%割引を実施した。

・レストランにおいて、企画展にあわせた期間限定メニューを全展示で販売した。友の会・JAF 会員・岡崎手帳提示又は十石舟乗船券提示の方に 10%割引きサービスを実施した。また Instagram の投稿を促す施策として当日投稿の方にドリンクプレゼントを実施した。さらに国内外の観光客に向け京野菜・京焙じ茶・抹茶など京都ならではの食材を使用しニーズに対応した。

ウ　国立映画アーカイブ

令和２年度に館内整備を行い、１階エントランスホールの総合受付に併設したミュージアムショップにて、「NFAJ ニューズレター」及び展覧会図録等を販売したほか、上映企画「アニメーション作家 山村浩二」に合わせて山村浩二監督の国立映画アーカイブ先付け映像『Archive of Lights』フリップブックの販売を開始した。また、各企画展の会期中には関連書籍の販売を行った。

エ　国立西洋美術館

・所蔵作品を用いたオリジナルグッズ（木製ボールペン、レプリカリング、モバイルバッテリー他）を新たに制作・販売するとともに、自主企画展オリジナルグッズ（A4 クリアファイル、T シャツ、バッグ他）の制作・販売により、展覧会の広報及び来館者サービスに貢献した。

・企画展「憧憬の地　ブルターニュ―モネ、ゴーガン、黒田清輝らが見た異郷」「パリ ポンピドゥーセンター　キュビスム展―美の革命ピカソ、ブラックからドローネー、シャガールへ」、自主企画展「スペインのイメージ：版画を通じて写し伝わるすがた」「ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？――国立西洋美術館 65 年目の自問｜現代美術家たちへの問いかけ 」において展覧会特別コースを開発・提供し、観覧環境の充実を図り、来館者が展覧会とあわせて楽しむことができる機会を設けた。

オ　国立国際美術館

・ミュージアムショップでは、すべての展覧会で、それぞれの内容や出品作家に合わせた関連書籍、グッズのコーナーを設け、商品の充実させた。特に「コレクション１ 80/90/00/10」では、令和４年度に収蔵した村上隆作品のポストカード付小冊子を販売し、来館者のニーズに応えることができた。

・令和４年度に館内レストランが閉店し、営業していない状態が続いていたが、令和６年２月に特別展「古代メキシコ ーマヤ、アステカ、テオティワカン」開幕にあわせレストランが新たにオープンした。同展会期中には古代メキシコにちなんだ特別メキシコプレートやメキシカンデザート、ドリンク等のメニューを提供して好評を博した。

カ　国立新美術館

・ミュージアムショップ内ギャラリーにおいて、一般社団法人阿寒アイヌコンサルンをはじめとする、作家やグループの展示を美術館との連携により４展開催し、合わせて関連商品の展示販売を実施した。
・ミュージアムショップにおいて、各展覧会の来館客層に合わせた催事展開を実施した。
・レストラン及びカフェにおいて、ルーヴル美術館展、テート美術館展及びマティス展とコラボレーションした特別メニューの提供を、展覧会の開催期間に合わせて展開した。
・テート美術館展期間中、カフェにおいてウェッジウッドの茶器を用いた「ウェッジウッド・カフェ」を展開した。
・テート美術館展において、観覧券とレストランで使用できる食事券とをセット販売した。

2　我が国の近現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示し得るナショナルコレクションの形成・活用・継承

（1）作品の収集

第５期（令和３年度～令和７年度）中期目標に定める指標	
指標	・所蔵作品の収集に係る取組状況。 （美術作品購入点数、美術作品寄贈点数、美術作品年度末所蔵作品数） ・所蔵作品整理に係る取組状況（レジストラー等の専門的職員の充当人数） ・国立各館間での管理換及び長期貸与の件数

①　ナショナルコレクションの形成

ナショナルコレクションの形成については、従来の各館の収集方針を再検討しながら令和４年 11 月に定めた「独立行政法人国立美術館収集方針」及び同方針に基づく現代の美術作品の同時代収集の推進方針にのっとり、リサーチと協議を重ねて既存のコレクションの手薄な部分を補うことに努めた。その結果、日比野克彦や太郎千恵蔵といった 1980 年代～90 年代に顕著な発表を行っていながらこれまで収集に至らなかった作家の作品や、関根直子、澤谷由子、AKI INOMATA、谷原菜摘子、片山真理ら若手～中堅の女性作家の作品、ルイーズ・ブルジョワ、レオノール・アントゥネスといった国際的な女性作家の作品、クゥワイ・サムナン（カンボジア）といったアジアの作家の作品を収集することができた。また、野長瀬晩夏（日本画）、板谷波山（陶芸）、海野勝珉（金工）といった、海外流出のおそれのある近代美術の重要作品、マックス・エルンスト、アルベール・グレーズら西洋近代美術の重要作家の作品も収集し、法人全体のコレクションに厚みを加えることができた。これらの作品は令和６年度以降に法人ウェブサイトで周知をはかるほか、各館において積極的に公開していく予定である。

・所蔵作品整理に係る取組状況（レジストラー等の専門的職員の充当人数）

令和５年度充当人数（人）	令和５年度新規	0	総数	2

※上記は常勤職員の人数である。このほか令和４年度に研究補佐員１名雇用

特記事項

レジストラーについてはこれまで国立国際美術館で主任研究員１名、国立西洋美術館で主任研究員１名、研究補佐員１名が配置されているが、令和５年度に法人全体で新規で配置された者はいない。両館ではレジストラーが収蔵庫からの作品の出し入れに関わる管理・記録、輸送の調整、作品の貸与・借用に伴う調整等を行っている。修復に関しては、国立西洋美術館では修復担当者の業務となるが、国立国際美術館ではレジストラーが作品状態点検、修復の必要性の判断を行い外部の専門家への手配まで担当する。以上の業務について、法人内の他館は専門職を置かず、研究員が数年おきに係を交代しつつその任にあたっている。国立西洋美術館ではまた、作品移動の調整の円滑化のために、出入庫記録の記録作成方針の標準化と DX の推進、システム構築を行い、国内美術館の規範となる作品管理体制の確立を目指している。

・国立各館間での管理換及び長期貸与の件数

国立各館間での管理換及び長期貸与の件数（件）	2

特記事項

中期目標の変更により「法人全体としての収蔵品状況を精査し、他館への長期貸与等により積極的活用を進める」ことが追記されたのを受け、国立アートリサーチセンター作品活用促進グループの調整により国立美術館相互の貸与促進をはかり、より潤滑に相互貸与を進められるよう規則の整備を行った。その結果、国立国際美術館の所蔵する日本画２点を京都国立近代美術館に長期貸与したほか、国立工芸館の企画展「印刷／版画／グラフィックデザインの断層 1957-1979」への国立各館のコレクションの出品、京都国立近代美術館における所蔵作品展の特集「京都の日本画」への東京国立近代美

術館所蔵品の出品、国立国際美術館における村上隆作品の新規所蔵を機に開催した特集展示への東京国立近代美術館が所蔵する村上作品の出品、東京国立近代美術館における国立工芸館所蔵作品の定期的な公開など、国立美術館相互の作品活用を活性化させた。この他に、各館で実施した企画展においても、法人内他館のコレクションを有効に活用した。

② 所蔵作品の収集に係る取組状況

作品の収集は、国立美術館の役割を踏まえ、法人全体及び各館の収集方針に基づき、各館の調査・研究活動を通じて収集するべき美術作品を検討した後、外部の有識者による美術作品購入選考委員会等の審査を経た上で実施している。また、法人内で各館の収集予定やその緊急性等について情報交換を行うことにより、適時適切な収集に努めている。

令和５年度の購入予算（法人共通）の使途については、海外への流出可能性など緊急度の高さや作品の品質と希少性等の観点から法人全体で協議し、決定している。

館名	購入点数	購入金額（円）	寄贈点数	年度末所蔵作品数	年度末寄託品数
東京国立近代美術館	85	540,265,141	29	13,762	251
国立工芸館	26	280,982,000	59	4,159	138
京都国立近代美術館	34	607,127,350	241	13,531	1,600
国立西洋美術館	22	28,811,471	0	6,456	65
国立国際美術館	17	730,952,224	25	8,203	98
合計	184	2,188,138,186	354	46,111	2,152

館名		令和５年度の収集方針
東京国立近代美術館	本館	19 世紀末から今日に至る日本の近現代美術の流れを、国際的な関連を交えつつ通史的・体系的に示すために、その十全な展観に必要不可欠な歴史的価値を有する作品・資料の収集に努める。またジェンダーバランスや地域性といった同時代的に重要な視点を常に踏まえ、将来的にその時代を象徴しうるような先駆的作品の確保に努める。 ア　1970 年代以降の日本と海外の作品の収集 イ　日本の美術に影響を与えた海外作家の作品の収集 ウ　1900～1940 年代の日本画作品の収集
	国立工芸館	ア　近現代の日本の工芸作品及びデザイン作品の体系的・通史的概観を可能とし、かつ世界との関係を示すため必要な時代や国・地域の作品の充実を図る。 イ　性別・年齢の偏りを是正するよう配慮しつつ時代精神を映し出す優品を積極的に収集するよう努める。 ウ　日本工芸の近代化を示す作品の補充と、個々の表現を模索し多様な展開を見せる、戦後から現代に至る重要な作品の収集を中心とする。
京都国立近代美術館		ア　近現代の工芸全般、日本画、油彩画、版画、彫刻、写真など多様なジャンルの作品資料を収集し、将来における横断的美術史研究と総合的展観に資する体系的コレクションの形成に努める。 イ　その際、優れた女性作家の作品を積極的に収集し、美術館活動におけるジェンダーバランスの是正を目指す。 ウ　また、美術における京都を含む西日本の歴史的文化的重要性に鑑み、その地域性に立脚した作品や、世界の美術との影響関係の検証に不可欠な作品の収集に努める。
国立西洋美術館		ア　中世から 20 世紀前半の西洋美術の流れの体系的・通史的概観を可能とするのに必要不可欠な時代や地域の作品の充実を図り、女性作家の作品も積極的に収集する。 イ　松方旧蔵品の調査研究の成果に基づきつつ収集する。 ウ　ヨーロッパ版画史を通覧できるよう、多様な様式や主題の作品の系統的収集を行う。

国立国際美術館	日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするため、国際的な交流が極めて盛んになった 1945 年以降の国内外の現代美術作品の収集を次の点について留意しながら積極的に行う。 ア 国内外の同時代性の高い先端的な美術作品の収集 イ ジェンダー・バランスの是正や非欧米地域の動向、国内の地域バランスに配慮した作品収集 ウ 今後の美術史に寄与する現代美術作品の体系的な収集

特記事項

ア　東京国立近代美術館

（本館）

〈購入〉

シュルレアリスムを代表する作家の一人マックス・エルンストの油彩《砂漠の花（砂漠のバラ）》（1925 年）を購入した。国立美術館全体のコレクションのなかで多様な活用が見込まれる優品である。日本画では速水御舟による画業初期の実験的意欲作《宮津》（1915 年）を購入した。近年重点的に取り組む女性作家の作品の充実として、油彩では桂ゆき（ユキ子）《秋》（1955 年）、毛利眞美《裸婦（B）》（1957 年）、写真では今井壽惠《「オフィリア」その後》（1960 年）などを購入し、着実な成果をあげた。同じく近年計画的に取り組む 1980～90 年代作品の収集として、油彩では堂本右美《無題》（1990 年）、彫刻では日比野克彦《PRESENT BOX》（1982 年）、写真では杉本博司〈劇場〉シリーズ（1977～80 年）など重要作家の代表作を購入した。また大正～昭和を代表する挿絵画家の一人・小村雪岱《邦枝完二著「江戸役者」挿絵》（1932 年）や、棟方志功による谷崎潤一郎『鍵』の挿絵版画《鍵板画柵》（1956 年）など、美術史上の重要作の購入に成功したことも大きな成果である。

〈寄贈〉

日本画では、いずれも南画系の作品である滝和亭《闔家全慶》（1898 年）、水田硯山《瀞峡積翠図》（1927 年）をご寄贈いただいた。当館コレクションに不足している傾向の補完となり、戦前の日本画の多様な展開を示すことが可能になった。油彩では、有馬さとえ（三斗枝）《題名不詳》（1946-51 年頃）をご寄贈いただいた。戦前から戦後まで息の長い活躍を続けた画家の作品で、近年重点的に取り組む女性作家の作品の充実に合致する収蔵となった。同じく油彩では、横尾忠則《見えざる助力者》（1989 年）、《かざぐるま 2004》（2004 年）を受贈した。また石版による風景画で名高い織田一磨の 1910 年前後の水彩６点、戦後の木版画界をリードした清宮質文による版画４点、ガラス絵１点も受贈した。横尾、織田、清宮とも既に作品を複数点所蔵する作家ではあるが、今回のご寄贈はコレクションに欠けていた傾向や時代の作品であり、より十全に各作家のキャリア全体を通覧することが可能となった。

（国立工芸館）

〈購入〉

板谷波山《彩磁紫陽花模様花瓶》と海野勝珉《花鳥図花瓶》を購入した。明治時代から大正時代の日本の工芸技術の粋を示す優品を収蔵できたことで、国立工芸館のコレクションの欠落を補い、また作品の海外流出を防いだという点でも国立の美術館としての役割を果たした意義のある購入であった。

また、現代の美術作品の同時代収集として、加守田章二、樂直入、井上雅之、小川待子、鈴木藏の陶芸作品、池田巖の漆芸作品、四谷シモンの人形など、現代工芸の多彩な様相を示す作品を幅広く収集することができた。さらに特筆すべき点として、新里明士、桑田卓郎、池田晃将、舘鼻則孝など、1970～1980 年代生まれの作家の作品を重点的に購入したことも令和５年度の成果として挙げられる。現代的な視点で工芸の分野を新たに切り拓こうとする若い世代の作家にも目配りしつつ、年代、ジャンルともにバランスの取れた収蔵を進めることができた。

〈寄贈〉

まとまった作品受贈として、釜我敏子による日本伝統工芸展出品作の型絵染着物、林康夫の陶磁、山田禮子のジュエリーを収蔵することができた。いずれも 1970 年代頃から 2000 年代まで、それぞ

れの作家の年代ごとの作風の展開をたどることのできる作品がまんべんなく含まれており、コレクションに厚みを持たせることができた。また、加藤清之の作風をよく示す代表作の《WORK 72-X》や、富本憲吉の《鉄描銅彩大和風景模様大飾皿》などコレクションの欠落を補う作品を受贈することができた。さらに松田権六の書簡を受け入れることができたが、国立工芸館内に移築された松田権六の工房での展示を充実させるとともに、制作工程を示す貴重な資料として今後の研究に寄与することも期待される。

イ　京都国立近代美術館

〈購入〉

令和５年度は、特別購入予算でキュビスムの世界的展開に重要な役割を果たしたアルベール・グレーズの《キュビスム的風景、木と川》（1914 年）と第２回国画創作協会展出品作である野長瀬晩花の《休み時》（1919 年）を購入した。前者は来歴上ドイツとの関わりが深いため、京都国立近代美術館が所蔵する村山知義などの前衛絵画との比較研究に寄与することが、長らく所在不明であった後者は、確認できる作品点数が少ない晩花の代表作として今後の晩花そして国画創作協会研究に資することが期待される。

また展覧会活動と連動した購入の事例として、京都国立近代美術館の「現代美術の動向展」出品作であり、「Re：スタートライン展」でも展示された松本陽子《作品 V》（1965 年）や八田豊《作品 65-BB（トロンロン）》（1965 年）ほかが挙げられる。加えて、コレクションにおけるジェンダーバランスの是正や中堅・若手作家作品の充実化を目指すため、AKI INOMATA（1983 年生まれ）の写真・彫刻・映像からなる〈やどかりに「やど」をわたしてみる〉シリーズを購入したが、この作品群は、令和６年度開催の「LOVE ファッション―私を着がえるとき」（仮称）展への出品を予定している。

〈寄贈〉

令和５年度も、多彩なジャンルの作品を数多く受贈することができた。代表的な事例を挙げれば、昭和の京都における洋画・デザイン・美術教育の指導者として活躍し、関西美術院理事長も務めた霜鳥之彦の滞米作《ウッズホール海洋生物学研究所》（1906 年）を含む油彩画７点、水彩画 23 点の受贈は、今後の京都における近代洋画研究に資することが期待される。また未亡人から寄贈された版画家黒崎彰の《我らを憐れみたまえ》（1965 年）に始まる作品計 65 点は、1960 年代以降関西を拠点に活躍した黒崎の制作の全貌を示すコレクションとして、今後の活用が期待される。さらに友禅の人間国宝として活躍した染織家森口華弘の日本伝統工芸展への出品作を中心とした全生涯にわたる作品・資料群計 87 点を、息子で同じく友禅の人間国宝である森口邦彦氏より受贈した。

上記の他にも、女性の陶芸家として先駆的役割を果たした坪井明日香の作品５点や津田信夫の金工作品２点、来野月乙や三橋遵の染織作品などを受贈し工芸コレクションの充実化を図った。また「Re：スタートライン」展出品作家については、購入のみならず、寄贈の申出も多数寄せられ、展覧会開催や日頃の活動などを通じて、作家や作家遺族と信頼関係を構築することの重要性を改めて認識することになった。

ウ　国立西洋美術館

〈購入〉

令和５年度は国立西洋美術館の収集方針に則って購入を行った。ジョヴァンニ・セガンティーニの《花野に眠る少女》は半世紀以上にわたり国立西洋美術館に寄託されてきたもので、旧松方コレクションのなかでも近代イタリア美術というやや珍しい作品を購入できたことは、松方コレクションの再構成をするうえで有意義な購入であった。レンブラントの版画、そしてレンブラントの技法を学んだイタリアのカスティリオーネの版画を購入したことは、17 世紀の重要な版画家の作品を収蔵したということにとどまらず、17 世紀の西洋版画史における南北交流をコレクションによって見せることができるようになった点においても重要である。

エ　国立国際美術館

〈購入〉

ルイーズ・ブルジョワ《カップル》（1996 年）、レオノール・アントゥネスの作品３点（《道子 #6》（2023 年）ほか２点）を購入し、立体作品を手掛ける女性作家の代表的な作例を収蔵することができた。また、国内外で高く評価される田中功起の初期を代表するシングルチャンネル映像作品、類例のないセルフ・ポートレイト写真で世界的に活躍する片山真理の作品、アジア地域で高く評価される樫木知子の絵画など、女性作家の作品をはじめ、収集方針に基づき多岐にわたるジャンルを積極的に収集した。その他、カンボジア出身のクゥワイ・サムナンの映像インスタレーションなど、地域の多様性にも配慮する作品収集を実施するなど、収集方針に基づいた作家・作品選定を行なった。

〈寄贈〉

竹村京の「修復シリーズ」を 13 点受贈した。また、関西で活躍する若手の画家、谷原菜摘子の作品は、購入作品とは異なるタイプの絵画について寄贈を受けた。さらに、関西ニューウェーブの作家のひとりである山崎亨の彫刻作品、及び 1980 年代以後の絵画の動向を検証するうえで重要な片山雅史の初期の代表作については、いずれも作家から寄贈の申し出があり受け入れた。上記の他にも、戦後関西の現代美術史においてパンリアル美術協会結成などの重要な役割を果たした日本画家の不動茂弥は、遺族から寄贈の申し出を受けて、関西の複数の美術館により調査・選別が行われ、受贈した。

（2）所蔵作品の保管・管理

第５期（令和３年度～令和７年度）中期目標に定める指標	
指標	・保管環境等の改善等に係る取組状況。 （各館の収蔵庫の収納率。）

保管施設の狭隘・老朽化への対応として、外部倉庫の活用、関係機関等との協議、既存の収蔵庫等保管施設の改修、額縁及び作品の整理による保管スペースの確保等を進め、保管環境の改善を行った。

また、平成 31 年３月に策定した「収蔵庫等保管施設の狭隘・老朽化対応に係る方針」に基づき、ナショナルセンターとして担う役割にふさわしい機能を有する新たな収蔵施設の設置に向けた検討を進めた。

①　収蔵庫等の狭隘・老朽化への対応

ア　東京国立近代美術館

（本館）

収納率：約165%

従来どおり、館外の倉庫に作品の一部を預けたり、作品貸与や所蔵作品展示により作品を庫外に出したりして対応している。令和５年度、民間倉庫利用のための予算が新たに追加で配分されたものの、新規収蔵作品の保管場所を確保するには継続的な予算の増額が必須である。令和４年度に定められた「現代の美術作品の同時代収集」が始まり、大型作品の収集は予想を超えて増加している。また適正な収納率をすでに大幅に超えているため、作品の出し入れに相当の時間を要することも多く、きわめて作業効率が悪い状況である。

（国立工芸館）

収納率：約 100%

石川の収蔵庫は、令和３年度までに移転した工芸作品で収納率が 100%を超えており、竣工に遅れが生じていた石川県金沢市内の民間倉庫の使用の目途が立ったことから、順次作品の移送を進めているところである。現在、作品は国立工芸館内の収蔵庫、東京分室内の収蔵庫および東京都内の民間倉庫、石川県金沢市内の民間倉庫の４ヶ所に分蔵して保管している。石川と東京の収蔵庫では、空気の対流の妨げにならないよう、作品の配置を検討し、また庫内清掃の徹底やサーキュレータの併用など、でき得る限りの環境保全に努めている。しかし、すでに棚の間の通路にも作品を置かざるを得ない狭隘状態で、毎年作品点数が増加するなかで適切な環境を維持することが難しく苦慮している。

イ　京都国立近代美術館

収納率：約 196%

収納率が 200%を超えるのは時間の問題という極めて危機的な状況にある。対応としては、令和４年度に引き続き、館内収蔵庫で収納することによって他収蔵品の運用を妨げる可能性のある大型作品や、展示・貸与の機会が比較的低い作品については、その作品の状態を考慮しつつ、館外の民間倉庫を活用している。それにより、館内外に収納されている作品の保存環境維持に努めているが、民間倉庫の借用には常に経費的限界が伴う。また、館内収蔵庫内での収蔵方法を適宜見直し、保存環境の改善と維持に努めている。

また令和４年度に引き続き情報資料（アーカイヴ）担当の常勤職員（任期付研究員）を中心として、収蔵庫に収められている貴重書やエフェメラルな資料類の整理にとりかかった。時間はかかるが、それによって散逸しがちな資料類の効率的収納を目指し、将来的な調査研究・公開促進に繋げていきたい。

ウ　国立西洋美術館

収納率：約 90%

・絵画彫刻室主導のもと、学芸課全員で収蔵庫の整理整頓・掃除を実施し、作品を安全に保管するに相応しい場所作りに努めた。

・収蔵庫の絵画ラックにかかっている作品の額縁、絵画ラック上部と下部の埃払い、全体的な床面清掃を頻繁に実施し、作品を虫菌害から守るため清潔度を上げる努力をした。

・使い古された薄葉紙を使用した綿布団をほどき、薄葉紙を新しいものに交換すると共に大小様々な綿布団を作成し、作品保管に十分な数の清潔で安全な環境を事前に準備した。

・額縁のない作品には新規額を作成し、オリジナル額から外され放置されている作品のオリジナル額の改修を行い、展示できる作品を増やすとともに、絵画ラックに掛けられる作品を増やすことで、収蔵庫の狭隘化解消を僅かながら進めた。

・適切な保管環境の整備：バックヤードに関しては例年どおり、トラップを仕掛けて文化財害虫のモニタリングを定期的に行い、現状調査と問題点の把握に努めた。東京文化財研究所が外来種としてここ数年気にしているニュウハクシミについて、国立西洋美術館でも数年前から捕獲されていたことが判明し、これまで以上に気を配る必要がある。

エ　国立国際美術館

収納率：約 139%

地下２階収蔵庫、地下２階一時保管庫の照明 LED 化工事に伴い、当該施設内にある作品をすべて（マップケース内を除く）展示室に仮置きし、IPM 調査と清掃を行った。あわせて、作品の保管状況の見直し、既存の棚に棚板を追加、再製函、配置の整理を遂行し、収蔵庫環境の改善に努めた。残る保管施設についても照明 LED 化及び作品状況の確認を必要としている。また、令和４年度より利用を開始した民間倉庫に、引き続き所蔵作品を移動させ、現在民間倉庫には 42 点の作品が収蔵されている。しかし、令和５年度新規収蔵した作品だけで 40 ㎡以上の床面積が新たに必要となっており、収蔵庫全体が引き続き稠密であることに変わりはない。

②　防災対策の推進・充実

館名		避難訓練等の実施日
東京国立近代美術館	本館	（本館）令和６年１月 23 日（金） （分室）令和６年２月 29 日（火）
	国立工芸館	令和６年２月 26 日（月）
京都国立近代美術館		令和５年 11 月６日（月）
国立映画アーカイブ		（本館）令和５年７月 11 日（火） （相模原分館）令和５年 11 月 28 日（火）
国立西洋美術館		令和５年６月７日（水）
国立国際美術館		令和５年 12 月 27 日（火）
国立新美術館		令和５年９月 12 日（火）、令和６年３月 26 日（火）

（3）所蔵作品の修理・修復

第５期（令和３年度～令和７年度）中期目標に定める指標	
指標	・所蔵作品についての修理、修復に係る取組状況。（所蔵作品の修理・修復数）

所蔵作品等の保存状況について、各館の連携・調整を行い、特に緊急に処置を必要とする作品について重点的に修理・修復を行った。

・所蔵作品の修理・修復実績

館　　名		修理・修復点数
東京国立近代美術館	本館	83 点（絵画 12 点、水彩 4 点、素描 2 点、版画 7 点、彫刻 4 点、資料・その他 54 点）
	国立工芸館	23 点（工芸 15 点、デザイン 8 点）
京都国立近代美術館		6 点（絵画 3 点、工芸 3 点）
国立西洋美術館		128 点（絵画 44 点、水彩 2 点、素描 2 点、版画 74 点、彫刻 3 点、工芸 3 点）
国立国際美術館		55 点（絵画 21 点、素描 9 点、版画 2 点、彫刻 1 点、写真 21 点、資料・その他 1 点）

特記事項

ア　国立アートリサーチセンター

国立美術館における科学調査および保存修復活動の促進を目指し、国立工芸館が所蔵する杉浦非水のポスター作品約 10 点に見られる変色した金色の色材について、国立西洋美術館にて顕微鏡撮影、紫外線蛍光撮影、蛍光Ｘ線分析を実施した。当時の印刷材料・技術および芸術表現との関わりについて、次年度に研究発表を予定している。

イ　東京国立近代美術館

（本館）

技法や素材が多様化する現代美術作品の修復で成果の多い年度となった。遠藤利克《欲動―近代・身体》（1997 年）は作品内部で水が循環する立体作品で、経年により木材や金属の腐食、また水漏れが生じていた。修復家、作家、美術館が協働を重ねながら２ヶ年にわたり作業を行い、現時点では最善と思われる処置を施した。来年度以降お披露目の展示を行うとともに、今回得られた専門的知見を修復業界で広く共有する機会を設けたい。また山口勝弘の《ユニヴァース》（1968 年）は、蛍光灯やストロボを使用した立体作品で、接触不良により一部点灯しないなどの不具合があった。長く作家のアシスタントを務め、山口作品の修復を手掛けている森脇裕之氏（多摩美術大学）に修復を依頼、LED 化や機構の改変、パーツ在庫の確保などを行い、将来的に安心して展示を続けていく目処が立った。その他、油彩、水彩、版画を中心に、今年度も各ジャンルについて着実に所蔵作品の保存修復とその公開に努めることができた。

（国立工芸館）

制作されてから半世紀以上が経過し、しみや汚れが目立ち展示が難しかった稲垣稔次郎《紙本型絵染額面　代かき》（1961 年頃）など８点について、令和４年のクリーニングに続き、令和５年度はマット装を新調するなどの作業を行った。これにより、草木染の繊細な色調を生かした型絵染がくっきりと鑑賞できるようになり、作品本来の魅力が引き出された。デリケートな素材・技法であるが、照度にも注意しながら今後の所蔵作品展や作品貸出にて活用していきたい。

また、A.M.カッサンドルのポスター《ワゴン・リ・クック(旅行サービス社)》がベニヤ板に直貼りされており、経年による劣化が見られたことから、裏板の交換と額の全面改修を行った。

ロベール・ボンフィス《現代装飾美術・工業美術国際博覧会》などポスター７点について低反射アクリルへの交換を行ったほか、汎用額のアクリルの一部も低反射アクリルへの交換を行った。

ウ　京都国立近代美術館

山鹿清華《冷蔵果》は経年劣化により糸が切れ、木枠から脱落しかけるなど作品が崩壊しつつあったため、糸を修理し、低反射アクリル板に貼り付けた。同作家の《蛮布》は経年劣化により、乳（展示時に吊元となる部分）の糸が切れたり、欠失したりしているうえに、裏にあててある裂が劣化しているため展示するのに危険な状態であったため、傷みを修理、裂を新しいものに交換した。両作品ともに、今後も安全に展示することが可能になった。

安田靱彦《菖蒲》と都路華香《白雲紅樹》は、使用毎に胡粉の亀裂等が進行したため、修理し、太巻き芯を新調した。また、冨田溪仙《江畔萬里図》は画面全体に広がるシミと折れが鑑賞を妨げていため、シミの除去と折れの修理、新たな表具への仕立て直し、太巻き芯を新調した。これ等のことにより、それぞれの劣化の進行を食い止めることが出来た。

小合友之助《楠》は、画面全体にシミが出、本紙が欠損して鑑賞を損なっていたため、シミの除去と欠損部分の補紙・補彩、新規屏風への仕立て直しをし、展示出来る状態にした。

エ　国立西洋美術館

・長年寄託作品だったが近年寄贈を受けたために近年額縁の保存修復作業を行ったカラッチ《ダリウスの家族》であったが、綺麗になった額縁と表面に塵芥の蓄積が目立つ作品の差異が歴然としていた。保存修復室所属の研究補佐員（絵画修復専門）が新しい洗浄手法を用いた表面クリーニングを行い、塵芥の除去を行って、作品細部が明確になって鑑賞性が高まり、新たに展示出来る作品を増やすことが可能となった。

・オリジナル額縁があるにも拘わらず、著しい劣化が理由と思われる白木の新規額への交換が過去に大量に行われ、作品の時代・雰囲気に合わずに作品価値を低めていた作品群のうち、クールベ《罠にかかった狐》（1860 年制作）、コッテ《琥珀の首飾りをした婦人》（1906 年）、セガンティーニ《風笛を吹くブリアンツァの男たち》（1883～1885 年頃制作）の額縁処置を行い、オリジナルの雰囲気を復活させるとともに、作品を安全に展示活用できる状態となった。

・令和４年度に購入した版画デューラー《聖母伝》20 点連作（1503～1510 年作成）の保存修復作業、新規マット作成およびマット装を行い、近年購入した作品を調査研究・展示に活用できるようにした。

オ　国立国際美術館

戦後ドイツを代表する作家の大作であるアンゼルム・キーファー《星空》（1995 年）について、画布の補強処置（ルースライニング）を行った。本作は常設展示での出品頻度が高い重要作品であるが、絵具の重みによって画布が弛んでおり、作品を移動させるごとに画布が木枠に衝突し、絵具層にダメージが生じていた。今回ルースライニングを行うことによって衝撃を緩和させることができ、安全な移動・展示が可能となった。

インクの固着不良のため剥落の恐れがあったマルセル・ブロータース《署名、シリーズ I》（1969 年）について、インクの剥落止め、浮き上がり接着、旧マウント除去を行った。トレーシングペーパーにシルクスクリーンという特徴的な技法材質の作品を修復できた意義は大きい。また、不適切な旧額装も除去し、安全に取り扱えるようになった。

（4）所蔵作品の貸与

第５期（令和３年度～令和７年度）中期目標に定める指標	
指標	・所蔵作品の貸与に係る取組状況。（所蔵作品の貸与件数）
関連指標	・所蔵作品の活用割合（展示、貸与及び特別観覧の合計の所蔵品と寄託品の合計に占める割合） ・国立美術館所蔵作品の国内外美術館への長期貸与契約件数

所蔵作品について、各館においてその保存状況や展示計画を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に実施した。

・所蔵作品の貸与に係る取組状況／国内美術館所蔵作品の国内外美術館への長期貸与契約件数

館名	貸出		貸出のうち長期貸与（※）		特別観覧	
	件数	点数	件数	点数	件数	点数
東京国立近代美術館（本館）	77	306	21	100	184	340
国立工芸館	13	158	1	13	27	47
京都国立近代美術館	54	1,063	15	45	83	160
国立西洋美術館	9	100	2	19	64	86
国立国際美術館	18	55	1	1	31	86
合計	171	1,682	40	178	389	719

※「長期貸与」とは、国内外を問わず貸出期間が半年以上のものである。

・所蔵作品の活用割合（展示、貸与及び特別観覧の合計の所蔵品と寄託品の合計に占める割合）

館名	所蔵作品の活用割合
東京国立近代美術館（本館）	13.4%
国立工芸館	8.9%
京都国立近代美術館	13.9%
国立西洋美術館	14.0%
国立国際美術館	3.8%

特記事項

ア　東京国立近代美術館

（本館）

「戸張孤雁の芸術展」（中村屋サロン美術館）、「竹内栖鳳　破壊と創生のエネルギー」（京都市京セラ美術館）、「須田国太郎の芸術」（碧南市藤井達吉現代美術館ほか）など、回顧展に必須となる代表作を多く貸与し、その顕彰に寄与した。また「今泉篤男と美術」（米沢市上杉博物館）へ 10 点、「シン・ジャパニーズ・ペインティング　革新の日本画」（ポーラ美術館）へ 17 点、「ジョゼフ・アルバースの授業」（DIC 川村記念美術館）へ 16 点など大規模な出品協力を行った。「京都画壇の青春」（京都国立近代美術館）、「コレクション１」（国立国際美術館）、「「憧憬の地ブルターニュ」（国立西洋美術館）、「印刷／版画／グラフィックデザインの断層 1957－1979」（国立工芸館）などへ出品し、独立行政法人国立美術館内での相互活用において成果を挙げた。海外へは、ドイツで開催された「Lee Ufan」（ハンブルガー・バーンホフ）に李禹煥氏の作品を貸与し、東京国立近代美術館コレクションの充実ぶりを国際的に発信できた。

（国立工芸館）

京都国立近代美術館を皮切りに国内４会場を巡回する「前衛陶芸の誕生　走泥社とその時代―結成前夜から 1973 年まで―」展に特別協力を行い、1950 年代から 70 年代の走泥社の活動を象徴する陶磁作品 13 点を貸与し、内容の充実に寄与した。また、富本憲吉にゆかりの深い奈良県立美術

館で開催された「開館 50 周年記念　富本憲吉展のこれまでとこれから」展に特別協力を行い、富本憲吉の重要作品 13 点を貸与し、その顕彰に寄与した。

さらに、東京国立近代美術館「MOMAT コレクション展」の一部で継続している工芸・デザイン作品の展示では、特集展示「芹沢銈介と、新しい日々」の開催にあたり、芹沢銈介ほか関連作家を含む染織作品・工業デザイン作品など計 78 点を貸与し、東京都内において国立工芸館の「金子量重コレクション」を中心とする代表作を一堂に展示する機会として有意義なものであった。

イ　京都国立近代美術館

国内で開催された展覧会に大きく寄与したものとして、アーティゾン美術館の「ABSTRACTION 展」に、日本で唯一京都国立近代美術館が所蔵するピエト･モンドリアン《コンポジション》作品 2 点と、村山知義《サディスティッシュな空間》の計３点を、ポーラ美術館の「シン・ジャパニーズ・ペインティング展」に菊池契月《ゆふべ》ほか日本画９点、油彩画１点、素描４点の計 14 点を、碧南市藤井達吉現代美術館・大分市美術館・西宮市大谷記念美術館・蘭島閣美術館・世田谷美術館を巡回する「須田国太郎の芸術展」に代表作である《校倉》や《修理師》を含む須田作品油彩画 17 点を、大阪中之島美術館・大分県立美術館の「没後 50 年 福田平八郎展」に代表作《花の習作》を含む福田作品日本画 12 点を貸与した。

また、京都国立近代美術館開催「走泥社再考展」の巡回館（岐阜県美術館、岡山県立美術館、菊池寛実記念 智美術館）に八木一夫《ザムザ氏の散歩》を含む陶芸作品 54 点を、同じく「甲斐荘楠音の全貌展」の巡回先である東京ステーションギャラリーに代表作《横櫛》を含む甲斐荘作品日本画 19 点、素描５点、資料 39 点の計 63 点を貸与し、展覧会開催実現に寄与した。

加えて、特別協力として京都国立近代美術館コレクションを用いた稲沢氏荻須記念美術館の「長谷川潔展」に長谷川潔の版画作品 62 点、油彩画４点、資料４点の計 70 点を貸与した。

ウ　国立西洋美術館

長崎県美術館の「スペインのイメージ」展（作品 65 点と資料 20 点）、京都市京セラ美術館の「パリ ポンピドゥーセンター　キュビスム展―美の革命」（作品６点と資料９点）など、国立西洋美術館の開催展の巡回先に多数の所蔵作品・資料を貸し出したほか、山梨県立美術館ほか４会場で開催中の「テルマエ展　お風呂でつながる古代ローマと日本」に作品 17 点を貸し出すなど、多くの美術館からの貸出要請に積極的に応え、所蔵作品を活用した。

また、国立アートリサーチセンターの事業「コレクション・プラス」のプレ事業として油彩 1 点を長崎県美術館のテーマ展示に貸し出し、地方公立美術館との新たな取り組みを行った。

こうした作品貸出情報は国立西洋美術館の SNS でも紹介し、積極的な姿勢を発信するとともに、地域におけるアートの鑑賞機会の充実に努めた。

エ　国立国際美術館

京都国立近代美術館で開催された「開館 60 周年記念　Re: スタートライン 1963-1970/2023 現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係」展へ、宇佐美圭司《アクション・フィールド》（1964 年）他、絵画や彫刻、写真など計８点を貸与した。現代美術史上重要なグループ展を検証する内容に、実際の出品作品を貸与することができた。

また、大阪中之島美術館で開催された「佐伯祐三―自画像としての風景」展に、佐伯祐三《バーの入口》（1927 年）を貸与した。大阪を代表する作家の代表作が一堂に会する大回顧展へ貢献することができた。

3　我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与

（1）国内外の美術館等との連携・協力等

第５期（令和３年度～令和７年度）中期目標に定める指標	
指標	・国立美術館巡回展の満足度調査を実施し、「良い」以上の回答率を８割程度とする。 ・国立映画アーカイブの優秀映画鑑賞推進事業の満足度調査を実施し、「良い」以上の回答率を８割程度とする。 ・国内外美術関係者向けワークショップへの国外からの参加者数は、30 名程度とする。
関連指標	・国立美術館巡回展の事業数及び会場数 ・国立映画アーカイブの優秀映画鑑賞推進事業の実施回数 ・国立美術館巡回展の入館者数 ・国立映画アーカイブの優秀映画鑑賞推進事業の入館者数 ・国内外の美術館関係者との研究会の開催や研究者との交流等に係る取組状況。（所蔵作品等に関するセミナー・シンポジウムの開催回数、国内外の研究者の招へい等に基づくセミナー・シンポジウムの開催回数。）

※指標１、２点目及び関連指標１～４点目については別表５、関連指標５点目については別表 15、16 を参照。

各館において国内外の研究者を招へいし、展覧会の開催等に合わせ各種講演会・セミナー・シンポジウムを開催し、展覧会等の紹介や企画に関連し、海外の美術館との連携・協力を図った。また、国立アートリサーチセンターでは、国内の美術館関係者と海外の美術館関係者をつなぐハブとして、国内の国公私立美術館関係者等を海外に派遣するなど、海外の美術関係者を招聘する事業を新たに開始した。

また、全国の美術館等の運営に対する援助、助言を適時行うとともに、地方巡回展の開催、企画展の共同主催やそれに伴う共同研究等を通じて、関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に取り組んだ。

①　国内外の研究者の招へいによるシンポジウムの開催等

国内外の優れた研究者等との人的ネットワークの構築を図るため、セミナー・シンポジウムを以下のとおり開催した。

館名	所蔵作品等に関するセミナー・シンポジウムの開催回数	国内外の研究者の招へい等に基づくセミナー・シンポジウムの開催回数
国立アートリサーチセンター	－	11
東京国立近代美術館（本館）	4	1
国立工芸館	0	6
京都国立近代美術館	0	10
国立映画アーカイブ	3	5
国立西洋美術館	1	1
国立国際美術館	1	4
国立新美術館	－	14
合計	9	52

※詳細については別表 15、16 を参照。国立アートリサーチセンターの取組については④で詳述。

特記事項

ア　国立工芸館

「国立工芸館とこれからの工芸 12 人の工芸・美術作家による新作制作プロジェクトから」については、「Kogei Art Fair Kanazawa 2023×国立工芸館プレミアムイベント」の一事業として実施

した。本イベントは、インバウンドの集客を目的に、観光庁再始動事業補助金の採択を受けて実施したもので、国立工芸館が「Kogei Art Fair Kanazawa」で実績のある外郭団体と協力し、事業申請はその外郭団体が行った。会場は、「Kogei Art Fair Kanazawa 2023」を開催したホテルを中心に市内にも場を広げ、茶道・工芸・食など金沢の文化資源をかけあわせた茶会、トークイベント及び工房見学を盛り込んだ体験型でプレミアム感のあるイベントとした。ホテルと市内２か所で実施した茶会では、令和２年度ファンドレイジングで購入した工芸作品を実際に活用した。

イ　国立国際美術館

定期的に開催している中之島映像劇場の実施に際しては、韓国国立現代美術館による企画協力を得て上映会を実施した。開催に際しては同館の Film&Video 担当学芸員イ・スジョン氏を招き、上映作品についての対話を客員研究員 馬定延とともに実施した。企画段階より積極的に協力を得ることができ、日韓の国立美術館同士の連携を深めることができた。

②　我が国の作家、美術作品による展覧会開催のための海外の美術館との連携・協力

ア　国立映画アーカイブ

・イタリア、ボローニャのフォンダツィオーネ・チネテカ・ディ・ボローニャ（FIAF 加盟機関）との共催で、第 37 回チネマ・リトロバート映画祭にて衣笠貞之助監督の特集上映「Teinosuke Kinugasa: From Shadow to Light（衣笠貞之助：影から光）」を、当館企画上映「発掘された映画たち 2022」にて上映した衣笠貞之助監督作品の『狂った一頁』[染色版]及び『鬼あざみ』［デジタル復元版］の海外初公開を中心に開催した。362 席定員の会場に平均 230 人という人気を博し、毎回上映終了時に拍手が起こる好評を博し、衣笠貞之助の再評価につなげることができた。

・イェール大学東アジア研究センター（米国コネチカット州）との共催上映として、海外では鑑賞機会の少ない日本喜劇映画を歴史的に回顧する特集「Comic Legacies on the Japanese Silver Screen（日本映画における喜劇の遺産）」を開催した。FIAF 会員のイェール・フィルム・アーカイブと連携して実施する同センターとの共催上映は、フィルムセンター時代に開催した 2012 年２月の時代劇映画特集、2015 年１月の犯罪映画特集に続く三回目で、国立映画アーカイブとしては初の共催企画となった。

イ　国立国際美術館

令和５年秋に韓国国立現代美術館で開催予定のアジア女性作家の企画展の準備・調査として、国立国際美術館の所蔵作品を含め日本に所在する女性作家作品の調査協力を実施した。

③　全国の美術館等との人的ネットワークの形成等

ア　地方巡回展の開催（再掲）

地方巡回展及び巡回上映等は、別表５のとおり実施した。

イ　企画展・上映会等の共同主催と共同研究

館名	共同主催件数	機関数	共同研究件数	機関数
東京国立近代美術館（本館）	2	4	2	4
国立工芸館	3	3	3	6
京都国立近代美術館	4	6	4	10
国立映画アーカイブ	9	124	9	118
国立西洋美術館	－	－	2	2
国立国際美術館	2	1	2	4
国立新美術館	5	5	5	6
合計	25	143	27	150

ウ　国内外の美術館等との保存・修復に関する連携・協力等

（ア）国立西洋美術館

・国立アートリサーチセンター作品活用グループが中心になって実施している国立美術館所蔵作品の科学調査に協力し、他国立館の研究員が参加した研究会において「美術品を対象とした科学調査について」講義した。また、国立工芸館所蔵のポスター作品について、デジタルマイクロスコープや蛍光 X 線分光分析による顔料調査を実施し、材料や技法を調査するとともに今後の作品保存につながるようにした。

・デンマーク国立美術館が進めているハンマースホイ・デジタルアーカイブプロジェクトに協力し、国立西洋美術館所蔵作品の透過 X 線・赤外線画像を提出するとともに、蛍光 X 線分光分析による顔料調査の結果などを報告した。同時に、国立西洋美術館作品の保存状態や今後の修復処置について、ハンマースホイ作品修復についての経験と知識をもっている先方美術館に相談中である。

（イ）国立国際美術館

・奈良文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室と共同で、ジャスパー・ジョーンズ《パン》（1969 年）の科学分析調査に向けた協議・状態調査を行った。

・現代美術の保存修復に関する共同研究として東京藝術大学と連携し、Stedelijk Museum、Depot Bojimans Van Beuningen、Amsterdam Museum（オランダ）における所蔵品管理・保存修復体制の調査を行った。

④ 国立アートリサーチセンターによる連携・協力

・国内外美術関係者向けワークショップへの国外からの参加者数（人）

参加者数	第5期参加者数累計	目標（第5期）
34	34	30

（内訳）

	ワークショップ等タイトル	開催日	全参加者数	うち海外からの参加者
1	「蔡國強　宇宙遊 ―〈原初火球〉から始まる」　開幕記念 トークセッション『〈原初火球〉再考』	令和5年6月29日	263	1
2	共創フォーラムVol.1　Art, Health & Wellbeingミュージアムで幸せになる。英国編	令和5年10月8日	804	4
3	共創フォーラムワークショップ	令和5年10月9日	55	4
4	文化財修復処置に関するワークショップ　ーナノセルロースの利用について　実技フォローアップー	令和5年10月11日	11	1
5	文化財修復処置に関するワークショップーモジュラー・クリーニング・プログラムの利用についてー	令和5年10月25～27日	22	1
6	講演会「近現代美術の保存修復ージャクソン・ポロック作品の事例からー」	令和5年10月28日	93	1
7	国立アートリサーチセンター設立記念シンポジウム「ナショナル・アートミュージアムのいま」	令和5年11月26日	178	5
8	東京大学駒場博物館 特別講義「大ガラス」	令和6年1月18日	44	2
9	LGTVワークショップ	令和6年1月20日	37	2
10	NCAR国際ワークショップ2023「美術館とリサーチ｜アートを”深める”とは？」	令和6年3月21、23日	79	9
11	NCAR国際シンポジウム2023「美術館とリサーチ｜アートを”深める”とは？」	令和6年3月22日	152	4

※「全参加者数」は講師・パネリスト等及び聴講者、オンライン聴講者を含む国内外の全ての参加者の数。「海外からの参加者数」はそのうち海外からの招へい者数。

国立アートリサーチセンター各グループにおいて、以下のとおり取り組んだ。

（作品活用促進グループ）

国立美術館コレクションの活用促進としては、新たな事業として国立美術館コレクションと地方の開催館のコレクションの双方を活用したテーマ性の高い企画展を実現する「国立美術館 コレクション・ダイアローグ」と、開催館のコレクションに関連の深い国立美術館コレクションを若干加えることで、開催館の所蔵作品展に新たな光をあて、充実したものとする「国立美術館 コレクション・プラス」を実施し、全国に募集を行った。その結果、令和６年度に栃木県立美術館で「コレクション・プラス」を、令和７年度に岐阜県美術館で「コレクション・ダイアローグ」を実施することが決まった。また「コレクション・プラス」のプレ事業として、長崎県美術館において国立西洋美術館の所蔵品を加えた「鴨居玲のスペイン時代―スペイン・バロックの巨匠ジュゼペ・デ・リベーラの作品とともに」を実施した。

保存修復事業としては、東京文化財研究所との共催により、海外から先駆的な知識・技術をもつ講師を招聘し、専門家向けのワークショップとして「ナノセルロースの利用について　実技フォローアップ」と「モジュラー・クリーニング・プログラムの利用について」を開催し、国内の保存修復技術の向上をはかった。講義は希望者全員が受講し、実習は選考で選ばれた21名が参加した。実習は、様々な修復分野の専門家の交流の役割も果たした。一方で一般への教育普及として、講演会「近現代美術の保存修復ージャクソン・ポロック作品の事例からー」を東京国立近代美術館にて開催し、記録動画をウェブサイト上に公開した。また、ウェブサイト記事の調査・研究事例「酵素を

用いた日本画のクリーニング」では、クリーニング方法を開発した科学者（東京文化財研究所）、修復を行った技術者、作品を所蔵する東京国立近代美術館の研究員の寄稿をとりまとめ、保存修復における各分野の専門家による協力体制の重要性を具体的に示した。これは、高松塚古墳壁画に生じた黴のクリーニングに際して開発された日本の新技術であり、世界に向けて英語でも発信されたことは意義深い。ウェブサイトにはその他、保存修復に関する海外の主要機関によるガイドラインの翻訳、リンク集、M+美術館（香港）の保存修復施設の紹介などの記事を掲載し、保存修復に関する幅広い情報発信を行った。

（情報資源グループ）

「全国美術館収蔵品サーチ」において、全国の美術館・博物館とのさらなる連携を推進し、新たに全国の都道府県・市町村立・私立美術館等の 35 の協力館を獲得した。これを含む総計 198 館より提供を受けた情報は、今回初公開となるデータも含め、当センターにて日英２か国語でウェブサイトにて発信した。文化庁より移管されたメディア芸術データベースについて、外部データ提供機関との連携のもと運営体制の構築に取り組み、令和６年１月 31 日に正式版を公開した。国立美術館５館共同の所蔵作品総合目録検索システムに関連して著作権調査等を行い、同システム収録画像の充実を図った。日本のアートに関する国際的リサーチ・センター機能確立について検討を進め、文化庁より継承したアートプラットフォーム事業ウェブサイトを日本の美術に関する総合的リサーチポータルとして位置づけると共に、外部執筆者の協力を得ながら独自レファレンス・ツールである「日本アーティスト事典」の新規公開を行った。

（国際発信・連携グループ）

国内外の美術館や専門家と連携し、議論の場を創出するためのシンポジウムやワークショップを開催した。アジア、米州、欧州などの主要外美術館や大学等専門機関よりパネリストを招聘し日本側の専門家との交流を図ったほか、専門家のみを対象とするワークショップや展覧会と連動するトークなどを開催し、より深く専門的な議論をする場を設けた。国内では、多摩美術大学アートアーカイブセンター、東京大学駒場博物館等との協力により、世界で３例のみ存在するマルセル・デュシャンの《大ガラス　レプリカ》のアーカイブ化に関する研究を開始、専門家によるワークショップを開催した。

日本のアーティストの国際的な発信を強化し、海外における日本美術の価値向上のため、主要な国際展に出品するアーティストを支援するスキームを新たに構築した。令和５年度は、上海ビエンナーレの出展作家の決定に先立ちキュレーターを招へいし、日本でのリサーチを支援するとともに、主要な国際展に出展が決まったアーティストのうち、７つの国際展に出品した 18 人のアーティストについて出展に係る費用の一部を支援した。

日本の美術館関係者と海外の主要な美術館との人的なネットワークを構築するため、ナショナルミュージアム・ネットワーキング事業を開始し、令和５年度は国立美術館の研究員をはじめ公立美術館、研究者、インデペンデントキュレーターを含む日本の美術専門家を韓国（韓国国立現代美術館等）に 19 人、カナダ・米国（ナショナル・ギャラリー・オブ・アート（ワシントン D.C.）等）に 11 人派遣し、現地の美術館を視察するとともに現地の専門家とのネットワーク構築をはかった。

（ラーニンググループ）

JST 共創の場支援プログラムである「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」を通じ、東京藝術大学をはじめ美術館や研究機関、医療・福祉機関、地方自治体とともに共同で研究を行った。健康やウェルビーイングに良い影響をもたらすアートや文化活動を推進するため、東京藝術大学、ブリティッシュカウンシルとともに、国際シンポジウムを開催し、英国から実践者を招へいした。これにより本分野での人的ネットワークを構築し、記録や映像をウェブサイトで公開することにより国内外へ発信した。また、このフォーラムに合わせて英国の基礎資料２冊を翻訳監修し日本語版として発行した。

法人内外の専門家による研究会「DEAI リサーチラボ」を連続開催し、ミュージアムにおける合理的配慮のケーススタディを調査研究したうえで『合理的配慮のハンドブック』を刊行し、ウェブサイトで公開した。

国立美術館の所蔵作品を手話で解説する動画を作成し、ウェブサイトで公開した。

法人各館と協力のうえ「鑑賞教育指導者研修」を開催し、その記録集を刊行するとともにウェブサイトで公開した。

（社会連携促進グループ）

「美術館に関する意識調査」（インターネット調査）を行った。20～70 代を対象に、美術館を訪れる頻度、契機、情報獲得手段、美術館に求める機能・サービスなどについての回答結果を集計分析し、関係者に共有するとともに、全国の美術館活動に資するべく、調査結果サマリーをセンターのウェブサイトで一般公開した。

また、国立美術館における観覧料の検討の基礎資料とするため、「展覧会観覧料に関する意識調査」を、美術館高関与層（年に１回以上美術館を訪れる）を対象に実施し、観覧したい展覧会の内容・ジャンル、妥当と思われる観覧料などを分析し、関係者に共有した。

社会に資する美術館活動の領域を拡げるべく、これまで美術館との接点がほとんど無かった企業・団体・個人とのつながりを生み出す以下２つの新規プログラムを国立新美術館とともに企画し３月に開催実施した。「子どもの美術館デビュー応援プログラム」では、子どもの貧困問題に取り組む認定 NPO 法人と連携して 32 人の親子を国立新美術館に招き、初めての美術館訪問と展覧会鑑賞およびワークショップをランチの提供を含めて国立新美術館職員とサポートするとともに、企業の CSR 担当者の見学も受け入れ、今後の企業からの支援獲得に向けた検討につなげた。「アーティスト・ワークショップ」は、企業向け研修の企画・実施を業務とする団体と連携してビジネスパーソンのニーズに応えるプログラムを企画し、企業や自治体とのコラボレーション実績もあるアーティスト１名がファシリテーターを務め、企業などから 19 人が参加（有料）し、創造的思考を実社会に活かした事例を共有しディスカッションを重ねた。ビジネスの課題解決にこれまでにない視座と刺激が得られたと好評であった。

（2）ナショナルセンターとしての人材育成

第５期（令和３年度～令和７年度）中期目標に定める指標	
指標	・指導者研修参加者に対する満足度調査を実施し、「良い」以上の回答率を前中期目標期間と同程度の水準を維持するものとする。
関連指標	・指導者研修実施回数 ・今後の美術館活動を担う中核的な人材や映画保存のニーズに対応した人材の育成に係る取組状況（インターンシップ受入人数、キュレーター研修受入人数）

①　美術教育の一翼を担うナショナルセンターとしての活動

ア　教育普及活動の充実に資する教材やプログラムの開発・実施・普及、実践者の育成・研修

（ア）国立アートリサーチセンター

誰もがアートに親しみ、美術館を利用することができるよう、法人各館と連携して以下を実施した。また聴覚障害のある児童生徒をはじめ、幅広い人々が国立美術館の所蔵作品を鑑賞できるよう、日本手話による作品鑑賞動画を作成した。

・各館で実施している特徴的な教育普及プログラムの紹介動画を作成した（東京国立近代美術館、国立工芸館、国立映画アーカイブ、国立西洋美術館、国立国際美術館、国立新美術館）。
・令和４年度に制作した教育プログラムの担当者・関係者インタビューを行い、国内美術館ではまだ少ないアクセシブルな事業や中高生プログラムを行う際の参考を示した。

（イ）東京国立近代美術館

（本館）

・「先生のための鑑賞日」を実施し、計 470 名が観覧した。また、教員を中心とした美術館教育に関心のある方向けのオンライン講座を開催し計 39 名が参加した。

（国立工芸館）

以下のとおり研修等を実施した。

・石川県立図工・美術研究会（支援学級）教員研修
・内灘町立大根布小学校研究授業のための教員研修
・河北郡市教育課程研究会図工部会との共同研究会
・金沢市公民館主事研修
・能美教育振興会教員研修
・金沢市立紫錦台中学校研究授業のための教員研修
・東久留米市立神宝小学校教員研修

（ウ）京都国立近代美術館

７月 24 日(月)に、京都市教育委員会、京都市立中学校教育研究会美術部会、京都市図画工作教育研究会との共催で、京都市内の幼小中学校、特別支援学校教員を対象とした、鑑賞教育の充実を目指した研修会「令和５年度　図画工作科・美術科夏季連携講座」を休館日に実施し、49 名の参加があった。

（エ）国立西洋美術館

・無料観覧時間の設定による「先生のための観覧日」を実施した。スライドトークと同時開催とすることで知識を得る機会も担保する試みを継続して行うとともに、対象を小～高の教員から幼保～高の教職員（事務員や支援員などを含む）へと拡大する検証を行っている。
・教員研修の受け入れについて、都度研修内容を検討し、実施することにより申込者の要望にあわせた内容での実現を目指している。令和５年度は４件実施した。
・新規ボランティア研修の実施について、３年ごとのボランティア・スタッフ入替期に当たる令和６年度にむけ候補生を募集し、７～３月にかけて自館コレクションや活動の基礎を学ぶ養成研修を行った。新規ボランティア・スタッフは 31 名。

（オ）国立国際美術館

畿央大学教育学部現代教育学科教授の西尾正寛氏を講師に招き、小学校教職員を対象とした、鑑賞教育の充実を目指した研修会「先生のための鑑賞プログラム」を実施した。また、大阪府教育センターと連携し、大阪府の小・中学校、義務教育学校、府立高等学校（岸和田市立の定時制の課程を含む）、府立支援学校の図工・美術担当教員を対象として、夏季の美術館研修を実施した。いずれも、終日かけて、美術館を活用し、児童生徒の学びにつながる鑑賞活動について、協議・検討し、今後の美術館と学校が連携した鑑賞活動をより一層推進できる内容となった。その他、日本私立小学校連合会、尼崎市立造形教育研究会、大阪市立小学校と連携し、美術館活用とその実践者育成につなげる研修の場を持った。

（カ）国立新美術館

・調布市美術部会に所属する教員向けの鑑賞ガイダンスを実施（8 月 18 日開催、8 名参加）
・港区図工部会に所属する教員向けの研修を実施（2 月 21 日開催、21 名参加）
・一般社団法人全国美術館会議との共催による「第 38 回学芸員研修会」の実施（3 月 7 日～8 日開催、138 人参加）

イ　美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修の実施等

国立美術館は、美術教育の一翼を担うナショナルセンターとして「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」を実施している。同研修は、学校や美術館で鑑賞教育に携わる教員、学芸員に対して実践的な研修を行うもので、修了者が研修の成果を各地域の学校等、現場で実践することで、鑑賞教育の充実を図っている。各地域の学校と美術館との連携強化を図るとともに、全国の児童生徒に対する鑑賞教育の充実に貢献している。

18 年目となる「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」を４年ぶりに関西で開催し、77 名が修了した。グループワークでは従来の小学校、中学校、高校のグループに加え新たに特別支援教育をテーマにしたグループを作り、障害の種類、度外が様々な児童・生徒に対してどのような鑑賞や授業ができるのか、参加者同士で議論を深めた。

また、本研修の記録まとめた報告書をリニューアルし、ウェブサイトで公開した。

・会期：令和５年８月７日、８月８日（２日間）
・修了者数：77 名（小学校教諭 14 名、中学校教諭 15 名、高等学校教諭９名、特別支援学校教諭８名、指導主事８名、学芸員 23 名）
・参加者の満足度：100%（目標：98.8%）

ウ　国立アートリサーチセンターにおけるファシリテータの育成・運営等

高齢者、認知症の方などに対応するファシリテータ育成に必要な要素を、医療、福祉などの専門家と協議した。VTS（対話型鑑賞）やユマニチュード（認知症のケア技術）の手法、認知症基本法や合理的配慮への理解形成などを含めた講座案を検討した。

② 今後の美術館活動を担う中核的人材の育成

国立美術館においては、美術館活動を担う中核的な人材を育成するため、選考方法、カリキュラムの内容、実際の指導等の検討を行い、大学院生等を対象としたインターンシップや美術館員（学芸員）の研修としてキュレーター研修を行った。

ア　インターンシップ等の実施

館名	キュレーター研修 受入人数	インターンシップ 受入人数	博物館実習 受入人数
東京国立近代美術館（本館）	4	5	－
国立工芸館	0	1	－
京都国立近代美術館	2	2	－
国立映画アーカイブ	－	1	12
国立西洋美術館	4	3	－
国立国際美術館	2	5	－
国立新美術館	－	7	－
合計	12	24	12

特記事項

（ア）東京国立近代美術館

（本館）

＜キュレーター研修＞

４名を受け入れ、以下のとおり実施した。

・横浜美術館の学芸員１名を 11 日間受け入れ、所蔵作品の管理、貸出、展示に関する作業、企画展の展示作業見学等の研修を行った。

・SOMPO 美術館の学芸員 1 名を 11 日間受け入れ、展示に関する作業、企画展の記者発表・内覧会の見学、広報対応等の研修を行った。

・新宿区立漱石山房記念館の学芸員 1 名を 11 日間受け入れ、所蔵作品の展示替、展示に関する作業等の研修を行った。

・徳島県立近代美術館の学芸員１名を８日間受け入れ、展覧会の立案から実現までのプロセス、作品・資料の収集や教育普及について、各研究員との意見交換をする等の研修を行った。

＜インターンシップ＞

「学芸／コレクション」近現代美術１名、「学芸／企画展」２名、「美術館教育」１名、「図書資料」１名を受け入れ、以下のとおり実施した。なお、実地研修とオンライン研修を織り交ぜながらインターン活動を行い、各分野の研究員が全分野のインターンに対し各々の業務等をオンラインでレクチャーする機会も設けた。

・「学芸／コレクション」近現代美術分野のインターンは所蔵作品展展示替え・展示図面作成の補助や作品の貸出・返却等の補助を行った。

・「学芸／企画展」分野のインターンは企画展の関連資料データ入力・校正作業の補助、作品搬出入時の補助を行った。

・「美術館教育」分野のインターンは来館者向けプログラム、ガイドスタッフ（ボランティア）養成等の教育普及に係る事業の補助を行った。

・「図書資料」分野のインターンはアートライブラリにおける閲覧・登録業務といった図書館運営全般に関するレクチャーを受けた上で、資料整理やイベント等の補助を行った。

（国立工芸館）

＜インターンシップ＞

令和５年度は国立工芸館が石川県に移転して初めてのインターンシップ受入を実施した。研修カリキュラムは、①鑑賞教育の実践（セルフガイド等来館者への配布資料の整備、各種イベントの運営補助、ガイドボランティアの養成研修の実施、またワークショップの企画と実施等）、②所蔵作品関連資料の整備（松田権六旧蔵資料等）、③展示作業補助と工芸作品の取扱いなどである。インターンシップは他分野にまたがって実施している。それにより来館者が国立工芸館で体験可能なさまざまなシーンの連関を学ぶことができ、今後の美術館活動を志す研修生にとって有意なカリキュラムであると考える。

（イ）京都国立近代美術館

＜キュレーター研修＞

新居浜市美術館学芸員１名を 16 日間、鹿児島県霧島アートの森学芸員１名を３日間受け入れ、コレクション展や企画展の展示撤収作業及び作品の取り扱い、教育普及・広報活動等についての研修を行った。

＜インターンシップ＞

大学院生２名を受け入れた。各自の関心分野や専門領域を踏まえ、展覧会準備の補助や教育普及プログラムの補助業務などに従事した。また広報業務の一環として美術館の SNS にて所蔵作品紹介を発信したほか、SNS 上での展覧会への反応を集計する作業等にも従事した。

（ウ）国立映画アーカイブ

＜インターンシップ＞

約半年の間、週に１回映画・映画アーカイブを研究している大学院生１名をインターンとして受け入れ、学芸課の４室で研修を行った。研修では、上映会・展覧会等の実施に関わる業務、映画フィルム及び関係資料の収集・保存・整理に関わる業務などを行った。

＜博物館実習＞

定員の 12 名を５日間受け入れた。実習内容は、映画アーカイブの概要講義と見学実習、学芸課の映画室、展示・資料室、上映室、教育・発信室の全４室で１日ずつ、映画フィルム及び関係資料の収集・保存・整理、上映会・展覧会・教育普及・広報等の実施に関わる業務を行った。

（エ）国立西洋美術館

＜キュレーター研修＞

公益財団法人三鷹市スポーツと文化財団三鷹市美術ギャラリー（22 日間）、千葉県環境生活部スポーツ・文化局文化振興課（15 日間）、豊橋市美術博物館（12 日間）、国立大学法人佐賀大学美術館（5 日間）からそれぞれ１名、計４名の学芸員を受け入れた。研修内容は企画展展示作業の見学、常設展展示作業の見学、版画素描室撤去及び展示作業の見学、X 線による作品調査見学、貸出作品調査の見学、埃払い見学、館内の保存修復、保存科学設備の見学、各室業務の聞き取り他を実施した。

＜インターンシップ＞

令和５年５月～10 月まで大学院生３名を受入れた。研修内容は所蔵作品（絵画・彫刻）の来歴・展覧会歴調査、美術史的研究及び絵画・彫刻室に関連する業務の補佐、教育普及プログラムの企画・実施の補助及び資料整理他を実施した。

（オ）国立国際美術館

＜キュレーター研修＞

２名を受入れ、以下のとおり実施した。

・関西学院大学博物館の学芸員１名を９日間受入れ、展覧会の構想方法、予算に合わせた資料の保管方法、著作物利用に係る書類の作成方法及びデータベースの構築方法について研修を行った。
・兵庫陶芸美術館の学芸員１名を 10 日間受入れ、様々なメディアを用いて制作された現代美術作品の取り扱い、展示方法、収蔵方法及び教育普及プログラムについて研修を行った。

＜インターンシップ＞

５名を受入れた。受入れの内訳は、「学芸」２名、「美術館教育」１名、「映像関係」１名、「情報資料」１名。「学芸」分野のインターンは「ホーム・スイート・ホーム」展、所蔵作品展の運営に関する業務の補助を、「美術館教育」のインターンは教育普及に係る事業の補助を、「映像関係」分野のインターンは「中之島映像劇場」の企画事業の補助を、「情報資料」分野のインターンは、図書登録から装備、配架作業補助、アーカイブ資料整理の補助を行った。

（カ）国立新美術館

＜インターンシップ＞

展覧会、教育普及、広報の３部門で将来美術館等の機関での就業を志す大学生・大学院生７人を受け入れた。展覧会部門では企画展「イヴ・サンローラン展」及び「遠距離現在」展でのカタログの編集及び校正作業等、教育普及部門では建築ツアーやワークショップといったイベント運営補助や参加者アンケートの集計等、広報部門では SNS 投稿案の作成や記者発表会での運営補助等の研修を行った。

※キュレーター研修については、令和５年度に受入予定だった研修生１名より、参加辞退の申し入れがあったため、実施しなかった。

③　映画保存のニーズに対応した人材育成

デジタルでの映画制作や上映が主流となった現在において、公開当時のオリジナルの映像や音の保存と復元について知見を深め、映画の適正な保存や映画文化の継承をはかることを目的に以下のとおり２回開催した。映画映像のアーカイブに関心のある方をはじめ、映画・テレビの関係者、技術者・若手スタッフ向けの内容となっている。

・NFAJ＆J.S.A. アーカイブセミナー　映画表現と音　ミナトーキー

主　　催：国立映画アーカイブ、協同組合日本映画・テレビ録音協会
開催日時：令和５年 12 月２日（土）12：50～16：00（開場 12：30）
会　　場：国立映画アーカイブ 小ホール
参加者数：65 人
内　　容：フィルム式トーキーの日本映画第一弾といえるミナトーキーに焦点をあて、作品鑑賞を通してミナトーキーの音表現を確認し、日本映画トーキー黎明期の技術と表現について考察した。

・NFAJ&J.S.E.アーカイブセミナー　体験的映画編集論

主　　催：国立映画アーカイブ、協同組合日本映画・テレビ編集協会
開催日時：令和６年１月 12 日（金）13：20～17：40（開場 13：00）
　　令和６年１月 13 日（土）13：20～16：40（開場 13：00）
会　　場：国立映画アーカイブ 小ホール
参加者数：112 人　（12 日:46 人/13 日:66 人）
内　　容：映画の編集とその技術・表現について、作品鑑賞を通して編集表現を理解した後、制作談を伺い、各撮影所のスタッフワークや施設・機材などの特色も交えて考察を行った。

（3）国内外の映画関係団体等との連携等

第５期（令和３年度～令和７年度）中期目標に定める指標	
指標	・映画・映像作品の収集・保管に係る取組状況。（映画フィルム購入本数、映画フィルム寄贈本数、映画フィルム年度末所蔵本数、所蔵フィルム検索システムにおける新規公開件数、所蔵フィルム検索システムにおける累計公開件数） ・国内外の映画関係団体等との連携・調整に係る取組状況。（「全国映画資料館録」更新版を中期目標期間中に刊行する。） 以上の指標については、第４期中期目標期間と同程度の水準を維持するものとする。 ・ロケーションデータベースの登録件数は、1,700 件程度とする。 ・ロケーションデータベースの利用者数は、839,000 人程度とする。
関連指標	・振興会におけるアーツカウンシル機能との連携を通じて実施したプログラムディレクター・プログラムオフィサーと映画製作団体等との意見交換会の件数 ・非フィルム資料のアーカイブ化の取組における成果に基づき実施した展示等の回数

※令和４年度は「全国映画資料館録」更新版を刊行していない。

①　映画フィルム及び映画関連資料の収集

	購入本数	購入金額	寄贈本数	年度末所蔵本数	年度末寄託本数
令和５年度	95	108,659,908	748	87,250	19,322
第４期中期目標期間実績（※）	152	－	970	83,744	－

※購入本数及び寄贈本数は平均値であり、年度末所蔵本数は令和２年度末の数値である。

令和５年度の収集方針
映画を芸術作品のみならず、文化遺産として、あるいは歴史資料として、網羅的に収集することを目標に、日本映画の収集を優先しながら、時代を問わず散逸や劣化、滅失の危険性が高い映画フィルム等及び上映事業や国際交流事業に必要な映画フィルム等の収集を行う。なお、収集にあたっては、自主製作映画等企業の管理下に置かれない映画の収集にも配慮することとし、受贈については、デジタル素材の受入れも継続しながら、映画のデジタル化に伴い散逸の危機に瀕しているフィルム原版の受入れも重点的に実施することとする。映画資料については、日本映画に関わるものを中心に、作品レベルでの網羅性を向上させるとともに、映画史の調査研究に資する幅広い種類の資料の収集を行う。加えて、本年度は特に次の点について留意する。 ア 歴史資料として貴重な無声期の映画作品について、デジタル復元を実施する。 イ 国立映画アーカイブが所蔵する歴史的映像等のデジタル化と配信への取り組みを継続し、サイトの充実を図る。 ウ フィルム、デジタルともにオリジナルフォーマットを重視した収集を行う。

特記事項

〈購入〉

上映企画に伴う映画フィルム購入に関しては、「逝ける映画人を偲んで 2021-2022」に伴い、『精霊のささやき』（1987 年）等 19 作品、20 本のフィルムと、『生態系-29-密度 3』（2021 年）等７作品のデジタル上映用及び保存用素材を、また、「月丘夢路 井上梅次 100 年祭」に伴い、『火の鳥』（1956 年）等４作品、６本のフィルムを購入し、撮影所全盛期からポスト撮影所期までの重要作を収集することができた。また「アニメーション作家 山村浩二」に伴い、『カフカ 田舎医者』（2007 年）１作品、１本のフィルムと、『台所会議』（1979 年）等学生時代の自主制作作品を含む 16 作品のデジタル上映用及び保存用素材を購入し、現代日本アニメーションを代表する作家のまとまった作品収集という点で、意義のある購入だった。さらに「日本の女性映画人（2）――1970-1980 年代」に伴い、『病院はきらいだ』（1991 年、時枝俊江監督）等 14 作品、14 本のフィルムと、『わらじ片っ

ぽ』（1976 年）等３作品のデジタル上映用及び保存用素材を購入し、コレクションに欠落していた文化記録映画や自主映画の重要作を収集することができた。

その他、特殊な現像手法によって作られた青山真治監督の『EUREKA』（2000 年）を、公開当時のタイミング担当者の監修を得て、新規プリント購入できたことや、野田真吉監督の『京浜労仂者 1953』（1953 年）及び『松川事件 真実は壁を透して』（1954 年）について、稀少な可燃性原版からプリントを作製できたことも、非常に意義のある購入だった。

〈受贈〉

令和５年度の映画フィルムの寄贈受け入れ本数は、748 本、42 件だった。特徴は３点挙げられる。１点目は、令和４年度に引き続き、独立系映画製作会社や個人からの原版寄贈が多くみられた。作品としては、橋浦方人の劇場監督デビュー作『星空のマリオネット』（1978 年、東京ビデオセンター寄贈）や、国内の数々の映画賞を受賞した今村昌平監督の『黒い雨』（1989 年、今村プロダクション寄贈）、中川陽介監督のデビュー作『青い魚』（1998 年、中川監督による寄贈）等がある。２点目として、1970 年代以降の日本のドキュメンタリー映画に重要な足跡を残した作家の多くの作品の著作権を継承する Palabra 株式会社から、『水俣―患者さんとその世界―』（1973 年、土本典昭監督）や『沖縄列島』（1969 年、東陽一監督）、『薬に病む クロロキン網膜症』（1980 年、小池征人監督）、『花子』（2001 年、佐藤真監督）といった重要作の原版寄贈を受けた。３点目として、東映株式会社から、1947～59 年の会社創立初期に東映（東横映画時代を含む）が製作した 110 作品（225 本）の原版寄贈を受けた。片岡千恵蔵や市川右太衛門ら大スター主演による娯楽時代劇から、戦後の反戦映画の嚆矢となり高い評価を得た『日本戦歿学生の手記 きけ、わだつみの声』（1950 年、関川秀雄監督）まで、時代を代表する数々の東映作品の原版を所蔵するに至ったことは、国立の映画保存機関として大きな一歩と言える。

映画関連資料については、日本映画に関わるものを中心に、作品レベルでの網羅性を向上させるとともに、映画史の調査研究に資する幅広い種類の資料の収集を行っており、令和５年度も映画会社・個人などから多くの資料寄贈を受けた。令和５年度に収蔵した主要な寄贈資料としては、有限会社和田誠事務所より受領したポスター、スチル写真など和田誠旧蔵品 4,005 点、株式会社繁田（三木鶏郎企画研究所)より脚本など三木鶏郎旧蔵品 350 点、株式会社東京現像所より洋雑誌など 565 点や和雑誌、脚本、写真、製作資料等、技術資料など 976 点、俳優小林桂樹ご遺族より小林桂樹旧蔵品 5,855 点、俳優澤村四郎五郎ご遺族よりスチル写真アルバムほか澤村四郎五郎旧蔵品 258 点、尾上松之助主演映画ポスターなど 5 点が挙げられる。

② 映画フィルム及び映画関連資料の保管・修復・復元

修理・修復本数
フィルム 46 点（映画フィルムデジタル復元 2 点、ノイズリダクション等 8 点、不燃化作業 6 点、映画フィルム洗浄 30 点） 映画関連資料　26 点（ポスター8 点、資料 18 点）

特記事項

令和５年度はデジタル復元を２件行った。松竹株式会社との共同による『父ありき』（1942 年、小津安二郎監督）復元では、占領期に再公開された際、検閲により約 7 分短くなったと推測される同作について、松竹所蔵の 16㎜ マスターポジと、国立映画アーカイブ所蔵の戦前公開版と思われる 35㎜ プリントを合わせることにより、最も公開時に近いバージョンを復元することができ、第 36 回東京国際映画祭でお披露目上映を行った。旧劇映画の大スター・澤村四郎五郎主演の『五郎正宗孝子伝』（1915 年、吉野二郎監督）の復元では、所蔵フィルムにあったフレームのずれや左右の反転を修正したほか、現存する台本に基づいて場面の順番を編集し、館内の教育普及企画でお披露目を行い、その後ウェブサイト「はじまりの日本劇映画 映画 meets 歌舞伎」で配信も行った。

また、さまざまなカテゴリーの映画を複製し、コレクションの欠落を埋めることができた。戦前の日活作品は、他のメジャー会社と比べても残存率が低い中、完全なバージョンではないが『輝く門出』（1933 年、三枝源次郎監督）や『遅咲きの花』（1939 年、伊賀山正徳監督）といった作品を、唯一素

材と思われる 16㎜プリントから保存用及び上映用素材を複製することができた。さらに、『白い影への対話』（1963 年、北村皆雄監督）といった実験映画や、『戦争の犬たち』（1980 年、土方鉄人監督）、『真夜中の河』（1988 年、南雲佑介監督）といった自主映画、『みやこ』（1974 年、山谷哲夫監督）といったドキュメンタリー等について、所蔵原版から上映用素材を複製し、劇映画のメジャー作以外の分野において、収集の大きな成果を得た。

映画関連資料については、年度ごとに材質や劣化状況に応じてさまざまな専門家に依頼して修復を行うとともに、アーカイブ用の資料保存ケースを購入して長期保存を図っている。具体的な案件としては、『聖ペテルブルクの最後』（1927 年）ほか袋一平コレクション（初期ソビエト映画）のポスターや、『西鶴一代女』（1951 年）ほか戦前・戦後期の重要な映画ポスターの修復、戦前期の映画館プログラムの脱酸性化作業、常設展展示品の中で長期展示に対応するためのレプリカ作成、二川文太郎監督旧蔵資料の修復などを行った。スタッフによる作業としても、公開・貸出頻度の高いポスターなどへの和紙を用いた簡易修復、脆弱なシナリオ等冊子に対する保存ケースの作成、接着したスチル写真の剥離などの措置を講じている。

③　映画フィルム及び映画関連資料の貸与等

・映画フィルム

貸出		特別映写観覧		複製利用	
件数	点数	件数	点数	件数	点数
73	132	49	156	70	181

・映画関連資料

貸出		特別観覧	
件数	点数	件数	点数
9	161	48	766

特記事項

映画フィルム等の貸与については、海外の貸与先はヨーロッパ・アメリカ・東アジア中心で、半数近くが FIAF 加盟機関の利用であった。韓国シネマテーク協会「清水宏特集」、フィルム・アット・リンカーンセンター「吉田喜重回顧特集」、台湾国家映画及び視聴文化センター「田中絹代回顧展」等の日本の映画作家の特集上映のほか、羽田澄子（オープンシティ・ドキュメンタリー映画祭）、坂根田鶴子（ニューヨーク近代美術館）等、女性映画作家の作品を取り上げる傾向もみられた。国内はラピュタ阿佐ヶ谷をはじめとした都内名画座への貸出が案件数として目立っているが、横浜シネマリン、シネ・ヌーヴォ（大阪）、神戸映画資料館、広島市映像文化ライブラリー、福岡市総合図書館、山形国際ドキュメンタリー映画祭、湯布院映画祭等、全国から貸与依頼が寄せられた。また国内外問わず、無声映画の貸出も一定数あり、活弁や伴奏をつけての上映が行われた。

特別映写観覧は例年通り、大学の研究試写が突出して多い。その他、日本映画撮影監督協会や日本映像アーキビスト協会等の映画関連団体による研究試写や、番組制作のための参考試写も行われた。

複製利用については、過去最高の利用件数となった。最大の理由は、関東大震災から 100 年を迎え、ウェブサイト「関東大震災映像デジタルアーカイブ」配信作品へのアクセス希望が爆発的に増加したことである。震災関連の映像は、テレビ番組制作から新聞の電子版、防災関連イベント、展覧会などさまざまな目的で利用され、全体の半数近くの 33 件にも及んだ。

映画資料の貸与については、日本でも数少ない常設の映画関連展示施設である鎌倉市川喜多映画記念館への貸出が案件の数として目立っているが、本年度は京都国立近代美術館・東京ステーションギャラリー・日本経済新聞社共催の「甲斐荘楠音の全貌 絵画・演劇・映画を越境する個性」展に対する資料 30 点の貸与、県立神奈川近代文学館の「小津安二郎展」へのポスター貸与も特筆される。資料の特別観覧については、出版社・教育機関・テレビ局などの要望に対し、資料画像の提供や研究者による熟覧などの形で所蔵資料へのアクセスに応じている。

④　所蔵フィルム検索システムにおける公開実績

映画フィルム（テキストデータ）公開実績	新規公開実績	累計公開件数
	142	8,045

⑤　国内外の映画関係団体等との連携・調整に係る取組状況

上映企画において、チネマ・リトロバート映画祭を主催するチネテカ・ディ・ボローニャ（イタリア、FIAF 加盟機関）他と共催上映を開催したほか、令和５年度も「東京国際映画祭」、「ぴあフィルムフェスティバル」と上映企画または映画祭の共同開催を実施した。展示企画においては、「月丘夢路 井上梅次 生誕 100 年祭」で井上・月丘映画財団の協力を得た。

映画関連資料については、令和５年度から資料の全国的な活用を視野に、重複して受領した同一資料を他の映画資料館の要望に応じて頒布する事業を開始した。また「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」において研究員が亀山市歴史博物館、小津安二郎松阪記念館、羽島市映画資料館ほか映画資料保存施設を訪問するなど、各地の映画資料館・専門図書館・研究機関と映画資料の保存に関する情報の収集や交換を行った。また、同事業の一環として「全国映画資料アーカイブサミット 2024」を開催し、研究員が主導的な役割を果たした。

教育普及事業においては、協同組合日本映画・テレビ録音協会、協同組合日本映画・テレビ編集協会との共催セミナーを開催し、東京国際映画祭との共催による映画教育国際シンポジウムを開催した。

⑥　我が国の映画助成システムの改善等に関する協力

振興会におけるアーツカウンシル機能との連携を通じて実施したプログラムディレクター・プログラムオフィサーと映画製作団体等との意見交換会の件数（件）	21 件

プログラムディレクター（PD）とプログラムオフィサー（PO）を配置し、独立行政法人日本芸術文化振興会の日本映画製作支援事業、芸術文化振興基金による国内映画祭等の活動への助成等について、実施計画や募集案内の作成、審査や助成作品の完成確認等に協力した。また、助成対象活動の調査や映画製作団体等との意見交換を実施して、映画関係者とのコミュニケーションを図り、現在の状況や要望、助成活動の成果の情報を収集し、助成システムの改善に取り組んだ。その他、同振興会の実施する映画分野を含む助成事業についても協力した。

⑦　非フィルム資料のアーカイブ化に関する取組

非フィルム資料のアーカイブ化の取組における成果に基づき実施した展示等の回数（件）	２回

令和５年度、文化庁から移管された本事業は、日本の歴史的・文化的価値のある非フィルム資料のアーカイブ構築に向けその保存及び活用を図るための望ましい仕組みの在り方について調査研究等を行い、非フィルム資料のアーカイブに係る中核拠点形成を図るため、当該分野のネットワーク化を推進し、分野全体のアーカイブの構築・運営や共同利用の促進等を行うことを目的としている。東海、関東の資料館、撮影所を現地調査し、資料の所在に関する情報を収集した。調査で確認された資料の利活用実証展示として、「“御意見無用！東映東京撮影所物語／関連展示：知られざる「日本映画博覧会」”」を開催した。デジタルアーカイブ化による保存や利活用の検討のため、デジタル化を実施した北九州市立松永文庫、木下惠介記念館が所蔵する資料の一部を同展示で公開した。移管前の実証研究で作成された「映画資料所在地情報検索システム（JFROL）」を４月に一般公開し、新たに調布市立図書館のデータベースを連携して、５館の協力所蔵館の映画資料データ横断検索を可能とした。また、「全国映画資料アーカイブサミット 2024」をオンライン開催してセミナーやシンポジウムを実施した。

⑧　ロケーションデータベースの運営

＜登録件数＞

新規登録件数	第５期新規 登録件数累計	目標登録 件数（第５期）	登録件数累計
710	710	1,700	12,120

＜利用者数＞

本年度利用者数	第５期 利用者数累計	目標利用者数 （第５期）
1,873,596	1,873,596	839,000

令和５年度、文化庁から移管された本事業は、「全国ロケーションデータベース（JL-DB）」に、全国各地域のフィルムコミッション（FC）が保有・蓄積しているロケーション情報を集約して検索性を高めることで、日本国内における映画撮影の促進及び日本映画の創造活動の活性化を図り、また、日本の魅力あるロケーションの発信を行うことを目的としている。国内ロケ地情報及びロケ撮影に係る行政機関等への許認可手続き等の情報を更新、新規登録を行い、内容を充実させることができた。また、JL-DB の利用促進や FC 体制強化に係る取り組みとして、研修やセミナー、ヒヤリング、イベントでの PR 活動等を実施した。

⑨　情報発信、人材育成に係る機能強化

令和４年度に展示・資料室及び教育・発信室に新たに配置された人員２名により、国立アートリサーチセンター及び国立各美術館との連絡調整及び事業の企画、立案、実施に向けた取り組みを行い、令和５年度も引き続き、その基礎的かつ専門的な調査研究を行った。

Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

1　業務運営の取組

●　一般管理費及び業務経費の削減状況

（単位：千円）

区分	前中期目標期間 最終年度	当中期目標期間	増減率
	令和２年度	令和５年度	
一般管理費物件費及び業務経費物件費	2,410,288	1,930,784	△19.89

特記事項

当中期目標期間終了年度（令和７年度）において、前中期目標期間の最終年度（令和２年度）と比べて、運営費交付金を充当して行う事業について一般管理費物件費及び業務経費物件費の合計を 5%削減することを目標としている。（ただし、美術作品購入費、美術作品修復費及び土地借料等の特殊要因経費（令和３年度以降に既定経費化されたものを含む。）は対象外。）

令和５年度の一般管理費物件費及び業務経費物件費の合計は、令和２年度に比し 19.89%減少している。

2　組織体制の見直し

独立行政法人の組織ガバナンス強化の観点から、本部体制の強化に努めるとともに、独立行政法人の業務運営の柔軟性を生かし、より一層のサービス向上及び組織の機能向上を実現するため、組織体制の見直しを進めた。

令和５年度は国際発信拠点としての機能強化のため、国立新美術館に国際連携室を設置し、国立映画アーカイブにおいては、独立行政法人日本芸術文化振興会の実施する映画助成事業への協力や文化庁からの移管事業である全国ロケーションデータベースの利用促進のための調査研究等を行う事業推進室を設置した。また、国立西洋美術館では、館の経営に関することを企画立案し実施する経営企画・広報渉外室及び世界遺産に関する調査研究や活用公開等を行う世界遺産担当室を設置した。

3　契約の点検・見直し

（1）調達等合理化の推進

「独立行政法人における調達等合理化の取組の推進について」（平成 27 年 5 月 25 日総務大臣決定）に基づき、事務・事業の特性を踏まえ、PDCA サイクルにより、公正性・透明性を確保しつつ、自律的かつ継続的に調達等の合理化に取り組むため、令和５年度独立行政法人国立美術館調達等合理化計画を策定した。

①　令和５年度の調達実績

ア　令和５年度の調達全体像　　（単位：件、千円）

	令和 4 年度		令和 5 年度		比較増△減	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額
競争入札等	(31.5%) 84	(37.9%) 2,475,028	(27.5%) 80	(48.2%) 4,170,480	(△4.8%) △4	(68.5%) 1,695,452
企画競争・公募	(21.0%) 56	(7.6%) 498,368	(20.6%) 60	(10.3%) 894,107	(7.1%) 4	(△79.4%) 395,739
競争性のある契約（小計）	(52.4%) 140	(45.5%) 2,973,396	(48.1%) 140	(58.5%) 5,064,587	(0.0%) 0	(70.3%) 2,091,191
競争性のない随意契約	(47.6%) 127	(54.5%) 3,554,521	(51.9%) 151	(41.5%) 3,593,451	(18.9%) 24	(1.1%) 38,930
合　計	(100.0%) 267	(100.0%) 6,527,917	(100.0%) 291	(100.0%) 8,658,038	(9.0%) 24	(32.6%) 2,130,121

（注 1）　計数は、それぞれ四捨五入しているため、合計において一致しない場合がある。

（注 2）　比較増△減の（　）書きは、令和 5 年度の対令和 4 年度伸率である。

イ　令和５年度の一者応札・応募状況　　（単位：件、千円）

		令和 4 年度		令和 5 年度		比較増△減	
２者以上	件数	53	(37.9%)	48	(35.3%)	△5	(△9.4%)
	金額	844,915	(28.3%)	1,076,460	(23.1%)	231,545	(27.4%)
１者以下	件数	87	(62.1%)	88	(64.7%)	1	(1.1%)
	金額	2,128,481	(71.7%)	3,581,818	(76.9%)	1,453,337	(68.3%)
合　計		140	(100.0%)	136	(100.0%)	△4	(△2.9%)
		2,973,396	(100.0%)	4,658,278	(100.0%)	1,684,882	(56.7%)

（注 1）　計数は、それぞれ四捨五入しているため、合計において一致しない場合がある。

（注 2）　合計欄は、競争契約（一般競争、指名競争、企画競争、公募）を行った計数である。

（注 3）　比較増△減の（　）書きは、令和 5 年度の対令和 4 年度伸率である。

②　契約監視委員会の審議状況

監事及び外部有識者で構成される契約監視委員会を２回実施（書面審査１回含む）し、令和５年度調達等合理化計画策定及び令和５年における契約の点検見直しを行ったところ、指摘事項はなかった。

・一者応札の検証実施件数：81 件

③　調達等合理化検討チームによる点検

新たに随意契約（少額随契を除く。）を締結することになった案件について、本部事務局長を総括責任者とする調達等合理化検討チームにおいて事前点検（緊急の場合は事後点検）を行い、競争性のない随意契約に関して真にやむを得ないものかの確認を行うことで契約の適正化に努めた。

・事前点検：9 件

④　不祥事の発生の未然防止・再発防止のための取組

令和５年度は、本部事務局、東京国立近代美術館、国立工芸館、京都国立近代美術館、国立映画アーカイブ、国立西洋美術館、国立国際美術館及び国立新美術館を対象として、契約方法の妥当性、固定資産等の管理、債権・債務の管理、前年度指摘事項のフォローアップ等について、監査員による内部監査を行った。内部監査の実施により、不適正な会計処理の未然防止と、効率的な取組の情報共有を図り、法人全体の業務効率化に努めた。

・内部監査実施件数：8 件

（2）民間委託の推進

①　一般管理部門を含めた組織・業務の見直しと民間委託の推進

次のとおり民間委託による業務の効率化を行い、限られた人員及び予算の中で、効率的な施設設備の維持及び来館者サービスの向上を図った。

（ア）会場管理業務、（イ）設備管理業務、（ウ）清掃業務、（エ）保安警備業務、
（オ）機械警備業務、（カ）収入金等集配業務、（キ）レストラン運営業務、
（ク）アートライブラリー運営業務、（ケ）ミュージアムショップ運営業務、
（コ）美術情報システム等運営支援業務、（サ）ホームページサーバ運用管理業務、
（シ）展覧会アンケート実施業務、（ス）省エネルギー対策支援業務、
（セ）展覧会情報収集業務、（ソ）映写等請負業務

②　広報・普及業務の民間委託の推進

次のとおり民間委託を行い業務の効率化を図った。

（ア）情報案内業務、（イ）広報物等発送業務、（ウ）交通広告等掲載、
（エ）ホームページ改訂・更新業務、（オ）特設サイト等、
（カ）ラジオ CM 等を利用した総合的な広報宣伝業務、
（キ）講堂音響設備オペレーティング業務、（ク）画像貸出業務

4　共同調達等の取組の推進

周辺機関や法人間で連携し、共同調達を行うことで、契約事務等の効率化を図った。国立西洋美術館は周辺の機関と連携し、電子複写機賃貸借及び保守、コピー用紙及びトイレットペーパー、廃棄物処理、古紙売買契約、トイレ用洗浄・脱臭器具の賃貸借について共同調達を実施した。東京国立近代美術館、国立映画アーカイブ及び国立新美術館はトイレットペーパーの共同調達を実施し、周辺の機関と連携して、コピー用紙の共同調達を実施した。東京国立近代美術館、国立映画アーカイブ、国立西洋美術館及び国立新美術館は電気の共同調達を実施した。京都国立近代美術館は周辺の機関と連携し、コピー用紙及びトイレットペーパーの共同調達を実施した。国立国際美術館は、周辺の機関と連携し、コピー用紙の共同調達を実施した。

5　給与水準の適正化等

①　人件費決算

決算額　1,227,555 千円（対令和４年度比較　113.3%）

※人件費は常勤職員を対象とし、退職金、福利厚生費を含まない。

②　給与体系の見直し国家公務員の給与等を考慮して、平成 18 年 4 月から俸給表の水準を全体として平均 4.8%引下げるとともに、級の構成の見直し、きめ細かい勤務実績の反映を行うため号俸の 4 分割を行ったほか、調整手当を廃止し、地域手当を新設するなど、国家公務員の給与構造改革を踏まえた給与体系の見直しを行った。なお、令和５年度においては、国家公務員の給与改定に準拠し、①人事院勧告による官民較差等の状況を踏まえ、俸給水準を平均 1.1%引き上げ（令和６年１月期において令和５年４月に遡及して引き上げ）、②期末手当支給割合及び勤勉手当成績率の引き上げ（年間 0.1 ヶ月分※各手当に 0.05 ヶ月分ずつ配分）の改定等を実施した。

また、国立美術館の職員が行う職務は、国の行政職俸給表（一）又は研究職俸給表の適用を受けるものと同等の職務であるとみなし、給与についても上述の通り一般職給与法に準拠した給与制度で支給してきていることを前提に、これらとの比較を行った。

ア　一般職俸給表の適用を受ける職員の給与水準
【ラスパイレス指数（令和５年度実績）】
対国家公務員・・・（年齢勘案）　96.4
（年齢・地域・学歴勘案）　88.3

イ　研究職俸給表の適用を受ける職員の給与水準
【ラスパイレス指数（令和５年度実績）】
対国家公務員・・・（年齢勘案）94.9
（年齢・地域・学歴勘案）93.9

③　令和４年度の役職員の報酬・給与等について
別紙「独立行政法人国立美術館の役職員の報酬・給与等について」を参照。

６　情報通信技術を活用した業務の効率化
在宅勤務等の「働く場所の拡張」に対応するため、オンラインストレージサービスやチャット／ミーティングツール（Microsoft 社 OneDrive や Teams）の活用を進め、在宅勤務者や外部関係者との情報共有やオンライン会議を積極的に実施し、業務の効率化を図った。
令和４年度に引き続き、在宅勤務時に館内情報システムを利用するためのリモートアクセスサービスにより、在宅勤務の促進を図った。
そのほか、メール利用等において外部データセンターが提供するサーバ機能及びセキュリティ機能により、安全かつ安定した業務運用を実現した。また、法人内ネットワークの回線多重化により、通信障害を回避するように構成したネットワークを引き続き運用している。
各館のホームページサーバーについてはクラウド化を推進し、システムの継続的かつ安定的な運用の基盤を整備し、運用している。
なお、次期ネットワーク更新に向けて、館内外を問わず、安全な業務遂行を実現するためのクラウドセキュリティサービスの選定を開始した。

Ⅲ　予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画等

１　自己収入の確保
入場料収入 1,210 百万円、公募展事業収入 315 百万円、不動産賃貸収入 151 百万円、その他事業収入 169 百万円等により、1,853 百万円の展示事業等収入を獲得し、予算額として定めた目標値である 1,504 百万円を達成した。外部資金については、オンライン寄附サイトの一部リニューアル、同サイト英語版の拡充、クラウドファンディング第４弾を実施し、個人からの支援獲得に努めた他、企業等にも働きかけ、寄附・協賛による支援を獲得した。また法人各館でも外部資金に係る職員の配置を進め、本部では活動支援の一環として独立行政法人に特化した税務研修を開催する等、体制の強化にも努めた。
会費収入及びクラウドファンディングによる外部資金獲得の令和５年度における合計額は 68 百万円であり、第５期中期目標期間累積額は 206 百万円である。
（前中期目標期間累積実績額 287 百万円）

２　保有資産の有効利用・処分
保有する資産について、美術館の事業・運営に影響のない範囲で積極的な講堂等の外部貸出やエントランスロビーの活用に努めた。また、保有する資産のうち不要な資産はない。

3　予算

（単位：百万円）

区　　分	予算額	決算額	増△減額
収入			
運営費交付金	7,739	7,739	0
展示事業等収入	1,504	1,853	349
施設整備費補助金	400	920	520
文化芸術振興費補助金	0	4	4
受託収入	0	101	101
寄附金収入	650	769	119
計	10,293	11,386	1,093
支出			
運営事業費	**9,243**	9,347	△104
人件費	1,246	1,285	△39
一般管理費	804	1,004	△199
事業部門経費	7,193	7,058	135
うち美術振興事業費	3,865	2,981	885
うちナショナルコレクション形成・継承事業費	2,484	2,538	△55
うちナショナルセンター事業費	844	1,539	△696
施設整備費	400	920	△520
文化芸術振興費	0	4	△4
受託事業費	0	101	△101
寄附金事業費	650	577	73
計	10,293	**10,949**	**△656**

※金額は単位未満四捨五入のため、合計等が合致しない場合がある。

特記事項

美術振興事業費については、未達成の運営費交付金債務の繰越により、予算に比し 885 百万円の支出増となり、ナショナルセンター事業費については、国立アートリサーチセンターにおける業務に係る運営費交付金債務の前年度からの繰り越し等により 696 百万円の支出増になっている。

施設整備費補助金は、前年度から繰り越された工事の完了により、予算額より 520 百万円の支出増となった。

寄附金については、769 百万円を獲得し、令和５年度に 577 百万円を支出した。

4　収支計画

（単位：百万円）

区　　分	計画額	決算額	増△減額
費用の部			
経常費用	8,047	8,206	△159
人件費	1,158	2,119	△961
一般管理費	946	1,259	△313
事業部門経費	5,169	4,287	882
うち美術振興事業費	3,846	2,840	1,006
うちナショナルコレクション形成・継承事業費	676	484	192
うちナショナルセンター事業費	647	962	△315
寄附金事業費	650	438	212
減価償却費	124	103	21
収益の部			
経常収益	8,047	8,344	297
運営費交付金収益	5,604	5,164	△440
展示事業等の収入	1,504	1,853	349
受託収入	0	101	101
寄附金収益	650	438	△212
資産見返負債戻入	124	100	△24
補助金等収益	0	4	4
施設費収益	0	520	520
引当金見返に係る収益	165	164	△1
経常損益		138	138
臨時損益		0	0
当期純損益		138	138
前中期目標期間繰越積立金取崩額		0	0
当期総利益		138	138

※金額は単位未満四捨五入のため、合計等が合致しない場合がある。

5　資金計画

（単位：百万円）

区分	計画額	決算額	増△減額
資金支出	10,293	10,506	△213
業務活動による支出	9,823	10,031	△208
投資活動による支出	470	475	△5
財務活動による支出	0	0	0
資金収入	10,293	10,798	505
業務活動による収入	9,893	10,287	394
運営費交付金による収入	7,739	7,453	△287
展示事業等による収入	1,504	1,847	343

受託収入	0	191	191
補助金等収入	0	26	26
寄附金収入	650	769	119
投資活動による収入	400	511	111
施設整備補助金による収入	400	511	111
資金増減額		292	
資金期首残高		6,481	
資金期末残高		6,773	

※金額は単位未満四捨五入のため、合計等が合致しない場合がある。

6　貸借対照表

（単位：百万円）

資産の部		負債及び純資産の部	
資産の部		負債の部	
Ⅰ　流動資産	8,443	Ⅰ　流動負債	8,124
Ⅱ　固定資産		Ⅱ　固定負債	1,273
１．有形固定資産	208,631		
２．無形固定資産	43	負債合計	9,398
３．その他の固定資産	747		
固定資産合計	209,421	純資産の部	
		Ⅰ　資本金	81,019
		Ⅱ　資本剰余金	126,763
		Ⅲ　利益剰余金	684
		純資産合計	208,467
資産の部　合計	217,864	負債及び純資産の部　合計	217,864

※金額は単位未満四捨五入のため、合計等が合致しない場合がある。

7　短期借入金

実績なし。

8　重要な財産の処分等

実績なし。

9　剰余金

（1）当期未処分利益の処分計画

（単位：円）

区分	金額
Ⅰ　当期未処分利益	
当期総利益	137,922,766
Ⅱ　利益処分額	
独立行政法人通則法第44条第3項により主務大臣の承認を受けようとする額	137,922,766

（2）利益の生じた主な理由

支出の抑制等による。

（3）目的積立金の使用状況

実績なし。

（4）積立金（通則法第 44 条第 1 項）の状況

（単位：円）

使途の内訳	期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高
積立金	121,499,910	26,083,638	0	147,583,548
前中期目標期間繰越積立金	386,766,711	0	0	386,766,711
目的積立金	12,131,806	0	0	12,131,806

Ⅳ　その他主務省令で定める業務運営に関する事項

1　内部統制・ガバナンスの強化

（1）内部統制の充実・強化

①　理事長がリーダーシップを発揮できる環境の整備

国立美術館が有する美術館施設や運営費交付金等を有効に活用して戦略的、効果的、かつ効率的で適正な管理運営を確保するため、内部統制・ガバナンスの強化に努めている。

理事長の意思決定を補佐するため、理事長及び理事をもって組織する理事会を原則毎月開催し、国立美術館の運営に関する基本方針のほか、中期計画・業務評価・予算・人事等の重要事項を審議した。

本部には、理事が兼任する事務局長を置き、事務局の企画立案機能の充実を図るとともに、各館横断的な調査研究業務及びその他の学芸に係る専門的な重要事項に係る業務を掌理する学芸調整役を配置し、各館が有機的に連携し、効果的・効率的な業務を遂行しうる体制を整備している。法人内会議（経営会議、研究系管理職を中心とした学芸課長会議、事務系管理職を中心とした運営管理会議）を通じて、役員及び各館の館長はもとより、法人各職員に対するミッションの周知及び情報共有を図っている。

また、予算配分に関しては、法人全体としての作品購入予算や修復予算、人件費等を本部が一括管理し、戦略的・機動的な執行を図っているほか、令和５年度は理事長裁量経費を計上し、職員の海外派遣やこども連れ来館者のための取組、情報システムの整備等への機動的配分や、各館の自己収入増へのインセンティブとして自己収入実績に応じた再分配など、理事長のリーダーシップによる資源配分の強化を図った。

内部統制に関しては、平成 29 年度に制定された「独立行政法人国立美術館内部統制規則」に基づき、国立美術館に対する社会的信頼の確保及び国立美術館における内部統制の推進のため、国立美術館内部統制委員会を開催した。本委員会では、内部監査及び監事監査の結果について情報共有と意見交換を行い、内部統制機能の強化に努めた。

さらに、外部の有識者で組織し、国立美術館の管理運営に関する重要事項について理事長の諮問に応じて審議し、理事長に対して助言する独立行政法人国立美術館運営委員会を開催し、令和４年度事業実績並びに、令和５年度事業計画について説明聴取の上、意見交換を行った。

②　組織全体で取り組むべき重要な課題（リスク）の把握

法人内の会議において情報共有及びリスクの把握に努めているほか、法人全体で取り組むべき重要な課題（リスク）に対応するため、令和５年度はリスク管理委員会を２回開催し、法人で取り組むべき重要な課題（リスク）について議論し、見直しに取り組んでいる。

そのほか、法人の事業継続計画の作成を進めるとともに、外部有識者で構成する運営委員会や外部評価委員会の開催を通じて、外部の視点からのリスクの把握に努め、監事や会計監査人との意見交換を通じて法人運営に影響を及ぼすリスクの把握に努めている。

（2）情報セキュリティ

情報資産の安全な運用管理実現のために、「情報システムの整備及び管理の基本的な方針」（令和３年 12 月 24 日デジタル大臣決定）にのっとり、適切な整備及び管理を行い、保有する情報については、法令等に基づき適切に情報の開示を行うとともに、政府の方針を踏まえた適切な情報セキュリティ対策を推進するなど、責任ある体制を構築するために 必要な措置の実行に努めた。令和３年度に改定された「政府機関等の情報セキュリティ対策のための統一基準群」に基づき、法人の情報セキュリティ体制の整備を進めるとともに、情報セキュリティ委員会を開催し、国立美術館の情報セキュリティ対策実施状況の把握・情報セキュリティ対策実施計画の協議及び推進を行うなど、情報セキュリティの実現に取り組んだ。

令和５年度は、国立美術館全館を対象として情報システム等の状況に関するヒアリングを行い、各館の情報セキュリティ上の問題点を調査し、また、「政府機関等の情報セキュリティ対策のための統一基準群」への準拠度を把握するため、京都国立近代美術館、国立映画アーカイブ及び国立アートリサーチセンターを対象とした情報セキュリティ自己監査を実施した。全館を対象としたヒアリングの実施と自己監査について対象とする館を２館から３館に増やしたことで、法人全体の情報セキュリテ

ィに関する状況をより密に把握することに努めた。なお、自己監査等の結果については、法人内役職員を対象とした説明会において報告し、現状の情報セキュリティ対策上の課題等を共有した。

さらに、情報セキュリティ研修等の機会を設け、法人全体の情報セキュリティ意識の底上げに努めるとともに、頻発している情報漏えい、情報改ざん等につながる悪意のあるソフトウェアが添付されたメール等への注意喚起等を随時に行うとともに、標的型メール攻撃訓練サービスを導入し、全５回のメール攻撃訓練を実施し、その結果について情報セキュリティ委員会にて報告した。

（３）内部統制・ガバナンスの強化に係る取組状況の検証

①　監事監査

監事２名が経営会議その他重要な会議に出席するほか、役職員から事業の報告を聴取し、重要な決裁書類等を閲覧し、財務及び業務についての状況を調査している。また、会計監査人から会計監査人の監査方法及びその結果について説明を受け、会計帳簿等の調査を行い、財務諸表、事業報告書及び決算報告書について検討を加え、いずれも適正であることを確認するとともに、業務の執行に関する法令遵守等の状況についても確認している。

令和５年度においては令和５年６月 26 日に期末監査を実施したほか、各館に対し期中監査を以下のとおり実施した。

令和６年１月 10 日：国立新美術館
令和６年１月 15 日：国立西洋美術館
令和６年１月 24 日：国立工芸館（書面監査のみ）
令和６年１月 31 日：国立国際美術館
令和６年２月６日：国立映画アーカイブ、国立アートリサーチセンター
令和６年２月７日：東京国立近代美術館
令和６年２月 14 日：京都国立近代美術館

なお、監査結果報告については速やかに法人内に周知し、運営改善に生かすとともに、報告書において意見が付された場合には、速やかに対応し、その状況を随時監事に報告している。

このほか、「独立行政法人、特殊法人等監事連絡会」第３部会へ監事２名が参加している。

②　内部監査

本部事務局、東京国立近代美術館、国立工芸館、京都国立近代美術館、国立映画アーカイブ、国立西洋美術館、国立国際美術館及び国立新美術館を対象として、契約方法の妥当性、固定資産等の管理、債権・債務の管理、前年度指摘事項のフォローアップ等について、監査員が以下のとおり実地監査に当たった。

令和５年８月 31 日：本部事務局、東京国立近代美術館
令和５年８月３日：国立工芸館
令和５年８月 23 日：京都国立近代美術館
令和５年８月 28 日：国立映画アーカイブ
令和５年８月１日：国立西洋美術館
令和５年８月 24 日：国立国際美術館
令和５年７月 26 日：国立新美術館

なお、監査結果報告については速やかに理事長、監事、理事及び各館長へ周知している。また、監査結果報告書において意見が付された場合には、改善措置を講じている。

③　外部評価

外部有識者で構成し、国立美術館の単年度ごとの業務の実績に関する評価を行う独立行政法人国立美術館外部評価委員会を２回（書面審議１回含む）開催し、令和４年度事業実績について説明聴取の上、審議し外部評価報告書を取りまとめている。外部評価報告書については法人ホームページにて公表している。

2　施設・設備に関する計画

国立映画アーカイブ京橋本館上映ホール特定天井改修他工事、国立映画アーカイブ相模原分館上映ホール天井改修他工事、国立新美術館空調設備蒸気配管更新等工事（第１期）及び国立新美術館空調設備蒸気配管更新等工事（第２期）を竣工した。また、平成 19 年度から継続している国立新美術館の土地購入を、予算措置に応じて行った。

3　人事に関する計画

（1）職員採用等の状況

令和５年度の常勤職員数は 143 名である（令和５年４月１日時点）。令和５年度においては、令和５年３月に設置された国立アートリサーチセンターの体制強化を図るため、常勤職員の募集・採用を進めた。（令和５年度新規採用 12 名）

職種別人員の増減状況（過去５年分）各年度４月１日時点の在籍者数

（単位：人）

職種	令和元年度	令和 2 年度	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度
定年制研究系職員	57	56	54	58	65
定年制事務系職員	57	57	57	63	72
定年制技能・労務系職員	1	1	1	1	1
指定職相当職員	4	5	5	5	5

また、国立美術館では、継続的な業務の見直しや人員の再配置、平成 23 年度より制度化した任期付研究員制度等の活用を行っている。

さらに、平成 26 年度に整備した常勤の研究職員及び事務職員に準じた特定有期雇用職員制度（専門的事項の調査研究を行う研究職及び専門的な知識と経験等を有する専門職を外部資金等により採用）等を活用し、本部及び各館に必要な人員の配置に努めた（任期付研究員及び特定有期雇用職員の新規採用 25 名）。令和５年度においては、令和５年３月の国立アートリサーチセンター設置を契機とし、法人全体の体制・連携強化のため、国際発信・連携、社会連携分野等の専門人材の確保を継続的に実施した。職員の採用にあたっては、幅広い経歴を有する社会人経験者の中途採用を積極的に行い、職員の多様化を推進している。

人事・給与制度については、公務員の給与改定に関する取扱いについて（平成 18 年 10 月 17 日閣議決定）」に基づき、公務員の例に準じて措置、対処している。令和５年度は、定年年齢の引き上げのほか、俸給等の改定（引上げ）を行い、世間の動向に応じた対応を実施した。また、新型コロナウイルス感染症が５類に移行したことに伴い、緊急対応的に導入していた在宅勤務制度を常設の制度化し、感染症の如何に関わらず職員の状況に応じてより柔軟に働き方を選択できるように整備した。

事務系職員については、法人内各館の異動のほか、文化庁、国立大学法人及び他の独立行政法人との間で定期的な人事交流を行い、組織の効率化と個々の職員の能力の発揮とその向上を考慮して人事配置を行った。また、学芸系職員についても、任期付研究員の常勤職員への登用など、適正な人事配置に努めた。

（2）職員の研修等

①　新規採用者・転任者職員研修

主に新規採用者（非常勤職員を含む）・外部機関からの転入者を対象として、新任職員研修をオンライン形式で実施した。（令和５年度実施　研修参加者 72 名）

②　職員研修の実施（括弧内は参加人数）

- 「ハラスメント防止研修」（348 人）
- 「メンタルヘルス研修（ストレスマネジメント）」（345 人）
- 「メンバーの育成方法研修」（109 人）

・「精神・発達障害者しごとサポーター養成講座」（40 人）

③　外部の研修への派遣（括弧内は参加人数）

ア　本部（事務局、国立アートリサーチセンター）

・文化庁主催「令和５年度文化財行政講座」（１人）
・財務省会計センター主催「第 61 回政府関係法人会計事務職員研修」（１人）
・財務省会計センター主催「第 52 回会計事務職員契約管理研修」（１人）
・会計検査院主催「第 42 回政府出資法人等内部監査業務講習会」（１人）
・関東管区行政評価局主催「令和５年度情報公開・個人情報保護・公文書管理制度の運用に関する研修」（１人）
・国立大学協会東京地区支部及び関東・甲信越地区支部主催「令和５年度東京地区及び関東･甲信越地区国立大学法人等係長研修」（１人）
・一般社団法人行政管理研究センター「マイナンバー実務セミナー」（１人）
・一般社団法人全国美術館会議主催「第 38 回学芸員研修会」（１人）
・国文学研究資料館主催「2023 年度アーカイブズ・カレッジ(史料管理学研修会）長期コース」（1 人）
・文化庁主催「令和５年度 文化財行政講座」（１人）
・文化庁主催「ミュージアム・PR（パブリックリレーションズ）研修」（２人）
・一般社団法人国立大学協会東京地区支部及び関東・甲信越地区支部主催「令和５年度東京地区及び関東･甲信越地区国立大学法人等係長研修」（１人）

イ　東京国立近代美術館

（本館）

・国立公文書館主催「令和５年度　アーカイブズ研修Ⅰ」（１人）
・文化庁主催「令和５年度図書館等職員著作権実務講習会」（1 人）
・独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館主催「令和５年ＩＰＭ研修」（２名）

（国立工芸館）

・文化庁主催「令和５年度文化財行政講座」（１人）
・独立行政法人国立文化財機構文化財活用センター主催「令和５年度博物館・美術館等保存担当学芸員研修（基礎コース）」（１人）
・独立行政法人国立文化財機構文化財活用センター主催「令和５年度博物館・美術館等保存担当学芸員研修（上級コース）」（１人）

ウ　京都国立近代美術館

・人事院主催「第 47 回近畿地区課長補佐研修」（1 人）
・国文学研究資料館主催「アーカイブズ・カレッジ（史料管理学研修会）長期コース」（1 人）
・文化庁主催「ミュージアム・PR（パブリックリレーションズ）研修」（1 人）

エ　国立映画アーカイブ

・財務省会計センター主催「第 52 回会計事務職員契約管理研修」（1 人）

オ　国立西洋美術館

・2023 年度東京大学職員階層別研修（課長級・副課長級・係長級（初任者））（２人）
・一般社団法人全国美術館会議主催「第 38 回学芸員研修会」（２人）
・公益財団法人日本博物館協会主催「第 71 回全国博物館大会」（５人）
・文化庁主催「令和５年度都道府県著作権事務担当者講習会」（４人）
・文化庁主催「令和５年度ミュージアム・PR（パブリックリレーションズ）研修」（１人）
・株式会社宣伝会議主催「危機管理広報講座」（１人）
・総務省関東管区行政評価局主催「令和５年度情報公開・個人情報保護・公文書管理制度の運用に関する研修」（５人）

カ　国立国際美術館

・人事院主催「第 46 回近畿地区課長研修」（１人）

・国立公文書館主催「令和５年度　公文書管理研修Ⅰ」（１人）
・国立公文書館主催「令和５年度　公文書管理研修Ⅱ」（１人）
・国立公文書館主催「令和５年度　アーカイブズ研修Ⅲ」（１人）
・財務省会計センター主催「第 61 回政府関係法人会計事務職員研修」（１人）
・文化庁主催「令和５年文化をつなぐミュージアム研修」（１人）
・大阪労働局主催「公正採用選考人権啓発推進員　新任・基礎研修」（1 人）
・大阪労働局主催「業務委託・請負適正化／労働者派遣法セミナー」（１人）
・近畿管区行政評価局主催「令和５年度情報公開・個人情報保護・公文書管理制度の運用に関する研修」（１人）
・大阪府主催「心のバリアフリーについて学ぼう！」（２人）

キ　国立新美術館
・国立文化財機構文化財活用センター主催「令和５年度博物館・美術館等保存担当学芸員研修（基礎コース）」（１人）
・国立公文書館主催「令和５年度　公文書管理研修Ⅰ」（１人）
・国立公文書館主催「令和５年度　公文書管理研修Ⅱ」（１人）
・国立公文書館主催「令和５年度　アーカイブズ研修Ⅰ」（１人）
・国立公文書館主催「令和５年度　アーカイブズ研修Ⅲ」（１人）
・文化庁主催「令和５年度都道府県著作権事務担当者講習会」（１人）
・文化庁主催「令和５年度図書館等職員著作権実務講習会」（４人）
・文化庁主催「令和５年度ミュージアム・PR（パブリックリレーションズ）研修」（１人）
・関東管区行政評価局「令和５年度情報公開・個人情報保護・公文書管理制度の運用に関する研修」（２人）
・国立新美術館学芸課研究職員の東京国立近代美術館における研修（１人）

4　関連公益法人

該当なし。

5　国立アートリサーチセンターの設置

「アートをつなげる、深める、拡げる」をキーワードに、国内外の美術館、研究機関をはじめ社会のさまざまな人々をつなぎ、アート振興の基盤整備および国際発信に寄与するとともに、その持続的な発展を志向する組織として、令和５年３月 28 日に国立アートリサーチセンターを設置した。

国立アートリサーチセンターにおいては、専門領域の調査研究（リサーチ）に留まらず、わが国の文化芸術振興政策にもとづき、独立行政法人国立美術館のナショナルセンターとしての機能の強化、情報収集と国内外への発信、コレクションの活用促進、人的ネットワークの構築、ラーニングの拡充、アーティストの支援などに取り組み、わが国の美術館活動全体の充実に寄与していく。

別　表

凡　例

・各館名の略称は以下を用いる。

NCAR：国立アートリサーチセンター（National Center for Art Research）
MOMAT：東京国立近代美術館（National Museum of Modern Art, Tokyo）
MOMAK：京都国立近代美術館（The National Museum of Modern Art, Kyoto）
NFAJ：国立映画アーカイブ（National Film Archive of Japan）
NMWA：国立西洋美術館（The National Museum of Western Art）
NMAO：国立国際美術館（The National Museum of Art, Osaka）
NACT：国立新美術館（The National Art Center, Tokyo）

別表１　所蔵作品展

館名	開催日数（日）		展示替回数		出品点数	入館者数		満足度	
	実績	年度計画	実績	年度計画		実績	目標	実績	目標
東京国立近代美術館（本館）	265	261	5	5	1,534	286,612	170,000	90.4%	77.4%
国立工芸館	69	69	1	1	107	15,926	11,200	95.1%	
京都国立近代美術館	297	266	4	4	958	82,780	68,000	82.6%	
国立西洋美術館	278	278	3	3	778	562,918	403,500	95.0%	
国立国際美術館	160	161	3	3	176	124,788	77,500	85.1%	
合計	1,069	1,035	16	16	3,553	1,073,024	730,200	89.6%	

※　「満足度」とは、満足度調査における「良い」以上の回答率を指し、合計欄に記載の値は平均値である。以下同じ。

※　展示替回数の第５期中期目標数値は 4.6 回（第４期中期目標期間実績）

※　所蔵作品展における小企画展・テーマ展は以下のとおり。

館名	タイトル（出品点数）	会期	年度内開催日数
東京国立近代美術館	修復の秘密（19 点）	令和 5 年 3 月 17 日～ 令和 5 年 5 月 14 日	40
	女性と抽象（25 点）	令和 5 年 9 月 20 日～ 令和 5 年 12 月 3 日	65
	新収蔵＆特別公開｜ジェルメーヌ・リシエ《蟻》（29 点）	令和 6 年 1 月 23 日～ 令和 6 年 4 月 7 日	61
国立工芸館	水のいろ、水のかたち展（107 点）	令和 5 年 7 月 7 日～ 令和 5 年 9 月 24 日	69
京都国立近代美術館	生誕 100 年 下村良之介／星野眞吾（32 点）	令和 5 年 4 月 21 日～ 令和 5 年 7 月 9 日	68
	芸術とは何かを考えさせる、ふたつの問題作―赤瀬川原平《模倣千円札》とマルセ・デュシャン《泉》（36 点）	令和 5 年 4 月 21 日～ 令和 5 年 7 月 9 日	68
	特集：北大路魯山人（23 点）	令和 5 年 4 月 21 日～ 令和 5 年 7 月 9 日	68
	歴程美術協会からパンリアル、そしてパンリアル美術協会へ（41 点）	令和 5 年 7 月 13 日～ 令和 5 年 10 月 1 日	71
	特集展示：関東大震災から 100 年 池田遙邨《大正 12 年 9 月関東大震災》の全貌（156 点）	令和 5 年 7 月 13 日～ 令和 5 年 10 月 1 日	71
	京都国立近代美術館開館 60 周年企画「拝啓、きょうきんび」（3 点）	令和 5 年 7 月 13 日～ 令和 5 年 10 月 1 日	71
	「京都画壇の青春」展によせて（48 点）	令和 5 年 10 月 5 日～ 令和 5 年 12 月 17 日	64
	友禅と型染（13 点）	令和 5 年 10 月 5 日～ 令和 5 年 12 月 17 日	64
	大正期洋画の個性派（13 点）	令和 5 年 10 月 5 日～ 令和 5 年 12 月 17 日	64
	エデュケーショナル・スタディズ 04「チョウの軌跡――長谷川三郎のイリュージョン」（16 点）	令和 5 年 10 月 5 日～ 令和 5 年 12 月 17 日	64
	生誕 150 年／没後 80 年　千種掃雲（64 点）	令和 5 年 12 月 21 日～ 令和 6 年 3 月 10 日	64
	追悼：野村仁 1945-2023（8 点）	令和 5 年 12 月 21 日～ 令和 6 年 3 月 10 日	64

	糸の構成（7 点）	令和 5 年 12 月 21 日～ 令和 6 年 3 月 10 日	64
	生誕 130 年　川端弥之助（11 点）	令和 5 年 12 月 21 日～ 令和 6 年 3 月 10 日	64
国立西洋美術館	橋本コレクション展―指輪よりどりみどり（209 点）	令和 5 年 3 月 18 日～ 令和 5 年 6 月 11 日	63
	美術館の悪（わる）ものたち （43 点）	令和 5 年 6 月 27 日～ 令和 5 年 9 月 3 日	61
	もうひとつの 19 世紀 ―ブーグロー、ミレイとアカデミーの画家たち（24 点）	令和 5 年 9 月 19 日～ 令和 6 年 2 月 12 日	123
	真理はよみがえるだろうか： ゴヤ〈戦争の惨禍〉全場面（82 点）	令和 6 年 2 月 27 日～ 令和 6 年 5 月 26 日	31
国立国際美術館	コレクション２　特集展示：メル・ボックナー（31 点）	令和 5 年 2 月 4 日～ 令和 5 年 5 月 21 日	45
	コレクション１　80/90/00/10（61 点）	令和 5 年 6 月 24 日～ 令和 5 年 9 月 10 日	67
	コレクション２　身体―身体（84 点）	令和 6 年 2 月 6 日～ 令和 6 年 5 月 6 日	48

別表２　企画展

館名	展覧会名	開催日数		入館者数		満足度		企画観点	共催者
		実績	目標	実績	目標	実績	目標		
東京国立近代美術館	東京国立近代美術館 70 周年記念展　重要文化財の秘密	40 (54)	40 (54)	117,057 (142,071)	53,000 (72,000)	91.8%	85.6%	イ、ロ、ニ	毎日新聞社、日本経済新聞社
	ガウディとサグラダ・ファミリア展	80	78	279,985	92,000	78.0%		イ、ロ、ハ、ニ	NHK、NHK プロモーション、東京新聞
	生誕 120 年　棟方志功展　メイキング・オブ・ムナカタ	52	51	96,565	46,000	89.0%		イ、ロ、ハ、二、ホ	NHK、NHK プロモーション、東京新聞
	中平卓馬　火―氾濫	49	49 (55)	28,419	16,000 (18,000)	－		ホ	朝日新聞社
	小計	221	218	522,026	207,000	85.9%			
国立工芸館	ポケモン×工芸展　美とわざの大発見	62 (72)	62 (72)	81,970 (95,158)	38,600 (44,800)	97.7%	85.6%	ハ	NHK エンタープライズ中部、読売新聞北陸支社
	皇居三の丸尚蔵館収蔵品展 皇室と石川　―麗しき美の煌めき―	43	43	46,234	18,000	91.2%		ニ	石川県立美術館、いしかわ百万石文化祭 2023 実行委員会、宮内庁、文化庁、独立行政法人国立文化財機構
	印刷／版画／グラフィックデザインの断層 1957-1979 ※1/1 能登半島地震の影響により 1/2-1/5 の 4 日間臨時休館	58	62	6,785	9,300	94.8%		ハ、ニ、ホ	京都国立近代美術館
	卒寿記念　人間国宝 鈴木藏の志野展	12	12 (69)	2,008	2,500 (14,600)	－		ニ、ホ	NHK エンタープライズ中部、北國新聞社
	小計	175	179	136,997	68,400	96.8%			

館名	展覧会名	開催日数		入館者数		満足度		企画観点	共催者
		実績	目標	実績	目標	実績	目標		
京都国立近代美術館	開館60周年記念　甲斐荘楠音の全貌―絵画、演劇、映画を越境する個性	8 (50)	8 (50)	5,511 (23,909)	4,000 (20,000)	89.0%	85.6%	ロ、ハ、ニ、ホ	日本経済新聞社、京都新聞 協賛：高砂香料工業
	開館60周年記念　Re: スタートライン 1963－1970/2023 現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係	57	57	12,781	15,000	85.8%		ホ	京都新聞
	開館60周年記念　走泥社再考 前衛陶芸が生まれた時代	59	59	16,314	18,000	90.0%		ニ、ホ	京都新聞、関西テレビ放送
	開館60周年記念　京都画壇の青春―栖鳳、松園につづく新世代たち	51	51	23,537	26,000	93.5%		ホ	NHK京都放送局、NHKエンタープライズ近畿、読売新聞社
	開館60周年記念　小林正和とその時代―ファイバーアート、その向こうへ	56	56	13,714	22,000	94.1%		ニ、ホ	－
	小計	231	231	71,857	85,000	91.8%			
国立西洋美術館	憧憬の地　ブルターニュ ―モネ、ゴーガン、黒田清輝らが見た異郷	63 (76)	63 (76)	137,096 (163,253)	130,000 (150,000)	88.0%	85.6%	ニ、ホ	TBS、読売新聞社
	スペインのイメージ ：版画を通じて写し伝わるすがた	55	55	55,207	42,500	89.0%		ロ、ニ、ホ	朝日新聞社
	パリ ポンピドゥーセンター キュビスム展―美の革命 ピカソ、ブラックからドローネー、シャガールへ	98	98	222,599	280,000	91.0%		イ	ポンピドゥーセンター、日本経済新聞社、テレビ東京、ＢＳテレビ東京、ＴＢＳ、ＢＳ-ＴＢＳ、ＴＢＳグロウディア
	ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？―国立西洋美術館65年目の自問｜現代美術家たちへの問いかけ	19	19 (56)	16,990	10,000 (30,000)	－		イ、ニ	－
	小計	235	235	431,892	462,500	89.3%			

館名	展覧会名	開催日数		入館者数		満足度		企画観点	共催者
		実績	目標	実績	目標	実績	目標		
国立国際美術館	ピカソとその時代　ベルリン国立ベルクグリューン美術館展	45 (93)	45 (93)	72,831 (139,461)	41,000 (85,000)	81.4%	85.6%	イ	ベルリン国立ベルクグリューン美術館、産経新聞社、MBS テレビ、共同通信社
	ホーム・スイート・ホーム	67	68	22,101	17,000	79.6%		イ、ロ、ハ	-
	古代メキシコ ーマヤ、アステカ、テオティワカン	48	48 (80)	68,256	60,000 (100,000)	-		イ	NHK 大阪放送局、NHK エンタープライズ近畿、朝日新聞社
	小計	160	161	163,188	118,000	81.4%			
国立新美術館	ルーヴル美術館展　愛を描く	64 (91)	64 (91)	322,310 (450,531)	241,000 (342,000)	90.0%	85.6%	イ、ロ	ルーヴル美術館、日本テレビ放送網、読売新聞社、BS 日テレ、ニッポン放送
	蔡國強　宇宙遊 ―〈原初火球〉から始まる	47	47	80,789	19,000	97.5%		イ、ロ、ハ、ニ	サンローラン
	テート美術館展　光　― ターナー、印象派から現代へ	72	72	292,525	146,000	85.4%		イ、ロ	テート美術館、日本経済新聞社、テレビ東京、ＢＳテレビ東京、ＴＢＳ、ＢＳ-ＴＢＳ
	イヴ・サンローラン展　時を超えるスタイル	72	72	251,140	175,000	89.8%		イ	産経新聞社、TBS、ソニー・ミュージックエンタテインメント
	大巻伸嗣　Interface of Being　真空のゆらぎ	48	48	136,126	59,000	97.8%		イ、ロ、ハ	独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁

	マティス　自由なフォルム	41	41 (91)	104,803	130,000 (290,000)	－		イ	ニース市マティス美術館、読売新聞社、日本テレビ放送網
	遠距離現在　Universal / Remote	23	23 (79)	8,021	8,000 (26,000)	－		イ、ロ、ニ	－
	小計	367	367	1,195,714	778,000	92.0%			
合計		1,389	1,391	2,521,674	1,718,900	89.5%			

※　別表２に記載の「企画観点」は以下のとおり。（別表３及び４についても同様。）

（イ）国際的視野に立ち、アジア諸地域を含め海外の主要美術館と連携し、確固たる評価を得ている世界の美術や海外の美術の新たな動向を紹介するとともに、我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介し、国際的な美術動向に位置付ける展覧会等に積極的に取り組む。

（ロ）展覧会テーマの設定や他の芸術文化との連携による展示方法等について方向性を提示することに取り組む。

（ハ）メディアアート、アニメ、マンガ、デザイン、建築など我が国が世界から注目される新しい領域の芸術表現を積極的に取り上げ、最先端の現代美術への関心を促す。

（ニ）国内の美術館と連携し、我が国に所在するコレクションの積極的活用を図る。

（ホ）過去の埋もれていた作家・作品・動向の発見や再評価に取り組み、国際的な美術動向に位置付ける展覧会に積極的に取り組む。

※　会期が年度をまたぐものは、通期の数値を括弧書きで記載している。以下同じ。

別表３　映画上映会（国立映画アーカイブ）

上映会名		上映日数		上映回数	入館者数		満足度		企画観点	共催者
		実績	目標	実績	実績	目標	実績	目標		
1	没後 10 年 映画監督 大島渚	42	42	90	11,428	8,500	78.6%	91.5%	ロ	－
2	EU フィルムデーズ 2023	25	25	58	6,847	7,500	97.3%		イ	駐日欧州連合代表部、在日 EU 大使館・文化機関
3	逝ける映画人を偲んで 2021-2022	64	66	145	15,214	17,000	93.0%		ホ	－
4	アニメーション作家 山村浩二	9	9	18	1,425	1,500	100.0%		ハ	－
5	第 45 回ぴあフィルムフェスティバル 2023	13	13	48	4,494	4,500	94.3%		ロ	一般社団法人 PFF、公益財団法人川喜多記念映画文化財団、公益財団法人ユニジャパン
6	サイレントシネマ・デイズ 2023	6	6	12	1,112	1,000	85.7%		ロ	－

7	TIFF/NFAJ クラシックス 小津安二郎監督週間	6	6	14	1,818	1,500	100.0%		イ	東京国際映画祭
8	月丘夢路 井上梅次 100 年祭	24	25	57	5,072	6,500	94.9%		ロ	－
9	返還映画コレクション（1）――第一次・劇映画篇	24	24	55	6,471	6,000	81.8%		ホ	－
10	蘇ったフィルムたち チネマ・リトロバート映画祭	27	27	53	6,362	9,000	91.9%		イ	チネテカ・ディ・ボローニャ財団、イタリア文化会館
11	NFAJ コレクション 2024 冬	9	9	18	1,367	1,500	100.0%		ロ	－
12	日本の女性映画人（2）――1970-1980 年代	42	42	110	9,656	9,500	98.0%		ロ	－
合計		291	294	678	71,266	74,000	92.9%			

別表４　展覧会（国立映画アーカイブ）

展覧会名	開催日数		入館者数		満足度		企画観点	共催者
	実績	目標	実績	目標	実績	目標		
1 没後 10 年 映画監督 大島渚	99	99	7,386	6,500	95.6%	93.8%	ロ	－
2 月丘夢路 井上梅次 100 年祭	74	74	3,417	4,000	100.0%		ロ	－
3 和田誠 映画の仕事	81	81	11,469	6,000	96.0%			－
合計	254	254	22,272	16,500	96.6%			

別表５　地方巡回展・巡回上映等

地方巡回展（企画館：東京国立近代美術館）	開催館	開催日数	入館者数	満足度調査	
				実績	目標
令和５年度国立美術館巡回展　20 世紀美術の冒険者たち　―名作でたどる日本と西洋のアート	熊本県立美術館	51	7,656	90.7%	80.0%
高松市美術館開館 35 周年記念　令和５年度国立美術館巡回展　20 世紀美術の冒険者たち　―名作でたどる日本と西洋のアート	高松市美術館	44	6,662	89.1%	80.0%
合計		95	14,318	89.9%	
優秀映画鑑賞推進事業（企画館：国立映画アーカイブ）	会場数	開催日数	入館者数	満足度調査	
				実績	目標
令和５年度優秀映画鑑賞推進事業	101	187	26,652	91.3%	80.0%

巡回上映会・展覧会名 （企画館：国立映画アーカイブ）	会場数	開催日数	入館者数	満足度調査	備考（会場）
こども映画館　スクリーンで見る日本アニメーション！	6	14	700	－	①上田映劇（長野県上田市） ②三根公民館（八丈島） ③アピアさかせがわ（兵庫県宝塚市） ④シネマ５（大分市） ⑤窪川四万十会館（高知県四万十町） ⑥邑楽町中央公民館（群馬県邑楽町）
MoMAK Films 2023	1	8	292	93.3%	京都国立近代美術館
山形国際ドキュメンタリー映画祭 2023 特集プログラム「野田真吉特集：モノと生の祝祭」	1	5	2,251	－	山形市民会館
第 37 回チネマ・リトロバート映画祭「 Teinosuke Kinugasa: From Shadow to Light （衣笠貞之助：影から光）」	2	8	2,421	－	ジョリー劇場、シネマ・リュミエール スコセッシ・ホール（いずれもイタリア、ボローニャ）
Comic Legacies on the Japanese Silver Screen（日本映画における喜劇の遺産）	1	3	108	－	イェール大学人文科学クアドラングル内アリス・シネマ（米国コネチカット州）
蘇ったフィルムたちチネマ・リトロバート映画祭①	1	19	1,307	－	福岡市総合図書館 映像ホール・シネラ
蘇ったフィルムたちチネマ・リトロバート映画祭②	1	12	1,118	－	京都文化博物館フィルムシアター
合計	13	69	8,197	93.3%	

別表６　公募展示室における展覧会毎の入場者数

	タイトル （主催団体名）	会期	年度内		会期全体	
			開催日数 （日）	入館者数 （人）	開催日数 （日）	入館者数 （人）
1	第 76 回　日本アンデパンダン展 （主催：日本美術会）	令和 5 年 3 月 23 日～ 令和 5 年 4 月 3 日	3	3,335	11	10,884
2	第 99 回　白日会展 （主催：白日会）	令和 5 年 3 月 23 日～ 令和 5 年 4 月 3 日	3	4,089	11	15,843
3	公募第 63 回　日本南画院展 （主催：公益社団法人 日本南画院）	令和 5 年 3 月 23 日～ 令和 5 年 4 月 3 日	3	1,699	11	7,052
4	第 82 回　創元展 （主催：一般社団法人 創元会）	令和 5 年 4 月 5 日～ 令和 5 年 4 月 17 日	12	12,399	12	12,399
5	第 76 回　示現会展 （主催：一般社団法人 示現会）	令和 5 年 4 月 5 日～ 令和 5 年 4 月 17 日	12	12,609	12	12,609

6	第 82 回　水彩連盟展 （主催：水彩連盟）	令和 5 年 4 月 5 日～ 令和 5 年 4 月 17 日	12	8,462	12	8,462
7	第 109 回　光風会展 （主催：一般社団法人 光風会）	令和 5 年 4 月 19 日～ 令和 5 年 5 月 1 日	12	15,353	12	15,353
8	第 100 回記念　春陽展 （主催：一般社団法人 春陽会）	令和 5 年 4 月 19 日～ 令和 5 年 5 月 1 日	12	21,238	12	21,238
9	第 38 回　全国公募書道展 （主催：現代日本書家協会）	令和 5 年 4 月 19 日～ 令和 5 年 5 月 1 日	12	4,440	12	4,440
10	第 97 回　国展 （主催：国画会）	令和 5 年 5 月 3 日～ 令和 5 年 5 月 15 日	12	66,236	12	66,236
11	第 45 回　日本新工芸展 （主催：公益社団法人 日本新工芸家連盟）	令和 5 年 5 月 17 日～ 令和 5 年 5 月 28 日	11	7,681	11	7,681
12	第 118 回　太平洋展 （主催：一般社団法人 太平洋美術会）	令和 5 年 5 月 17 日～ 令和 5 年 5 月 29 日	12	12,690	12	12,690
13	75 回記念　三軌展 （主催：三軌会）	令和 5 年 5 月 17 日～ 令和 5 年 5 月 29 日	12	11,171	12	11,171
14	第 13 回　世界平和芸術家協会展 （主催：世界平和芸術家協会）	令和 5 年 5 月 19 日～ 令和 5 年 5 月 28 日	9	5,515	9	5,515
15	第 79 回　現展 （主催：現代美術家協会）	令和 5 年 5 月 31 日～ 令和 5 年 6 月 12 日	12	11,086	12	11,086
16	第 92 回　第一美術展 （主催：第一美術協会）	令和 5 年 5 月 31 日～ 令和 5 年 6 月 12 日	12	12,601	12	12,601
17	第 37 回　日洋展 （主催：一般社団法人 日洋会）	令和 5 年 5 月 31 日～ 令和 5 年 6 月 12 日	12	10,811	12	10,811
18	第 22 回　国際公募国際墨画会展 （主催：一般社団法人 国際墨画会）	令和 5 年 6 月 14 日～ 令和 5 年 6 月 26 日	12	11,959	12	11,959
19	第 48 回　日本自由画壇展 （主催：日本自由画壇）	令和 5 年 6 月 14 日～ 令和 5 年 6 月 26 日	12	5,850	12	5,850
20	第 27 回　日仏現代国際美術展 （主催：サロン・ブラン美術協会）	令和 5 年 6 月 14 日～ 令和 5 年 6 月 26 日	12	5,680	12	5,680
21	第 56 回　たぶろう展 （主催：たぶろう美術協会）	令和 5 年 6 月 14 日～ 令和 5 年 6 月 26 日	12	5,948	12	5,948
22	第 51 回　「日本の書展」東京展 （主催：公益財団法人 全国書美術振興会）	令和 5 年 6 月 15 日～ 令和 5 年 6 月 25 日	10	9,868	10	9,868
23	第 62 回 書象展 （主催：書象会）	令和 5 年 6 月 15 日～ 令和 5 年 6 月 25 日	10	5,370	10	5,370
24	公募第 38 回　日本水墨院展 （主催：日本水墨院）	令和 5 年 6 月 28 日～ 令和 5 年 7 月 9 日	11	10,039	11	10,039
25	第 42 回　日本教育書道藝術院同人書作展 （主催：日本教育書道藝術院）	令和 5 年 6 月 28 日～ 令和 5 年 7 月 9 日	11	4,424	11	4,424
26	2023・26th　国際公募アート未来展（主催： アート未来）	令和 5 年 6 月 28 日～ 令和 5 年 7 月 10 日	12	4,655	12	4,655
27	第 62 回　蒼騎展 （主催：蒼騎会）	令和 5 年 6 月 28 日～ 令和 5 年 7 月 10 日	12	8,893	12	8,893
28	第 50 回記念　日象展 （主催：日本表象美術協会）	令和 5 年 6 月 28 日～ 令和 5 年 7 月 10 日	12	4,972	12	4,972
29	第 57 回　貞香書展 （主催：貞香会）	令和 5 年 6 月 28 日～ 令和 5 年 7 月 10 日	12	4,047	12	4,047

30	千紫会　公募　万紅展 （主催：千紫会）	令和5年6月29日～ 令和5年7月9日	10	4,496	10	4,496
31	第1回　蛙園会書展 （主催：蛙園会）	令和5年6月29日～ 令和5年7月9日	10	6,012	10	6,012
32	第74回　毎日書道展 （主催：一般財団法人 毎日書道会・毎日新聞社）	令和5年7月12日～ 令和5年8月6日	23	28,327	23	28,327
33	第24回　高校生国際美術展 （主催：特定非営利活動法人 世界芸術文化振興協会）	令和5年8月9日～ 令和5年8月20日	11	12,307	11	12,307
34	第70回記念　新美術展 （主催：一般社団法人 新美術協会）	令和5年8月9日～ 令和5年8月21日	12	4,664	12	4,664
35	全国公募 第6回　日美展 （水墨画部門・絵画部門） （主催：公益財団法人 国際文化カレッジ）	令和5年8月10日～ 令和5年8月19日	9	13,835	9	13,835
36	現代書作家協会展 （主催：現代書作家協会）	令和5年8月10日～ 令和5年8月20日	10	6,893	10	6,893
37	第73回　学展 （主催：日本学生油絵会）	令和5年8月10日～ 令和5年8月20日	10	3,241	10	3,241
38	第24回　日本・フランス現代美術世界展 （主催：JIAS日本国際美術家協会）	令和5年8月10日～ 令和5年8月20日	10	11,087	10	11,087
39	第39回　読売書法展 東京展 （主催：読売書法会・読売新聞社）	令和5年8月25日～ 令和5年9月3日	9	16,470	9	16,470
40	第107回　二科展 （主催：公益社団法人 二科会）	令和5年9月6日～ 令和5年9月18日	12	64,557	12	64,557
41	第86回　新制作展 （主催：新制作協会）	令和5年9月20日～ 令和5年10月2日	12	38,068	12	38,068
42	第78回　行動展 （主催：行動美術協会）	令和5年9月20日～ 令和5年10月2日	12	18,311	12	18,311
43	第87回　自由美術展 （主催：自由美術協会）	令和5年10月4日～ 令和5年10月16日	12	10,518	12	10,518
44	第69回　一陽展 （主催：一陽会）	令和5年10月4日～ 令和5年10月16日	12	13,524	12	13,524
45	第57回　一期展 （主催：一期会）	令和5年10月4日～ 令和5年10月16日	12	6,883	12	6,883
46	第90回記念　独立展 （主催：独立美術協会）	令和5年10月18日 ～ 令和5年10月30日	12	15,783	12	15,783
47	第76回　二紀展 （主催：一般社団法人 二紀会）	令和5年10月18日 ～ 令和5年10月30日	12	23,229	12	23,229
48	第28回　瓦・造形展 （主催：瓦・造形会）	令和5年10月19日 ～ 令和5年10月30日	11	736	11	736
49	第10回　日展 （主催：公益社団法人 日展）	令和5年11月3日～ 令和5年11月26日	21	85,155	21	85,155

50	JAGDA　国際学生ポスターアワード 2023 (主催：公益社団法人 日本グラフィックデザイン協会)	令和 5 年 11 月 29 日 ～ 令和 5 年 12 月 11 日	12	9,370	12	9,370
51	第 95 回記念　新構造展 (主催：一般社団法人 新構造社)	令和 5 年 11 月 29 日 ～ 令和 5 年 12 月 11 日	12	6,554	12	6,554
52	第 4 回　カルチャー芸術展 (主催：株式会社カルチャー)	令和 5 年 11 月 29 日 ～ 令和 5 年 12 月 11 日	12	13,901	12	13,901
53	第 48 回　秋耕展 (主催：一般社団法人　秋耕会)	令和 5 年 11 月 29 日 ～ 令和 5 年 12 月 11 日	12	4,850	12	4,850
54	21 世紀アートボーダレス展 Aurora (主催：21 世紀アートボーダレス展実行委員会)	令和 5 年 11 月 30 日 ～ 令和 5 年 12 月 9 日	9	17,386	9	17,386
55	第 12 回　躍動する現代作家展 (主催：一般社団法人　空間芸術 TORAM)	令和 5 年 11 月 30 日 ～ 令和 5 年 12 月 10 日	10	2,001	10	2,001
56	ナナ展 （主催：一般社団法人 七草會）	令和 5 年 12 月 1 日～ 令和 5 年 12 月 11 日	10	3,931	10	3,931
57	2023 年度　第 48 回全国伝統的工芸品公募展 (主催：一般財団法人 伝統的工芸品産業振興協会)	令和 5 年 12 月 1 日～ 令和 5 年 12 月 11 日	10	8,076	10	8,076
58	第 36 回　国際架橋書展 (主催：特定非営利活動法人 国際架橋書会)	令和 5 年 12 月 13 日 ～ 令和 5 年 12 月 25 日	12	3,364	12	3,364
59	第 30 回記念　雪舟国際美術協会展 (主催：一般社団法人 雪舟国際美術協会)	令和 5 年 12 月 13 日 ～ 令和 5 年 12 月 24 日	11	11,476	11	11,476
60	第 48 回　土日会展 (主催：土日会)	令和 5 年 12 月 13 日 ～ 令和 5 年 12 月 25 日	12	4,667	12	4,667
61	Idemitsu Art Award 展 2023 (主催：Idemitsu Art Award 事務局・出光興産株式会社)	令和 5 年 12 月 13 日 ～ 令和 5 年 12 月 25 日	12	5,050	12	5,050
62	第 41 回　白峰社書展 (主催：白峰社)	令和 5 年 12 月 13 日 ～ 令和 5 年 12 月 25 日	12	4,281	12	4,281
63	第 52 回　公募　全書芸展 (主催：株式会社 全日本書芸文化院)	令和 5 年 12 月 14 日 ～ 令和 5 年 12 月 25 日	11	7,840	11	7,840
64	第 72 回　独立書展 (主催：公益財団法人 独立書人団)	令和 6 年 1 月 11 日～ 令和 6 年 1 月 21 日	10	21,457	10	21,457
65	第 46 回　國際書画展 (主催：國際書画連盟)	令和 6 年 1 月 24 日～ 令和 6 年 2 月 5 日	12	7,203	12	7,203
66	第 36 回　平泉展　～楽しい手作り～ (主催：特定非営利活動法人 平泉会)	令和 6 年 1 月 24 日～ 令和 6 年 2 月 5 日	12	10,764	12	10,764

67	第 40 回記念　産経国際書展　新春展 （主催：産経国際書会）	令和 6 年 1 月 24 日～ 令和 6 年 2 月 5 日	12	3,508	12	3,508
68	第 12 回　シャドーボックス展 （主催：シャドーボックス展実行委員会）	令和 6 年 1 月 25 日～ 令和 6 年 2 月 3 日	9	9,670	9	9,670
69	国際公募展　美は国境を越えて （主催：国際墨友会）	令和 6 年 1 月 25 日～ 令和 6 年 2 月 5 日	11	6,095	11	6,095
70	第 5 回　和紙ちぎり絵創作展 （主催：株式会社ハクビ 和紙ちぎり絵学院）	令和 6 年 1 月 25 日～ 令和 6 年 2 月 5 日	11	1,640	11	1,640
71	第 22 回　ＮＡＵ21 世紀美術連立展 （主催：New Artist Unit）	令和 6 年 2 月 7 日～ 令和 6 年 2 月 18 日	11	9,994	11	9,994
72	東京書作展 選抜作家展　2024 （主催：東京書作展）	令和 6 年 2 月 7 日～ 令和 6 年 2 月 18 日	11	3,842	11	3,842
73	第 68 回　新槐樹社展 （主催：新槐樹社）	令和 6 年 2 月 7 日～ 令和 6 年 2 月 19 日	12	4,827	12	4,827
74	第 56 回　等迦展 （主催：美術団体 等迦会）	令和 6 年 2 月 7 日～ 令和 6 年 2 月 19 日	12	6,787	12	6,787
75	第 33 回　全日本アートサロン絵画大賞展 （主催：全日本アートサロン絵画大賞展実行委員会）	令和 6 年 2 月 8 日～ 令和 6 年 2 月 19 日	11	3,402	11	3,402
76	第 64 回　日本書作院展 （主催：日本書作院）	令和 6 年 2 月 8 日～ 令和 6 年 2 月 19 日	11	8,788	11	8,788
77	第 49 回　あきつ会書道展 （主催：あきつ会）	令和 6 年 2 月 9 日～ 令和 6 年 2 月 18 日	9	3,517	9	3,517
78	第 64 回　現日春季書展 （主催：現日会）	令和 6 年 2 月 21 日～ 令和 6 年 3 月 4 日	12	3,647	12	3,647
79	2023 年度　第 47 回　東京五美術大学　連合卒業・修了制作展　（主催：東京五美術大学（女子美術大学・東京造形大学・日本大学芸術学部・武蔵野美術大学・多摩美術大学））	令和 6 年 2 月 23 日～ 令和 6 年 3 月 3 日	9	122,709	9	122,709
80	DOUBLE ANNUAL 2024 （主催：京都芸術大学）	令和 6 年 2 月 24 日～ 令和 6 年 3 月 3 日	8	4,543	8	4,543
81	2024　汎美展 （主催：汎美術協会）	令和 6 年 3 月 6 日～ 令和 6 年 3 月 18 日	12	6,860	12	6,860
82	第 60 回記念　創玄展 （主催：公益社団法人 創玄書道会）	令和 6 年 3 月 7 日～ 令和 6 年 3 月 17 日	10	23,014	10	23,014
83	第 77 回　日本アンデパンダン展 （主催：日本美術会）	令和 6 年 3 月 20 日～ 令和 6 年 4 月 1 日	12	9,930	12	10,920
84	白日会創立百周年記念展 （主催：白日会）	令和 6 年 3 月 21 日～ 令和 6 年 4 月 1 日	11	14,857	11	16,162
85	公募第 64 回　日本南画院展 （主催：公益社団法人 日本南画院）	令和 6 年 3 月 20 日～ 令和 6 年 4 月 1 日	12	5,283	12	5,575

※「2022 年度　第 46 回　東京五美術大学　連合卒業・修了制作展」の入館者数は複数の展示室それぞれの入館者数を合計したものである。

別表７　展覧会毎の批評・レビューの状況（掲載数及び掲載媒体数）

	展覧会名	新聞	その他（※）	合計
1	ルーヴル美術館展　愛を描く	57	17	74
2	蔡國強　宇宙遊 ―〈原初火球〉から始まる	11	54	65
3	テート美術館展　光　― ターナー、印象派から現代へ	29	10	39
4	イヴ・サンローラン展　時を超えるスタイル	8	6	14
5	大巻伸嗣　Interface of Being　真空のゆらぎ	13	29	42
6	NACT View 02 築地のはら　ねずみっけ	0	0	0
7	NACT View 03 渡辺 篤（アイムヒア プロジェクト） 私はフリーハグが嫌い	9	11	20
合計		127	127	254

※「その他」は雑誌、ウェブ掲載数である。

別表８　企画展示室における現代作家を採り上げた展覧会の実施回数及び採り上げた作家の人数

展覧会（回）	8回	作家（人）	44人	
	展覧会名	作家名		会期
1	蔡國強　宇宙遊 ―〈原初火球〉から始まる	蔡國強		令和5年6月29日～ 令和5年8月21日
2	テート美術館展 光－ターナー、印象派から現代へ	アニッシュ・カプーア、リリアン・レイン、エトムント・コライン、ステファン・テマーソン、ケペシュ・ジェルジ、ハナヤ勘兵衛、ルイジ・ヴェロネージ、草間彌生、バーネット・ニューマン、マーク・ロスコ、ゲルハルト・リヒター、スティーヴン・ウィラッツ、ペー・ホワイト、ブリジット・ライリー、ダン・フレイヴィン、ブルース・ナウマン、ディヴィッド・バチェラー、ピーター・セッジリー、オラファー・エリアソン、キャサリン・ヤース、ジュリアン・オピー、ジェームズ・タレル、リズ・ローズ、ヴィヤ・ツェルミンシュ		令和5年7月12日～ 令和5年10月2日
3	イヴ・サンローラン展　時を超えるスタイル	イヴ・サンローラン		令和5年9月20日～ 令和5年12月11日
4	大巻伸嗣　Interface of Being 真空のゆらぎ	大巻伸嗣		令和5年11月1日～ 令和5年12月25日
5	遠距離現在　Universal / Remote	井田大介、徐冰（シュ・ビン）、トレヴァー・パグレン、ヒト・シュタイエル、ジョルジ・ガゴ・ガゴシツェ、ミロス・トラキロヴィチ、 地主麻衣子、ティナ・エングホフ、チャ・ジェミン、エヴァン・ロス、木浦奈津子		令和6年3月6日～ 令和6年6月3日
6	NACT View 02 築地のはら　ねずみっけ	築地のはら		令和5年1月12日～ 令和5年5月29日 ※パブリックスペースで展示
7	NACT View 03 渡辺 篤（アイムヒア プロジェクト）私はフリーハグが嫌い	渡辺篤		令和5年9月13日～ 令和5年12月25日 ※パブリックスペースで展示
8	NACT View 04　和田礼治郎：FORBIDDEN FRUIT	和田礼治郎		令和6年1月24日～

			令和6年6月10日 ※パブリックスペースで展示

別表９　調査研究一覧

ア　国立アートリサーチセンター

	調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
1	絵画作品の画面洗浄に関する新しいシステムの研究	ワークショップと講演会を実施	クリス・スタヴロウディス（アメリカ）、東京文化財研究所
2	赤外線調査分析に関する研究	撮影機器について各館担当者に説明し今後の調査計画の参考とする	東京文化財研究所
3	国立美術館所蔵作品の科学調査	国立工芸館の所蔵するポスターの素材分析を行い、今後の修復計画の参考とする	東京文化財研究所、東京藝術大学
4	美術作品の保存に関する研究	情報交換会を行い、各館の今後の作品保存業務の参考とする	国立美術館各館
5	国立美術館の所蔵品を活用した展覧会	「国立美術館 コレクション・プラス」のプレ事業を長崎県美術館で開催	国立美術館各館
6	ナノセルロースを用いた新しい修復技術の研究	ワークショップを実施	レミー・ドレフュス=ドゥセーニュ（フランス）、東京文化財研究所
7	繰り返し使用できる作品輸送箱の開発研究	次年度の「国立美術館 コレクション・プラス」での活用	国立西洋美術館、ヤマト運輸株式会社
8	超高齢社会に向けた、福祉・医療分野との共同研究	共創フォーラムの開催	東京藝術大学、他
9	高齢者の美術館利用や作品鑑賞の効果計測	今後のリンクワーカー育成計画の参考とする	東京藝術大学、他
10	多様性、公平性、アクセシビリティ、包摂性に関する調査	DEAI リサーチラボによる国立アートリサーチセンターウェブサイトへの記事掲載	NPO エイブルアートジャパン、他
11	美術館のアクセシビリティについての調査	『合理的配慮ハンドブック』刊行	NPO エイブルアートジャパン、他
12	特別支援教育における美術鑑賞	鑑賞教育指導者研修のグループワーク充実	法人各館
13	美術館と学校が連携して行う鑑賞教育	『鑑賞教育指導者研修報告書』刊行	法人各館
14	美術作品画像を活用したプログラムの開発	手話によるコレクション解説動画の制作	東京国立近代美術館
15	国内美術館収蔵品の調査と情報収集	ウェブサイト「アートプラットフォームジャパン」（以下、APJ）の「全国美術館収蔵品サーチ（SHŪZŌ）を通じて公開	全国の美術館
16	日本のアーティストに関する調査と情報収集	APJ の「日本アーティスト事典」を通じて公開	外部研究協力者等
17	日本の現代美術展に関する調査と情報収集	APJ の「日本の現代アート展覧会 1945 年以降」を通じて公開	中島理壽氏、光山清子氏、他研究協力者
18	日本の画廊に関する調査と情報収集	APJ の「日本の画廊・アートスペース」を通じて公開	－
19	日本のアート分野レファレンス・ツールの調査と情報収集	APJ を通じて公開	吉村玲子氏、他研究協力者
20	国立美術館所蔵作品に関する画像・歴史的情報等の公開データの拡充	独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システムを通じて公開	法人各館

21	独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システムと、国立国会図書館が運営するジャパンサーチ、文化庁文化遺産オンラインとの連携の継続維持	ジャパンサーチ、文化遺産オンラインを通じて公開	国立国会図書館、文化庁
22	アート分野のアーカイブズ資料の整理・公開方法についての基礎調査	-	法人各館
23	「写真・映像の「影響」から見た日本の前衛芸術――昭和戦前期を中心に」（科研費　基盤C　研究代表者：谷口　英理、令和元年度～令和5年度）	作品・資料の保存及びデジタル化、データベース構築に関する協力	甲南学園長谷川三郎記念ギャラリー
イ　東京国立近代美術館			
（本館）			
	調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
1	日本近代美術史の形成と重要文化財	「東京国立近代美術館70周年記念展　重要文化財の秘密」に成果の一部を反映	－
2	ガウディの建築思想とサグラダ・ファミリア	「ガウディとサグラダ・ファミリア」展に成果の一部を反映	サグラダファミリア建設委員会
3	棟方志功とメディア	「生誕120年　棟方志功展　メイキング・オブ・ムナカタ」に成果の一部を反映	青森県立美術館、富山県美術館
4	中平卓馬と雑誌メディアに関する調査研究	「中平卓馬　火―氾濫」展に成果の一部を反映	－
5	東京、大阪、パリにおける近代美術の比較研究	作品及び文献調査	大阪中之島美術館、パリ市立近代美術館
6	はにわ・土偶と近代美術に関する研究	作品及び文献調査	－
7	ヒルマ・アフ・クリントと20世紀の抽象美術の研究	作品及び文献調査	ヒルマ・アフ・クリント財団
8	速水御舟資料の調査研究	作品及び文献調査	川越市立美術館、小林古径記念美術館他
9	「MOMATコレクション」	所蔵作品展「MOMATコレクション」を開催。	－
10	「MOMATコレクション　特集：美術館の春まつり」	「MOMATコレクション　特集：美術館の春まつり」を開催。	－
11	コレクションの画像を用いた来館者用体験機器開発	来館者がコレクションの中から好みの作品を選択すると、関連した「おすすめ作品」が表示される機器を設置。	株式会社DNPアートコミュニケーションズ
12	デジタルカメラによる作品撮影及び画像アーカイブ構築のための撮影機材の比較	作品の調査撮影とデータ比較を実施。	西川茂（写真家）
13	近代日本絵画における多層構造の活用に関する研究	関連資料の収集	小林俊介（山形大学）
14	美術館におけるデジタル・アーカイブの構築	デジタル・コンテンツの整備を行い、将来的なデジタル・アーカイブの構築の準備を進めた。	－
15	児童生徒を対象とする所蔵作品の鑑賞教育の推進	学校団体向けプログラムの実施	－
16	オンライン会議システム等を利用した鑑賞プログラムの推進	一般向けオンライン対話鑑賞プログラムの実施、ジュニアセルフガイド等の発行	－
17	企画展示やコレクションを活用してのワークショップ、鑑賞ガイド等の推進	ワークショップ、鑑賞ガイド等の実施	－

18	ビジネスパーソンなど特定の層に向けての鑑賞プログラムの推進	企業向け対話鑑賞プログラムの実施	―
19	外国人に向けての英語鑑賞プログラムの推進（オンラインを含む）	英語によるオンラインプログラムの実施	―
20	「1990 年代から 2000 年代のロンドンにおける具象絵画に関する研究」（科学研究費助成事業 若手研究 19K13019 研究代表者：桝田倫広）	作品及び文献調査、企画展、論文にて研究成果の一部を発表	-
21	戦後の抽象表現を行った女性作家	コレクションによる小企画「女性と抽象」を共同企画、構成、開催、リーフレットを発行、トークイベントを開催	-
22	荒川修作の 60 年代におけるダイアグラム作品	作品及び文献調査、研究紀要『東京国立近代美術館 28 号』にて研究成果の一部を発表	-
23	ジャン（ハンス）・アルプの石膏模型に関する調査研究	①ハンス・アルプ財団（ドイツ）と共同研究の提携を結ぶ ②石膏模型 11 点を財団より受贈予定	ハンス・アルプ財団（ドイツ）
24	「19 世紀末-20 世紀前半の日本における装飾デッサンと絵画の諸相」（公益財団法人ポーラ美術振興財団　令和 5 年度調査研究助成金研究代表者：横山由季子）	作品及び文献調査、次年度以降の企画展にて研究成果の一部を発表	-
（国立工芸館）			
	調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
1	日本の近・現代陶芸史と伝統工芸	「未来へつなぐ陶芸　伝統工芸のチカラ展」巡回展の展示協力	パナソニック汐留美術館、山口県立萩美術館・浦上記念館、佐賀県立九州陶磁文化館、MOA 美術館、愛知県陶磁美術館、茨城県陶芸美術館、兵庫陶芸美術館、日本工芸会
2	国立工芸館と周辺美術館・博物館との連携について	観覧料金の相互割引	石川県立美術館、金沢 21 世紀美術館、金沢市立中村記念美術館ほか
3	現代工芸における心象表現について	令和 6 年度開催予定の展覧会にて研究成果の一部を発表予定	―
4	石川の若手工芸家に関する調査研究	令和 6 年度開催予定の展覧会にて研究成果の一部を発表予定	―
5	美術館の宣伝・広報活動	ＳＮＳ発信およびそれに伴うフォロワー数の増加	石川県立美術館、石川県立歴史博物館、金沢 21 世紀美術館、金沢市立中村記念美術館ほか
6	工芸・デザイン作品における「水」の表現について	「水のいろ、水のかたち」展の企画構成、開催、リーフレットの発行	―
7	児童を対象とする工芸作品の鑑賞教育の推進	「水のいろ、水のかたち」展の子ども向けセルフガイドの発行	―

8	工芸制作における言語活動の推進について	研究授業の共同開催	石川県図工・美術教育研究会
9	ポップカルチャーを題材とする伝統的工芸制作について	「ポケモン×工芸展」教育普及活動	株式会社ポケモン
10	工芸作品の鑑賞における高精細デジタルデータの作成について	２Ｄ鑑賞システムへの追加データの実装	シャープ株式会社、株式会社 DNP アートコミュニケーションズ
11	明治および大正期の工芸研究	「皇居三の丸尚蔵館収蔵品展　皇室と石川 ―麗しき美の煌めき―」企画構成、図録、リーフレット	三の丸尚蔵館、石川県立美術館
12	所蔵作品および作家資料の活用について	松田権六の仕事場展示での修復完了作品の展示	富山大学
13	地場工芸における倫理的側面について	所蔵作品展等に反映	―
14	1960 年以降における海外のデザイン動向の受容について	所蔵作品展等に反映	―
15	工芸作家、研究者等への聞き取り調査	「印刷／版画／グラフィックデザインの断層 1957-1979」の企画、小冊子の発行	―
16	版画とグラフィックデザインの交錯と境界：1950-70 年代の日本を中心に	「印刷／版画／グラフィックデザインの断層 1957-1979」の企画、小冊子の発行	―
17	1920-50 年代のデザイン／工芸の実践に関する基礎的研究（科学研究費助成事業 基盤研究 C 研究代表者：中尾優衣）	調査結果の一部を令和 6 年度発行の研究紀要にて公開予定	―
18	東京国際版画ビエンナーレ展とその影響について	「印刷／版画／グラフィックデザインの断層 1957-1979」の企画、小冊子の発行	京都国立近代美術館
19	所蔵作品のデータベース構築とその活用について	所蔵作品の適切な管理と活用	―
20	鈴木藏と桃山の陶芸	「卒寿記念　人間国宝 鈴木藏の志野展」の企画、図録の発行	江別市セラミックアートセンター、富山県水墨美術館、岐阜県現代陶芸美術館
21	芹沢銈介と戦後のデザイン、日本美術について	MOMAT コレクション展特集展示「芹沢銈介と、新しい日々」の企画構成、リーフレットの発行	―
22	戦後の日本における生活様式の変化と工芸制作について	MOMAT コレクション展特集展示「芹沢銈介と、新しい日々」の企画構成、リーフレットの発行	―
23	手摺多色木版の普及と日本のデザインの相関関係について	MOMAT コレクション展特集展示「芹沢銈介と、新しい日々」の企画構成、リーフレットの発行	―
24	所蔵作品に関する画像・歴史的情報等の公開データの拡充（独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システムでの公開を目標に）	独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システムを通じて公開	法人各館
25	独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システムと、国立国会図書館が運営するジャパンサーチ、文化庁文化遺産オンラインとの連携の継続維持	ジャパンサーチ、文化遺産オンラインを通じて公開	国立国会図書館、文化庁

26	工芸館におけるデジタル・アーカイブの構築	デジタル・コンテンツの整備を行い、将来的なデジタル・アーカイブの構築の準備を進めた	－
27	近代日本における中国陶磁研究への新たな視座―小森忍の活動を通して（科研費　基盤 C 研究代表者：谷口　英理、令和元年度～令和 5 年度）	令和 7 年度開催予定の展覧会にて研究成果の一部を発表予定	－

ウ　京都国立近代美術館

	調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
1	所蔵作品（工芸）に関する研究	コレクション展に反映	－
2	フィンランドにおけるリュイユ織に関する研究	展覧会「リュイユ―フィンランドのテキスタイル：トゥオマス・ソパネン・コレクション」を企画構成、開催、図録を発行	－
3	甲斐荘楠音の絵画・映画・演劇：越境的個性に関する研究	展覧会「開館 60 周年記念　甲斐荘楠音の全貌―絵画、演劇、映画を越境する個性」を企画構成、開催、図録を発行	東京ステーションギャラリー、国際日本文化研究センター、神戸大学、東映太秦映画村
4	京都国立近代美術館と「現代美術の動向展」	展覧会「開館 60 周年記念　Re:スタートライン 1963－1970/2023 現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係」を企画構成、開催、図録を発行	－
5	走泥社と前衛陶芸の展開	展覧会「開館 60 周年記念　走泥社再考 前衛陶芸の生まれた時代」を企画構成、開催、図録を発行	岐阜県美術館、岡山県立美術館館、菊池寛実記念智美術館
6	明治末から昭和初めにかけての京都の日本画について	展覧会「開館 60 周年記念　京都画壇の青春―栖鳳、松園につづく新世代たち」を企画構成、開催小冊子を発行	－
7	小林正和と 1970 年代以降のファイバーアートの展開について	展覧会「開館 60 周年記念　小林正和とその時代―ファイバーアート、その向こうへ」を企画構成、開催、図録を発行	岡山県立美術館、ギャラリー・ギャラリー
8	富岡鉄斎に関する研究	展覧会「没後 100 年 富岡鉄斎」の開催に向けて準備を進めた	鉄斎美術館、碧南市藤井達吉現代美術館、富山県水墨美術館
9	版画とグラフィックデザインの交錯と境界：1950-70 年代の日本を中心に	展覧会「印刷/版画/グラフィックデザインの断層　1957-1979」の開催に向けて準備を進めた	国立工芸館、国立アートリサーチセンター
10	倉俣史朗のデザインとその思想に関する研究	展覧会「倉俣史朗のデザイン―記憶のなかの小宇宙」の開催に向けて準備を進めた	富山県立美術館、世田谷美術館、クラマタデザイン事務所
11	ファッションとアートにおける自然・身体・アイデンティティをめぐる研究	展覧会「LOVE ファッション―私の着たい服（仮称）」の開催に向けて準備を進めた	京都服飾文化研究財団、熊本市現代美術館、東京オペラシティアートギャラリー
12	黒田辰秋に関する研究	展覧会「生誕 120 年　黒田辰秋（仮称）」の開催に向けて準備を進めた	豊田市美術館
13	Young Poland（若きポーランド）：1860 年頃から 1918 年までのポーランドにおける芸術とアイデンティティの問題について	展覧会「Young Poland：ポーランドの美術 1860-1918（仮称）」の開催に向けて準備を進めた	クラクフ国立博物館（ポーランド）

14	上方文化サロン：人的ネットワークから解き明かす文化創造空間 1780-1880（国際共同研究事業　英国との国際共同研究プログラム（JRP-LEAD with UKRI）研究代表者：大英博物館・矢野明子、立命館大学・赤間亮）	コレクション研究、コレクション展に反映	大英博物館、立命館大学アート・リサーチセンター
15	日本映画を中心とする研究	国立映画アーカイブ（NFAJ）との共催による映画上映会「MoMAK Films」を実施	国立映画アーカイブ
16	児童生徒を対象とする鑑賞教育	美術館を活用した学習支援活動の実施など	京都市図画工作教育研究会、京都市立中学校教育研究会美術部会
17	美術館の教育普及活動	展覧会に関連したワークショップの開催	―
18	障害の有無に関わらず多感覚で享受できるユニバーサルな美術鑑賞プログラム	障害の有無に関わらず多感覚で享受できるユニバーサルな美術鑑賞プログラムの企画実施など	国立民族学博物館、京都大学総合博物館、京都府立盲学校、京都市立芸術大学、大阪教育大学
19	アーカイブズ資料と文化的精神活動との有機的連関性について	資料収集活動における整備充実に反映	―
20	20 世紀後半の現代陶芸の動向についての基礎的研究 （科研費　基盤研究C　研究代表者：宮川智美、令和 3 年度～令和 7 年度）	コレクション展に反映	―
21	中近世ドイツ語圏の金工の社会史的研究ーW.ヤムニッツァーを中心に（科研費　若手研究　研究代表者：村松綾、令和 2 年度～令和 6 年度）	2023 年度アーカイブズ・カレッジ(史料管理学研修会)長期コース（国文学研究資料館主催）修了論文にて研究成果の一部を発表	―

エ　国立映画アーカイブ

	調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
1	イタリア映画の歴史	特集上映「蘇ったフィルムたち チネマ・リトロバート映画祭 を企画、開催	チネテカ・ディ・ボローニャ
2	アニメーション作家山村浩二の映画	特集上映「アニメーション作家 山村浩二」を企画、開催	―
3	日本映画における女性の役割の歴史	特集上映「日本の女性映画人（2）――1970-1980 年代」を企画、開催	―
4	アメリカから返還された映画	特集上映「返還映画コレクション（1）――第一次・劇映画篇」を企画、開催	―
5	ヨーロッパ諸国の現代映画	特集上映「EU フィルムデーズ 2023」を企画、開催	駐日欧州連合代表部及び EU 加盟国大使館・文化機関
6	外国映画を中心とする無声映画	特集上映「サイレントシネマ・デイズ 2023」を企画、開催	―
7	日本映画の古典	特集上映「TIFF/NFAJ クラシックス 小津安二郎監督週間」を企画、開催	東京国際映画祭
8	日本の自主映画	特集上映「第 45 回ぴあフィルムフェスティバル 2023」を企画、開催	一般社団法人 PFF、公益財団法人川喜多記念映画文化財団、公益財団法人ユニジャパン

9	映画監督大島渚の映画	特集上映及び企画展「没後 10 年 映画監督 大島渚」を企画、開催	―
10	俳優月丘夢路・監督井上梅次の映画	特集上映及び企画展「月丘夢路 井上梅次 100 年祭 」を企画、開催	一般財団法人井上・月丘映画財団
11	和田誠の映画関連の業績	企画展「和田誠 映画の仕事」を企画、開催	―
12	映画の収集のための原版の所在並びに権利帰属等の情報収集と調査	作品購入及び寄贈受入	―
13	国際フィルムアーカイブ連盟（FIAF）会員、その他同種機関、現像所等からの情報に基づく、未発見の日本映画フィルムの所在調査	作品及び文献調査	-
14	映画フィルムのデジタル化と配信に係る調査	ウェブサイト「関東大震災映像デジタルアーカイブ」「フィルムは記録する－国立映画アーカイブ歴史映像ポータルー」更新ならびに「はじまりの日本劇映画 映画 meets 歌舞伎」「映画遺産－国立映画アーカイブ映画資料ポータルー」の開設	国立情報学研究所
15	映画資料を整理するとともに、その画像をデジタル化し、活用することを目的とする事業（※）	「デジタル資料閲覧システム」の充実等	―
16	映画製作専門家のオーラルヒストリー	オンラインサービス「映画製作専門家養成講座」	―
17	こどもを対象にした映画鑑賞プログラム	「こども映画館 2023 年の夏休み★」、「V4中央ヨーロッパ子ども映画祭」、こども映画館『スクリーンで見る日本アニメーション！』を企画、開催	―
18	映写技術・復元、フィルム映写をテーマにした教育プログラム	「NFAJ&J.S.A. アーカイブセミナー 映画表現と音ミナトーキー」及び「NFAJ & J. S. E. アーカイブセミナー体験的映画編集論」を企画、開催	―
19	社会人を対象にした映画鑑賞プログラム	優秀映画鑑賞推進事業	―
20	日本における 70 ミリ劇映画文化の受容とそのイメージの復元(科研費 基盤 B 研究代表者：冨田美香、平成 31 年度～平成 33 年度)	フィルム及び文献調査	―
21	カラー映画フィルムのスペクトル分析に基づく忠実な色再現と褪色補正に関する基盤研究（※）（科研費 基盤 C 研究代表者：大傍正規、令和 3 年度～令和 5 年度)	映画のデジタル保存・活用等に関する調査	―
22	ナショナル・フィルモグラフィ構築に向けた調査研究：塚田嘉信コレクションを活用して（科研費 基盤 C 研究代表者：入江良郎、令和 5 年度～令和 7 年度)	映画史家・塚田嘉信旧蔵資料の調査研究	―

オ　国立西洋美術館

	調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
1	国立西洋美術館所蔵橋本コレクション	小企画展「橋本コレクション展　指輪よりどりみどり」を企画構成、開催、特別ウェブサイトを制作	-
2	悪の表象	小企画展「美術館の悪ものたち」を企画構成、開催	-

3	19 世紀後半の仏英のアカデミスム絵画	所蔵作品展小企画「もうひとつの 19 世紀―ブーグロー、ミレイとアカデミーの画家たち」を企画、構成、開催	－
4	ゴヤ〈戦争の惨禍〉	所蔵作品展小企画「真理はよみがえるだろうか：ゴヤ〈戦争の惨禍〉全場面」を企画、構成、開催	－
5	印象派とナビ派の装飾画	常設展内小企画「Collection in FOCUS 印象派とナビ派の装飾画」開催	－
6	ロイヤル・アカデミーにおける女性作家：アンゲリカ・カウフマンとローラ・ナイト	常設展内小企画「Collection in FOCUS ロイヤル・アカデミーにおける先駆者たち――カウフマンとナイト」開催	－
7	国立西洋美術館における作品の保存修復	常設展内小企画「Collection in FOCUS 国立西洋美術館における作品の保存修復－カリエール《自画像》を例として」開催	－
8	絵具層の下に隠された下描きを視る	常設展内小企画「Collection in FOCUS 絵画の下書きを視る」開催	株式会社ニコン
9	ドイツ近代美術史におけるオークの木の表象の歴史、およびロヴィス・コリントをめぐる研究	常設展内小企画「Collection in FOCUS 植生へのまなざし、絵画への距離－ロヴィス・コリントの《オークの木》を結節点として」開催	－
10	ルドヴィーコ・カラッチ《ダリウスの家族》	常設展内小企画「Collection in FOCUS ルドヴィーコ・カラッチ《ダリウスの家族》初公開」開催	－
11	輸送用クレートの構造	常設展内小企画「クレート―美術作品の輸送を支える箱」開催	国立アートリサーチセンター、ヤマト運輸株式会社
12	手で見るかたち	常設展内小企画「Collection in FOCUS 手で見るかたち」開催	－
13	憧憬の地 ブルターニュ―モネ、ゴーガン、黒田清輝らが見た異郷	「憧憬の地 ブルターニュ」展を企画構成、開催、図録を発行	－
14	スペインのイメージ	「スペインのイメージ：版画を通じて写し伝わるすがた」展を企画構成、開催、図録を発行	－
15	キュビスム	「パリ ポンピドゥーセンター キュビスム展―美の革命 ピカソ、ブラックからドローネー、シャガールへ」展を企画構成、開催、図録を発行	ポンピドゥーセンター
16	日本の現代美術作家	特別展「ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？―国立西洋美術館 65 年目の自問｜現代美術家たちへの問いかけ」を企画構成、開催、図録を刊行	―
17	国立西洋美術館所蔵作品の材料・技法についての科学的調査	作品中の顔料（絵具）の同定、適切な保存のため	筑波大学、東京電機大学、明治大学
18	アクリルケースを用いた展示における反射グレア低減手法の検討、輝度対比を考慮した美術館照明手法の検討	展示室の照明の改善へ向けた研究	東京理科大学
19	杉浦非水のポスターに用いられている顔料の科学調査	作品中の顔料（絵具）の調査。適切な保存のため	国立アートリサーチセンター、国立近代美術

			館工芸館、東京電機大学、明治大学
20	国立西洋美術館の所蔵作品における 3D データを用いた活用方法	主に彫刻作品の状態記録と活用	奈良県立大学
21	視覚障がい者対象プログラム及び教材開発	視覚障害者対象に触察を含むギャラリートークなどの実施、及び常設展愛小企画「Collection in FOCUS 手でみるかたち」開催	－
22	美術館教育（鑑賞教育、ワークショップなどの学びを深めるためのアクティビティ、アクセシビリティの向上、教材の開発など）	ファミリープログラム、スクールプログラム、既存プログラムのアクセシビリティ向上、セルフガイド等の作成　など	－
23	美術館における聾学校向け教育プログラム開発のための基礎研究 (2023 年度笹川科学研究助成 実践研究部門 研究代表者：長谷川暢子)	視覚特別支援学校を対象としたスクール・ギャラリートークの実施	学校法人明晴学園
24	「装飾的」なる概念を介した 19 世紀末美術と演劇の連動―ナビ派と芸術座を中心に（科研費　研究活動スタート支援　研究代表者：袴田紘代、令和 4 年～令和 5 年）	カタログレゾネ編纂者とのコンタクト、作品・文献・一次史料調査、『国立西洋美術館研究紀要』28 号にて研究成果の一部を発表	－
25	美術作品や歴史資料中の膠着材の同定法の構築―方法の改善・発展と実践（科研費　基盤 C　研究代表者：高嶋美穂、令和元年～令和 5 年）	作品中の膠着材の同定。適切な保存のため	筑波大学、（株）ニッピ・バイオマトリックス研究所
26	松方コレクション来歴研究とデジタル・カタログ・レゾネ試作（科研費　基盤 B　研究代表者：川口雅子、令和 2 年～令和 5 年）	作品及び文献調査	－

カ　国立国際美術館

	調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
1	所蔵作品の研究	所蔵作品展の企画構成、作品の収集活動	－
2	現代美術の動向調査	所蔵作品展の企画構成、作品の収集活動	－
3	20 世紀前半の西洋美術について	「ベルリン国立ベルクグリューン美術館展」を実施	ベルクグリューン美術館（ベルリン）、国立西洋美術館
4	メル・ボックナーについて	「コレクション２　特集展示：メル・ボックナー」展の企画構成、作品の収集活動、作家調査	豊田市美術館
5	現代美術における「ホーム」の表象	「ホーム・スイート・ホーム」展の企画実施	丸亀市猪熊弦一郎現代美術館
6	古代メキシコ文明について	「古代メキシコ ーマヤ、アステカ、テオティワカン」を実施、古代メキシコ文明が現代美術に及ぼした影響について調査	東京国立博物館、九州国立博物館、メキシコ国立人類学博物館他
7	タイムベースド・メディアについて	中之島映像劇場「現代美術と映像_田中功起との対話」を実施	－
8	アジアの女性作家について	作品収集に向けての調査、アジア女性をテーマにした企画展（韓国国立現代美術館）への調査協力	韓国国立現代美術館

9	アジアにおける美術館活動について	美術館事業、所蔵作品状況調査、中之島映像劇場「空、境界のない」（韓国国立現代美術館 企画協力）を実施	韓国国立現代美術館、M+
10	2000 年代以後の所蔵作品についての重点的調査	「コレクション１ 80/90/00/10」展の企画構成、新規収蔵作品の検討	―
11	1960 年代から 70 年代の関西を中心とした前衛美術、パフォーマンスやエフェメラを中心とした研究	池水慶一、水上旬、糸井寛二関連の資料調査（将来的な収集に向けて）	-
12	「もの派」以降の日本現代美術アーカイヴの構築と活用:安齊重男資料を対象として	「もの派」に関する基礎資料を作成、日本アーティスト辞典における作家解説（李禹煥）の資料として活用	多摩美術大学
13	田中信太郎の遺品資料に基づく作家研究基礎調査（鹿島美術財団助成　研究代表者：中井康之）	作家資料を整理するためのモデルケースとして活用	東京文化財研究所
14	プレイについて	「現代美術スタディーズ」に向けての調査と執筆	―
15	展示室、収蔵庫環境についての調査	地下三階展示室及び地下二階収蔵庫の LED 化工事と収蔵環境改善	―
16	現代美術における映像表現	作品及び文献調査	関西大学
17	児童生徒を対象とする鑑賞教育の推進	「令和５年度美術館研修－鑑賞ワークショップ－」の実施	大阪府教育センター
18	美術館教育	小中高特別支援学校対象プログラム、教職員対象研修、未就学児対象美術館体験プログラム「ちっちゃなこどもびじゅつあー　～絵本もいっしょに～」、発達段階別鑑賞プログラム（「こどもびじゅつあー」「びじゅつあー」「だれでもびじゅつあー」）、だれでもがアクセスしやすいプログラム「みる＋（プラス）」、現代美術作家を招聘したワークショップ、ファミリー向け鑑賞制作プログラム「びじゅつあーすぺしゃる」の実施	―
19	所蔵作品に関する歴史的情報等の公開データの拡充、整備	NMAO サーチの公開、コンテンツの拡充	―
20	鉛を用いた美術作品の構造と劣化に関する調査研究	所蔵作品の科学分析に向けた事前調査を実施	奈良文化財研究所
21	合成樹脂を用いた美術作品の劣化状態と保存、展示方法についての調査研究	所蔵作品の科学分析に向けた事前調査を実施	―
22	近現代アートの保存・継承に向けた収蔵品情報管理・共有システムの構築	海外美術館等の作品管理方法を実地調査し、収蔵庫整理業務に反映	東京藝術大学
23	現代美術に関する収集アーカイブズ構築と公開の為の方法論策定：画廊旧蔵資料調査から（科研費　研スタ　研究代表者：児玉茜、令和５年度～令和６年度）	国内美術館の先行例を実地調査し、将来的に検討している収集アーカイブズ公開に係る権利処理と整理作業についてのケーススタディに反映	
24	フェリックス・ゴンザレス=トレス	作家・作品調査、所蔵作品の研究	東京都現代美術館、フェリックス・ゴンザレス=トレス財団

キ　国立新美術館			
	調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
1	ルネサンスから 19 世紀前半までの西洋美術における「愛」の表現について	企画展「ルーヴル美術館展　愛を描く」を企画、開催した。	ルーヴル美術館
2	蔡國強について	企画展「蔡國強　宇宙遊 —〈原初火球〉から始まる」を企画、開催し、図録を刊行した。	－
3	近代以降の美術における光の表象について	企画展「テート美術館展　光　— ターナー、印象派から現代へ」を企画、開催し、図録を刊行した。	テート美術館
4	イヴ・サンローランについて	企画展「イヴ・サンローラン展　時を超えるスタイル」を企画、開催し、図録を刊行した。	イヴ・サンローラン美術館パリ
5	大巻伸嗣について	企画展「大巻伸嗣　Interface of Being 真空のゆらぎ」を企画、開催し、図録を刊行した。	イヴ・サンローラン美術館パリ
6	アンリ・マティスについて	企画展「マティス　自由なフォルム」を企画、開催し、図録を刊行した。	ニース市マティス美術館
7	パンデミック下で顕在化した現代社会の諸傾向と国内外の美術動向について	企画展「遠距離現在　Universal / Remote」を企画、開催し、図録を刊行した。	熊本市現代美術館、広島市現代美術館
8	パブリックスペースの展示について	国立新美術館のパブリックスペースを活用した小展示シリーズ「NACT View」として、「NACT View 02 築地のはら　ねずみっけ」、「NACT View 03 渡辺 篤（アイムヒア プロジェクト）　私はフリーハグが嫌い」、「NACT View 04　和田礼治郎：FORBIDDEN FRUIT」を開催した。	－
9	1920 年代から 70 年代を中心とする 20 世紀の住宅建築について	企画展「リビング・モダニティ（仮称）」に向けて準備を進めた。	兵庫県立美術館
10	田名網敬一と 1960 年代以降の現代美術について	企画展「田名網敬一　RETROSPECTIVE（仮称）」に向けて準備を進めた。	－
11	1990 年代・2000 年代の日本の現代美術について	R7 年度開催予定の展覧会に向けて準備を進めた。	M+
12	日本の現代美術の動向	企画展「CLAMP 展」、「絵のアティテューズ—— 荒川ナッシュ医（仮）」、および将来の展覧会に向けて準備を進めた。	－
13	海外の現代美術の動向	将来の展覧会に向けて準備を進めた。	－
14	美術館の教育普及事業（ワークショップ、鑑賞ガイド等）	アーティスト・ワークショップやユースプロジェクト、建築ツアー、学校を対象としたガイダンス等を実施した。企画展に合わせて鑑賞ガイドを作成・配布した。	株式会社日本設計
15	美術資料のアーカイブズ構築における編成記述方法	ISAD(G)の記述標準に基づき、新規で受け入れ下資料群についての記述方法を検討した。	－
16	展覧会情報の収集・提供システム「アートコモンズ」の構築	展覧会情報収集・提供サービス「アートコモンズ」において、日本国内の美術館、画	－

		廊等で開催された展覧会の情報を収集し、データベースとして公開した。	
17	展覧会情報の国立国会図書館「ジャパンサーチ」との連携	「アートコモンズ」に登録された展覧会情報を国立国会図書館「ジャパンサーチ」に提供した。	国立国会図書館

※映画のデジタル保存・活用等に関する調査研究である。

別表 10　展覧会図録における執筆

ア　東京国立近代美術館			
（本館）			
	タイトル	執筆者氏名 （職名）	展覧会名
1	章解説 1 点（「抑制と解放」共同執筆、作家・作品解説 4 点（三岸節子《静物》、芥川（間所）紗織《スフィンクス》、草間彌生、木下佳通代《'79-38-A》）、「企画者座談会」	佐原しおり （研究員）	女性と抽象
2	章解説 1 点（「女流画家協会」）、作家・作品解説 4 点（桜井浜江《壺》《花》、藤川栄子《塊》、桂ゆき（ユキ子）《作品》、辰野登恵子《UNTITLED-28》《May-7-91》）、「企画者座談会」	横山由季子 （研究員）	女性と抽象
3	作品解説 1 点（春木麻衣子《outer portrait 1》）、作家解説 2 点（春木麻衣子、田中敦子）、「企画者座談会」	小林紗由里 （任期付研究員）	女性と抽象
4	「展覧会概要文」、章解説 1 点（2 章「増殖する円」）、作家・作品解説 5 点（田中田鶴子《無 - Ⅱ》、福島秀子《凝視》、《ビンの中》、沢居曜子《Line Work Ⅳ-77-3》、青木野枝）、「企画者座談会」	小川綾子 （研究補佐員）	女性と抽象
5	作家・作品解説 2 点（杉浦邦恵《孤 #57-V1》《Botanicus 18》）	堀田文 （研究補佐員）	女性と抽象
6	章解説 1 点（「抑制と解放」共同執筆）、「企画者座談会」	松田貴子 （客員研究員）	女性と抽象
7	「廃墟としてのサグラダ・ファミリア」	鈴木勝雄 （企画課長）	ガウディとサグラダ・ファミリア
8	中平卓馬 関連文献一覧	長名大地 （主任研究員）	中平卓馬　火―氾濫
9	「根底的に、過激に、中平卓馬の活動の軌跡をたどるために」章解説(1,3,4 章）・コラム「1973 年、知覚異常の経験」・作品解説	増田玲 （主任研究員）	中平卓馬 火―氾濫
10	章解説 1 点、作品解説 13 点、コラム 3 点（「反復するイメージ」、「中平卓馬と美術」、「人物像の変化」）、「展覧会・著作文献一覧」、「展示作品一覧」	小林紗由里 （任期付研究員）	中平卓馬　火―氾濫
11	作品解説 15 点、コラム 4 点（「東松照明と多木浩二」「「風景論」と『映画批評』」「中平卓馬と『朝日ジャーナル』」「中平卓馬による写真家論」）、作家略歴、著作文献一覧（共同執筆）	松田貴子 （客員研究員）	中平卓馬　火－氾濫
12	「東京国立近代美術館のコレクションとその形成について」	小林紗由里 （任期付研究員）	令和５年度国立美術館巡回展 20 世紀美術の冒険者たち―名作でたどる日本と西洋のアート

（国立工芸館）			
	タイトル	執筆者氏名 （職名）	展覧会名
1	「皇居三の丸尚蔵館収蔵品展」章解説、作家作品解説（川之邊一朝、安達陶仙ほか）	北村仁美 （主任研究員）	皇居三の丸尚蔵館収蔵品展　皇室と石川 ―麗しき美の煌めき―
2	「皇居三の丸尚蔵館収蔵品展」作家作品解説（由木尾雪雄作品 2 点）	中尾優衣 （主任研究員）	皇居三の丸尚蔵館収蔵品展　皇室と石川 ―麗しき美の煌めき―
3	「皇居三の丸尚蔵館収蔵品展」作家作品解説（赤地友哉）	横川悠子 （工芸課研修生）	皇居三の丸尚蔵館収蔵品展　皇室と石川 ―麗しき美の煌めき―
4	「皇居三の丸尚蔵館収蔵品展」作家作品解説（塩多慶四郎）	日南日和 （研究補佐員）	皇居三の丸尚蔵館収蔵品展　皇室と石川 ―麗しき美の煌めき―
5	「皇居三の丸尚蔵館収蔵品展」作家作品解説（初代諏訪蘇山、宮川香山、ほか作品 3 点）	田中真希代 （研究補佐員）	皇居三の丸尚蔵館収蔵品展　皇室と石川 ―麗しき美の煌めき―
6	「皇居三の丸尚蔵館収蔵品展」作家作品解説（松田権六作品 2 点）	笹出照江 （研究補佐員）	皇居三の丸尚蔵館収蔵品展　皇室と石川 ―麗しき美の煌めき―
7	「皇居三の丸尚蔵館収蔵品展」作家作品解説（２代徳田八十吉、２代諏訪蘇山）	髙橋佑香子 （客員研究員）	皇居三の丸尚蔵館収蔵品展　皇室と石川 ―麗しき美の煌めき―
8	「志野」というやきもの	唐澤昌宏 （国立工芸館長）	卒寿記念　人間国宝 鈴木藏の志野展
9	鈴木藏の「志野」、その思考と作陶	唐澤昌宏 （国立工芸館長）	卒寿記念　人間国宝 鈴木藏の志野展
10	『卒寿記念　人間国宝 鈴木藏の志野展』図録、章解説、コラム解説、作品解説	唐澤昌宏 （国立工芸館長）	卒寿記念　人間国宝 鈴木藏の志野展
イ　京都国立近代美術館			
	タイトル	執筆者氏名 （職名）	展覧会名
1	「編集注記：「Re: スタートライン 1963-1970/2023」―展覧会アーカイヴを通して 1960 年代美術をみるための取扱説明書」、「はじめに」、用語解説	牧口千夏 （主任研究員）	開館 60 周年記念　Re: スタートライン 1963－1970/2023 現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係
2	作家略歴	渡辺亜由美 （特定研究員）	開館 60 周年記念　Re: スタートライン 1963－1970/2023 現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係
3	作家略歴	竹花藍子 （研究補佐員）	開館 60 周年記念　Re: スタートライン 1963－1970/2023 現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係
4	「今、走泥社を「再考」するということ」	大長智広 （主任研究員）	開館 60 周年記念　走泥社再考 前衛陶芸が生まれた時代
5	出品作家解説、目録編集	宮川智美 （任期付研究員）	開館 60 周年記念　走泥社再考 前衛陶芸が生まれた時代
6	「小林正和と日本のファイバーアート―伝統と自由のはざまで」、章解説、作家略歴、作品解説、英文和訳	池田祐子 （副館長･学芸課長）	開館 60 周年記念　小林正和とその時代―ファイバーアート、その向こうへ
7	「「テキスタイル・マジシャン」―小林正和と 4 人の作家たち」、作家略歴、作品解説	宮川智美 （任期付研究員）	開館 60 周年記念　小林正和とその時代―ファイバーアート、その向こうへ

8	章解説	小倉実子 （主任研究員）	京都画壇の青春

ウ　国立映画アーカイブ

	タイトル	執筆者氏名 （職名）	展覧会名
1	展覧会関連書籍 『和田誠　映画の仕事』解説文 （監修:国立映画アーカイブ、発行：国書刊行会）	岡田秀則 （主任研究員） 藤原征生 （特定研究員）	和田誠　映画の仕事

エ　国立西洋美術館

	タイトル	執筆者氏名 （職名）	展覧会名
1	序文、エッセイ「モーリス・ドニ、内なる眼がみたブルターニュ」、章解説、作品・資料解説	袴田紘代 （主任研究員）	憧憬の地 ブルターニュ―モネ、ゴーガン、黒田清輝らが見た異郷
2	「スペインのイメージ：版画を通じて写し伝わるすがた　序文」「マハとジプシー：異国スペインの女たち」「マリアーノ・フォルトゥーニの版画制作」、「19 世紀フランスの挿絵入り定期刊行物に見るスペイン：舞台、建築、美術」、作品解説	川瀬佑介 （主任研究員）	スペインのイメージ：版画を通じて写し伝わるすがた
3	″Imaged and Imagined: Spain Seen through Prints from Japanese Collections″; The Maja and the Gypsies: Women in a Foreigin Country, Spain; The Prints by Mariano Fortuny; Spain as Seen through Illustrated Periodicals in the Nineteenth Century France: THeater, Architecture, and Fine Art″; Entries	川瀬佑介 （主任研究員）	スペインのイメージ：版画を通じて写し伝わるすがた
4	作品解説 8 点	久保田有寿 （特定研究員）	スペインのイメージ ：版画を通じて写し伝わるすがた
5	巻頭エッセイ「キュビスムを理解するために―いくつかの視点」、資料解説 2 点、作家解説 5 点	田中正之 （館長）	パリ ポンピドゥーセンター キュビスム展―美の革命　ピカソ、ブラックからドローネー、 シャガールへ
6	シルヴィ・パトリ「技師、野生人、職人―キュビスムの始まりにおけるセザンヌ、ゴーガン、ルソー」仏語和訳	陳岡めぐみ （主任研究員）	パリ ポンピドゥーセンター　キュビスム展―美の革命 ピカソ、ブラックからドローネー、シャガールへ
7	エッセイ「キュビスムと女性芸術家― 6 人の出品作家を中心に」、5 章解説、作家解説 5 点	久保田有寿 （特定研究員）	パリ ポンピドゥーセンター キュビスム展―美の革命　ピカソ、ブラックからドローネー、 シャガールへ

オ　国立国際美術館

	タイトル	執筆者氏名 （職名）	展覧会名
1	作品解説	橋本梓 （主任研究員）	コレクション１　80/90/00/10

カ　国立新美術館			
タイトル		執筆者氏名 （職名）	展覧会名
1	「光と映画の体験、その拡張とリズ・ローズ」（執筆）／作品解説 15 本（翻訳）	山田由佳子 （主任研究員）	テート美術館展　光―ターナー、印象派から現代へ
2	作品解説 15 本（翻訳）	吉村麗 （特定研究員）	テート美術館展　光―ターナー、印象派から現代へ
3	作品解説 10 本（翻訳）	伊藤ちひろ （研究補佐員）	テート美術館展　光―ターナー、印象派から現代へ
4	「イヴ・サンローランによる 1968 年のパンタロンと日本における展開について」（執筆）／章解説・作品解説（翻訳）	小野寺奈津 （特定研究員）	イヴ・サンローラン　時を超えるスタイル
5	「メッセージ」、「序―日本での回顧展に寄せて」（翻訳）	宮島綾子 （主任研究員）	イヴ・サンローラン　時を超えるスタイル
5	作品解説（翻訳）	杉本渚 （研究補佐員）	イヴ・サンローラン　時を超えるスタイル
6	「インタビュー：渡辺篤（アイムヒア プロジェクト）」（インタビュー編集）	山田由佳子 （主任研究員）	NACT View 03 渡辺 篤（アイムヒア プロジェクト）　私はフリーハグが嫌い
7	「大巻伸嗣論―身体とイメージ」（執筆）／「大巻伸嗣へのインタビュー」（編集）	長屋光枝 （学芸課長）	大巻伸嗣　Interface of Being 真空のゆらぎ
8	作品解説 10 本（会場配布マップ）	長屋光枝 （学芸課長）	大巻伸嗣　Interface of Being 真空のゆらぎ
9	「ヴァンスのロザリオ礼拝堂　諸芸術の空間」（執筆）／作品解説（執筆）	米田尚輝 （主任研究員）	マティス　自由なフォルム
10	年譜（執筆）／文献（執筆）	亀田晃輔 （研究補佐員）	マティス　自由なフォルム
11	「遠距離現在　Universal/Remote」（執筆）／作品解説 4 本（執筆）／「対談：イメージの自律性、つまりイメージが人を殺すことは知っていたが、今やその指は引き金にかけられた」（翻訳）／「インタビュー：アートがもたらす変化」（編集）	尹志慧 （特定研究員）	遠距離現在　Universal/Remote
12	作品解説 3 本（執筆）	真住貴子 （主任研究員）	遠距離現在　Universal/Remote
12	作品解説 2 本（執筆）／作家略歴、参考文献（執筆）／「対談：イメージの自律性、つまりイメージが人を殺すことは知っていたが、今やその指は引き金にかけられた」（翻訳）／「インタビュー：アートがもたらす変化」（編集）	伊藤ちひろ （研究補佐員）	遠距離現在　Universal/Remote

別表 11　研究紀要における執筆

ア　東京国立近代美術館				
	（本館）			
	タイトル	執筆者氏名 （職名）	掲載誌名	発行年月日
1	「 抽象と幻想：非写実絵画をどう理解するか」展（1953 年）について	長名大地 （主任研究員）	『東京国立近代美術館 研究紀要』第 28 号	R6.3.31
2	「資料紹介　速水御舟日記(1934 年)」	鶴見香織 （主任研究員）	『東京国立近代美術館 研究紀要』第 28 号	R6.3.31
3	「ジェルメ―ヌ・リシエのポンピドゥー・センターでの回顧展と新収蔵《蟻》をめぐる覚書」	横山由季子 （研究員）	『東京国立近代美術館 研究紀要』第 28 号	R6.3.31
4	研究ノート：荒川修作《アルファベットの皮膚 No.3》 - アルファベット・スキンをめぐる試論	小川綾子 （研究補佐員）	『東京国立近代美術館 研究紀要』第 28 号	R6.3.31
	（国立工芸館）			
	タイトル	執筆者氏名 （職名）	掲載誌名	発行年月日
1	［資料紹介］「松田権六書簡―椀制作のころ」	北村仁美 （主任研究員）	『東京国立近代美術館 研究紀要』第 28 号	R6.3.31
イ　京都国立近代美術館				
	タイトル	執筆者氏名 （職名）	掲載誌名	発行年月日
1	巻頭あいさつ	福永治 （館長）	京都国立近代美術館研究論集『CROSS SECTIONS　―Vol.11』	R6.3.31
2	ドイツにおける印象派受容とその展開	池田祐子 （副館長･学芸課長）	京都国立近代美術館研究論集『CROSS SECTIONS　―Vol.11』	R6.3.31
3	キュレトリアルスタディズ 15　八木一夫の写真	大長智広 （主任研究員）	京都国立近代美術館研究論集『CROSS SECTIONS　―Vol.11』	R6.3.31
ウ　国立西洋美術館				
	タイトル	執筆者氏名 （職名）	掲載誌名	発行年月日
1	松方コレクションとパリの画商―INHA 所蔵のレオンス・ベネディット資料の紹介 (2)	陳岡めぐみ （主任研究員）	『国立西洋美術館研究紀要』No.28	R6.3.31
2	「象徴主義演劇における「文様」と「装飾」：19 世紀末フランスの美術と演劇の交差をめぐる試論」	袴田紘代 （主任研究員）	『国立西洋美術館研究紀要』No.28	R6.3.31
エ　国立新美術館				
	タイトル	執筆者氏名 （職名）	掲載誌名	発行年月日
1	「NACT YOUTH PROJECT 2022 新美塾！」その計画と実施について	真住貴子 （主任研究員）	『国立新美術館研究紀要』第 9 号	R5.12.10
2	「ICA, Nagoya 関係資料と当館所蔵資料の関係から――80 年代美術受容論のための試論」	伊村靖子 （主任研究員）	『国立新美術館研究紀要』第 9 号	R5.12.10
3	パブリックスペースを活用した小企画シリーズ「NACT View」開催報告	小野寺奈津 （特定研究員） ／吉村麗 （特定研究員）	『国立新美術館研究紀要』第 9 号	R5.12.10

別表 12　館ニュースにおける執筆

ア　東京国立近代美術館				
（本館）				
	タイトル	執筆者氏名 （職名）	掲載誌名	発行年月日
1	開館 70 周年特集―「偉大なるマンネリズム」へ向けて	三輪健仁 （美術課長）	『現代の眼』638 号	R6.3.31
2	「ミュージアム・アーカイブズの活用―― プレイバック「抽象と幻想」展（一九五三ー一九五四）を通して」	長名大地 （主任研究員）	『国立国際美術館ニュース』251 号	R5.11.1
3	「開館 70 周年特集―情報コーナーのリニューアル」	長名大地 （主任研究員）	『現代の眼』638 号	R6.3.31
4	「研究員の本棚＃4｜学芸員としての歩み／デッサンをめぐる本 横山由季子」	長名大地 （主任研究員）	『現代の眼』638 号	R6.3.31
5	「イベント報告：「VR ヘッドセットで「抽象と幻想」展をプレイバック！」について」	長名大地 （主任研究員）	『現代の眼』638 号	R6.3.31
6	「新しいコレクション　池田蕉園《かえり路》」	鶴見香織 （主任研究員）	『現代の眼』638 号	R6.3.31
7	開館 70 周年特集　持続と更新―開館 60 周年リニューアルから 10 年　対談　藏屋美香・西澤徹夫	花井久穂 （主任研究員）	『現代の眼』638 号	R6.3.31
8	「みんなでみると、みえてくる-教育普及の中核をなす「所蔵品ガイド」」	端山聡子 （主任研究員）	『現代の眼』638 号	R6.3.31
9	「鑑賞のきっかけをつくる ―所蔵作品展の新しい試み―」	佐原しおり （研究員）	『現代の眼』638 号	R6.3.31
10	スクールプログラムの充実に向けて-特別支援学校を迎えて	細谷美宇 （研究員）	『現代の眼』638 号	R6.3.31
11	「新しいコレクション　風間サチコ《セメント・モリ》」	横山由季子 （研究員）	『現代の眼』638 号	R6.3.31
12	「新しいコレクション　ジェルメ―ヌ・リシエ《蟻》」	横山由季子 （研究員）	『現代の眼』638 号	R6.3.31
13	「研究員の本棚 #4　学芸員としての歩み／デッサンをめぐる本」	横山由季子 （研究員）	『現代の眼』638 号	R6.3.31
14	論文「鑑賞のきっかけをつくる-所蔵作品展の新しい試み-」	藤田百合 （特定研究員）	『現代の眼』638 号	R6.3.31
15	「資料紹介#4 ｜ Art & Project bulletin」	小澤万紀 （研究補佐員）	『現代の眼』638 号	R6.3.31
16	「資料紹介#5 ｜『美術史評』と『記録帯』」	花﨑結梨 （研究補佐員）	『現代の眼』638 号	R6.3.31
17	「資料紹介#5 ｜『美術史評』と『記録帯』」	花﨑結梨 （研究補佐員）	『現代の眼』638 号	R6.3.31
（国立工芸館）				
	タイトル	執筆者氏名 （職名）	掲載誌名	発行年月日
1	「新しいコレクション 池田晃将《電光無量無辺大棗》」	岩井美恵子 （工芸課長）	現代の眼 638 号	R6.3.31
2	土田ルリ子「『水のいろ、水のかたち』の豊富なバリエーション」後記	岩井美恵子 （工芸課長）	現代の眼 638 号	R6.3.31

3	佐藤一信「青磁鳳雲文花瓶にみる諏訪蘇山の革新性と古典研究」後記	北村仁美 （主任研究員）	現代の眼 638 号	R6.3.31
4	「新しいコレクション 川之邊一朝《梨子地青貝唐草内蒔絵料紙箱・硯箱》」	北村仁美 （主任研究員）	現代の眼 638 号	R6.3.31
5	「水のいろ、水のかたち展」こどもセルフガイドの作り方	今井陽子 （主任研究員）	現代の眼 638 号	R6.3.31
6	渋谷拓 「ポケモン×工芸展」：デュアル・ミッションの成否を分けるもの」リード文	今井陽子 （主任研究員）	現代の眼 638 号	R6.3.31
7	「新しいコレクション 作者不詳(芝山象嵌)《渡船・雨宿芝山象嵌屏風》」	村山閑 （主任研究員）	現代の眼 638 号	R6.3.31
8	「資料紹介 日本クラフト協会旧蔵資料」	廣川晶子 （研究員）	現代の眼 638 号	R6.3.31
9	三浦小平二《縮緬地友禅あおい文振袖》含む４作品並びに技法解説６件	今井陽子 （主任研究員）	２Ｄ鑑賞システム	R6.3.25
10	三浦小平二《青磁飾り壺》含む６作品	宮川典子 （特定研究員）	２Ｄ鑑賞システム	R6.3.25
11	前大峰《沈金蝶散模様色紙箱》含む３作品	横川悠子 （研修生）	２Ｄ鑑賞システム	R6.3.25
12	加藤土師萌《辰砂魚藻文壺》含む４作品	日南日和 （研究補佐員）	２Ｄ鑑賞システム	R6.3.25

イ　京都国立近代美術館

	タイトル	執筆者氏名 （職名）	掲載誌名	発行年月日
1	「アンネグレート・ベルクマン著「甲斐荘楠音の全貌ー絵画、演劇、映画を越境する個性ー」REVIEW」	村松綾 （任期付研究員）	『京都国立近代美術館ニュース視る』525 号	R5.6.26
2	「開館 60 周年記念インタビュー①　森口邦彦氏（上）」	池田祐子 （副館長･学芸課長）	『京都国立近代美術館ニュース視る』526 号	R5.9.10
3	「開館 60 周年記念インタビュー①　森口邦彦氏（上）」	宮川智美 （任期付研究員）	『京都国立近代美術館ニュース視る』526 号	R5.9.10
4	京都国立近代美術館開館 60 周年記念企画	松山沙樹 （研究員）	『京都国立近代美術館ニュース視る』528 号	R6.2.13
5	「京都国立近代美術館の日本画コレクションを考える―今後の展望への一試案―」、作家略歴	平井啓修 （主任研究員）	『京都国立近代美術館所蔵作品目録 ⅩⅣ［日本画］』	R6.3.29

ウ　国立映画アーカイブ

	タイトル	執筆者氏名 （職名）	掲載誌名	発行年月日
1	フリップブックから現れたメリエスの「列車の到着」	岡島尚志 （館長）	『NFAJ ニューズレター』第 20 号	R5.4.1
2	塚田嘉信氏コレクションの収蔵	本地陽彦 （客員研究員）	『NFAJ ニューズレター』第 20 号	R5.4.1
3	『混淆する戦前の映像文化』を読む	岡島尚志 （館長）	『NFAJ ニューズレター』第 21 号	R5.7.1
4	シネマシナリー――かつて結ばれた「映画と機械」のその後を考える	岡島尚志 （館長）	『NFAJ ニューズレター』第 22 号	R5.10.1
5	イマジナリーライン再考	岡島尚志 （館長）	『NFAJ ニューズレター』第 23 号	R6.1.1

6	FIAF メキシコシティ会議報告――ジェンダー平等とフィルムアーカイブ	大澤 浄 （主任研究員）	『NFAJ ニューズレター』第 23 号	R6.1.1

エ　国立西洋美術館

	タイトル	執筆者氏名 （職名）	掲載誌名	発行年月日
1	スペインのイメージ 版画を通じて写し伝わるすがた	川瀬佑介 （主任研究員）	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』第 87 号	R5.5.29
2	美術館の悪ものたち	渡辺晋輔 （学芸課長）	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』第 87 号	R5.5.29
3	Collection in FOCUS ｜ コレクション・イン・フォーカスについて	新藤淳 （主任研究員）	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』第 87 号	R5.5.29
4	絵具層の下に隠された下描きを視る	髙嶋美穂 （特定研究員）	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』第 87 号	R5.5.29
5	パリ ポンピドゥーセンター　キュビスム展―美の革命　ピカソ、ブラックからドローネー、シャガールへ	久保田有寿 （特定研究員）	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』第 88 号	R5.9.20
6	もうひとつの 19 世紀―ブーグロー、ミレイとアカデミーの画家たち	浅野菜緒子 （特定研究員）	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』第 88 号	R5.9.20
7	前庭ブロンズ彫刻の定期的保存修復作業	邊牟木尚美 （主任研究員）	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』第 88 号	R5.9.20
8	本館３Ｄデジタルコンテンツ　ゆびさきでめぐる世界遺産―ぐるぐる国立西洋美術館	福田京 （主任研究員）	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』第 88 号	R5.9.20
9	スクール・ギャラリートーク再開	長谷川暢子 （研究補佐員）	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』第 88 号	R5.9.20
10	ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？―国立西洋美術館 65 年目の自問｜現代美術家たちへの問いかけ	新藤淳 （主任研究員）	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』第 89 号	R6.2.5
11	真理はよみがえるだろうか：ゴヤ〈戦争の惨禍〉全場面	川瀬佑介 （主任研究員）	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』第 89 号	R6.2.5
12	動画で楽しむ！西美のコレクションと展覧会	浅野菜緒子 （特定研究員）	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』第 89 号	R6.2.5
13	６期ボランティア・スタッフ 活動デビュー！	長谷川暢子 （研究補佐員）	『国立西洋美術館ニュース：ZEPHYROS』第 89 号	R6.2.5

オ　国立国際美術館

	タイトル	執筆者氏名 （職名）	掲載誌名	発行年月日
1	「画家と画商とコレクター ―「ピカソとその時代 ベルリン国立ベルクグリューン美術館展」に寄せて」	安來正博 （研究員）	『国立国際美術館ニュース』249 号	R5.5
2	「「コレクション２　特集展示：メル・ボックナー」展に寄せて」	植松由佳 （学芸課長）	『国立国際美術館ニュース』249 号	R5.5
3	「館蔵品紹介　　髙柳恵里《ハンカチ》」	福元崇志 （主任研究員）	『国立国際美術館ニュース』249 号	R5.5
4	「今ふたたび世界とどのように繋がるのか　シャルジャ・ビエンナーレ 15　調査報告」	橋本梓 （主任研究員）	『国立国際美術館ニュース』250 号	R5.8
5	「館蔵品紹介　クリスチャン・ボルタンスキー《モニュメント》」	中井康之 （研究員）	『国立国際美術館ニュース』250 号	R5.8
6	「NMAO サーチ― 記録：アーカイブズの構築と公開の起点」	児玉茜 （特定研究員）	『国立国際美術館ニュース』251 号	R5.11

7	「館蔵品紹介　ミケル・バルセロ《下は熱い》」	安來正博（研究員）	『国立国際美術館ニュース』251 号	R5.11
8	「メキシコに魅せられた日本人画家たち」	安來正博（研究員）	『国立国際美術館ニュース』252 号	R6.2
9	「館蔵品紹介　荒木悠《オラファー》」	馬定延（客員研究員）	『国立国際美術館ニュース』252 号	R6.2

別表 13　館外の学術雑誌、学会等における調査研究成果の発信

ア　国立アートリサーチセンター

学会等発表

	タイトル	学会等名	発表者氏名（職名）	日付	場所	聴講者数（人）
1	NCAR（国立アートリサーチセンター）がめざすもの	美術史学会シンポジウム	一條彰子（ラーニンググループリーダー）	R5.4.23	学習院大学	50
2	日本国家藝術研究中心的展望	台北市立美術館 40 周年記念シンポジウム	一條彰子（ラーニンググループリーダー）	R5.10.5	台北市立博物館	100
3	国立アートリサーチセンター情報資源グループの活動概要（動向紹介）	アート・ドキュメンテーション学会	川口雅子（情報資源グループリーダー）	R5.6.18	国際教養大学コベルコホール	90
4	「電磁的記録の作成・公開」は「デジタル・アーカイブ化」と同義か？	全国博物館フォーラム「改正博物館法を現場の運営に活かす」	川口雅子（情報資源グループリーダー）	R5.11.15	千葉市文化センター	150
5	著作権法第 47 条と全国美術館収蔵品サーチ「SHŪZŌ」	第 6 回多摩美術大学アートアーカイヴシンポジウム「資料のデータ公開と著作権」	川口雅子（情報資源グループリーダー）	R5.12.2	多摩美術大学八王子キャンパス	50
6	国立アートリサーチセンターのリサーチポータル「アートプラットフォームジャパン」	国立アートリサーチセンター国際シンポジウム・ワークショップ 2023「美術館とリサーチ｜アートを“深める”とは？」	川口雅子（情報資源グループリーダー）	R6.3.23	国立新美術館講堂	188
7	イギリスにみる社会的処方と共創の場	東京都だれもが文化でつながるサマーセッション	稲庭彩和子（主任研究員）	R5.7.29	東京都美術館	200
8	学び、健康、ケアの拠点として期待される美術館の世界的潮流	鳥取大学	稲庭彩和子（主任研究員）	R5.10.29	鳥取県立図書館	70
9	つながりをつくる博物館−多世代共創とウェルビーイング	全国博物館大会	稲庭彩和子（主任研究員）	R5.11.15	千葉市文化センター	400

10	アートとアクセシビリティ	福祉をかえる「アート化」セミナー2023	稲庭彩和子（主任研究員）	R6.1.27	一般財団法人たんぽぽの家	80
11	ミュージアムのアクセシビリティ	みんミの”わ”シンポジウム 2023	稲庭彩和子（主任研究員）	R6.2.10	オンライン	120
12	文化的処方とは	社会的処方 EXPO2024	稲庭彩和子（主任研究員）	R6.3.3	京都経済センター	120
13	萌芽研究発表コメント	2023 年度アート・ドキュメンテーション学会第 16 回秋季研究集会	谷口英理（主任研究員）	R5.10.28	東京文化財研究所 地下セミナー室	76
14	Sustainability and Wellbeing in Museums	ICOM-CAMOC 委員会	鈴木智香子（研究員）	R6.4.29	北師美術館（国立台北教育大学内）	50
15	これからの文化施設と市民の共創	九州大学・那珂川市「ミリカルリーダー養成講座」	原泉（任期付研究員）	R5.7.29	ミリカローデン那珂川（福岡県那珂川市）	50

学術書籍、研究報告書等の発行

	タイトル	執筆者氏名（職名）	掲載誌名	発行年月日
1	みんなの社会的処方（共著）	稲庭彩和子（主任研究員）	学芸出版社	R6.3.1
2	これからどう進む？対話型鑑賞のこれまでとこれから（共著）	原泉（任期付研究員）	淡交社	R5.9.18

【査読無し】論文掲載（学術誌、美術雑誌、館外の展覧会図録等）

	タイトル	執筆者氏名（職名）	掲載誌名	発行年月日
1	アートの研究振興から考えるアーカイブズと「デジタルアーカイブ」	川口雅子（情報資源グループリーダー）	DNP 文化振興財団 学術研究助成紀要 第 5 号	R5.11.24
2	海外調査報告―チューリッヒデザイン美術館におけるポスター類の整理と公開について	石黒礼子（主任研究員）	DNP 文化振興財団 学術研究助成紀要 第 5 号	R5.11.24
3	アート振興の基盤としての アーカイブズの整備に向けた三つの論点	谷口英理（主任研究員）	DNP 文化振興財団 学術研究助成紀要 第 5 号	R5.11.24
4	【報告】美術品の保存修復の理念－西洋絵画を中心として－	鳥海秀実（主任研究員）	五浦論叢	R5.12.20
5	【特集　美術史家ジュリオ・カルロ・アルガンの思想と方法】（3）ローマ中央修復研究所の創設－その歴史と意義－	鳥海秀実（主任研究員）	五浦論叢	R5.12.20

その他の執筆（機関紙、雑誌、新聞、ウェブサイト等）

	タイトル	執筆者氏名（職名）	掲載誌名	発行年月日
1	映画「わたしたちの国立西洋美術館　奇跡のコレクションの舞台裏」の舞台裏	川口雅子（情報資源グループリーダー）	全国美術館会議機関誌『全美フォーラム』	R6.2.1

2	参加報告記 2022 年度アート・ドキュメンテーション学会年次大会 ポスター発表	石黒礼子（主任研究員）	アート・ドキュメンテーション研究 第 31 号	R5.5.31
3	ART! 健康効果と「文化的処方」	稲庭彩和子（主任研究員）	毎日新聞 東京朝刊	R5.4.9
4	ART! 美術館はだれのもの？	稲庭彩和子（主任研究員）	毎日新聞 東京朝刊	R5.6.11
5	ART ！ 美術館と地域社会	稲庭彩和子（主任研究員）	毎日新聞 東京朝刊	R5.8.13
6	ART ！ 人を力づける当事者性	稲庭彩和子（主任研究員）	毎日新聞 東京朝刊	R5.10.8
7	ART! ギフトよ、届け	稲庭彩和子（主任研究員）	毎日新聞 東京朝刊	R5.12.10
8	ART!認知症と「ゆっくり鑑賞」	稲庭彩和子（主任研究員）	毎日新聞 東京朝刊	R6.2.11
9	美術館はみんなの財産	稲庭彩和子（主任研究員）	共同通信配信	R6.2.28
10	楽しむことを諦めない	稲庭彩和子（主任研究員）	共同通信配信	R6.3.6
11	自分らしくいられる居場所	稲庭彩和子（主任研究員）	共同通信配信	R6.3.13
12	美術館と合理的配慮	稲庭彩和子（主任研究員）	共同通信配信	R6.3.20
13	それからの春陽会	田中正史（主任研究員）	『春陽会の１００年』	R.5.12.5
14	それからの春陽会	田中正史（主任研究員）	春陽会史料館	R.6.1.1
15	「高野光正コレクション　発見された日本の風景」展の解説	田中正史（主任研究員）	高島屋のウェブサイトおよび展示会場での映像放映	R.5.8.17
16	中村直人――彫刻家として、画家として	田中正史（主任研究員）	『中村直人　パリを征服した芸術家』	R.5.1.17
17	作家解説 古賀春江	谷口英理（主任研究員）	日本アーティスト事典	R5.9.11
18	作家解説 瑛九	谷口英理（主任研究員）	日本アーティスト事典	R5.9.11

イ　東京国立近代美術館

（本館）

学会等発表

	タイトル	学会等名	発表者氏名（職名）	日付	場所	聴講者数（人）
1	ギャラリートーク「建築をつくることをめぐって、離れたり、近づいたり」	「西澤徹夫　偶然は用意のあるところに」	三輪健仁（美術課長）	R5.11.18	TOTO ギャラリー・間	40
2	記録と再現：プレイバック「抽象と幻想」展（1953-1954）を中心に	第 33 回ネオ夜の会	長名大地（主任研究員）	R5.4.8	世田谷文化生活情報センター	19

3	鼎談1：ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズそしてドキュマンタシオンを語る	アート・ドキュメンテーション学会（JADS）美術館図書室SIG	長名大地（主任研究員）	R5.4.22	オンライン	121
4	東京国立近代美術館アートライブラリにおける情報資源組織化について	日本図書館研究会情報組織化研究グループ	長名大地（主任研究員）	R5.11.11	オンライン	21
5	美術館の歴史的展示をデジタル化し展示し再現すること	日本展示学会	長名大地（主任研究員）	R5.11.25	東京大学総合研究博物館	40
6	06：超私的美術労働	展示設営の技術を公開・交換するレクチャーシリーズ〈現場派〉	長名大地（主任研究員）	R5.12.8	東京造形大学CSLAB	12
7	東京国立近代美術館とシュルレアリスム	シュルレアリスム宣言100年記念講演会	長名大地（主任研究員）	R6.3.17	東京国立近代美術館講堂	101
8	砂と創造力	鳥取大学「鳥取砂丘学」	成相肇（主任研究員）	R5.5.31	鳥取大学	52
9	ゼロックスと美術：変換器／道具から肉体へ	京都市立芸術大学美術科（版画専攻）特別講義	成相肇（主任研究員）	R5.5.29	京都市立芸術大学	33
10	「空間に、自然光だけで、日高理恵子の絵画を置く」トークセッション3	多摩美術大学芸術学科展覧会設計ゼミ	成相肇（主任研究員）	R5.10.24	多摩美術大学	12
11	印刷と芸術について	梅津庸一 個展	成相肇（主任研究員）	R5.5.19	NADiff a/p/a/r/t	23
12	成相肇×石内都トークイベント	-	成相肇（主任研究員）	R5.7.14	青山ブックセンター本店	80
13	笠原出×成相肇対談	笠原出 「観光/出口/入口」展	成相肇（主任研究員）	R5.10.14	GALLERY TAGA 2	20
14	コンビニで作品をつくる	連続レクチャー｜アートの使い方	成相肇（主任研究員）	R5.9.7	SUGAR CUBE	10
15	君たちはどうコピーするか	Public Art Research Center 11	成相肇（主任研究員）	R5.10.23	札幌駅前通地下歩行空間（チ・カ・ホ）	15
16	哲学と美術をつなぐ書物たち	-	成相肇（主任研究員）	R5.11.22	本の長屋	8
17	マンガをいかに展示するか？	『鬼滅の刃』吾峠呼世晴原画展	成相肇（主任研究員）	R6.1.13	岡山県立美術館	60
18	美術館学芸員正体不明	どうもん学舎	成相肇（主任研究員）	R6.2.19	カルチャーどうもん	12
19	どげだいこげだい　植物性とわるさ、その変幻自在と批判力	-	成相肇（主任研究員）	R6.1.10	恵文社一乗寺店	30
20	ことなる、そのもの	刘家铭個展『The Painted Veil』	成相肇（主任研究員）	R6.2.4	BLANKgallery Tokyo	34

21	トークセッション	清島アパート 2023 活動成果展	成相肇（主任研究員）	R6.2.23	別府市レンガホール	40
22	Observations: Moments in Design History : MINGEI	連続講座「Observations」	花井久穂（主任研究員）	R5.9.23	国立ヴィクトリア美術館（豪・メルボルン）	
23	生誕 120 年「棟方志功展　メイキング・オブ・ムナカタ」	NHK 関連文化講演会	花井久穂（主任研究員）	R5.10.11	五日市市地域交流センターまほろばホール	107
24	生誕 120 年「棟方志功展　メイキング・オブ・ムナカタ」	NHK 関連文化講演会	花井久穂（主任研究員）	R5.10.20	江東区砂町文化センター	326
25	生誕 120 年「棟方志功展　メイキング・オブ・ムナカタ」	NHK 関連文化講演会	花井久穂（主任研究員）	R5.10.21	新宿区立新宿歴史博物館	85
26	生誕 120 年「棟方志功展　メイキング・オブ・ムナカタ」	NHK 関連文化講演会	花井久穂（主任研究員）	R5.10.27	板橋区グリーンカレッジホール	140
27	事例報告「バックヤードと表舞台を入れ子にする：「のこす、伝える―「お宝」考今昔」展（茨城県陶芸美術館 2008）」	東洋陶磁学会 50 周年記念シンポジウム「陶磁器の展示 これまでとこれから」	花井久穂（主任研究員）	R5.11.12	東京国立博物館	50
28	メイキング・オブ・メイキング・オブ・ムナカタ「棟方志功展」のつくりかた	武蔵野美術大学学芸員課程特別授業 2023	花井久穂（主任研究員）	R5.11.16	武蔵野美術大学	120
29	“A Report of the Painter,Photographer,and Their Works from the Illustrations of Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan”	Association for Asian Studies （AAS-in-ASIA,大邱,韓国）	端山聡子（主任研究員）	6 月 25 日 16:10-18:00	国立慶北大学,大邱,韓国	20
30	海を渡った芸術家と絵画の変遷	-	桝田倫広（主任研究員）	R.5.8.20	アートト	10
31	「絵画」を脱する絵画へ	-	桝田倫広（主任研究員）	R.5.9.16	アートト	10
32	公開講評会「キュレーターの眼 2023」	-	桝田倫広（主任研究員）	R.6.3.16	女子美術大学	40
33	クロストーク	-	桝田倫広（主任研究員）	R.6.2.9	東北芸術工科大学	40
34	「絵画鑑賞会 楊博・山田康平の作品とともに」	トークイベント	佐原しおり（研究員）	R5.7.8	タカ・イシイギャラリー、Yutaka Kikutake Gallery	25

35	「あなたは誰？描かれた「モデル」から読み解く近現代美術」	講演会	佐原しおり（研究員）	R5.9.30	高松市美術館	100

雑誌等論文掲載

学術書籍、研究報告書等の発行

	タイトル	執筆者氏名（職名）	掲載誌名	発行年月日
1	忘却からの召喚―作品の現存しない画家たちをめぐって	大谷省吾（副館長）	『シュルレアリスムと日本』（青幻舎）	R6.1.20
2	百年後の《ゴールドフィンガー》	三輪健仁（美術課長）	『冨井大裕　みるための時間』（水声社）	R5.7.10
3	「彫刻的映像」と「彫刻／映像」	三輪健仁（美術課長）	『わからない彫刻 みる編　彫刻の教科書2』（武蔵野美術大学出版局）	R6.3.25
4	「2章 ミュージアム・ライブラリ」「コラム2 展覧会記録の利活用」	長名大地（主任研究員）	『ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ』	R5.4.22
5	芸術のわるさ	成相肇（主任研究員）	-	R5.6.10
6	論文「記憶がイメージをむすぶ―痕跡か新たな幕開けかー」	藤田百合（特定研究員）	『第15回 茨城一陽展 表現する、自由と多様性』	R6.1.1
7	河原温〈Today〉シリーズの再考---一九六六年の《ジャーナル》の読解をつうじて	桝田倫広（主任研究員）	坂上桂子編『近代都市と絵画 パリからニューヨークへ』水声社	R5.2.20

【査読無し】論文掲載（学術誌、美術雑誌、館外の展覧会図録等）

	タイトル	執筆者氏名（職名）	掲載誌名	発行年月日
1	今泉篤男と国立近代美術館	大谷省吾（副館長）	『今泉篤男と美術』展図録（米沢市上杉博物館）	R5.7.8
2	美術館問題（3）来館者の会場での撮影をめぐって	大谷省吾（副館長）	『美術の窓』483号	R5.12.20
3	中村正義《源平海戦絵巻》　異例づくめの代表作	鶴見香織（主任研究員）	北海道立近代美術館編『揺さぶる絵　変貌する日本画のイメージ』中西出版株式会社	R5.9.16
4	言語的ダイエット	成相肇（主任研究員）	遠藤麻衣『Scraps of Defending Reanimated Marilyn』oar press	R5.4.14
5	感覚をみる	成相肇（主任研究員）	『形 forme』330号、日本文教出版	R5.5.10
6	著者インタビュー	成相肇（主任研究員）	『アートコレクターズ』2023年8月号	R5.8.25
7	大竹伸朗が語るホックニー	成相肇（主任研究員）	『美術手帖』2023年10月号	R5.9.7

8	笑いの声はとうとうたらり	成相肇 （主任研究員）	『GALLERY TAGA 2 book vol.5 笠原出』GALLERY TAGA 2	R5.10.2
9	前提の話（インスタレーションの条件と祝祭）	成相肇 （主任研究員）	山本基『Staying in Time』YUKIKOMIZUTANI	R5.10.18
10	重さをみる	成相肇 （主任研究員）	『形 forme』331 号、日本文教出版	R5.10.27
11	「詰まらない」をみる	成相肇 （主任研究員）	『形 forme』332 号、日本文教出版	R6.2.16
12	中平卓馬のあるがままを凝視する	成相肇 （主任研究員）	『芸術新潮』2024 年 3 月号	R6.3.25
13	年賀状一枚から始まった、棟方板画の冒険―水平に読む、垂直に見る	花井久穂 （主任研究員）	『目の眼』561 号	R5.5.15
14	展覧会プレビュー生誕 120 年「棟方志功展　メイキング・オブ・ムナカタ」	花井久穂 （主任研究員）	『美術の窓』2023 年 10 月号	R5.9.20
15	民藝運動とミュージアムの思想	花井久穂 （主任研究員）	デザイン史学研究会誌『デザイン史学』第 20 号	R5.12.1
16	「生涯学習を実践する場としての美術館で、ボランティアがプログラムを担う意義」	端山聡子 （主任研究員）	『横浜美術館ボランティアによるガイドプログラムができるまで 2021-2023 活動報告書』	2023 年 9 月 30 日発行(横浜美術館)
17	「正常と異常、その境界が綻ぶ瞬間」	桝田倫広 （主任研究員）	『Mitsubishi Corporation ART GATE Program 2021-2022 Exhibition』	R5
18	「期待からすり抜ける」	桝田倫広 （主任研究員）	『Mitsubishi Corporation ART GATE Program 2021-2022 Exhibition』	R5
19	「小山維子」	桝田倫広 （主任研究員）	『VOCA 展 2024』上野の森美術館	R6
20	「伝統と現代の間（あわい）ー野田哲也の 1970 年代」	都築千重子 （研究員）	『上野の森美術館所蔵 野田哲也作品集　1970-1981』日本美術協会 上野の森美術館、pp.4-7、英訳 pp.8-11	R5.08
21	A History of Western-Style Yōga Painting in Japan and Women Yōga Artists from the Meiji Period to the Pre-War Era	Yukiko Yokoyama	「AWARE : Archives of Women Artists, Research and Exhibition」（ウェブサイト）	R5.4.21
22	What were “Ultra Girls”? Women Artists in 1980s Japan	Yukiko Yokoyama	「AWARE : Archives of Women Artists, Research and Exhibition」（ウェブサイト）	R5.6.16

23	アフォーダンスと彫刻：袴田京太郎の作品を知覚するということ	横山由季子（研究員）	『アーティスト@TAD 袴田京太朗　複製する（陰の彫刻）』富山県美術館	R5.9.30

その他の執筆（機関紙、雑誌、新聞、ウェブサイト等）

	タイトル	執筆者氏名（職名）	掲載誌名	発行年月日
1	東京国立近代美術館 70 周年記念展　重要文化財の秘密	大谷省吾（副館長）	『図書館教育ニュース』1623 号	R5.4.18
2	山中信夫について（前編）	三輪健仁（美術課長）	WEB サイト「山中信夫前期展」（Takuro Someya Contemporary Art）	R5.5.27
3	山中信夫について（後編）	三輪健仁（美術課長）	WEB サイト「山中信夫後期展」（Takuro Someya Contemporary Art）	R5.7.15
4	〈教科書で出会う美術名品ガイド２〉日本画家、安田靫彦の描く《鴻門会》	鶴見香織（主任研究員）	『漢文教室』209 号、大修館書店	R5.4.1
5	近代美術の眼　太田聴雨《星をみる女性》	鶴見香織（主任研究員）	『読売新聞』（都内版）	R5.4.8
6	酵素を用いた日本画のクリーニング	鶴見香織（主任研究員）	国立アートリサーチセンターウェブサイト	R5.9.28
7	*Ogura Yuki*	鶴見香織（主任研究員）	AWARE(Archives of Women Artists, Reserchard Exhibitions)ウェブサイト	R5.11.8
8	東山魁夷　作家解説	鶴見香織（主任研究員）	ウェブサイト「ART PLATTFORM JAPAN」	R6.9.11
9	加山又造　作家解説	鶴見香織（主任研究員）	ウェブサイト「ART PLATTFORM JAPAN」	R6.9.11
10	（論文）作家解説　上村松園	中村麗子（主任研究員）	ウェブサイト「ART PLATFORM JAPAN」	R5.9.11
11	（論文）Shoen Uemura	中村麗子（主任研究員）	ウェブサイト「AWARE: Archives of Women Artists, Research and Exhibitions」（運営：AWARE: Archives of Women Artists, Research and Exhibitions）	R5.9.23
12	近代美術の眼　佐藤玄々（朝三）《動》	成相肇（主任研究員）	『読売新聞』（都内版）	R5.5.13
13	作家解説　大竹伸朗	成相肇（主任研究員）	国立アートリサーチセンター「日本アーティスト事典」	R5.9.11

			https://artplatform.go.jp/ja/artists/A1169	
14	成相肇インタビュー	成相肇 （主任研究員）	Tokyo Art Beat https://www.tokyoartbeat.com/articles/-/hajime-nariai-interview-202311	R5.11.13
15	横尾忠則インタビュー	成相肇 （主任研究員）	Tokyo Art Beat https://www.tokyoartbeat.com/articles/-/tadanori-yokoo-interview-202311	R5.11.27
16	眼指、光舐め	成相肇 （主任研究員）	Takuro Someya Contemporary Art ウェブサイト https://tsca.jp/ja/artist/mayumi-hosokura/#text	R5.12.21
17	空想書店	成相肇 （主任研究員）	『読売新聞』	R6.1.14
18	審査講評、作品評2点	成相肇 （主任研究員）	『アート・ミュージアム・プレス2023』山口県美術展覧会実施協議会	R6.3.7
19	書評　深川雅文著『生きるアート　折元立身』	成相肇 （主任研究員）	『週刊読書人』読書人	R6.3.15
20	生誕120年「棟方志功展　メイキング・オブ・ムナカタ」	花井久穂 （主任研究員）	文化庁広報誌ぶんかる連載「アートダイアリー」	R5.9.1
21	生誕120年「棟方志功展　メイキング・オブ・ムナカタ」（1）「世界のムナカタ」をたどる	花井久穂 （主任研究員）	東京新聞首都圏版	R5.10.4
22	生誕120年「棟方志功展　メイキング・オブ・ムナカタ」（2）「読みもの」としての版画	花井久穂 （主任研究員）	東京新聞首都圏版	R5.10.11
23	生誕120年「棟方志功展　メイキング・オブ・ムナカタ」（3）大和し美し「藻草の柵」日本神話への憧れ	花井久穂 （主任研究員）	東京新聞首都圏版	R5.10.18
24	生誕120年「棟方志功展　メイキング・オブ・ムナカタ」（4）幾利需當頌耶蘇十二使徒屏風　最大サイズを狙った屏風	花井久穂 （主任研究員）	東京新聞首都圏版	R5.11.15
25	生誕120年「棟方志功展　メイキング・オブ・ムナカタ」（5）「二菩薩釈迦十大弟子」（右隻）新たに彫り直された菩薩	花井久穂 （主任研究員）	東京新聞首都圏版	R5.11.22
26	生誕120年「棟方志功展　メイキング・オブ・ムナカタ」（6）鍵板画柵「大首の柵」美人大首絵の原型に	花井久穂 （主任研究員）	東京新聞首都圏版	R5.11.29
27	「Artist in Focus テリー・ウィンタース」	桝田倫広 （主任研究員）	『美術手帖』2023年7月号	R5.6.7
28	「初期作品における「様式の折衷」を可能にする条件とは？」	桝田倫広 （主任研究員）	『美術手帖』2023年10月号	R5.9.7

29	仮設的（または暫定的）な絵画（Provisional Painting）と，マイクロポップ，そしてアノーマリー――絵画のモダン，ポストモダンのあとで 1	桝田倫広（主任研究員）	『コメット通信』No.39	R.5.10.31
30	三瀬夏之介作品の形式について――絵画のモダン，ポストモダンのあとで 2	桝田倫広（主任研究員）	『コメット通信』No.42	R6.1.31
31	「近代美術の眼　大辻清司《破りすてたあとで拾った大事なデータのある封筒》」	増田玲（主任研究員）	読売新聞都内版	R5・6・10
32	「追悼・鈴木一誌　「十全に横たわらせる」作業」	増田玲（主任研究員）	週刊読書人（読書人）	R5・9・29
33	「中平卓馬の「実像」を探る」	増田玲（主任研究員）	『版画芸術』No.203 2024 春（阿部出版）	R6・3・1
34	「戦後写真を変えた「挑発」の軌跡」	増田玲（主任研究員）	朝日新聞	R6・3・14
35	「十亀広太郎 「御茶ノ水ニコライ堂」「東京新橋側ヨリ築地―逓信省等―」「東京神田明神附近」」	横山由季子（研究員）	『美術の窓』	R5.8.19
36	「十亀広太郎　御茶ノ水ニコライ堂」	横山由季子（研究員）	近代美術の眼『読売新聞』	R5.9.9
37	「変容する絵画―「安藤裕美個展　学舎での 10 年をめぐって「ナビ派」と「パープルーム」への眼差し」レビュー」	横山由季子（研究員）	『Tokyo Art Beat』株式会社アートビート	R5.12.14
38	近代美術の眼「 田中敦子《作品 66 - SA》」	小林紗由里（任期付研究員）	『読売新聞』（都内版）	R5.7.8
39	Yeji Sei Lee「韓国の「母」と自己の関係性を見つめて」（活動支援生インタビュー vol.50）	小林紗由里（任期付研究員）	クマ財団ウェブサイト	R5.12.6
40	「東京国立近代美術館はなぜ「女性と抽象」展を開催するのか。コレクションにおける女性の作家の再発見とジェンダーバランスについて担当者に聞く」（インタビュー）	小川綾子（研究補佐員）、横山由季子（研究員）、小林紗由里（研究員）	『Tokyo Art Beat』株式会社アートビート	R5.10.20
41	「近代美術の眼」福島秀子《凝視》	小川綾子（研究補佐員）	読売新聞都内版	R5.10.7
42	東京国立近代美術館はなぜ「女性と抽象」展を開催するのか。コレクションにおける女性の作家の再発見とジェンダーバランスについて担当者に聞く	小川綾子（研究補佐員）、横山由季子（研究員）、小林紗由里（研究員）	『Tokyo Art Beat』株式会社アートビート	R5.10.20
43	論文「近代美術の眼　杉浦邦恵《Botanicus 18》」	堀田文（研究補佐員）	読売新聞（都内版）	R5.11.11
44	近代美術の眼「山村豊成（耕花）《「梨園の華」より　十三世守田勘弥のジャン・バルジャン》」	森卓也（研究補佐員）	『読売新聞』朝刊（都内版）	R6.2.10
45	「麗子、生誕 110 年」	森卓也（研究補佐員）	『美術の窓』487 号（生活の友社）	R6.3.20

（国立工芸館）

学会等発表

	タイトル	学会等名	発表者氏名（職名）	日付	場所	聴講者数（人）
1	日本の伝統陶芸の歴史展開と未来への展望	愛知県陶磁美術館	唐澤昌宏（国立工芸館長）	R5.4.15	愛知県陶磁美術館本館地下1階講堂	45
2	北陸の工芸―高岡と金沢を中心に―	高岡市立博物館	唐澤昌宏（国立工芸館長）	R5.4.20	高岡市立博物館ホール	56
3	特別セッションⅠ「北陸の文化観光拠点」	文化経済学会	唐澤昌宏（国立工芸館長）	R5.7.8	團十郎芸術劇場うらら小ホール	150
4	日本の伝統陶芸のあゆみと未来への展望	兵庫陶芸美術館	唐澤昌宏（国立工芸館長）	R5.9.8	兵庫陶芸美術館 研修棟1階セミナー室	58
5	いしかわの工芸、その技と美	第38回国民文化祭、第23回全国障害者芸術文化祭「いしかわ百万石文化祭2023」情報発信イベント	唐澤昌宏（国立工芸館長）	R5.9.24	朝日ホール	417
6	石川・金沢の工芸と国立工芸館のコレクション	令和5年度目黒区かなざわ講座	唐澤昌宏（国立工芸館長）	R5.10.28	中目黒住区センター第5・6会議室	58
7	トークセッション「国立工芸館とこれからの工芸―12人の工芸・美術作家による新作制作プロジェクトから―」	KOGEI Art Fair Kanazawa 2023 実行委員会	唐澤昌宏（国立工芸館長）	R5.12.1	ハイアットセントリック 金沢2階	79
8	受賞作家と審査員によるトーク	菊池寛実記念 智美術館	唐澤昌宏（国立工芸館長）	R6.1.13	菊池寛実記念 智美術館 展示室ホール	50

【査読無し】論文掲載（学術誌、美術雑誌、館外の展覧会図録等）

	タイトル	執筆者氏名（職名）	掲載誌名	発行年月日
1	走泥社の前衛性と現代性 『走泥社再考　前衛陶芸が生まれた時代』	岩井美恵子（工芸課長）	京都国立近代美術館『視る』529号	R6.3.14
2	陶芸史を映す―田中佐次郎の作陶	唐澤昌宏（国立工芸館長）	『田中佐次郎展』図録	R5.6.7
3	無釉焼締陶の美―伊勢﨑晃一朗の“やきもの”	唐澤昌宏（国立工芸館長）	『陶説』843	R5.10.1
4	寺西松太の漆芸―「蜻蛉塗」を極める	唐澤昌宏（国立工芸館長）	『寺西松太展』図録	R5.10.3
5	造形表現としての茶陶―十三代三輪休雪の想い	唐澤昌宏（国立工芸館長）	『十三代三輪休雪展』図録	R5.10.20

6	近代以降の工芸制作と茶の湯のうつわ	唐澤昌宏 （国立工芸館長）	『加賀茶道のみやび』	R5.11.1
7	林恭助の作陶と思考	唐澤昌宏 （国立工芸館長）	『林恭助展』図録	R5.11.1
8	近代の工芸家と数寄者―交流が育んだ美の凄み	唐澤昌宏 （国立工芸館長）	『近代の工芸家と数寄者』展図録	R5.11.3
9	近代・現代陶磁における調査・研究の深化	唐澤昌宏 （国立工芸館長）	『東洋陶磁学会誌』100	R5.12.31

その他の執筆（機関紙、雑誌、新聞、ウェブサイト等）

	タイトル	執筆者氏名 （職名）	掲載誌名	発行年月日
1	伊能一三／村本真吾論	岩井美恵子 （工芸課長）	ガレリアポンテリーフレット	R5.10.14
2	「［工芸館の窓から］」観光客誘致　積極的ＰＲを	岩井美恵子 （工芸課長）	『読売新聞』（石川県版）	R5.12.21
3	東京から金沢へ―国立工芸館、移転開館からの３年間	岩井美恵子 （工芸課長）	「キュレーターズノート」『art scape』	R5.7.1
4	「［工芸館の窓から］皇室と石川 ゆかりの名品」	北村仁美 （主任研究員）	『読売新聞』（石川県版）	R5.10.14
5	「［工芸館の窓から］淡い青磁釉 優雅の極み」	北村仁美 （主任研究員）	『読売新聞』（石川県版）	R5.11.3
6	「「鷺蒔絵筥」松田権六　戦後の蒔絵表現刷新」	北村仁美 （主任研究員）	『読売新聞』（石川県版）	R5.11.10
7	「鳳凰菊文様蒔絵飾棚」　金蒔絵 高貴な輝き放つ	北村仁美 （主任研究員）	『読売新聞』（石川県版）	R5.11.22
8	「［工芸館の窓から］」流水、潮騒…水の音想像して	中川智絵 （特定研究員）	『読売新聞』（石川県版）	R5.9.9
9	「陶土で『らしさ』細部に宿る：今井完眞〈フシギバナ〉」	今井陽子 （主任研究員）	『読売新聞』（石川県版）	R5.4.1
10	「漆できらめく水注世界：田口義明〈乾漆蒔絵螺鈿蓋物「遊」〉」	今井陽子 （主任研究員）	『読売新聞』（石川県版）	R5.4.2
11	「伝説の３匹　器満たす迫力：葉山有樹〈超古代ポケモン玉盌〉」	今井陽子 （主任研究員）	『読売新聞』（石川県版）	R5.4.12
12	アートダイアリー「ポケモン×工芸展―美とわざの大発見」	今井陽子 （主任研究員）	『ぶんかる』文化庁	R5.4.25
13	「水由来の模様で彩る：植葉香澄〈水文メッソン〉」	今井陽子 （主任研究員）	『読売新聞』（石川県版）	R5.5.11
14	「8色の点と点　鮮やか：池本一三〈湖のほとりで〉」	今井陽子 （主任研究員）	『読売新聞』（石川県版）	R5.5.12
15	「［工芸館の窓から］素材や技法「タイプ」に重ね」	今井陽子 （主任研究員）	『読売新聞』（石川県版）	R5.5.13
16	「ポケモンと工芸の共鳴」	今井陽子 （主任研究員）	『Switch』6月号	R5.5.20
17	「第70回日本伝統工芸展染織作品をみる」	今井陽子 （主任研究員）	『美しいキモノ』冬号	R5.11.20
18	「メイド・イン・成城　Vol.18　伝統×革新。アートの可能性に心が弾む展覧会」	今井陽子 （主任研究員）	『エスフル　成城だより』（石川県版）	R5.12.8

19	「小宮康義《江戸小紋 着尺 「ゲンガー・ゴースト」》特別解説」	今井陽子（主任研究員）	『美しいキモノ』インスタグラム	R5.5.18
20	「『ポケモン×工芸展―美とわざの大発見―』小宮康義作品解説」	今井陽子（主任研究員）	『婦人画報』ウェブサイト	R5.5.27
21	「［工芸館の窓から］」多様な「タイプ」工芸と共鳴	唐澤昌宏（国立工芸館長）	『読売新聞』（石川県版）	R5.4.8
22	「金属色　輝き引き出す：桂盛仁〈帯留　ブラッキー「威嚇」「立ち姿」〉〈ブローチ　ブラッキー〈眠り〉」	唐澤昌宏（国立工芸館長）	『読売新聞』（石川県版）	R5.5.13
23	第10回菊池ビエンナーレに寄せて	唐澤昌宏（国立工芸館長）	『第10回菊池ビエンナーレ』図録	R5.12.16
24	「制作の裏側」から見えてきたこと	唐澤昌宏（国立工芸館長）	『令和5年度金沢美術工芸大学大学院博士後期課程1年研究制作展』記録集	R6.3.29
25	「氷柱の破片　光の表情映す：新實広記〈Vessel―TSURARA－」	日南日和（研究補佐員）	『読売新聞』（石川県版）	R5.5.18
26	「［工芸館の窓から］版画表現 面白さに迫る」	中尾優衣（主任研究員）	『読売新聞』（石川県版）	R6.1.27
27	「［工芸館の窓から］1977年の開館展 振り返る」	中尾優衣（主任研究員）	『読売新聞』（石川県版）	R6.2.10
28	「［工芸館の窓から］閉架資料閲覧予約不要に」	廣川晶子（研究員）	『読売新聞』（石川県版）	R5.6.10
29	美術館の外から中へ―国立工芸館、移転後のライブラリ	廣川晶子（研究員）	「キュレーターズノート」『art scape』	R6.3.25
30	「［工芸館の窓から］変幻自在の水の姿とらえる」	小島美里（特定研究員）	『読売新聞』（石川県版）	R5.7.15

ウ　京都国立近代美術館

学会等発表

	タイトル	学会等名	発表者氏名（職名）	日付	場所	聴講者数（人）
1	「福永治（京都国立近代美術館長）、石堂裕昭（福井市美術館長）、土屋公雄（彫刻家）の3氏による講演会＆トーク」	養浩館庭園開園30周年記念「うつしょの庭 土屋公雄展」	福永治（館長）	R5.7.2	福井市立郷土博物館	54
2	公開特別講義「走泥社展を開催して」	多治見市陶磁器意匠研究所	大長智広（主任研究員）	R5.10.20	多治見市陶磁器意匠研究所	50
3	特別講義「走泥社展を開催して」	金沢美術工芸大学	大長智広（主任研究員）	R5.10.31	金沢美術工芸大学	60
4	受賞作家＆審査員によるトーク　宇佐美朱里、大長智広	展覧会「第10回菊池ビエンナーレ」	大長智広（主任研究員）	R6.1.20	菊池寛実記念 智美術館	15
5	記念講演会「今なぜ走泥社なのか」	展覧会「走泥社再考－前衛陶芸が生まれた時代」	大長智広（主任研究員）	R6.1.27	岐阜県美術館	100
6	記念講演会「富本憲吉の模様」	工芸美術創工会総会	大長智広（主任研究員）	R6.2.11	みやこめっせ	40

7	記念講演会「今なぜ走泥社なのか」	展覧会「走泥社再考－前衛陶芸が生まれた時代」	大長智広（主任研究員）	R6.3.20	岡山県立美術館	45
8	「京都国立近代美術館と大坂画壇」	京坂文化サロン・プロジェクト 夏季ワークショップ（国際共同研究プロジェクト「上方文化サロン：人的ネットワークから解き明かす文化創造空間 1780-1880」）	平井啓修（主任研究員）	R5.7.29	立命館大学アート・リサーチセンター+オンライン併用	会場：11名、オンライン：11名
9	「京都から考える大阪画壇」	佛教大学オープンラーニングセンター講座　京都新聞総合研究所提携講座 アートサロン	平井啓修（主任研究員）	R6.1.22	佛教大学オープンラーニングセンター	会場：15名、オンライン：100名
10	「画壇の応援団―画家と実業家の幸福な関係」	藤本英子退任記念プレイフルイベント「画壇対決の日」	平井啓修（主任研究員）	R6.3.28	京都市立芸術大学Ｇ棟L13	35
11	美術館における視覚障害者の絵画鑑賞の内容・方法・鑑賞教材等のアンケート 集計	全日本博物館学会第49回研究大会	松山沙樹（研究員）	R5.7.1	國學院大學	200
12	視覚支援学校の鑑賞学習についての一考察（4）～先行研究との比較から～	日本特殊教育学会第61回大会	松山沙樹（研究員）	令和5年8月25～27日	横浜国立大学	300
13	「マティスと現代美術家たち　―《ブルー・ヌード》を中心に―」	日仏美術学会	渡辺亜由美（特定研究員）	R5.9.23	京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス	100名（オンライン含む）
14	「展示室の外側」	公益財団法人きょうと視覚文化振興財団	渡辺亜由美（特定研究員）	R6.1.28	同志社大学	20名（オンライン含む）

雑誌等論文掲載

【査読無し】論文掲載（学術誌、美術雑誌、館外の展覧会図録等）

	タイトル	執筆者氏名（職名）	掲載誌名	発行年月日
1	「土屋公雄の歩み」	福永治（館長）	『養浩館庭園開園30周年記念 うつしょの庭 土屋公雄展』（福井市商工労働部観光文化局文化振興課）	R5.6.17
2	Felice [Lizzi] Rix-Ueno: Design-Fantasien aus Wien / Felice [Lizzi] Rix-Ueno: Design Fantasy Originating in Vienna	池田祐子（副館長･学芸課長）	Lilli Hollein and Anne-Katrin Rossberg (eds.), *Sterne, Fadern, Quasten. Die Wiener-Werkstätte-*	R5.11

			Künstlerin Felice Rix-Ueno (1893-1967)/ Stars, Feathers, Tassels: The Wiener-Werkstätte Artists Felice Rix-Ueno (1893-1967), exh. cat., MAK - Museum für angewandte Kunst Wien	
3	［展覧会スポットライト］開館 60 周年記念　小林正和とその時代―ファイバーアート、その向こうへ	池田祐子（副館長･学芸課長）	『炎芸術』No. 157	R5.12
4	プレシャスボックス　森口邦彦×ヴァンクリーフ&アーペル　手の思想	大長智広（主任研究員）	『PRECIOUS BOX』Van Cleef & Arpels	R5
5	伊村俊見の黒陶	大長智広（主任研究員）	『伊村俊見　黒陶』白倉窯　伊村俊見	R5
6	いま、なぜ河本五郎なのか	大長智広（主任研究員）	『河本五郎　反骨の陶芸』図録　公益財団法人菊池美術財団	R5.4.22
7	展覧会スポットライト「開館 60 周年記念　走泥社再考　前衛陶芸が生まれた時代」	大長智広（主任研究員）	『炎芸術』No.155　阿部出版	R5.8.1
8	走泥社再考　前衛陶芸が生まれた時代	大長智広（主任研究員）	『陶説』No.841　日本陶磁協会	R5.8.1
9	近藤高弘展によせて	大長智広（主任研究員）	『近藤高弘 陶芸―火から生まれる水の表象』髙島屋	R5.9.13
10	川上力三の位相シリーズについて	大長智広（主任研究員）	『川上力三　位相シリーズ』　川上力三	R5.9
11	第 70 回日本伝統工芸展受賞作品解説（文部科学大臣賞　大村幸太郎《友禅訪問着「波に魚」》）／（日本工芸会新人賞　鈴田清人《木版摺更紗着物「蒼晶」》）	大長智広（主任研究員）	『第 70 回日本伝統工芸展』　日本工芸会	R5.9
12	作家解説（庄村久喜）／作家解説（中村清吾）	大長智広（主任研究員）	『陶芸の進行形』　公益財団法人菊池美術財団	R5.9
13	作品講評（優秀賞　宇佐美朱里　《土環》）	大長智広（主任研究員）	『第 10 回菊池ビエンナーレ展』　公益財団法人菊池美術財団	R5.12
14	日本陶磁調査報告「木村定三コレクションにおける日本陶磁（近現代）について」および「作品解説」	大長智広（主任研究員）	『愛知県美術館 研究紀要 第 30 号 木村定三コレクション編』　愛知県美術館	R6.2
15	重松あゆみの現在地	大長智広（主任研究員）	『重松あゆみ 1985-2023』　重松あゆみ	R6.3
16	（タイトルなし）	牧口千夏（主任研究員）	『MARCEL BROODTHEAERS: Works, Films and the Complete Editions &	R6.3.30

			Books』展図録（発行：TARO NASU）	
17	「時間をながめ、「線」で描く」	平井啓修（主任研究員）	『柴垣美恵展』リーフレット（ギャラリーモーニング）	R5.10

その他の執筆（機関紙、雑誌、新聞、ウェブサイト等）

	タイトル	執筆者氏名（職名）	掲載誌名	発行年月日
1	「京の歴史重視 地方美術館の手本」	福永治（館長）	京都新聞 朝刊（京都新聞社）	R5.6.4
2	「伝統工芸展に思うこと」	福永治（館長）	『日本工芸会 近畿支部会報』35号（公益社団法人日本工芸会近畿支部）	R5.8.1
3	「ネット社会と美術」	福永治（館長）	『美術京都』第55号（中信美術奨励基金）	R6.3
4	審査委員講評	福永治（館長）	『Kyoto Art for Tomorrow 2024 京都府新鋭選抜展』（京都府、京都文化博物館）	R6.3
5	連載「ウィーン　近代化と芸術　十選」	池田祐子（副館長･学芸課長）	『日本経済新聞』朝刊	R5.7.12～7.14, 7.17～7.21, 7.24～7.25
6	小林正和とその時代―ファイバーアート、その向こうへ	池田祐子（副館長･学芸課長）	文化庁広報誌『ぶんかる』	R5.12
7	Fuku Akino	小倉実子（主任研究員）	AWARE(https://awarewomenartists.com/artiste/fuku-akino/)	R6.1
8	Hisako Kajiwara	小倉実子（主任研究員）	AWARE(https://awarewomenartists.com/en/artiste/hisako-kajiwara/)	R6.1
9	京都画壇の青春 上　身近な様子現代的に	小倉実子（主任研究員）	読売新聞	R5.10.24
10	京都画壇の青春 中　色彩にゴーギャンの影響	小倉実子（主任研究員）	読売新聞	R5.10.25
11	京都画壇の青春 下　西洋の呪縛から解放	小倉実子（主任研究員）	読売新聞	R5.10.27
12	開館60周年記念　走泥社再考　前衛陶芸が生まれた時代	大長智広（主任研究員）	『新美術新聞』	R5.8.1
13	前衛陶芸が生まれた時代　走泥社再考展から①八木一夫「ザムザ氏の散歩」	大長智広（主任研究員）	『京都新聞　朝刊』	R5.8.2
14	前衛陶芸が生まれた時代　走泥社再考展から②鈴木治「白釉黒絵ピエロ文広口瓶」	大長智広（主任研究員）	『京都新聞　朝刊』	R5.8.3

15	前衛陶芸が生まれた時代　走泥社再考展から③森里忠男「作品 B」	大長智広（主任研究員）	『京都新聞　朝刊』	R5.8.4
16	前衛陶芸が生まれた時代　走泥社再考展から④山田光「塔」	大長智広（主任研究員）	『京都新聞　朝刊』	R5.8.7
17	前衛陶芸が生まれた時代　走泥社再考展から⑤林康夫「ホットケーキ」	大長智広（主任研究員）	『京都新聞　朝刊』	R5.8.8
18	鑑査講評	大長智広（主任研究員）	『日本工芸会 近畿支部会報』第 35 号　日本工芸会近畿支部	R5.8
19	寄稿「自由な造形切り開く」（特別展　走泥社再考－前衛陶芸が生まれた時代－）	大長智広（主任研究員）	『山陽新聞　朝刊』	R6.2.26
20	作品鑑賞の「当たり前」を問い直す―京都国立近代美術館「感覚をひらく」プロジェクト	松山沙樹（研究員）	『新ノーマライゼーション』	R5.7.25
21	感覚をひらく―新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業　令和５年度実施報告書	松山沙樹（研究員）	感覚をひらく―新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業　令和５年度実施報告書	R6.2.29
22	「鬼丘鬼鏟：時間的臨摹 レヴュー 暗闇が照らすもの」	渡辺亜由美（特定研究員）	AMeeT	R6.1.18
23	「吹けば風」	渡辺亜由美（特定研究員）	芸術批評誌 REAR	R6.2.29
24	アメルバッハ・キャビネット：コンテキスト分析による原秩序類推の試み	村松綾（任期付研究員）	一般公開無し	R6.1.25

エ　国立映画アーカイブ

学会等発表

	タイトル	学会等名	発表者氏名（職名）	日付	場所	聴講者数（人）
1	上映作品の紹介 The Dragon Painter「蛟龍を描く人」（1919 年・早川雪洲主演、ウィリアム・ワーシントン監督）	第 26 回サンフランシスコ無声映画祭	岡島尚志（館長）	R.5.7.14	Castro Theatre	-
2	上映作品の紹介 Walk Cheerfully by Ozu「朗かに歩め」（1930 年・小津安二郎）	第 26 回サンフランシスコ無声映画祭	岡島尚志（館長）	R5.7.15	Castro Theatre	-
3	上映作品の紹介「颱風」The Typhoon（1914 年・早川雪洲主演、レジナルド・バーカー監督）	「サイレントシネマ・デイズ 2023」	岡島尚志（館長）	R.5.10.3	国立映画アーカイブ・長瀬記念ホール OZU	-
4	「世界が見た小津映画－－映画祭、シネマテークでの上映と反響」	小津安二郎監督生誕 120 年記念イベント「世界の OZU、市井の小津」	岡島尚志（館長）	R.5.12.2	鎌倉市川喜多映画記念館	-

5	「野田真吉特集：プログラム 3」上映前解説	山形国際ドキュメンタリー映画祭 2023	大澤浄（主任研究員）	R5.10.7	山形市民会館小ホール	224
6	「父ありき」上映後トーク	第 36 回東京国際映画祭	大澤浄（主任研究員）	R5.10.25	角川シネマ有楽町	200
7	「インディーズ映画の復元と保存の重要性」シンポジウム	第 36 回東京国際映画祭	大澤浄（主任研究員）	R5.10.30	TOHO シネマズシャンテ（スクリーン 1）	200
8	「父ありき」上映前解説	特集上映「小津安二郎 モダン・ストーリーズ」	大澤浄（主任研究員）	R5.12.9	Bunkamura ル・シネマ渋谷宮下	200
9	「120 年目の清水宏」講演	「清水宏生誕 120 年シンポジウム」	大澤浄（主任研究員）	R5.12.19	アテネ・フランセ文化センター	150
10	「野田真吉監督特集 モノと生の祝祭」トーク	第 18 回山形国際ドキュメンタリー映画祭	岡田秀則（主任研究員）	R5.10.7	山形市民会館小ホール	244
11	アート・ミーツ・シネマ 戦後日本の美術映画と 2 つの美術館	京橋彩区芸術文化講座	岡田秀則（主任研究員）	R5.10.11	ミュージアムタワー京橋 16 階カフェ	38
12	ウェブサイト「映画遺産―国立映画アーカイブ映画資料ポータル―」の開設	全国映画資料アーカイブサミット 2024	岡田秀則（主任研究員）	R6.1.26	オンライン	133
13	映画資料アーカイブと地域連携―その可能性を探る	全国映画資料アーカイブサミット 2024	岡田秀則（主任研究員）	R6.1.26	オンライン	144
14	南極探検記録映画の複数バージョン――1930・1950 年版の同定研究	日本映像学会第 49 回大会	大傍正規（主任研究員）	R5.6.11	明治学院大学	35
15	『南極探検活動寫眞』(1912)――南極探検隊後援会と白瀬隊による活動写真興行	NPO 法人白瀬南極探検 100 周年記念会「調査専門委員会調査・研究・検証報告会」	大傍正規（主任研究員）	R5.11.9	SHIRASE5002	25
16	『狂った一頁』［染色版］上映前解説	福岡市総合図書館、映像ホール・シネラ実行委員会、国立映画アーカイブ、チネテカ・ディ・ボローニャ財団、イタリア文化会館共催「蘇ったフィル	大傍正規（主任研究員）	R6.2.9	福岡市総合図書館映像ホール・シネラ	52

		ムたち チネマ・リトロバート映画祭」				
17	『サイレント短篇集/サタン狂騒曲』上映前解説	福岡市総合図書館、映像ホール・シネラ実行委員会、国立映画アーカイブ、チネテカ・ディ・ボローニャ財団、イタリア文化会館共催「蘇ったフィルムたち チネマ・リトロバート映画祭	大傍正規（主任研究員）	R6.2.10	福岡市総合図書館映像ホール・シネラ	43
18	映像に見る白瀬隊の偉業――最古の長篇記録映画『日本南極探検』の新発掘版をめぐって	令和５年度にかほ市郷土史市民講座	大傍正規（主任研究員）	R6.3.9	にかほ市金浦公民館	30
19	Hairdressers as Women Pioneers in Japanese Filmmaking	[2023 FIAF Congress] SYMPOSIUM: Women, cinema, and film archives	冨田美香（主任研究員）	R5.4.18	Casa del lago UNAM	-
20	109 シネマズプレミアム新宿で新たな映画体験を フィルム映画を堪能する	「ニュー・シネマ・パラダイス」鑑賞会 トークイベント	冨田美香（主任研究員）	R5.5.22	109 シネマズプレミアム新宿 シアター8	-
21	「狂った一頁」上映前イントロダクション	第 37 回チネマ・リトロバート映画祭「衣笠貞之助：影から光」	冨田美香（主任研究員）	R5.6.25	チネマ・ジョリー	325
22	パネルディスカッション「映画教育の、社会的意義と映画産業における可能性」 モデレーター	「映画教育国際シンポジウム 2023 ～海外の事例から次のステップにむけて」、主催：東京国際映画祭、共催：国立映画アーカイブ、企画運営：一般社団法人こども映画教室	冨田美香（主任研究員）	R5.10.28	国立映画アーカイブ小ホール	122

23	資料コレクションが伝える天活旧派澤村四郎五郎映画の魅力	国立映画アーカイブ　常設展ギャラリートーク	冨田美香（主任研究員）	R5.11.4	国立映画アーカイブ６F	30
24	日本における教育・宣伝映画の歩みと宗教 ―無声映画の時代―	人文研アカデミー2023 レクチャー上映会「大正期の映画と民衆宗教」	冨田美香（主任研究員）	R5.11.5	京都大学百周年時計台記念館 百周年記念ホール	-
25	「映画表現と音　ミナトーキー」ディスカッションの司会	「NFAJ&J.S.A.アーカイブセミナー　映画表現と音　ミナトーキー」、主催：国立映画アーカイブ、協同組合日本映画・テレビ録音協会	冨田美香（主任研究員）	R5.12.2	国立映画アーカイブ 小ホール	65
26	「体験的映画編集論　日活（調布）編」聞き手・司会	「NFAJ & J. S. E. アーカイブセミナー　体験的映画編集論」主催：国立映画アーカイブ、協同組合日本映画・テレビ編集協会	冨田美香（主任研究員）	R6.1.12	国立映画アーカイブ 小ホール	46
27	「体験的映画編集論　京都映画編」聞き手・司会	「NFAJ & J. S. E. アーカイブセミナー　体験的映画編集論」主催：国立映画アーカイブ、協同組合日本映画・テレビ編集協会	冨田美香（主任研究員）	R6.1.13	国立映画アーカイブ 小ホール	66
28	「復元プロジェクトの概要とスーパーテクニラマ 70 版『釈迦』の調査報告」	「[上映と報告]日本初 70㎜ 映画『釈迦』の復元にむけた調査報告」、主催：京都府京都文化博物館、東京国立近代美術館、国立映画アーカイブ、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研	冨田美香（主任研究員）	R6.3.20	京都文化博物館フィルムシアター	160

		究（C）「日本における 70 ミリ劇映画文化の受容とそのイメージの復元」（研究代表者・冨田美香）				
29	映画のデジタル化と現物保存	都市のカルチュラル・ナラティヴ 地域の文化と記憶を映像資料で読み解くラーニング・ワークショップ「コレクティヴ・メモリー技術編」	三浦和己（主任研究員）	R5.9.27	慶應義塾大学アート・センター	20
30	『愛と死の谷間』上映前解説	MoMAK FIlms2023	玉田健太（研究員）	R5.8.26	京都国立近代美術館 １階講堂	37
31	『わかれ雲』上映前解説	MoMAK FIlms2023	玉田健太（研究員）	R5.8.27	京都国立近代美術館 １階講堂	30
32	『チェチリア・マンジーニ作品集』上映前解説（1 回目）	京都文化博物館、国立映画アーカイブ、チネテカ・ディ・ボローニャ財団、イタリア文化会館共催「蘇ったフィルムたち チネマ・リトロバート映画祭」	中西香南子（特定研究員）	R6.3.15	京都文化博物館フィルムシアター	71
33	『チェチリア・マンジーニ作品集』上映前解説（2 回目）	京都文化博物館、国立映画アーカイブ、チネテカ・ディ・ボローニャ財団、イタリア文化会館共催「蘇ったフィルムたち チネマ・リトロバート映画祭」	中西香南子（特定研究員）	R6.3.15	京都文化博物館フィルムシアター	37
34	2023 年度ミュージアム・シアター「女性たちの映像表現」上映後トーク	2023 年度ミュージアム・シアター「女性たちの映像表現」	中西香南子（特定研究員）	R6.3.24	埼玉県立近代美術館	80

35	無声映画期における女性脚本家たちの台頭――時代劇の林義子（日活）・社喜久江（マキノ・東亜）と現代劇の水島あやめ（松竹）を中心に	日本映像学会第49回大会	森宗厚子（特定研究員）	R5.6.11	明治学院大学	50
36	映像遺産の保存と活用 無声映画期の女性脚本家作品を見る	相模原市学習センター令和５年度 研究機関等公開講座「国立映画アーカイブコース」	森宗厚子（特定研究員）	R5.11.10	国立映画アーカイブ相模原分館	27
37	『狂った一頁』［染色版］上映前解説（1回目）	京都文化博物館、国立映画アーカイブ、チネテカ・ディ・ボローニャ財団、イタリア文化会館共催「蘇ったフィルムたち チネマ・リトロバート映画祭」	森宗厚子（特定研究員）	R6.3.16	京都文化博物館フィルムシアター	47
38	『狂った一頁』［染色版］上映前解説（2回目）	京都文化博物館、国立映画アーカイブ、チネテカ・ディ・ボローニャ財団、イタリア文化会館共催「蘇ったフィルムたち チネマ・リトロバート映画祭」	森宗厚子（特定研究員）	R6.3.16	京都文化博物館フィルムシアター	34
39	新発掘『深川美談 孝女てい子』『筑紫の太刀風 石童丸』	神戸発掘映画祭2023	佐崎順昭（客員研究員）	R5.10.28	神戸映画資料館	－
40	アニメーション調査研究	神戸発掘映画祭2023	佐崎順昭（客員研究員）	R5.10.29	神戸映画資料館	－
41	ウェブサイト「関東大震災映像デジタルアーカイブ」について	関東大震災100年シンポジウム「関東大震災の建築アーカイブズをつなぐ」	とちぎあきら（客員研究員）	R5.9.27	清水建設株式会社技術研究所	95
42	地域史・災害史資料としての映像の可能性	球磨川映像学 第1回 流域史を編む／読む	とちぎあきら（客員研究員）	R5.12.6	熊本県立大学CPDホール	20
43	東宝争議の〝真相〟を追う　Part1	ギャラリートーク	本地　陽彦（客員研究員）	R5.8.5	国立映画アーカイブ	59
44	東宝争議の〝真相〟を追う　Part2	ギャラリートーク	本地　陽彦（客員研究員）	R5.9.2	国立映画アーカイブ	52

45	映像アーカイブにおけるノンフィルム・マテリアルの収集・保存・利活用		本地　陽彦 （客員研究員）	R5.11.6	早稲田大学	－
46	ナショナル・アイデンティティの再構築と反共主義 韓国映画における在日朝鮮人の表象	日本映像学会第49回大会	具　珉婀 （研究補佐員）	R5.6.11	明治学院大学	35
47	『カルプナ』（1948）、その想像力の始まり	福岡市総合図書館、映像ホール・シネラ実行委員会、国立映画アーカイブ、チネテカ・ディ・ボローニャ財団、イタリア文化会館共催「蘇ったフィルムたち チネマ・リトロバート映画祭」	具　珉婀 （研究補佐員）	R6.2.7	福岡市総合図書館	25
48	チェチリア・マンジーニと闘争の詩学	福岡市総合図書館、映像ホール・シネラ実行委員会、国立映画アーカイブ、チネテカ・ディ・ボローニャ財団、イタリア文化会館共催「蘇ったフィルムたち チネマ・リトロバート映画祭」	具　珉婀 （研究補佐員）	R6.2.8	福岡市総合図書館	20

雑誌等論文掲載

学術書籍、研究報告書等の発行

	タイトル	執筆者氏名 （職名）	掲載誌名	発行年月日
1	The Konicolor Monoplane One-shot Camera No.101	岡田秀則 （主任研究員）	*Tales from The Vaults* (FIAF, Technès)	R5.6.30
2	マキノ映画にみる京都の花街・舞妓表象　―万国博覧会から『祇園小唄 繪日傘 第一話 舞ひの袖』(一九三〇年)へ―	冨田美香 （主任研究員）	高木博志編『近代京都と文化　「伝統」の再構築』株式会社 思文閣出版	R5.8.31
3	「シナリオの独立」運動に始まった戦時下映画研究の軌跡	冨田美香 （主任研究員）	冨田美香監修・解説『季刊映画研究』第３巻（ゆまに書房）	R5.10.31
4	生き残った「震災記録映画」――『キャメラを持った男たち―関東大震災を撮る』	とちぎあきら （客員研究員）	『世界』2023年9月号（岩波書店）	R5.9.1

【査読有り】論文掲載（学術誌、美術雑誌、館外の展覧会図録等）

	タイトル	執筆者氏名（職名）	掲載誌名	発行年月日
1	映画渡来史再考――吉澤系シネマトグラフの正体は何か	入江良郎（学芸課長）	『映像学』111 号	R6.2.25
2	デジタル映画の長期保存用ファイルフォーマット―Interoperable Master Format とMatroska Video Format の有効性と課題―	三浦和己（主任研究員）	日本写真学会誌 2023 年 86 巻 2 号 p.189-195	R5.5.20
3	デジタル映画の長期保存用ファイルフォーマット―Interoperable Master Format とMatroska Video Format の有効性と課題―	浜田直樹（特定研究員）	日本写真学会誌 2023 年 86 巻 2 号 p.189-195	R5.5.20
4	「日本初の女性脚本家」再考――1920 年代後半日活における時代劇の脚本家・林義子	森宗厚子（特定研究員）	『映画研究』18 巻	R5.12.10
5	木下惠介の映画における恋する男と音楽 『お嬢さん乾杯』（1949）と『遠い雲』（1955）を中心に	具　珉婀（研究補佐員）	『映像学』111 号	R6.2.25

【査読無し】論文掲載（学術誌、美術雑誌、館外の展覧会図録等）

	タイトル	執筆者氏名（職名）	掲載誌名	発行年月日
1	戦後日本の美術映画－その誕生の風景	岡田秀則（主任研究員）	「創造の現場 映画と写真による芸術家の記録」展図録（アーティゾン美術館）	R5.9.9
2	速歩きのショーン・ベイカー論	宮本法明（任期付研究員）	『ユリイカ』通巻 805 号（青土社）	R5.6.1

その他の執筆（機関紙、雑誌、新聞、ウェブサイト等）

	タイトル	執筆者氏名（職名）	掲載誌名	発行年月日
1	生誕 100 年記念 国立映画アーカイブで「月丘夢路・井上梅次 生誕 100 年祭」を開催	岡田秀則（主任研究員）	『井上梅次 創る心』（講談社エディトリアル）	R5.6.2
2	村木忍解説	冨田美香（主任研究員）	web サイト「日本映画における女性パイオニア」	R5.5.26
3	村木忍　まず観るならこの１本：『君も出世ができる』（1964 年）	冨田美香（主任研究員）	web サイト「日本映画における女性パイオニア」	R5.5.26
4	特別企画第 191 回『ワールドワイドオブ宝塚』花組宝塚大劇場公演『鴛鴦歌合戦』―あのとき映画は若かった！1930 年代の時代劇黄金期―	冨田美香（主任研究員）	『歌劇』1174 号、宝塚クリエイティブアーツ	R5.7.5
5	エジソンのキネトスコープ『京都祇園新地芸妓三人晒布舞ノ図』の謎―『近代京都と文化―「伝統」の再構築』こぼれ話	冨田美香（主任研究員）	『鴨東通信』117 号、株式会社 思文閣出版	R5.9.20
6	特集・追悼・中島貞夫「京都映画祭の想い出」談	冨田美香（主任研究員）	『ユリイカ』55 巻 13 号通巻 810 号、青土社	R5.10.1
7	澤村四郎五郎フィルモグラフィー	冨田美香（主任研究員）	WEB サイト「はじまりの日本劇映画 映画 meets 歌舞伎」	R6.3.27
8	「静かな怒り、ひそやかな創作」―『訪問、秘密の庭』	中西香南子（特定研究員）	山形国際ドキュメンタリー映画祭 2023　映画祭公式ガイド[スプートニク]	R5.10.6
9	ある映画人夫妻の華麗なる足跡――企画展『月丘夢路 井上梅次 100 年祭』	藤原征生（特定研究員）	「文化庁広報誌 ぶんかる」アートダイアリー 107	R5.8.25

10	日本の女性映画人の歴史について	森宗厚子 （特定研究員）	『映画撮影』236 号	R5.8.20
11	フィルム作品を未来へ残すために ―国立映画アーカイブへのフィルム寄贈について	森宗厚子 （特定研究員）	『映画撮影』237 号	R5.11.20
12	日本の女性映画人の歴史について 2	森宗厚子 （特定研究員）	『映画撮影』238 号	R6.2.25

オ　国立西洋美術館

学会等発表

	タイトル	学会等名	発表者氏名 （職名）	日付	場所	聴講者数 （人）
1	「ウィンダム・ルイスとメディア」	『ウィンダム・ルイスのメディア論――アートとイデオロギーの交錯』主催公開研究会	田中正之 （館長）	R5.7.15	文京アカデミー茗台	15
2	コロナ下とコロナ以降の美術館経営をめぐる諸問題	文化政策研究会	田中正之 （館長）	R5.7.20	政策研究大学院大学	30
3	「キュビスムの誕生・ピカソとブラック」	早稲田大学 2023 年度オープンカレッジ秋学期講座	田中正之 （館長）	R5.10.17	早稲田大学エクステンションセンター早稲田校	15
4	「キュビスムの広がり　レジェ、ドローネー、グレーズなど」	早稲田大学 2023 年度オープンカレッジ秋学期講座	田中正之 （館長）	R5.10.24	早稲田大学エクステンションセンター早稲田校	15
5	「キュビスムの展開―ピカソからル・コルビュジエまで」	同友クラブ美術鑑賞倶楽部	田中正之 （館長）	R5.11.17	国立西洋美術館	70
6	「ナショナル・アートミュージアムのこれから」	国立アートリサーチセンター設立記念シンポジウム「ナショナル・アートミュージアムのいま」	田中正之 （館長）	R5.11.26	国立新美術館	186
7	「キュビスムと 20 世紀美術」	国立西洋美術館	田中正之 （館長）	R5.12.9	国立西洋美術館	100
8	「ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズの地平―その過去・現在・未来を見とおす」	アート・ドキュメンテーション学会（JADS）美術館図書室 SIG	黒澤美子 （主任研究員）	R5.4.22	オンライン	122

9	「ロマン主義のブルターニュ『発見』から印象派世代まで」	アンスティテュ・フランセ東京講座「展覧会でめぐるフランスの地方ーブルターニュと南仏」	袴田紘代（主任研究員）	R5.4.11	アンスティチュ・フランセ東京、オンライン（ハイブリッドセミナー）	約 30
10	「19 世紀末、ポスト印象派画家たちとブルターニュ」	アンスティテュ・フランセ東京講座「展覧会でめぐるフランスの地方ーブルターニュと南仏」	袴田紘代（主任研究員）	R5.4.18	アンスティチュ・フランセ東京、オンライン（ハイブリッドセミナー）	約 30
11	「ブルターニュを見る！」	明治大学商学部主催講演会	袴田紘代（主任研究員）	R5.5.17	明治大学和泉キャンパス	約 60
12	「「憧憬の地 ブルターニュ」展企画・構成の経緯とその趣旨」	一橋大学大学院言語社会研究科主催ワークショップ「日本の美術館とブルターニュ」	袴田紘代（主任研究員）	R5.5.22	オンライン	72
13	「ポスト印象派の画家たちとブルターニュ」	国立西洋美術館「憧憬の地ブルターニュ」展関連講演会	袴田紘代（主任研究員）	R5.6.3	オンライン	226
14	「KCM（川崎市市民ミュージアム）の被災収蔵品レスキューの現状」	全国美術館会議第 11 回　災害対策委員会	邊牟木尚美（主任研究員）	R5.12.14	愛知芸術センターアートスペース A	約 30
15	「一般社団法人 全国美術館会議 災害時・緊急時のための常備用資機材リスト　および　国立西洋美術館美術品救急箱について」	公益財団法人文化財虫菌害研究所「第 45 回文化財の虫菌害・保存対策研修会」	邊牟木尚美（主任研究員）	R5.6.12	国立オリンピック記念青少年総合センターカルチャー棟　小ホール	約 200
16	産業用 InGaAs カメラを用いた赤外線反射画像撮影：国立西洋美術館所蔵・オールドマスタ作品の下描きをみる	文化財保存修復学会第 45 回大会	高嶋美穂（特定研究員）	R6.6.24	国立民族学博物館	500
17	美術館照明における絵画の見えの好ましさに関する評価構造	第 56 回照明学会全国大会	高嶋美穂（特定研究員）	R6.9.5	東京理科大葛飾キャンパス	100

18	Evaluation Structure on Preferance of Painting's Appepearance in Museum Lighing	30th Quadrennial Session of the International Commission on Illumination (CIE)	高嶋美穂 (特定研究員)	R6.9.18	Ljubljana, Slovenia	200
19	Reflected Glare on Museum Exhibits with Display Cases: An Examination of a Glare Prediction Method Based on Luminance Distribution	30th Quadrennial Session of the International Commission on Illumination (CIE)	高嶋美穂 (特定研究員)	R6.9.19	Ljubljana, Slovenia	200

雑誌等論文掲載

学術書籍、研究報告書等の発行

	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	「解釈学的行為としての制作　そして／あるいは 多声的なる美術館	田中正之 (館長)	『ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？―国立西洋美術館 65 年目の自問｜現代美術家たちへの問いかけ』	R6.3.11
2	講演録「1910－20 年代の松方とマティス　国立西洋美術館リニューアルオープン記念展と姫路市立美術館「國富奎三コレクション」マティス作品」	田中正之 (館長)	姫路市立美術館蔵 國富奎三コレクション－近代フランス絵画 モネからマティスまで【増補改訂版】	R6.3
3	4 章　ドキュマンタシオン―作品の歴史情報とその資料の集成	黒澤美子 (主任研究員)	ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ	R5.4.22
4	『ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？―国立西洋美術館 65 年目の自問｜現代美術家たちへの問いかけ』	新藤淳 (主任研究員)	タイトルに同じ	R6.3.11
5	講義録「ちょっと変わった市民ギャラリー －川口市立アートギャラリー・アトリア 学芸員の仕事」	秋田美緒 (任期付研究員)	藤井匡編『美術館と学芸員Ⅱ 学芸員課程講義録』東京造形大学研究報別冊 21	R6.3.31

【査読有り】論文掲載（学術誌、美術雑誌、館外の展覧会図録等）

	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	「『授業』としてのアーティスト・イン・スクール ―埼玉県さいたま市と埼玉県川口市の事例を比較して」	秋田美緒 (任期付研究員)	『芸術学論集』第 4 号	R5.12
2	「ギュスターヴ・クールベ〈狩人のための連作〉解釈の試み」	山枡あおい (任期付研究員)	『美術史』194 号	R5.3

【査読無し】論文掲載（学術誌、美術雑誌、館外の展覧会図録等）

	タイトル	執筆者氏名 (職名)	掲載誌名	発行年月日
1	橋本コレクションと古代ローマの指輪	飯塚隆 (主任研究員)	テルマエ　お風呂でつながる古代ローマと日本	R5.9.30

2	「亡霊と精子と花粉と――梅津庸一の憑在論的芸術、あるいは「悪い場所」を超えて」	新藤淳 （主任研究員）	画集『梅津庸一｜ポリネーター』	R5.4.13
3	「拡張された絵画実験について――「Tiles｜Signals――unexpected dimensions」にさきだって 新藤淳×坂本夏子」	新藤淳 （主任研究員）	『Tiles｜Signals――unexpected dimensions 坂本夏子』	R5.7.1
4	審査講評	秋田美緒 （任期付研究員）	『FACE 展 2024』展覧会図録	R6.2
5	作品紹介「千原真実《風景 L》」	秋田美緒 （任期付研究員）	『VOCA 展 2024 現代美術の展望-新しい平面の作家たち』展覧会図録	R6.3
6	教美アートギャラリー第 19 回「国立西洋美術館（東京都）」	秋田美緒 （任期付研究員）	月刊『教育美術』2024 年 3 月号	R6.3.1

その他の執筆（機関紙、雑誌、新聞、ウェブサイト等）

	タイトル	執筆者氏名 （職名）	掲載誌名	発行年月日
1	「大西さんの教え――誰から学ぶか、どう学ぶか」	田中正之 （館長）	『大西廣遺稿等・追悼文集』	R5.7.14
2	「瞬発力」と「遅さ」	田中正之 （館長）	日展ニュース第 186 号	R6.2.26
3	橋本コレクション展　指輪よりどりみどり	飯塚隆 （主任研究員）	『うえの』 2023 年 5 月号（No.765）	R5.5.1
4	青の居場所	陳岡めぐみ （主任研究員）	新美術新聞	R5.8.9
5	「描くことで思考する」（美の十選）「アルブレヒト・デューラー《メレンコリア Ⅰ》」、「ヨハネス・フェルメール《絵画芸術》」、「ターナー《光と色彩（ゲーテの理論）―大洪水の翌朝―創世記を書くモーセ》」、「マックス・クリンガー《行為》（連作「手袋」より）」、「ヒルマ・アフ・クリント《十大、No.8、成人期》」、「アウグスト・ジャコメッティ《色彩論的ファンタジー》」、「パウル・クレー《リズミカルなもの、より厳格に、より自由に》」、「アニ・アルバース《黒・白・黄》」、「ジャスパー・ジョーンズ《0 から 9》」、「辰野登恵子《WORK 89-P-13》」	新藤淳 （主任研究員）	日本経済新聞	R5.10.24-11.6
6	「ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？―国立西洋美術館 65 年目の自問｜現代美術家たちへの問いかけ	新藤淳 （主任研究員）	『うえの』2024 年 3・4 月合併号（No.775）	R6.3.1
7	「未来の芸術家のために」	新藤淳 （主任研究員）	『東京・春・音楽祭 2024』	R6.3
8	展評「画家が見たこども展」	袴田紘代 （主任研究員）	『三菱一号館美術館　研究紀要』６号、三菱一号館美術館	R5.3
9	「保存研究部会　部会報告」	邊牟木尚美 （主任研究員）	全国美術館会議機関紙「ZENBI（Vol.25）」	R6.2.1
10	「ロダンの花子」	山枡あおい （任期付研究員）	『女性のひろば』	R5.7
11	「名画紀行 ミレイ「あひるの子」国立西洋美術館」	浅野菜緒子 （特定研究員）	『女性のひろば』2023 年 9 月号（通関 535 号）	R5.9.1

12	「もうひとつの 19 世紀―ブーグロー、ミレイとアカデミーの画家たち」	浅野菜緒子 （特定研究員）	『うえの』2023 年 12 月 （No. 772）	R5. 12. 1
13	「パリ ポンピドゥーセンター キュビスム展―美の革命」	久保田有寿 （特定研究員）	公明新聞	R5. 12. 27
14	アートダイアリー「パリ ポンピドゥーセンター キュビスム展―美の革命 ピカソ、ブラックからドローネー、シャガールへ」	久保田有寿 （特定研究員）	文化庁広報誌 ぶんかる	R5. 11. 24
15	「パリ ポンピドゥーセンター キュビスム展―美の革命」	久保田有寿 （特定研究員）	『うえの』2023 年 10 月 （No. 770）	R5. 10. 1
16	国立西洋美術館におけるコレクションケアの取り組みの事例	高嶋美穂 （特定研究員）	令和 5 年度 文化遺産国際協力拠点交流事業「シリア・アラブ共和国におけるアイン・ダーラ遺跡の保護のための人材育成事業・成果報告書（筑波大学）	R6. 3. 31

カ　国立国際美術館

学会等発表

	タイトル	学会等名	発表者氏名 （職名）	日付	場所	聴講者数 （人）
1	「僕らの時代のアートとデザイン」	大阪中之島美術館開館１周年記念－大阪中之島美術館×国立国際美術館　館長対談	島敦彦 （館長）	R5. 4. 16	大阪中之島美術館	150
2	「文化エリア・中之島が目指すところ」	ART OSAKA 2023 アートクルーズ＆トーク	島敦彦 （館長）	R5. 7. 29	若松浜～北加賀屋周遊船	35
3	プレミア上映会トークショー	表現者工房プロデュース『Rey Camoy 鴨居玲』	島敦彦 （館長）	R5. 9. 18	肥後橋セミナールーム	20
4	「Korean Artist Prize 2023 Artist & Juror Talk」	Korean Artist Prize 2023	植松由佳 （学芸課長）	R6. 2. 5	韓国国立現代美術館	100
5	「VOCA2024 シンポジウム『VOCA の現在』」	VOCA2024	植松由佳 （学芸課長）	R6. 3. 13	上野の森美術館	100
6	「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか―現代美術とは？―」	美術講座「アートスパイス」	中井康之 （研究員）	R6. 2. 11	丹波市立春日住民センター	45
7	「アーカイブズの構築と公開について―NMAO サーチを例に」	第 32 回北海道美術館学芸員研究協議会	児玉茜 （特定研究員）	R6. 3. 7	北海道立近代美術館　講堂	60
8	「Dara Birnbaum: Visionary Pioneer」	Dara Birnbaum 展	馬定延 （客員研究員）	R5. 5. 31	Prada 青山店	50
9	「現代美術と映像表現」	PROJECT A_ Think School	馬定延 （客員研究員）	R5. 12. 9	オンライン	－

10	「キュレーターズ・ミーティング」	久門剛史「Dear Future Person,」展・京都市立芸術大学作品展同時開催企画	馬定延（客員研究員）	R6.2.11	京都市立芸術大学	-
11	Hotel Aporia: Artist Tour and Conversation with Ho Tzu Nyen and Dr. Ma Jung-Yeon	Ho Tzu Nyen:Time & Tiger 展	馬定延（客員研究員）	R6.3.3	Singapore Art Museum	-
12	「リサーチについて私が知っている二、三の事柄」	NCAR 国際シンポジウム 2023「美術館とリサーチ｜アートを”深める”とは？」	馬定延（客員研究員）	R6.3.22	国立新美術館	-

雑誌等論文掲載

学術書籍、研究報告書等の発行

	タイトル	執筆者氏名（職名）	掲載誌名	発行年月日
1	「空白を想像する」	馬定延（客員研究員）	『表象』17 号	R5.8.11
2	「この領土の芸術、この芸術の領土 - ホー・ツーニェンの「日本三部作」をめぐって」	馬定延（客員研究員）	『この国（ルビ：近代日本）の芸術〈日本美術史〉を脱帝国主義化する』（月曜社）	R5.11.30
3	Exploring Sojung Jun's Video Media Praxis: The Ghost in the Machine	馬定延（客員研究員）	『The One Work: Sojung Jun』（The Floorplan）	R6.3.29

【査読無し】論文掲載（学術誌、美術雑誌、館外の展覧会図録等）

	タイトル	執筆者氏名（職名）	掲載誌名	発行年月日
1	「VOCA2024 選考を終えて」	植松由佳（学芸課長）	『VOCA2024』	R6.3
2	「作品とイマジネーションについて――2 回目の審査での所感」	正路佐知子（主任研究員）	『Idemitsu Art Award 2023』	R5.12
3	「学びの現場としての現代美術：『ワールド・クラスルーム』展レビュー」	馬定延（客員研究員）	『Wolganmisool（韓国月刊美術）』	R5.6.1
4	「時間の彫刻」	馬定延（客員研究員）	『荒木悠　LONELY PLANETS』（十和田市現代美術館）	R6.1.26

その他の執筆（機関紙、雑誌、新聞、ウェブサイト等）

	タイトル	執筆者氏名（職名）	掲載誌名	発行年月日
1	「評論家・学芸員が選ぶ注目の新人アーティスト」	島敦彦（館長）	『美術の窓』５月号	R5.4.20
2	「蛮勇をふるって」	島敦彦（館長）	『くまもと「描く力」2023』熊日美術公募展（熊本日日新聞社）	R5.11.28
3	「世界的名作の特別展だけではない　美術館の重要なミッションとは」	島敦彦（館長）	『毎日新聞』（WEB）	R5.12.15

4	「論点　美術収蔵品を守るには」	島敦彦 （館長）	『毎日新聞』（朝刊）	R5.12.20
5	「絹谷幸二芸術賞選評「大胆な構図と色彩　圧倒」」	島敦彦 （館長）	『産経新聞』（朝刊）	R5.12.21
6	「選考委員・審査委員講評」	島敦彦 （館長）	京都府新鋭選抜展	R6.1.20
7	絵が開く	橋本梓 （主任研究員）	『IN/SECTS』Vol.17	R5.11.10
8	大阪にとってMINEは何を意味するか	橋本梓 （主任研究員）	別棟MINEウェブサイト	R5.11.30
9	35thサンパウロビエンナーレ&ブラジルアートシーン交流ツアー	橋本梓 （主任研究員）	田口アートコレクションウェブサイト	R5.12.15
10	「『ハイライト』での第一歩」	正路佐知子 （主任研究員）	東京国立近代美術館ニュース『現代の眼』638号	R5.4.30
11	「アプローチ九州　福岡アートアワード展　隠された社会の『現実』を現前に」	正路佐知子 （主任研究員）	『日本経済新聞』西部版（朝刊）	R5.5.11
12	「アプローチ九州　水のアジア展　豊かな美術体験　海でつながる国々を知る」	正路佐知子 （主任研究員）	『日本経済新聞』西部版（朝刊）	R5.8.17
13	「作家解説」	福元崇志 （主任研究員）	「泉依里」展DM、0ギャラリーeyes	R5.6.26
14	「泉茂とどう向き合うか」	福元崇志 （主任研究員）	「泉茂 Newly Discovered Works」Yoshimi Arts+the three konohana	R5.9.13
15	「はならぁと コア」における長谷川新「SEASON 2」の試み	中井康之 （研究員）	アートスケープ	R5.11.15
16	李禹煥（作家解説）	中井康之 （研究員）	日本アーティスト辞典（ART PLATFORK JAPAN）	R5.9.28
17	全体性を求めて 小松純の作品	中井康之 （研究員）	小松純展リーフレット（ギャラリー白、大阪）	R5.12.11
18	作家解説（メロッティ、下村良之助,吉田克朗、宮永愛子、狗巻賢二、坂本夏子、鴫剛、菅木志雄、藤本由紀夫、李禹煥）	中井康之 （研究員）	NMAOサーチ	R5.4-R6.3
19	作家解説（田中一光、瑛九、横溝秀実、ミケル・バルセロ、桑山忠明）	安來正博 （研究員）	NMAOサーチ	R5.4-R6.3
20	「ダラ・バーンバウムとは誰か?-プラダ青山店にて「DARA BIRNBAUM」展が開催」	馬定延 （客員研究員）	GQ Japan	R5.7.6
21	「メディアと社会を読み解く 学びの扉：大久保遼『これからのメディア論』書評」	馬定延 （客員研究員）	明治学院大学『白金通信』2023年夏515号、オンライン	R5.7.1

キ　国立新美術館

学会等発表

	タイトル	学会等名	発表者氏名 （職名）	日付	場所	聴講者数 （人）
1	「印象派を歴史化する――美術史編纂と1900年のパリ万国博覧会「100年展」をめぐって」	日仏美術学会	亀田晃輔 （研究補佐員）	R6.3.30	日仏会館＋オンライン	46(会場13、オンライン33)

学術書籍、研究報告書等の発行

	タイトル	執筆者氏名 （職名）	掲載誌名	発行年 月日
1	「「絵画」を描く――20 世紀の絵画へ」	長屋光江 （学芸課長）	『今、絵画について考える』	R6.1.10
2	ジョルジュ・ブラックの触覚的絵画空間―木目模様の描写を巡って（一九一一―一九年）	杉本渚 （元研究補佐員）	『今、絵画について考える』	R6.1.10
3	「混淆するイスム（-ismes）――1891 年におけるフランス前衛画家たちの布置」	亀田晃輔 （研究補佐員）	『今、絵画について考える』	R6.1.10
4	「画家としてのダミアン・ハースト―「桜」シリーズにおける実践をめぐって」	小野寺奈津 （特定研究員）	『今、絵画について考える』	R6.1.10
5	『アンリ・マティス作品集　諸芸術のレッスン』	米田尚輝 （主任研究員）	『アンリ・マティス作品集　諸芸術のレッスン』	R5.5.30
6	美術館を考える―パンデミック以後の「共集性」	伊村靖子 （主任研究員）	『国立新美術館連続講座記録集　美術館を考える 2022』	R6.3.15
7	国立新美術館の展覧会との関連から「美術館を考える」	山田由佳子 （主任研究員）	『国立新美術館連続講座記録集　美術館を考える 2022』	R6.3.15

雑誌等論文掲載

【査読無し】論文掲載（学術誌、美術雑誌、館外の展覧会図録等）

	タイトル	執筆者氏名 （職名）	掲載誌名	発行年 月日
1	「今井龍満―〈偶然を生きるものたち〉の系譜」	米田尚輝 （主任研究員）	『今井龍満―偶然を生きるものたち 1999－2023』	R5.8.24
2	「ファッション・メディアにおけるスナップ写真をめぐって――人々の着こなしはいかに発信されてきたか」	小野寺奈津 （特定研究員）	『デザイン学研究　特集号:ファッション・デザインとメディアⅡ――15 年後の再検討』	R5.8.30
3	ジャスパー・ジョーンズ《Summer Critic》（『マルセル・デュシャン語録』所収） ―東京のＪ・Ｊと「Summer Critic」	伊村靖子 （主任研究員）	『マージナリア・ジャーナル特集号 2：パピエプリエ 01』―蝶番のタブローをつくること（曲尺や書物などのように…）』	R5.12.7

その他の執筆（機関紙、雑誌、新聞、ウェブサイト等）

	タイトル	執筆者氏名 （職名）	掲載誌名	発行年 月日
1	「西洋美術にみる多様な愛のかたち」	宮島綾子 （主任研究員）	『公明新聞』	R5.4.26
2	「大巻伸嗣のインスタレーション－展覧会に寄せて」	長屋光枝 （学芸課長）	文化庁広報誌『ぶんかる』	R5.10.25
3	「各界のマンガ好きが選ぶ このマンガがすごい!［オンナ編］」	吉村麗 （特定研究員）	『このマンガがすごい! 2024』（宝島社）	R5.12.13
4	「特集 THE BEST MANGA 2024 このマンガを読め!」選者コメント	吉村麗 （特定研究員）	『フリースタイル 54 特集 THE BEST MANGA 2024 このマンガを読め!』（フリースタイル）	R5.12.22
5	「李禹煥と国立新美術館の“場”」	伊藤ちひろ （研究補佐員）	『美学論究』第 39 編（関西学院大学美学芸術学会）	R5.9.20

6	「高田賢三」／「山本寛斎」	小野寺奈津 （特定研究員）	『日本美術年鑑』（東京文化財研究所）	R5.10.31
7	「天使の耳はパンの耳／襤褸の響きを懐かしむ」	伊澤拓人 （研究補佐員）	Ginza Curators Room（ウェブサイト）	R6.3.25

別表 14　美術作品購入一覧

東京国立近代美術館						
	種別	作者名	作品名	制作年	材質・形状等	寸法(cm)
1	写真	ホンマタカシ (1962-)	「その森の子供」より Fukushima #1 ほか全 12 点	2012 年ほか	発色現像方式印画、額装 （12 点組）	100.0× 116.6cm ほか
2	写真	米田知子(1965-)	「Scene」より　畑－ソンムの戦いの最前線であった場所、フランス	2002 年	発色現像方式印画、額装 ed. 2/5	75.5× 96.0cm
3	写真	米田知子(1965-)	「Scene」より　丘－沖縄戦終焉の地、摩文仁、沖縄	2002 年	発色現像方式印画、額装 ed. 1/5	75.5× 96.0cm
4	写真	米田知子(1965-)	「Scene」より　道－サイパン島在留邦人玉砕があった崖に続く道	2003 年	発色現像方式印画、額装 ed. 4/5	75.5× 96.0cm
5	写真	米田知子(1965-)	「Scene」より　地雷原－地雷が埋められたサッカー場、サラエボ	2004 年	発色現像方式印画、額装 ed. 4/5	75.5× 96.0cm
6	写真	米田知子(1965-)	「Scene」より　国境－ヒズボラ拠点村より望むイスラエル、レバノン南部・イスラエル国境地帯	2004 年	発色現像方式印画、額装 ed. 1/5	75.5× 96.0cm
7	写真	米田知子(1965-)	「Scene」より　線路－満州事変勃発となる関東軍が爆破を仕掛けた線路を臨む、瀋陽	2007 年	発色現像方式印画、額装 ed. 2/5	75.5× 96.0cm
8	写真	米田知子(1965-)	「Scene」より　70 年目の 8 月 6 日、広島	2015 年	発色現像方式印画、額装 ed. 2/5	75.5× 96.0cm
9	日本画	速水御舟(1894-1935)	宮津	1915 年	絹本彩色　軸	140.0 × 49.3 cm
10	日本画	秦テルヲ(1887-1945)	玉乗り	1915 年頃	紙本彩色　軸	135.0 × 33.4 cm
11	日本画	秦テルヲ(1887-1945)	京洛追想画譜	1939 年頃	紙本彩色　画帖 13 面（+序 1 面）	各 24.2 × 34.4 cm
12	油彩・その他	マックス・エルンスト（1891-1976）	砂漠の花（砂漠のバラ）	1925 年	油彩、鉛筆・キャンバス	75.0 × 59.0 cm

13	油彩・その他	桂ゆき（ユキ子）(1913-1991)	秋	1955年	油彩・キャンバス	53.0 × 65.0 cm
14	油彩・その他	毛利眞美（1926-2022）	［無題］	1950-55年頃	油彩・キャンバス	116.5 × 91.0 cm
15	油彩・その他	毛利眞美（1926-2022）	裸婦（B）	1957年	油彩・キャンバス	130.0 × 89.0 cm
16	油彩その他	安宅安五郎（1883-1960）	白蓮樹	1919年	油彩・キャンバス	165.0 × 70.0 cm
17	油彩その他	椿貞雄(1896-1957)	晴子像	1938年	油彩・キャンバス	33.7 × 25.8 cm
18	油彩その他	堂本右美(1960-)	無題	1990年	油彩・キャンバス	182.0 × 227.5 cm
19	油彩その他	太郎千恵蔵（1962-）	戦争（ピンクは血の色）	1996年	油彩、アクリリック、インク、プラスチックシート・パネル	235.0 × 235.0 cm
20	油彩その他	中村宏（1932-）	空襲 1945	2022年	アクリリック・キャンバス　3点組	各65.2 × 53.0 cm
21	油彩その他	関根直子（1977-）	Stacks I（381）	2023年	グラファイト、グアッシュ・板	89.0 × 122.0 cm
22	油彩その他	関根直子（1977-）	Stacks II（382）	2023年	グラファイト、グアッシュ、水溶性顔料インク、油性インク・板	91.5 × 152.7 cm
23	版画	棟方志功（1903-1975）	鍵板画柵	1956年	木版（58面）画帖（2点）	各11.4-17.2 × 21.0-35.0 cm
24	素描	小村雪岱（1887-1940）	邦枝完二著「江戸役者」挿絵	1932年	墨・紙（70図）彩色・紙（見返し2図）　画帖	各15.0 × 23.4 cm 見返し 各19.6 × 54.7 cm
25	彫刻（立体造形）	日比野克彦（1958-）	APRIL	1980年	段ボール、アクリリック、色鉛筆、テープ、値札、紙、板	50.0 × 39.0 cm

26	彫刻（立体造形）	日比野克彦（1958-）	BOEING	1981年	段ボール、アクリリック、色鉛筆、厚紙	60.5 × 73.0 cm
27	彫刻（立体造形）	日比野克彦（1958-）	PRESENT BOX	1982年	段ボール、アクリリック、色鉛筆、厚紙、テグス	44.3 × 24.0 × 29.2 cm
28	彫刻（立体造形）	日比野克彦（1958-）	RED HIGH HEELS	1982年	段ボール、アクリリック、色鉛筆、厚紙	72.8 × 51.5 cm
29	彫刻（立体造形）	日比野克彦（1958-）	SEWING SCHOOL	1983年	段ボール、アクリリック、色鉛筆、墨、紙	89.8 × 69.9 cm
30	彫刻（立体造形）	日比野克彦（1958-）	ELECTRIC GUITAR	1986年	段ボール、厚紙、木、針金、釘、金属板、新聞、紙、墨、凧糸	68.0 × 23.0 × 8.0 cm
31	彫刻（立体造形）	太郎千恵蔵（1962-）	T-555P	1993年	布、金属、モーター付き台車２点組	各67.5 × 46.0 × 39.0 cm
32	資料	日比野克彦（1958-）	THE SHOES. VERY PARCO.	1984年	オフセット	103.0 × 72.8 cm
33	資料	日比野克彦（1958-）	LABYRINTH	1989年	ヴィデオ　カラー　サウンド	30秒
34	写真	今井壽惠（1931-2009）	「オフェリアその後」より［1］	1960年（printed 2024）	ゼラチン・シルバー・プリント、AP1/3	52.1×40.8（56.2×46.0）cm
35	写真	今井壽惠（1931-2009）	「オフェリアその後」より［2］	1960年（printed 2024）	ゼラチン・シルバー・プリント、AP1/3	51.7×40.9（56.2×45.9）cm
36	写真	今井壽惠（1931-2009）	「オフェリアその後」より［3］	1960年（printed 2024）	ゼラチン・シルバー・プリント、AP1/3	40.9×51.9（46.0×56.3）cm
37	写真	今井壽惠（1931-2009）	「オフェリアその後」より［4］	1960年（printed 2024）	ゼラチン・シルバー・プリント、AP1/3	51.8×40.9（56.2×45.9）cm
38	写真	今井壽惠（1931-2009）	「オフェリアその後」より［5］	1960年（printed 2024）	発色現像方式印画、AP1/3	52.1×37.8（56.2×45.8）cm

39	写真	今井壽惠（1931-2009）	「オフェリアその後」より［6］	1960年（printed 2024）	発色現像方式印画、AP1/3	52.1×41.5（56.1×45.8）cm
40	写真	今井壽惠（1931-2009）	「オフェリアその後」より［7］	1960年（printed 2024）	発色現像方式印画、AP1/3	52.1×36.2（56.2×45.8）cm
41	写真	今井壽惠（1931-2009）	「オフェリアその後」より［8］	1960年（printed 2024）	発色現像方式印画、AP1/3	52.1×36.0（56.2×45.8）cm
42	写真	今井壽惠（1931-2009）	「オフェリアその後」より［9］	1960年（printed 2024）	ゼラチン・シルバー・プリント、AP1/3	51.8×40.9（56.2×45.9）cm
43	写真	中平卓馬（1938-2015）	「大和南限」より　［1］	1976年	ゼラチン・シルバー・プリント	29.2×19.8（30.3×25.1）cm
44	写真	中平卓馬（1938-2015）	「大和南限」より　［2］	1976年	ゼラチン・シルバー・プリント	18.8×28.2（25.1×30.4）cm
45	写真	中平卓馬（1938-2015）	「大和南限」より　［3］	1976年	ゼラチン・シルバー・プリント	28.2×18.7（30.5×25.2）mm
46	写真	中平卓馬（1938-2015）	「大和南限」より　［4］	1976年	ゼラチン・シルバー・プリント	19.8×29.2（30.2×25.1）cm
47	写真	中平卓馬（1938-2015）	「大和南限」より　［5］	1976年	ゼラチン・シルバー・プリント	19.9×29.0（25.1×30.2）cm
48	写真	中平卓馬（1938-2015）	「大和南限」より　［6］	1976年	ゼラチン・シルバー・プリント	18.8×28.3（25.2×30.5）cm
49	写真	中平卓馬（1938-2015）	「大和南限」より　［7］	1976年	ゼラチン・シルバー・プリント	19.0×29.2（25.1×30.3）cm
50	写真	中平卓馬（1938-2015）	「大和南限」より　［8］	1976年	ゼラチン・シルバー・プリント	29.0×19.8（30.3×25.1）cm
51	写真	中平卓馬（1938-2015）	「大和南限」より　［9］	1976年	ゼラチン・シルバー・プリント	29.2×19.8（30.3×25.1）cm

52	写真	中平卓馬（1938-2015）	「大和南限」より ［10］	1976年	ゼラチン・シルバー・プリント	28.2×18.8（30.4×25.1）cm
53	写真	中平卓馬（1938-2015）	「大和南限」より ［11］	1976年	ゼラチン・シルバー・プリント	28.3×18.6（30.6×25.1）cm
54	写真	中平卓馬（1938-2015）	「大和南限」より ［12］	1976年	ゼラチン・シルバー・プリント	19.8×29.1（25.1×30.2）cm
55	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［7］	1980（printed 2006）	ゼラチン・シルバー・プリント	25.2×25.3（35.4×27.6）cm
56	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［8］	1980（printed 2006）	ゼラチン・シルバー・プリント	25.4×25.3（35.4×27.5）cm
57	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［9］	1980（printed 2006）	ゼラチン・シルバー・プリント	25.2×25.3（35.4×27.5）cm
58	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［10］	1980（printed 2006）	ゼラチン・シルバー・プリント	25.2×25.3（35.4×27.5）cm
59	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［11］	1980（printed 2006）	ゼラチン・シルバー・プリント	25.2×25.3（35.4×27.5）cm
60	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［12］	1980（printed 2006）	ゼラチン・シルバー・プリント	25.2×25.3（35.4×27.5）cm
61	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［13］	1980（printed 2006）	ゼラチン・シルバー・プリント	25.2×25.3（35.4×27.5）cm
62	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［14］	1980（printed 2006）	ゼラチン・シルバー・プリント	25.2×25.3（35.4×27.6）cm
63	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［15］	1980（printed 2006）	ゼラチン・シルバー・プリント	25.2×25.3（35.4×27.5）cm
64	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［16］	1980（printed 2006）	ゼラチン・シルバー・プリント	25.2×25.3（35.3×27.5）cm

65	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［17］	1980 (printed 2006)	ゼラチン・シルバー・プリント	25.2×25.3 (35.4×27.5) cm
66	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［18］	1980 (printed 2006)	ゼラチン・シルバー・プリント	25.2×25.3 (35.3×27.5) cm
67	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［19］	1980 (printed 2006)	ゼラチン・シルバー・プリント	25.2×25.3 (35.3×27.6) cm
68	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［20］	1980 (printed 2006)	ゼラチン・シルバー・プリント	25.2×25.3 (35.3×27.5) cm
69	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［21］	1980 (printed 2006)	ゼラチン・シルバー・プリント	25.2×25.3 (35.4×27.5) cm
70	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［22］	1980 (printed 2006)	ゼラチン・シルバー・プリント	25.2×25.3 (35.3×27.5) cm
71	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［23］	1980 (printed 2006)	ゼラチン・シルバー・プリント	25.3×25.3 (35.3×27.5) cm
72	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［24］	1980 (printed 2006)	ゼラチン・シルバー・プリント	25.5×25.3 (35.4×27.5) cm
73	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［25］	1980 (printed 2006)	ゼラチン・シルバー・プリント	25.3×25.3 (35.3×27.5) cm
74	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［26］	1980 (printed 2006)	ゼラチン・シルバー・プリント	25.3×25.3 (35.3×27.5) cm
75	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［27］	1980 (printed 2006)	ゼラチン・シルバー・プリント	25.3×25.3 (35.3×27.5) cm
76	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［28］	1980 (printed 2006)	ゼラチン・シルバー・プリント	25.3×25.3 (35.4×27.5) cm
77	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［29］	1980 (printed 2006)	ゼラチン・シルバー・プリント	25.5×25.3 (35.3×27.5) cm

78	写真	渡辺兼人（1947- ）	「既視の街」より［30］	1980 (printed 2006)	ゼラチン・シルバー・プリント	25.2×25.3 (35.4×27.5) cm
79	写真	杉本博司（1948-）	パレス、ニュージャージー州	1977 年	ゼラチン・シルバー・プリント、額装 ed. 6/25	42.3×54.5 (50.8×61.0) cm
80	写真	杉本博司（1948-）	エルムウッド、ニュージャージー州	1977 年	ゼラチン・シルバー・プリント、額装 ed. 6/25	42.3×54.5 (50.8×61.0) cm
81	写真	杉本博司（1948-）	マリオン・パレス、オハイオ州	1980 年	ゼラチン・シルバー・プリント、額装 ed. 1/25	42.3×54.5 (50.8×61.0) cm
82	写真	杉本博司（1948-）	オハイオ・シアター、オハイオ州	1980 年	ゼラチン・シルバー・プリント、額装 ed. 12/25	42.3×54.5 (50.8×61.0) cm
83	写真	杉本博司（1948-）	北太平洋、岩手	1986 年	ゼラチン・シルバー・プリント、額装 ed. 4/25	42.3×54.5 (50.8×61.0) cm
84	写真	杉本博司（1948-）	イオニア海、サンタ・チェザーレア	1990 年	ゼラチン・シルバー・プリント、額装 ed. 1/25	42.3×54.5 (50.8×61.0) cm
85	写真	杉本博司（1948-）	南太平洋、テアライ	1991 年	ゼラチン・シルバー・プリント、額装 ed. 1/25	42.3×54.5 (50.8×61.0) cm

国立工芸館						
	種別	作者名	作品名	制作年	材質・形状等	寸法(cm)
1	陶磁	板谷波山（1872-1963）	彩磁紫陽花模様花瓶	1915 年	磁器、彩磁	h29.8 D35.9
2	金工	海野勝珉（1844-1915）	花鳥図花瓶	明治・大正時代	片切彫、高肉象嵌、平象嵌、金、銀、四分一、赤銅	各 h 35.4 D16.0

3	陶磁	加守田章二（1933-1983）	壺	1974年	陶器	h44.2 w17.0 d14.2
4	陶磁	新里明士（1977 - ）	光器	2022年	磁器、蛍手	h24.5 w39.5 d37.5
5	陶磁	樂直入（十五代樂吉左衛門）（1949-）	焼貫花入	1984年	樂焼	h19.5 w13.5 d13.4
6	竹工	池田巖（1940- ）	Untitled	2016年	竹、漆、蒔絵	h57.7 w13.3 d11.0／h42.0 w14.7 d10.0
7	人形	四谷シモン（1944- ）	機械仕掛の少女 2	2016年	紙、木、ガラス、毛、金属	h107.0 w63.0 d14.2
8	その他の工芸	名倉鳳山（1947- ）	書画方硯　洗月	2015年	石（雄勝波板石）	h4.8 w18.5 d26.5
9	陶磁	井上雅之(1957-)	T-917	1991年	陶器	h79.0 w94.0 d61.5
10	陶磁	小川待子（1946- ）	Untitled	1993年	陶土、磁土	h 40.5 w 43.0 d 36.0
11	陶磁	隠﨑隆一(1950-)	白泥混淆水指	2019年	陶器	h 20.0 w 22.3 d17.5
12	陶磁	金重陶陽（1896-1967）	備前長方台鉢	1951年	陶器	h13.5 w58.0 d26.0
13	陶磁	桑田卓郎（1981 - ）	白金彩梅華皮志野茶垸	2020年	磁土、釉薬、顔料、白金	h13.5 w18.0 d 17.0
14	陶磁	澤谷由子（1989 - ）	露絲紡	2022年	磁土、イッチン、銀彩	h7.0、D31.3
15	陶磁	鈴木藏(1934-)	志埜大皿	1991年	陶器	h12.2 w55.3 d34.8
16	陶磁	ピーター・ヴォーコス(1924-2002)	PLATTER	1959年	陶器	h8.4 w45.3 d45.7
17	漆工	池田晃将（1987 - ）	Error403	2020年	漆、鮑貝、夜光貝、金、木曽檜、螺鈿、蒔絵	h19.3 w19.1 d19.3
18	その他の工芸	舘鼻則孝(1985-)	Heel-less Shoes	2018年	牛革、染料、金属ファスナー	各h34.8 w9.3 d 21.5
19	その他の工芸	舘鼻則孝(1985-)	Heel-less Shoes	2023年	牛革、染料、金属ファスナー	各h33.5 w9.8 d 19.0
20	陶磁	深見陶治（1947- ）	孤	2018年	磁器	h177.5 w48.0 d44.0

21	漆工	奥出寿泉（1916-1973）	乾漆廿四辺菊形食籠	1961年	漆、乾漆	h10.0 D19.0
22	漆工	二十代　堆朱楊成（1880-1952）	彫漆香盆 甜瓜	1926年	漆、彫漆	h3.5 D24.6
23	漆工	六角紫水（1867-1950）	銀平文不動尊像軸盆	1943年	漆、蒔絵、平文	h2.5 w15.8 d36.6
24	染織	釜我敏子（1938- ）	型絵染着物「秋草文」	2012年	絹、型染	h180.0 w139.4
25	人形	鹿児島寿蔵（1898-1982）	あこめを着て	1955年	紙塑	h17.0 w12.0　d7.8
26	工芸・デザイン資料	松田権六（図案・絵付）（1896-1986）	色絵金彩鶴文飾皿	1970年代	磁器	h7.0 D40.0

京都国立近代美術館

	種別	作者名	作品名	制作年	材質・形状等	寸法(cm)
1	陶芸	加藤清之（1931～）	花器	1961年	陶器	45.0(h)×110.0×20.0cm
2	陶芸	加藤清之（1931～）	作品01-IS	2001年	陶器	86.5(h)×41.0×22.0cm
3	染織	芹沢銈介（1895～1984）	型染いろは六曲屏風	1958年	麻布、型染	171.5(h)×279.0cm
4	日本画	伊藤柏台（1896～1932）	南座	不詳	軸／絹本着色	52.4×38.0 cm
5	日本画	幸野楳嶺（1844～1895）	中島来章像	1883年	軸／絹本着色	92.6×37.7 cm
6	日本画	野長瀬晩花（1889～1964）	休み時	1919年	屏風(二曲一双)／麻布着色	(各)181.8×186.8 cm
7	日本画	野長瀬晩花（1889～1964）	祇園祭りの巻	不詳	巻子／紙本着色	19.4×642.2 cm
8	日本画	畠中光享（1947～）	青色青光（問顕）、黄色黄光（駆走）、赤色赤光（跳踊）、白色白光（合掌礼）、緑色緑光（山水）、黒色黒光（流灯）	2020～2021	屏風(二曲六隻)／紙本着色	（各）170.0×170.0 cm
9	油彩画	アルベール・グレーズ（1881～1953）	キュビスム的風景、木と川	1914年	油彩画布	97.0×130.0 cm

10	版画	黒崎彰（1937～2019）	寓話 69	1969 年	木版、越前鳥の子紙	画面：50.0×69.8／紙：61.9×81.6 cm
11	版画	黒崎彰（1937～2019）	寓話 76	1969 年	木版、越前鳥の子紙	画面：72.8×50.0／紙：85.7×59.8 cm
12	染織	来野月乙（1924-2005）	争鳥	1962 年	画仙紙、カラーインク、顔料、臈纈染 ／屏風（二曲一隻）	158.0×177.0
13	染織	三橋 遵（1954-）	思い出の向こう側	2016 年	シルクオーガンジー、木、ネオジウム、酸性染料、アクリル絵具、ぼかし染め、木造形、その他 ／三対	（各）200×110
14	染織	森口華弘（1909 - 2008）	友禅訪問着　花の泉	1971 年	絹、友禅	163.0×128.0
15	染織	森口華弘（1909 - 2008）	友禅訪問着　彩華	1985 年	絹、友禅	164.0×128.0
16	陶芸	栗木達介（1943-2013）	花器	1966 年	陶土、手びねり	31.0×25.0×26.2
17	陶芸	栗木達介（1943-2013）	黒い柱のモニュメント	1966 年	陶土、手びねり	134.0×37.0×37.0
18	陶芸	栗木達介（1943-2013）	きいろい壺	1967 年	陶土、手びねり	28.0×45.0×30.0
19	陶芸	栗木達介（1943-2013）	碗のモニュメント	1968 年	陶土、木、手びねり	70.0×24.0×24.0
20	陶芸	栗木達介（1943-2013）	碑 GENROKU	1969 年	陶土、木、手びねり	92.5×26.2×17.5
21	陶芸	栗木達介（1943-2013）	積まれた五つの形	1971 年	陶土、石、手びねり	177.5×60.0×60.0
22	陶芸	栗木達介（1943-2013）	歩行する鞍態	1976 年	陶土、手びねり	40.0×45.0×48.0
23	陶芸	栗木達介（1943-2013）	黒釉銀緑彩蓋器	1978-9 年	陶土、手びねり	7.0×32.0×32.0

24	陶芸	栗木達介（1943-2013）	銀緑彩文方陶　一号／銀緑彩文方陶　二号／ 銀緑彩文方陶　三号	1982 年	陶土、手びねり	一号：9.0×30.0×30.0 二号：9.0×30.0×30.0 三号：8.0×33.0×34.0
25	油彩画	松本陽子（1936-）	作品Ⅳ	1964 年	油彩画布	130×162
26	油彩画	松本陽子（1936-）	作品Ⅴ	1965 年	油彩画布	130.5×194.5
27	油彩画	八田 豊（1930-）	作品 65-BB（トロンロン）	1965 年	水性塗料、パルプボード	162.5×122.0
28	油彩画	柏原えつとむ（1941-）	Silencer 68-4	1968 年	水性ペイント、画布	162.1×130.3
29	その他	ザ・プレイ（1967 結成）	《7DIMENSIONS：ハロゲン化するプレイ氏の触媒調合 あるいは 12090 帯での追跡計画》関連資料 （1）記録写真 （2）メンバー用プラン（池水慶一の書込みあり） （3）美術館の診療行為（鈴木芳伸による黒十字） （4）1969 年「現代美術の動向」展出品者用リボンバッジ （5）『PLAY』誌（黒本）	1969	写真、印刷物、冊子等	－
30	その他	AKI INOMATA（1983-）	やどかりに「やど」をわたしてみる	2016 年	HD ヴィデオ（約 6 分）	可変
31	その他	AKI INOMATA（1983-）	やどかりに「やど」をわたしてみる－Border－ （ニューヨーク２）	2019 年	3D プリント、樹脂	7.2×7.8×4.8
32	その他	AKI INOMATA（1983-）	やどかりに「やど」をわたしてみる－Border－ （ライヒスターク）	2016 年	3D プリント、樹脂	4.5×11.5×3.5
33	その他	AKI INOMATA（1983-）	やどかりに「やど」をわたしてみる－Border－ （天壇、北京）	2010/2019 年	インクジェット・プリント／額	48.0×48.0
34	その他	AKI INOMATA（1983-）	やどかりに「やど」をわたしてみる－Border－ （アイット=ベン=ハドゥ 、モロッコ）	2010／2019 年	インクジェット・プリント／額	48.0×48.0

国立西洋美術館						
	種別	作者名	作品名	制作年	材質・形状等	寸法(cm)
1	版画	レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン（1606～1669）	放蕩息子の帰還	1636年	エッチング	156×136mm（版寸）
2	版画	ジョヴァンニ・ベネデット・カスティリオーネ（1609～1664）	神、聖霊の鳩と天使を伴うキリスト降誕	C.1647	エッチング	206×404mm
3	版画	ガエターノ・ガンドルフィ（1734～1802）	聖家族	-	エッチング、アクアチント	203×147mm
4	版画	マリアーノ・フォルトゥーニ・マドラソ（1871～1949）	グラナダ、ダロ川	-	エッチング、アクアチント（亜鉛板）	335×445mm
5	版画	フェリックス・ブラックモン（1833～1914）	批評家マルゴ	1854年	エッチング、シン・アプリケ	241×210mm（版寸）、215×191mm（画寸）
6	版画	フェリックス・ブラックモン（1833～1914）	シャルル・ボードレールの肖像	C.1860	エッチング、シン・アプリケ	148×100mm（版寸）、102×71mm（画寸）
7	版画	フェリックス・ブラックモン（1833～1914）	老雄鶏	1882年	エッチング	345×268mm（版寸）、282×248mm（画寸）
8	版画	フェリックス・ブラックモン（1833～1914）	ツァー万歳！	1893年	エッチング	329×226mm（版寸）、308×220mm（画寸）
9	版画	エドゥアール・マネ（1832～1883）	プルチネッラ	1874年	カラー・リトグラフ／網目紙	472×310mm
10	版画	フェリックス・ビュオ（1847～1898）	パリの冬	1879年	エッチング・ドライポイント・アクアチント	237×348mm（版寸）、300×442mm（画寸）

11	版画	フェリックス・ビュオ（1847～1898）	フクロウの城	1887 年	エッチング・ドライポイント・アクアチント	112×178mm（版寸）、210×290mm（画寸）
12	版画	アンリ・ゲラール（1846～1897）	王妃マリア・テレサ（ベラスケスに基づく）（第 1 ステート）	–	エッチング、アクアティント	340×232mm（紙寸）、278×201mm（画寸）
13	版画	アンリ・ゲラール（1846～1897）	王妃マリア・テレサ（ベラスケスに基づく）（第 4 ステート）	–	エッチング、アクアティント	478×350mm（紙寸）、278×201mm（画寸）
14	版画	ハインリヒ・フォーゲラー（1872～1942）	受胎告知	1895 年	エッチング	245×198mm
15	版画	ハインリッヒ・フォーゲラー（1872～1942）	5 月に	1897 年	エッチング、アクアティント	330×235mm
16	版画	ハインリッヒ・フォーゲラー（1872～1942）	はじめての夏	1904 年	エッチング	345×246mm
17	版画	ハインリッヒ・フォーゲラー（1872～1942）	冬のメルヒェン	1909 年	エッチング、アクアティント	335×240mm
18	版画	ハインリッヒ・フォーゲラー（1872～1942）	春のメルヒェン	1912 年	エッチング、アクアティント	340×238mm
19	版画	カミーユ・ピサロ（1830～1903）	水浴の女たちの理論	C.1897	リトグラフ、シン・コレ	130×200mm
20	版画	イグナシオ・スロアガ（1870～1945）	3 人のスペイン人女性（デトマ 3 姉妹）	1899 年	エッチング	550×617mm（紙寸）、530×617mm（版寸）
21	版画	藤田嗣治（1886～1968）	自画像	1923 年	エッチング	418×319mm（版寸）、561×454mm（紙寸）
22	水彩	ジョヴァンニ・セガンティーニ（1858～1899）	花野に眠る少女	1884-85 年	水彩、グアッシュ、パステル／紙	1884-85 年

国立国際美術館						
	種別	作者名	作品名	制作年	材質・形状等	寸法(cm)
1	彫刻	レオノール・アントゥネス(1972-)	M.Y.との相違	2021年	エンゴーベ（化粧土）、施釉された陶	2点組、サイズ可変
2	彫刻	レオノール・アントゥネス(1972-)	シャルロット#7	2021年	杉、施釉された陶	153.0 × 61.5 × 37.4 cm
3	彫刻	レオノール・アントゥネス(1972-)	道子#6	2023年	真鍮	サイズ可変(6点組)
4	彫刻	ルイーズ・ブルジョワ (1911-2010)	カップル	1996年	布、詰め物、ステンレススチール、木、ガラス	38.0 × 68.5 × 70.2 cm、台：178.2 × 112.0 × 97.0 cm
5	洋画	谷原菜摘子(1989-)	SADO	2015年	油彩、アクリル、グリッター、金属粉、スパンコール、ラインストーン、ベルベット	130.3 × 194.0 cm
6	洋画	廣直高(1972-)	無題（陽）	2022年	染料、オイルパステル、ロープ、グロメット、カンバス	258.2 × 212.0 cm
7	洋画	ヨシダミノル(1935-2010)	The Orange Tent	1966年	油彩、カンバス	195.4 × 280.4 × 10.0 cm
8	写真	片山真理(1987-)	小さなハイヒールを履く私、子供の足の私	2011/23年	発色現像方式印画、オリジナル額装	各111.8 × 154.3cm（2点組）
9	映像	クゥワイ・サムナン (1982-)	Untitled	2011-13年	5チャンネル・ヴィデオ（カラー、サウンド）	CH1：23秒、CH2：22秒、CH3：17秒、CH4：15秒、CH5：18秒（ループ）

10	映像	田中功起(1975-)	シンプルなジェスチャーに場当たりなスカルプチャー	2008 年	シングルチャンネル・ヴィデオ（HD、カラー、サウンド）	3 分 26 秒
11	映像	田中功起(1975-)	ウォーキング・スルー	2009 年	シングルチャンネル・ヴィデオ（HD、カラー、サウンド）	55 分
12	映像	田中功起(1975-)	だれかのゴミはだれかの宝物	2011 年	シングルチャンネル・ヴィデオ（HD、カラー、サウンド）	11 分
13	洋画	樫木知子(1982-)	風呂と砂	2011 年	アクリル、白色下地、紙、麻布、木	130.2 × 162.5 cm
14	洋画	竹村京(1975-)	はなのいろ	2015 年	日本製釜糸、ドイツ製合成繊維、パーマネントマーカー、紙	300.0 × 700.0 cm
15	洋画	竹村京(1975-)	E.K.のために	2015 年	日本製釜糸、ドイツ製合成繊維、プリント、綿布	368.0 × 289.5 cm
16	洋画	手塚愛子(1976-)	Ghost I met	2013 年	多色織（EPOTEX） 制作協力：川島織物セルコン	左：330.3 × 190.2 cm、右：330.7 × 190.3 cm (2 枚組)
17	洋画	手塚愛子(1976-)	織り直し #04	2017 年	解体された二種類の織物、平織り、木枠	200.5 × 230.0 × 95.0 cm

別表 15　所蔵作品等に関するセミナー・シンポジウムの開催

ア　東京国立近代美術館						
（本館）						
1	セミナー・シンポジウム　タイトル	修復の秘密｜トークイベント				
	開催日	令和 5 年 4 月 29 日	場所	地下 1 階講堂	聴講者数（人）	86
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	田口かおり（京都大学准教授／修復家）、土師広（修復家［土師絵画工房］）				
	内容	コレクションによる小企画「修復の秘密」関連イベント。土師広氏は、ご自身が担当した当館所蔵の油彩作品の修復作業について、田口かおり氏は、海外の修復の歴史や理論、あるいは素材や技法が多様化した現代美術の修復事例などについて発表。両発表から引き出されたトピックについて、お二方に対談いただいた。				
2	セミナー・シンポジウム　タイトル	模写と対話で考える関東大震災				
	開催日	令和 5 年 8 月 4 日	場所	所蔵品ギャラリー2-4 室、および 2F テラスに面した通路	聴講者数（人）	18
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	瀬尾夏美（アーティスト）、横山由季子（美術課研究員）				
	内容	「所蔵作品展　MOMAT コレクション」内の特集展示「関東大震災から 100 年」の関連企画。瀬尾夏美氏と担当研究員がギャラリートークを行った後、参加者は関東大震災に関連する展示作品を模写。模写を囲んで、100 年前に発生した震災について対話を行った。				
3	セミナー・シンポジウム　タイトル	女性と抽象｜トークイベント				
	開催日	令和 5 年 10 月 22 日	場所	地下 1 階講堂	聴講者数（人）	45
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	中嶋泉（大阪大学大学院文学研究科准教授）、内海潤也（石橋財団アーティゾン美術館学芸員）、小川綾子（当館研究補佐員）、横山由季子（当館研究員）				
	内容	コレクションによる小企画「女性と抽象」関連イベント。中嶋泉氏は 20 世紀美術における女性アーティストと抽象の歴史的な流れについて、内海潤也氏は、ご自身の勤務館における女性アーティストの作品収集について発表。両発表および展示から引き出されたトピックについて、展示を担当した研究員、研究補佐員も加わり意見交換を行った。				
4	セミナー・シンポジウム　タイトル	シュルレアリスム宣言 100 年記念講演会				
	開催日	令和 6 年 3 月 17 日	場所	地下 1 階講堂	聴講者数（人）	101
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	利根川由奈（文教大学国際学部国際観光学科専任講師）、松岡佳世（株式会社キュレイターズ）、中田健太郎（静岡文化芸術大学専任講師）、長名大地（企画課主任研究員）				
	内容	アンドレ・ブルトン『シュルレアリスム宣言』発表から 100 年を記念した講演会。登壇者の発表後、ディスカッションを行った。各発表テーマは以下の通り。「東京国立近代美術館とシュルレアリスム」（長名大地）、「ルネ・マグリットと展示―1920-30 年代ベルギーにおけるシュルレアリスムとファッション」（利根川由奈氏）、「展示にみる身体のテーマ―1959-60 年のシュルレアリスム国際展を中心に」（松岡佳世氏）、「展示とレイアウト―シュルレアリスム・マンガの事情をめぐって」（中田健太郎氏）				

イ　国立映画アーカイブ

1	セミナー・シンポジウム　タイトル		ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント 旧劇映画の大スター 澤村四郎五郎再考 講演×『五郎正宗孝子伝』[デジタル復元版]特別上映			
	開催日	令和 5 年 10 月 14 日	場所	長瀬記念ホール OZU	聴講者数（人）	190
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	【講演】 『女忍術』1917、天活　「歌舞伎役者としての澤村四郎五郎」 講師:児玉竜一（早稲田大学文学学術院教授） 【ビデオレクチャー】 「澤村四郎五郎 あるいは旧劇映画のアンチヒーロー像」 講師:小松弘（早稲田大学文学学術院教授） 【上映】 『五郎正宗孝子伝』［デジタル復元版］特別上映（本篇 72 分） 《声色掛け合い》 澤登翠／活動写真弁士・片岡一郎／活動写真弁士・樗澤賢一／活動写真弁士 《和洋合奏》 湯浅ジョウイチ／作曲・編曲、三味線・鈴木真紀子／フルート 多田恵子／打楽器・藤髙りえ子／筑前琵琶				
	内容	主催：国立映画アーカイブ 内容：ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」（10 月 27 日）を記念し、日本初の映画スター尾上松之助と人気・実力ともに双璧をなした大正時代の映画スター澤村四郎五郎を再評価する特別イベントを開催した。 四郎五郎の映画は、映像美とトリック撮影や美術の技巧、義太夫なども活かした情感表現で高い評価と人気を誇ったが、現存作もわずかで歴史的に顧みられることは少なくなっていることから、本イベントでは、専門家による講演のほか、当館所蔵の澤村四郎五郎コレクションの台本と照合してデジタル復元した『五郎正宗孝子伝』（1915 年）を和洋合奏と同台本に基づく声色掛け合いによる上映を行い、知られざる日本映画の歴史と、歴史的かつ文化的遺産である映画・映像のアーカイブの活動への理解を深める機会とした。				
2	セミナー・シンポジウム　タイトル		［上映と報告］日本初 70mm 映画『釈迦』の復元にむけた調査報告			
	開催日	令和 6 年 3 月 2 日	場所	京都府京都文化博物館　3 階 フィルムシアター	聴講者数（人）	160
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	プログラム ［上映］『釈迦』上映　35mm　2 時間 36 分 ［報告］ ・冨田美香（国立映画アーカイブ主任研究員／東京国立近代美術館主任研究員） 「復元プロジェクトの概要とスーパーテクニラマ 70 版『釈迦』の調査報告」 ・エイドリアン・ウッド氏（映画復元専門家、OWL Studio 株式会社代表） 「『釈迦』現存フィルムの調査とその復元の意義」　＊逐次通訳付 ・宮野起 氏（Audio Mechanics、Film Preservationist） 「『釈迦』復元に向けた現存する音素材の調査報告」＊ビデオ・プレゼンテーション				
	内容	主催：京都府京都文化博物館、東京国立近代美術館、国立映画アーカイブ、 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C） 「日本における 70 ミリ劇映画文化の受容とそのイメージの復元」 （研究代表者・冨田美香） 協力：株式会社 KADOKAWA オリジナルのスーパーテクニラマ 70 方式では現在鑑賞することができなくなっている日本映画史上初の 70mm 映画として重要な『釈迦』（1961 年、大映、三隅研次）。 本来の芸術表現、技術について、復元にむけた、文献資料やオリジナル・ネガを含めた現存フィルム の調査報告会を開催。上映ではコロナ禍後初の定員超過となり、報告終了時も熱心な質疑応答が展開される会となった。				

3	セミナー・シンポジウム　タイトル		2023 年度日本演劇学会全国大会 前夜祭〈特別イベント〉 「歌舞伎の発掘映像をみる～国立映画アーカイブ所蔵 林又一郎コレクションより」			
	開催日	令和 5 年 6 月 23 日	場所	近畿大学東大阪キャンパス内　E キャンパス文芸学部 A-301	聴講者数（人）	40
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	上映映像同時解説：児玉竜一氏（早稲田大学） 司会：林公子氏（近畿大学）				
	内容	主催：日本演劇学会 / 共催：国立映画アーカイブ 「歴史と演劇」をテーマとするこの大会は、「歴史」と演劇研究も含めた「演劇」との切り結びのありようが、それぞれの研究発表や講演、対談から、多角的に立ち現れる場となった。				
ウ　国立西洋美術館						
1	セミナー・シンポジウム　タイトル		現代美術のない美術館で芸術の未来を考える			
	開催日	令和 6 年 3 月 23 日	場所	国立西洋美術館講堂	聴講者数（人）	78
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	梅津庸一（アーティスト）、小田原のどか（アーティスト、美術評論家）、布施琳太郎（アーティスト、美術評論家）、松浦寿夫（画家、美術評論家）、新藤淳（国立西洋美術館主任研究員）				
	内容	「ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？―国立西洋美術館 65 年目の自問｜現代美術家たちへの問いかけ」展にあわせた公開座談会。ともすれば芸術にはオルタナティヴな未来はないと語られる昨今の状況にあってなお、いかにしてそうしたものが生まれてくるのかといった問題を、展覧会参加アーティストのうち、こんにちの日本の美術批評をリードする複数の論客でもある面々とともに議論する。				
エ　国立国際美術館						
1	セミナー・シンポジウム　タイトル		「コレクション 1　80/90/00/10」特別対談　村上隆×篠原資明			
	開催日	令和 5 年 8 月 20 日	場所	国立国際美術館　講堂	聴講者数（人）	123
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	村上隆（アーティスト、出品作家）×篠原資明（哲学者、詩人、美術評論家）				
	内容	「コレクション 1　80/90/00/10」展の関連イベントとして、出品作家である村上隆氏と、30 年以上に及ぶ交流をもつ哲学者で詩人の篠原資明氏を招き、特別講演会を開催した。				

別表 16　シンポジウムの開催等による国内外の優れた研究者等とのネットワークの構築

ア　国立アートリサーチセンター						
1	セミナー・シンポジウム　タイトル	「蔡國強　宇宙遊 ―〈原初火球〉から始まる」　開幕記念 トークセッション『〈原初火球〉再考』				
	開催日	令和 5 年 6 月 29 日	場所	国立新美術館講堂	聴講者数（人）	260
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	蔡國強、芹沢高志（P3 art and environment 統括ディレクター）、レイチェル・リヴェンク（ゲッティ学術研究所（GRI）保存修復室長）、神谷幸江（美術評論家、インデペンデント・キュレーター）、逢坂恵理子（国立新美術館長）				
	内容	1991 年に発表した〈原初火球〉の起点として、蔡の日本における活動の様々なエピソードを紹介しつつ、作家の創作の深部に迫る。				

2	セミナー・シンポジウム　タイトル	共創フォーラム Vol.1　Art, Health & Wellbeing ミュージアムで幸せになる。英国編				
	開催日	令和 5 年 10 月 8 日	場所	国立新美術館講堂	聴講者数（人）	93
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	講師：ルス・エドソン（マンチェスター市立美術館　ラーニング・マネージャー（コミュニティ担当）），キャロル・ロジャーズ（ナショナル・ミュージアムズ・リバプール/ハウス・オブ・メモリーズ　ディレクター）、マーク・ミラー　（テート美術館　ラーニング・ディレクター）、ジェーン・フィンドレー（ダリッジ・ピクチャー・ギャラリー　プログラム・エンゲージメント長）、藤岡勇人（東京都美術館　学芸員） ファシリテータ：伊藤達矢（東京藝術大学　社会連携センター　特任教授）、稲庭彩和子（国立アートリサーチセンター主任研究員） セッション：片岡真実（国立アートリサーチセンター長）、日比野克彦（東京藝術大学長）、マシュー・ノウルズ（ブリティッシュカウンシル 駐日代表） 司会：一條彰子（国立アートリサーチセンターラーニンググループリーダー）				
	内容	健康やウェルビーイングに良い影響をもたらすアートや文化の活動を推進するために、英国から 4 名を招聘して先進的な取組を紹介し、ディスカッションを行った。 日英同時通訳、同時配信、手話、文字支援など多様な参加者に対応する体制をとったため、25 か国からの参加申込があり、約 800 名の参加者を得た。 オンライン聴講者 706 名				
3	セミナー・シンポジウム　タイトル	共創フォーラムワークショップ				
	開催日	令和 5 年 10 月 9 日	場所	国立新美術館講堂	聴講者数（人）	50
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	講師：ルス・エドソン（マンチェスター市立美術館　ラーニング・マネージャー（コミュニティ担当）），キャロル・ロジャーズ（ナショナル・ミュージアムズ・リバプール/ハウス・オブ・メモリーズ　ディレクター）、マーク・ミラー　（テート美術館　ラーニング・ディレクター）、ジェーン・フィンドレー（ダリッジ・ピクチャー・ギャラリー　プログラム・エンゲージメント長）、藤岡勇人（東京都美術館　学芸員） ファシリテータ：伊藤達矢（東京藝術大学　社会連携センター　特任教授）、稲庭彩和子（国立アートリサーチセンター主任研究員）				
	内容	共創フォーラム 2 日目に「深掘り！セッション」と題して、1 日目のフォーラムに参加したミュージアム関係者や大学・研究機関、行政関係者など実務担当者約 50 名を対象に行われた、対話的なプログラム。初日登壇者がより専門家向けにトークを行い、5 人程度のグループで議論をした上で、全体ディスカッションが行われた。				
4	セミナー・シンポジウム　タイトル	文化財修復処置に関するワークショップ　－ナノセルロースの利用について　実技フォローアップ－				
	開催日	令和 5 年 10 月 11 日	場所	東京文化財研究所	聴講者数（人）	10
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	レミー・ドレフュス＝ドゥセーニュ（保存修復専門家）				
	内容	令和 4 年度に東京文化財研究所は、ナノセルロースという透明で天然由来の材料を用いた新しい修復技術について、フランスの第一人者であるレミー・ドレフュス＝ドゥセーニュ氏によるワークショップを実施したが、希望者多数により座学の講義のみしか受講できなかった方もいたため、今年度にその方々を対象とした実技フォローアップ講習会を開催した。同氏を再びお招きし、ナノセルロースフィルムの作成および作品への適用の実習を行った。				
5	セミナー・シンポジウム　タイトル	文化財修復処置に関するワークショップ－モジュラー・クリーニング・プログラムの利用について－				

	開催日	令和 5 年 10 月 25～27 日	場所	東京文化財研究所	聴講者数（人）	21
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	クリス・スタヴロウディス（保存修復専門家）				
	内容	絵画のクリーニングにおいて、作品にとって安全で、かつ除去したい物質のみに働きかけるクリーニング溶液を調整するために、材料の配合の計算をコンピューターでプログラムするという画期的方法を開発したアメリカの保存修復専門家クリス・スタヴロウディスを招き、このプログラムの理論と実践について 3 日間にわたるワークショップを実施した。				
6	セミナー・シンポジウム　タイトル	講演会「近現代美術の保存修復－ジャクソン・ポロック作品の事例から－」				
	開催日	令和 5 年 10 月 28 日	場所	東京国立近代美術館講堂	聴講者数（人）	92
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	クリス・スタヴロウディス（保存修復専門家）				
	内容	モジュラー・クリーニング・プログラムの具体的な実践例として、ロサンゼルス現代美術館所蔵のジャクソン・ポロック《ナンバー1》（1949 年）の修復事例を中心に、近現代美術作品の修復の重要性について一般の聴衆にもわかりやすく講演していただいた。エナメル等、伝統的な材料ではなく新しく工業的に開発された材料に関する劣化や修復については未知の部分が多く国際的な課題となっており、そうした近現代美術の修復の重要性について認識を深める機会となった。				
7	セミナー・シンポジウム　タイトル	国立アートリサーチセンター設立記念シンポジウム 「ナショナル・アートミュージアムのいま」				
	開催日	令和 5 年 11 月 26 日	場所	国立新美術館講堂	聴講者数（人）	173
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	ユージン・タン（ナショナル・ギャラリー・シンガポール館長）、ガス・ケースリー＝ヘイフォード（ビクトリア&アルバート美術館 イースト館長）、クリステル・クレフ（フランス文化省文化遺産・建築総局次長兼美術館局長）、ケイウィン・フェルドマン（ナショナル・ギャラリー・オブ・アート館長（米・ワシントン D.C.））、ガブリエレ・フィナルディ　（ナショナル・ギャラリー館長（英・ロンドン））、田中 正之（独立行政法人国立美術館理事/国立西洋美術館長） モデレーター： 片岡 真実（国立アートリサーチセンター長）				
	内容	シンガポール、英国、フランス、米国、日本の国立美術館長や政策担当者が集い、ナショナル・アートミュージアムの役割や社会への貢献について考えるシンポジウムを開催した。固有性、歴史、制度、運営課題など多角的に「国立美術館」を再考する好機となった。				
8	セミナー・シンポジウム　タイトル	東京大学駒場博物館 特別講義「大ガラス」				
	開催日	令和 6 年 1 月 18 日	場所	東京大学大学院総合文化研究科・教養学部　駒場博物館	聴講者数（人）	42
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	松井裕美（東京大学大学院総合文化研究科、准教授）、Matthew Affron（フィラデルフィア美術館、キュレーター）、加治屋健司（東京大学大学院総合文化研究科、教授）				
	内容	東京大学駒場博物館が所蔵する《花嫁は彼女の独身者たちによって裸にされて、さえも（東京版）》（東京版制作：1980 年、東京版監修：瀧口修造・東野芳明、通称「大ガラス」）の背景と成り立ちについて、マルセル・デュシャンによるオリジナル作品を所蔵するフィラデルフィア美術館学芸員と東大の近現代美術史研究者による講義。				
9	セミナー・シンポジウム　タイトル	LGTV ワークショップ				
	開催日	令和 6 年 1 月 20 日	場所	多摩美術大学アートアーカイブセンター	聴講者数（人）	35

	講師・パネリスト等の氏名（職名）	Matthew Affron（フィラデルフィア美術館、キュレーター）、有福一昭（有明教育芸術短期大学教授）、光田由里（多摩美術大学アートアーカイブセンター所長）				
	内容	マルセル・デュシャン《大ガラスレプリカ　東京ヴァージョン》が瀧口修三、東野芳明氏の監修のもとで東大多摩美の教師学生によりどのような経緯で実際どのように制作されたのか、当時の制作状況を撮影した安齋重男の写真等を含めて検証。				
10	セミナー・シンポジウム　タイトル	NCAR 国際シンポジウム・ワークショップ 2023「美術館とリサーチ｜アートを”深める”とは？」				
	開催日	令和 6 年 3 月 21、23 日	場所	国立新美術館、横浜美術館（第 8 回横浜トリエンナーレ視察）	聴講者数（人）	40
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	キュンチョメ（アーティスト）、高山明（シアター・ディレクター / アーティスト）、藤井光（アーティスト）、チョ・ジウン（アーティスト） モデレーター：大舘奈津子（一色事務所/芸術公社理事）				
	内容	国境を超えてリサーチを展開し、リサーチの過程で得た資源をもとに作品制作を行うアーティストの実践例を紹介。				
11	セミナー・シンポジウム　タイトル	NCAR 国際シンポジウム 2023「美術館とリサーチ｜アートを”深める”とは？」				
	開催日	令和 6 年 3 月 22 日	場所	国立新美術館	聴講者数（人）	148
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	マリ・カルメン・ラミレス（ヒューストン美術館 キュレーター）、イ・デヒョン（H ゾーン設立者/ディレクター）、オズゲ・エルソイ（アジア・アート・アーカイブ シニア・キュレーター）、カラ・オリッジ（ゲッティ・リサーチ・インスティテュート アソシエイト・ディレクター）、 川口雅子（国立アートリサーチセンター 情報資源グループリーダー） モデレーター：片岡真実（国立アートリサーチセンター長）				
	内容	美術館の活動に不可欠であるリサーチをどのように行っているのか、世界各地のリサーチ機関を代表するパネリストによる様々なケーススタディを提示。				
イ　東京国立近代美術館						
（本館）						
1	セミナー・シンポジウム　タイトル	ガウディとサグラダ・ファミリア展　開幕記念座談会				
	開催日	令和 5 年 6 月 13 日	場所	東京国立近代美術館　地下 1 階講堂	聴講者数（人）	100
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	鳥居徳敏（本展学術監修、神奈川大学名誉教授）、ジョルディ・ファウリ（サグラダ・ファミリア聖堂主任建築家）、外尾悦郎（サグラダ・ファミリア 聖堂彫刻家）				
	内容	「ガウディとサグラダ・ファミリア展」の関連イベント。ガウディ建築の魅力および建築家の実像について、立場を違えて長年ガウディの建築に携わってきた三名がディスカッションを行った。				
（国立工芸館）						
1	セミナー・シンポジウム　タイトル	アーティスト×アーティスト				
	開催日	令和 5 年 4 月 15 日、4 月 23 日、5 月 21 日	場所	国立工芸館多目的室	聴講者数（人）	119
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	登壇者：福田亨（木工芸家）、満田晴穂（金工家）、小宮康義（染織家）、吉田泰一郎（金工家）、今井完眞（陶芸家）、桝本佳子（陶芸家） ファシリテータ：唐澤昌宏（国立工芸館長）、岩井美恵子（国立工芸館工芸課長）、今井陽子（国立工芸館主任研究員）				
	内容	展覧会「ポケモン×工芸展―美とわざの大発見―」の関連イベントとして出品作家の福田亨氏、満田春穂氏、小宮康義氏、吉田泰一郎氏、今井完眞氏、桝本佳子氏を迎え、各回それぞれ唐澤昌宏館				

		長、岩井美恵子工芸課長、今井陽子主任研究員がファシリテータを務めるトークセッションを開催した。				
2	セミナー・シンポジウム　タイトル	「ポケモン展×工芸展」からあらためて考える工芸の魅力				
	開催日	令和 5 年 5 月 5 日	場所	石川県立美術館講堂	聴講者数（人）	111
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	講師：桂盛仁（金工家）、田口義明（金工家） 聞き手：唐澤昌宏（国立工芸館長）				
	内容	展覧会「ポケモン×工芸展―美とわざの大発見―」の関連イベントとして出品作家の桂盛仁氏と田口義明氏を迎え唐澤昌宏館長が聞き手となりシンポジウムを開催した。 ＊石川県との連携事業として開催 ＊地震により講演会は中止				
3	セミナー・シンポジウム　タイトル	加賀前田家と皇室				
	開催日	令和 5 年 10 月 22 日	場所	石川県立美術館講堂	聴講者数（人）	129
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	太田彩（元宮内庁三の丸尚蔵館首席研究官）				
	内容	展覧会「皇居三の丸尚蔵館収蔵品展　皇室と石川　一麗しき美の煌めきー」の関連イベントとして元宮内庁三の丸尚蔵館の主席研究員太田彩氏を迎え、講演会を実施した。 ＊石川県との連携事業として開催				
4	セミナー・シンポジウム　タイトル	三の丸尚蔵館の過去・現在・未来				
	開催日	令和 5 年 11 月 23 日	場所	石川県立美術館講堂	聴講者数（人）	140
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	朝賀浩（皇居三の丸尚蔵館学芸部）				
	内容	展覧会「皇居三の丸尚蔵館収蔵品展　皇室と石川　一麗しき美の煌めきー」の関連イベントとして皇居三の丸尚蔵館の学芸員朝賀浩氏を迎え、講演会を実施した。 ＊石川県との連携事業として開催				
5	セミナー・シンポジウム　タイトル	「東京国際版画ビエンナーレ展の頃、そして版画の今」				
	開催日	令和 6 年 2 月 24 日	場所	国立工芸館多目的室	聴講者数（人）	56
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	木村秀樹（画家、版画家）、牧口千夏（京都国立近代美術館主任研究員）、中尾優衣（国立工芸館主任研究員）				
	内容	展覧会「版画／印刷／グラフィックデザインの断層 1957－1979」の関連イベントとして、画家で版画家の木村秀樹氏と共同企画者である京都国立近代美術館の牧口千夏氏を迎え、中尾優衣主任研究員とともにトークセッションを実施した。				
6	セミナー・シンポジウム　タイトル	国立工芸館とこれからの工芸 12 人の工芸・美術作家による新作制作プロジェクトから				
	開催日	令和 5 年 12 月 1 日	場所	ハイアット セントリック 金沢 2 階	聴講者数(人)	79
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	新里明士（陶芸家）、見附正康（陶芸家）、唐澤昌宏（国立工芸館長）				
	内容	「Kogei Art Fair Kanazawa2023×国立工芸館プレミアムイベント」の一つとして、工芸館の石川移転・開館を記念して実施したクラウドファンディング第 2 弾「12 人の工芸・美術作家による新				

		作制作プロジェクト」に参加した陶芸家2人をトーカーに、当時の感想やその後の制作について、唐澤昌宏（国立工芸館）が聞き手となりトークセッションを行った。				
ウ　京都国立近代美術館						
1	セミナー・シンポジウム　タイトル	連続アーティスト・トーク　河口龍夫				
	開催日	令和5年4月29日	場所	1階講堂	聴講者数（人）	29
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	河口龍夫（1968年動向展 出品作家）				
	内容	展覧会「開館60周年記念　Re: スタートライン 1963－1970/2023　現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係」の関連イベントとして、1968年動向展の出品作家の河口龍夫氏を迎え、連続アーティスト・トークを実施した。				
2	セミナー・シンポジウム　タイトル	連続アーティスト・トーク　松本陽子				
	開催日	令和5年5月20日	場所	1階講堂	聴講者数（人）	26
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	松本陽子（1966年動向展 出品作家）				
	内容	展覧会「開館60周年記念　Re: スタートライン 1963－1970/2023　現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係」の関連イベントとして、1966年動向展の出品作家の松本陽子氏を迎え、連続アーティスト・トークを実施した。				
3	セミナー・シンポジウム　タイトル	連続アーティスト・トーク　ザ・プレイ				
	開催日	令和5年7月1日	場所	1階講堂	聴講者数（人）	70
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	ザ・プレイ（池水慶一・三喜徹雄／1969年動向展 出品作家）				
	内容	展覧会「開館60周年記念　Re: スタートライン 1963－1970/2023　現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係」の関連イベントとして、1969年動向展の出品作家のザ・プレイ（池水慶一氏・三喜徹雄氏）を迎え、連続アーティスト・トークを実施した。				
4	セミナー・シンポジウム　タイトル	講演会「京都発・現代美術」				
	開催日	令和5年6月17日	場所	1階講堂（オンライン配信あり）	聴講者数（人）	48
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	富井玲子（美術史家）				
	内容	展覧会「開館60周年記念　Re: スタートライン 1963－1970/2023　現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係」の関連イベントとして、美術史家の富井玲子氏を迎え、講演会を実施した。				
5	セミナー・シンポジウム　タイトル	講演会「走泥社おちこち余話」				
	開催日	令和5年7月29日	場所	1階講堂（オンライン配信あり）	聴講者数（人）	46
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	太田垣 實（美術評論家）				
	内容	展覧会「開館60周年記念　走泥社再考 前衛陶芸が生まれた時代」の関連イベントとして、美術評論家の太田垣實氏を迎え、講演会を実施した。				

6	セミナー・シンポジウム　タイトル	トークセッション 秋山陽×福永治「わたしたちがみた走泥社とその時代」				
	開催日	令和5年8月19日	場所	1階講堂（オンライン配信あり）	聴講者数（人）	38
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	秋山陽（陶芸家、京都市立芸術大学名誉教授）、福永治（京都国立近代美術館館長）				
	内容	展覧会「開館60周年記念　走泥社再考 前衛陶芸が生まれた時代」の関連イベントとして、陶芸家、京都市立芸術大学名誉教授の秋山陽氏を迎え、京都国立近代美術館館長福永治とのトークセッションを実施した。				
7	セミナー・シンポジウム　タイトル	ラウンドテーブル「小林正和とその時代」 第1回：「日本のファイバーアートと世界への挑戦ーローザンヌ、ウッヂ、京都」				
	開催日	令和6年1月20日	場所	1階講堂（オンライン配信あり）	聴講者数（人）	79
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	登壇者：草間喆雄、久保田繁雄、熊井恭子、佐久間美智子 モデレーター：池田祐子（京都国立近代美術館副館長・学芸課長）				
	内容	展覧会「開館60周年記念 小林正和とその時代―ファイバーアート、その向こうへ」の関連イベントとして、京都国立近代美術館副館長・学芸課長の池田祐子がモデレーターを務め、本展出品作家の草間喆雄氏、久保田繁雄氏、熊井恭子氏、佐久間美智子氏を迎え、ラウンドテーブルを実施した。				
8	セミナー・シンポジウム　タイトル	第2回：「自然とファイバーアートー〈テキスタイル・マジシャン〉の周辺」				
	開催日	令和6年2月3日	場所	1階講堂（オンライン配信あり）	聴講者数（人）	110
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	登壇者：小林尚美、新道弘之、田中千世子、冨田潤 モデレーター：宮川智美（京都国立近代美術館任期付研究員）				
	内容	展覧会「開館60周年記念 小林正和とその時代―ファイバーアート、その向こうへ」の関連イベントとして、京都国立近代美術館研究員の宮川智美がモデレーターを務め、本展出品作家の小林尚美氏、新道弘之氏、田中千世子氏、冨田潤氏を迎え、ラウンドテーブルを実施した。				
9	セミナー・シンポジウム　タイトル	第3回：「メンターとしての小林正和」				
	開催日	令和6年2月17日	場所	1階講堂（オンライン配信あり）	聴講者数（人）	47
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	登壇者：扇千花、島田清徳、戸矢崎満雄、野田凉美 モデレーター：福冨幸（岡山県立美術館学芸課長）				
	内容	展覧会「開館60周年記念 小林正和とその時代―ファイバーアート、その向こうへ」の関連イベントとして、岡山県立美術館学芸課長の福冨幸がモデレーターを務め、本展出品作家の扇千花氏、島田清徳氏、戸矢崎満雄氏、野田凉美氏を迎え、ラウンドテーブルを実施した。				
10	セミナー・シンポジウム　タイトル	第4回：「世界の小林正和、そして日本のファイバーアート」				
	開催日	令和6年3月9日	場所	1階講堂（オンライン配信あり）	聴講者数（人）	79
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	レスリー・ミラー(University for the Creative Arts, Textile Culture 名誉教授)、川嶋啓子(Office G²主宰／アートコーディネーター) モデレーター：池田祐子（京都国立近代美術館副館長・学芸課長）				
	内容	展覧会「開館60周年記念 小林正和とその時代―ファイバーアート、その向こうへ」の関連イベントとして、京都国立近代美術館副館長・学芸課長の池田祐子がモデレーターを務め、University for the Creative Arts, Textile Culture 名誉教授のレスリー・ミラー氏とOffice G²主宰／アートコーディネーターの川嶋啓子氏を迎え、ラウンドテーブルを実施した。				

<table>
<tr><td colspan="7">エ　国立映画アーカイブ</td></tr>
<tr><td rowspan="4">1</td><td>セミナー・シンポジウム　タイトル</td><td colspan="5">特別上映会：山崎博作品集＋《山崎博の海》上映＆トーク</td></tr>
<tr><td>開催日</td><td>令和 5 年 10 月 21 日</td><td>場所</td><td>国立映画アーカイブ
小ホール</td><td>聴講者数
（人）</td><td>32</td></tr>
<tr><td>講師・パネリスト等の氏名（職名）</td><td colspan="5">壇者：萩原朔美、石田哲朗（東京都写真美術館、キュレーター）</td></tr>
<tr><td>内容</td><td colspan="5">主催：国立映画アーカイブ、一般社団法人 TOKYO INSTITUTE of PHOTOGRAPHY
内容：東京駅東側の八重洲・日本橋・京橋で開催される屋外型国際写真祭『T3 PHOTO FESTIVAL TOKYO 2023』（会期：2023 年 10 月 7 日～29 日、主催：一般社団法人 TOKYO INSTITUTE of PHOTOGRAPHY）と連携し、トークイベントつき特別上映会を開催。山崎博の映画 4 作品（東京都写真美術館所蔵）と、高校時代からの山崎博の親友であった萩原朔美の作品『山崎博の海』の上映後、山崎博が追及し続けた写真表現とその特徴について、萩原朔美氏と東京都写真美術館のキュレーター石田哲朗氏が対談形式で解説した。</td></tr>
<tr><td rowspan="4">2</td><td>セミナー・シンポジウム　タイトル</td><td colspan="5">映画教育国際シンポジウム 2023
～海外の事例から次のステップにむけて</td></tr>
<tr><td>開催日</td><td>令和 5 年 10 月 28 日</td><td>場所</td><td>国立映画アーカイブ
小ホール</td><td>聴講者数
（人）</td><td>122</td></tr>
<tr><td>講師・パネリスト等の氏名（職名）</td><td colspan="5">○映画教育専門家による事例発表
・ナタリー・ブルジョア氏（CCAJ 国際映画教育プログラム、フランス）
「価値あるワークショップについて、実践の場より」
・ジェイミー・チェンバース氏（Film Education Journal 編集長・エディンバラ芸術大学、スコットランド）
「世界の映画教育情勢について、映画教育学の場より」
・エミリー・チャン氏（BIKY 映画プログラマー、韓国）
「映画産業との連携、映画祭の場より」
・土肥悦子（一般社団法人こども映画教室代表理事）
諏訪敦彦（映画監督、一般社団法人こども映画教室専務理事）
「人間教育としての映画教育、公教育での実践」

○パネルディスカッション「映画教育の、社会的意義と映画産業における可能性」
・ナタリー・ブルジョア氏
・エミリー・チャン氏
・ジェイミー・チェンバース氏
・ヴァニャ・カルジェルチッチ氏（ﾛｯﾃﾙﾀﾞﾑ国際映画祭 ﾌｪｽﾃｨﾊﾞﾙ・ﾃﾞｨﾚｸﾀｰ）
・諏訪敦彦氏
・土肥悦子氏
司会：冨田美香（国立映画アーカイブ主任研究員）</td></tr>
<tr><td>内容</td><td colspan="5">主催：東京国際映画祭/共催：国立映画アーカイブ
企画運営：一般社団法人こども映画教室
内容：一般社団法人こども映画教室の企画運営による、映画教育に関する国際シンポジウムを、東京国際映画祭との共催で開催。海外の子供たちが制作した映画を上映後、フランス、スコットランド、韓国の専門家の発表と日本の事例も踏まえ「映画教育の社会的意義」について論じた。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">3</td><td>セミナー・シンポジウム　タイトル</td><td colspan="5">NFAJ&J.S.A. アーカイブセミナー
映画表現と音　ミナトーキー</td></tr>
<tr><td>開催日</td><td>令和 5 年 12 月 2 日</td><td>場所</td><td>国立映画アーカイブ
小ホール</td><td>聴講者数
（人）</td><td>65</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="2"></td><td>講師・パネリスト等の氏名（職名）</td><td colspan="5">登壇者：八木信忠（日本大学名誉教授、協同組合日本映画・テレビ録音協会名誉会員）
高木創（協同組合日本映画・テレビ録音協会員）
とちぎあきら（国立映画アーカイブ客員研究員）
三浦和己（国立映画アーカイブ主任研究員）
司会：冨田美香（国立映画アーカイブ主任研究員）</td></tr>
<tr><td>内容</td><td colspan="5">主催：国立映画アーカイブ、協同組合日本映画・テレビ録音協会
内容：デジタルでの映画制作や上映が主流となった現在において、公開当時のオリジナルの映像や音の保存と復元について知見を深め、映画の適正な保存や映画文化の継承をはかることを目的に開催。今回はフィルム式トーキーの日本映画第一弾といえるミナトーキーに焦点をあて、上映鑑賞とディスカッションを通して当時の技術的観点を交えてミナトーキーの機材特性や音の特徴、日本映画トーキー黎明期の技術と表現について考察した。</td></tr>
<tr><td rowspan="4">4</td><td>セミナー・シンポジウム　タイトル</td><td colspan="5">NFAJ & J. S. E. アーカイブセミナー
体験的映画編集論　日活（調布）編</td></tr>
<tr><td>開催日</td><td>令和6年1月12日</td><td>場所</td><td>国立映画アーカイブ
小ホール</td><td>聴講者数（人）</td><td>46</td></tr>
<tr><td>講師・パネリスト等の氏名（職名）</td><td colspan="5">登壇者：鍋島惇（元 協同組合日本映画・テレビ編集協会理事長）
宮澤誠一（日本大学名誉教授、協同組合日本映画・テレビ編集協会副理事長）
鵜飼邦彦（協同組合日本映画・テレビ編集協会専務理事）
司会：冨田美香（国立映画アーカイブ主任研究員）</td></tr>
<tr><td>内容</td><td colspan="5">主催：国立映画アーカイブ、協同組合日本映画・テレビ編集協会
内容：　デジタルでの映画制作や上映が主流となった現在において、公開当時のオリジナルの映像や音の保存と復元について知見を深め、映画の適正な保存や映画文化の継承をはかることを目的に開催。今回は、映画の編集とその技術・表現について、日活（調布）、松竹京都、の二つの撮影所に焦点をあて、各撮影所のスタッフワークや施設・機材などの特色も交えて考察し、この日は第1回として日活（調布）編を開催した。</td></tr>
<tr><td rowspan="4">5</td><td>セミナー・シンポジウム　タイトル</td><td colspan="5">NFAJ & J. S. E. アーカイブセミナー
体験的映画編集論　京都映画編</td></tr>
<tr><td>開催日</td><td>令和6年1月13日</td><td>場所</td><td>国立映画アーカイブ
小ホール</td><td>聴講者数（人）</td><td>66</td></tr>
<tr><td>講師・パネリスト等の氏名（職名）</td><td colspan="5">登壇者　園井弘一（協同組合日本映画・テレビ編集協会会員）
宮澤誠一（日本大学名誉教授、協同組合日本映画・テレビ編集協会副理事長）
石島一秀（協同組合日本映画・テレビ編集協会副理事長）
司会　冨田美香（国立映画アーカイブ主任研究員）</td></tr>
<tr><td>内容</td><td colspan="5">主催：国立映画アーカイブ、協同組合日本映画・テレビ編集協会
内容：　デジタルでの映画制作や上映が主流となった現在において、公開当時のオリジナルの映像や音の保存と復元について知見を深め、映画の適正な保存や映画文化の継承をはかることを目的に開催。今回は、映画の編集とその技術・表現について、日活（調布）、松竹京都、の二つの撮影所に焦点をあて、各撮影所のスタッフワークや施設・機材などの特色も交えて考察し、この日は第2回として京都映画編を開催した。</td></tr>
<tr><td colspan="7">オ　国立西洋美術館</td></tr>
<tr><td rowspan="3">1</td><td>セミナー・シンポジウム　タイトル</td><td colspan="5">クローズドセミナー 『オランダにおける文化財保存の最新動向』</td></tr>
<tr><td>開催日</td><td>令和6年3月18日</td><td>場所</td><td>国立西洋美術館講堂</td><td>聴講者数（人）</td><td>51</td></tr>
<tr><td>講師・パネリスト等の氏名（職名）</td><td colspan="5">1. Dr. Robert van Langh (Chair of NICAS=Netherlands Institute of Conservation, Arts and Sciences / Head of Conservation & Research, Rijksmuseum)
2. Dr. Matthias Alfeld (Assistant Professor, TU Delft)</td></tr>
</table>

	内容	NICAS 専門家の別件での来日機会を利用し、日本（東京藝術大学美術学部・国立西洋美術館）とオランダ（NICAS）の文化財保存分野における新たな研究・教育連携を模索することを目的として、関係者向けに非公開のセミナーを実施する。 NICAS の活動を中心にオランダにおける文化財保存の最新動向をご紹介いただくとともに、東西文化の交流ならびに連携体制の構築に向けた機会とする。				
カ　国立国際美術館						
1	セミナー・シンポジウム　タイトル	「ホーム・スイート・ホーム」アーティスト・トーク				
	開催日	令和 5 年 6 月 24 日～ 令和 5 年 6 月 25 日	場所	国立国際美術館　講堂	聴講者数（人）	105
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	24 日（土）　マリア・ファーラ、竹村京、アンドロ・ウェクア（いずれも出品作家） 25 日（日）　鎌田友介、潘逸舟（いずれも出品作家）				
	内容	「ホーム・スイート・ホーム」展の出品作家であるマリア・ファーラ氏、竹村京氏、アンドロ・ウェクア氏、鎌田友介氏、潘逸舟氏を招き、アーティスト・トークを開催した。				
2	セミナー・シンポジウム　タイトル	「ホーム・スイート・ホーム」アーティスト・トーク				
	開催日	令和 5 年 7 月 30 日	場所	国立国際美術館　講堂	聴講者数（人）	38
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	石原海（出品作家）				
	内容	「ホーム・スイート・ホーム」展の出品作家である石原海氏を招き、アーティスト・トークを開催した。				
3	セミナー・シンポジウム　タイトル	記念講演会「メキシコ古代文明の創造力：モニュメントとアートの深堀り」				
	開催日	令和 5 年 2 月 25 日	場所	国立国際美術館　講堂	聴講者数（人）	120
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	杉山三郎（アリゾナ州立大学研究教授、愛知県立大学名誉教授）				
	内容	「古代メキシコ －マヤ、アステカ、テオティワカン」展の関連イベントとして、同展監修者の杉山三郎氏を招き、講演会を開催した。				
4	セミナー・シンポジウム　タイトル	第 26 回 中之島映像劇場「空、境界のない」				
	開催日	令和 6 年 3 月 17 日	場所	国立国際美術館　講堂	聴講者数（人）	70
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	イ・スジョン（韓国国立現代美術館 Film & Video 部門担当学芸員）				
	内容	第 26 回中之島映像劇場「空、境界のない」の開催に際して、映像作品を上映するとともに韓国国立現代美術館（企画協力）の Film&Video 担当学芸員イ・スジョン氏を招き、担当客員研究員 馬定延とともに上映作品について対話を行った。				
キ　国立新美術館						
1	セミナー・シンポジウム　タイトル	蔡國強展講演会 「蔡國強　宇宙遊 ―〈原初火球〉から始まる」　開幕記念 トークセッション『〈原初火球〉再考』				
	開催日	令和 5 年 6 月 29 日	場所	国立新美術館 3 階講堂	聴講者数（人）	260
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	蔡國強（本展アーティスト）、レイチェル・リヴェンク（ゲッティ学術研究所（GRI）保存修復室長）、芹沢高志（P3 art and environment 統括ディレクター）、神谷幸江（美術評論家、インデペンデント・キュレーター）、逢坂恵理子（国立新美術館長）				

	内容	「蔡國強」展の開幕を記念したトークイベント。1991 年に発表した〈原初火球〉の起点に立ち会ったP3 art and environment 統括ディレクターの芹沢高志氏、2008 年広島市現代美術館ヒロシマ賞受賞記念展においてチーフ・キュレーターとして伴走した神谷幸江氏、そして、蔡の火薬素材、創作プロセスの研究者であるゲッティ学術研究所（GRI）保存修復室長のレイチェル・リヴェンク氏を迎え、当館館長の逢坂恵理子とともに、作家の創作と活動を多角的な視点で紹介した。当日は国内外から定員を超える来場者があり、満席での開催となった。イベントのアーカイブ動画（日・英）は当館 YouTube チャンネルにて開催３日後に配信開始。視聴数は閉幕後も伸びている。				
2	セミナー・シンポジウム　タイトル	テート美術館展 「講演会　展覧会にみるテート美術館のコレクション戦略」				
	開催日	令和 5 年 7 月 13 日	場所	国立新美術館 3 階講堂	聴講者数（人）	120
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	ポリー・ステイプル（テート美術館　英国美術コレクション・ディレクター） モデレーター：アンジェラ・マッカイ（フィナンシャル・タイムズ　マネージング・ディレクター／アジアパシフィック発行人/FT Live）				
	内容	テート美術館が現代社会の様々な問題に対して、どのようにコレクションを形成し、また、それらを世界中に紹介しているのかについて具体的な多様な事例を交えて紹介する講演会であった。美術館の活動において気候変動問題をどのように考えているのか、そのための具体的な戦略が当館で開催された「テート美術館展　光―ターナー、印象派から現代美術へ」とどのような関係にあるのかについても説明があった。本講演は動画で記録し、日経アートアカデミア会員は大阪会場閉幕日（2024 年 1 月 14 日まで）無料で視聴可能であった。				
3	セミナー・シンポジウム　タイトル	テート美術館展 「キュレーターズ・トーク」				
	開催日	令和 5 年 7 月 14 日	場所	国立新美術館 3 階講堂	聴講者数（人）	146
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	ローレン・バックリー（テート美術館　国際巡回展シニアプロジェクトマネージャー）、マシュー・ワッツ（テート美術館　アシスタント・キュレーター）、山田由佳子（国立新美術館　主任研究員）				
	内容	「テート美術館展」は 2021 年上海で始まり、その後ソウル、メルボルン、オークランド、東京、大阪と移動する国際巡回展として企画された。この巡回展をコーディネートしたローレン・バックリー氏と作品選定、図特執筆を担当したマシュー・ワッツ氏による講演会。司会を本展担当の山田が担当した。展覧会関連の講演会では展覧会の内容やある特定の作品や作家の説明を中心とすることが多いが、本イベントでは、展覧会という事業の裏側と主要作品の説明の二つの側面からの話があり、展覧会の理解にとって非常に有益なものであった。				
4	セミナー・シンポジウム　タイトル	VANITAS 現代美術と写真にみる「はかなさ」のイメージ　シンポジウム				
	開催日	令和 5 年 9 月 17 日	場所	国立新美術館 3 階講堂	聴講者数（人）	100
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	ヴィクトリア・フォン・フレミング（ブラウンシュヴァイク美術大学教授）、仲間裕子（立命館大学名誉教授）、鈴木賢子（京都芸術大学特任准教授）、結城円（九州大学准教授）、マーレン・ゴツィック（福岡大学教授）、石田圭子（神戸大学准教授）、香川檀（武蔵大学教授）				
	内容	武蔵大学教授でドイツ近現代美術史を専門とする香川檀氏を代表とする研究チームとの共催によるイベントである。ドイツのブラウンシュヴァヴァイク美術大学で教鞭をとるフォン・フレミング氏による基調講演「現代美術におけるヴァニタスの回帰―ドイツの芸術学がひらく視座」と日本を拠点とし、主にドイツ美学を専門とする研究者 6 名による発表から構成されたシンポジウムである。都内の美術館に勤務する学芸員、ドイツ美学、哲学系の研究者に加え、一般来場者も多く、発表内容も国立新美術館で個展を開催した草間彌生、イケムラレイコに焦点を当てたものもあり、学術的な観点からも非常に内容の濃いイベントであった。				

5	セミナー・シンポジウム　タイトル	ミラノ大学 国際シンポジウム DESIGN + LIFE Interconnessioni				
	開催日	令和 5 年 10 月 29 日	場所	国立新美術館 3 階講堂	聴講者数（人）	244
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	ゴードン・ブルース（デザインコンサルタント／Red Dot Design Award 審査員）、ジョルジェット・ジウジアーロ（デザイナー）、蓮池槇郎（デザイナー）、ミケーレ・デ・ルッキ（建築家、デザイナー）、喜多俊之（プロダクトデザイナー）、伊藤節 + 伊藤志信（デザイナー）、ロッセッラ・メネガッツォ（ミラノ 大学 文化・環境遺産学部 東洋美術史准教授）				
	内容	1960 年代以降のデザインにおいて、イタリアと日本のデザイン思想は互いに惹かれ合い、融合し、新たな表現を生み出してきました。こうした歴史的経緯を踏まえ、ミラノ大学では 2022 年 10 月に国際シンポジウム「ジャパン デザイン・ 越境のアート」を開催。そのスピンオフとして開催された今回のシンポジウムでは、レジェンドとも言える両国のデザイナーたちが登壇。自国の歴史や環境に深く根ざしながら海外の文化や生活を好奇心旺盛に見つめ前進してきた姿や、生き方と一体となったデザインについて語り合われました。会場は事前予約で満席となり、当日は急遽オンラインのサテライト会場を設置するほどの盛況であった。				
6	セミナー・シンポジウム　タイトル	大巻伸嗣展関連イベント クロストーク：大巻伸嗣×関口涼子　アーティストと詩人、ぞれぞれの視点から				
	開催日	令和 5 年 11 月 3 日	場所	国立新美術館 3 階講堂	聴講者数（人）	120
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	大巻伸嗣（本展アーティスト）、関口涼子（詩人・小説家）				
	内容	大巻伸嗣展の関連イベントとして、作家・大巻伸嗣氏と、本展カタログおよび展示のなかで詩作により大巻氏の作品とコラボレーションを展開した詩人・関口涼子氏とのクロストークを開催した。大巻氏の芸術の様々な特質が、インスタレーションと言葉という異なった表現形式で活動する二人の対話を通して浮き彫りにされた。開催の二週間後に当館 Youtube で公開したアーカイブ動画（和英）は、貴重な記録として、本展閉幕後も視聴数が伸びている。				
7	セミナー・シンポジウム　タイトル	国立新美術館　連続講座：アートをめぐる場の設計 第 1 回「地域と美術館の関わりを考える」				
	開催日	令和 5 年 12 月 10 日	場所	国立新美術館 3 階講堂	聴講者数（人）	71
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	鷲田めるろ（十和田市現代美術館館長／東京藝術大学准教授）				
	内容	2022 年度の連続講座「美術館を考える」に続き「アートをめぐる場の設計」と題して、立場の違いを超えて共通の関心が形成されていく場について考察を深める企画とした。第 1 回は、「地域と美術館の関係を考える」をテーマに、美術館と地域の人々との文化を通じた直接的な関わり、地域外の人々が美術館を訪れることで生まれる地域への経済的な影響についての講演となった。地域との関わりからツーリズムまで、近年のアートを取り巻く状況を反映し、情報保証（手話通訳、UD トーク）、アーカイブ動画の配信により、参加者との対話を促した。				
8	セミナー・シンポジウム　タイトル	NACT View 03 「渡辺 篤（アイムヒア プロジェクト） 私はフリーハグが嫌い」関連イベント もやもやトーク（仮）　渡辺 篤と石川良子				
	開催日	令和 5 年 12 月 14 日	場所	国立新美術館 1 階ロビーほか	聴講者数（人）	24
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	渡辺篤（本展アーティスト）、石川良子（立教大学社会学部教授）				
	内容	NACT View03 の出品作家渡辺篤氏とひきこもりの研究を長年続けている社会学者の石川良子氏によるトークイベント。イベントは作家が常日頃感じたり、本展の準備中に考えたことを率直に語り、それに対して石川氏が考えたことや感じたことを述べる形式で進められた。参加者は事前に美術館のホームページで募集。平日（木曜日）の閉館後 18 時半から開始した。パブリックスペースに展				

		示された複数の作品の前で作家が参加者に語るもので、2022 年から開始している NACT View シリーズでは初のアーティストトーク形式イベントとなった。				
9	セミナー・シンポジウム　タイトル	国立新美術館　連続講座：アートをめぐる場の設計 第 2 回「芸術祭の空間論」				
	開催日	令和 6 年 1 月 28 日	場所	国立新美術館 3 階講堂	聴講者数（人）	64
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	山岸綾（一級建築士事務所サイクル・アーキテクツ代表/中部大学工学部建築学科准教授）				
	内容	「芸術祭の空間論」をテーマに、アートと観光、町おこしの観点から語られることの多い芸術祭を、空間設計から読み解く講演となった。山岸氏が携わってきた大地の芸術祭（2000 年～）、国際芸術祭「あいち」（2010 年～）、奥能登国際芸術祭（2017 年）を中心に、都市計画や美術館のコレクションモデルとの比較を通じた分析が行われ、「離散性」「巡礼」などの時間的な移動や動線から芸術体験を考える機会となった。講師のみオンラインでの実施となったが、大幅なキャンセルはなく、講演への関心の高さが窺えた。情報保証（手話通訳、UD トーク）、アーカイブ動画の配信により、参加者との対話が生まれた。				
10	セミナー・シンポジウム　タイトル	マティス展関連イベント 講演会「アンリ・マティスと壁画――《花と果実》を例として」				
	開催日	令和 6 年 2 月 14 日	場所	国立新美術館 3 階講堂	聴講者数（人）	141
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	クロディーヌ・グラモン（前ニース市マティス美術館館長）				
	内容	本展監修者であるクロディーヌ・グラモン（前ニース市マティス美術館館長）による講演会。マティスの作品における広義での壁画の変遷を辿った。1910 年代に収集家シチューキンからの依頼に応じた数点の壁画、1930 年代にバーンズ財団から依頼された壁画「ダンス」、1940 年代にパリのアトリエで制作された切り紙絵のマケットに基づいたシルクスクリーン《オセアニア、空》と《オセアニア、海》、1940 年代にヴァンスのアトリエ壁面で制作された一連の切り紙絵、1940 年代後半のヴァンスのロザリオ礼拝堂のステンドグラスと陶板壁画、《花と果実》に代表される 1950 年代初頭の切り紙絵による大型装飾について論じられた。				
11	セミナー・シンポジウム　タイトル	国立新美術館　連続講座：アートをめぐる場の設計 第 3 回「芸術が生まれる場の現在と過去と未来：大学と分散型アーカイブの試みから」				
	開催日	令和 6 年 2 月 17 日	場所	国立新美術館 3 階講堂	聴講者数（人）	60
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	佐藤知久（京都市立芸術大学芸術資源研究センター教授）				
	内容	2023 年 10 月に崇神地区へ移転した京都市立芸術大学のキャンパスを事例とし、「芸術が生まれアーティストが育つ場としての芸術大学」「芸術のアーカイブ」の二つの視点から、アートをめぐる場に設計が可能かを問う講演となった。文化人類学を背景とする佐藤氏からは、設計されたプログラムとそれを読み替える試みの中に、社会における芸術の関わりやアーカイブの役割があることが示され、建築を学ぶ学生や自らアーカイブに携わる作家などの参加者からも関心を集めた。情報保証（手話通訳、UD トーク）、アーカイブ動画の配信を行った。				
12	セミナー・シンポジウム　タイトル	国立新美術館　連続講座：アートをめぐる場の設計 第 4 回「「眠り」がアートになるとき–ソフィ・カルの実践から」				
	開催日	令和 6 年 3 月 3 日	場所	国立新美術館 3 階講堂	聴講者数（人）	59
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	松田愛（富山大学 学術研究部芸術文化学系 准教授）				
	内容	「アートをめぐる場の設計」最終回として、松田氏によるソフィ・カルの初期作品《眠る人々》（1979 年）についての講演を行った。同作品は、友人や知人、見知らぬ人々をカル自身の寝室に				

		招き、8 時間眠ってもらうというプロジェクトであり、本作品の背景や詳細を日本語で紹介する初の機会であった。質疑応答では、眠りという日常の行為がなぜアートになるのか、見知らぬ他者が触れ合うという経験がどのようなものか、他者によって完成される作品とはどのようなものかなどの点について対話が交わされた。情報保証（手話通訳、UD トーク）、アーカイブ動画の配信を行った。				
13	セミナー・シンポジウム　タイトル	アーティスト・リレー・トーク				
	開催日	令和 6 年 3 月 10 日	場所	国立新美術館 3 階講堂	聴講者数（人）	60
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	井田大介（出品作家）、地主麻衣子（出品作家）、ティナ・エングホフ（出品作家）、チャ・ジェミン（出品作家）、エヴァン・ロス（出品作家）				
	内容	展覧会のオープンに際し、出品アーティスト５名（井田大介、地主麻衣子、ティナ・エングホフ、チャ・ジェミン、エヴァン・ロス）を迎えてのリレートークを開催した。それぞれの作家が作品や制作活動について３０分トークを行った。日本語と英語の同時通訳を行った。後日アーカイブ配信も行う。				
14	セミナー・シンポジウム　タイトル	遠距離現在展　徐冰（シュ・ビン）　講演会				
	開催日	令和 6 年 3 月 17 日	場所	国立新美術館 3 階講堂	聴講者数（人）	70
	講師・パネリスト等の氏名（職名）	徐冰（出品作家）				
	内容	出品アーティストの徐冰（シュ・ビン）氏を迎えて、氏の創作活動を紹介する講演会を開催した。徐冰（シュ・ビン）は、1980 年代より、実在しない「偽漢字」や漢字のように見える英文「新英文書法」の創作、絵文字と記号のみで書かれた小説「地書」、廃材を用いたインスタレーション作品などを発表し、アジアを代表するアーティストとして活躍を続けている。５年ぶりの来日となる今回は、本展に出品されている作家にとって初の映像作品《とんぼの眼》とともに、40 年にわたる活動と創作についての講演を日本語と中国語の同時通訳で行った。議日アーカイブ配信を行う。				

様式 1　公表されるべき事項

別紙

独立行政法人国立美術館の役職員の報酬・給与等について

Ⅰ 役員報酬等について

1 役員報酬についての基本方針に関する事項

① 役員報酬の支給水準の設定についての考え方

国立美術館は、美術館を設置して、美術（映画を含む）に関する作品その他資料を収集し、保管して公衆の観覧に供するとともに、これに関連する調査及び研究並びに教育及び普及の事業等を行うことにより、芸術その他の文化の振興を図ることを目的としている。
そうした組織の中で、理事長は、法人全体の活動を総括する一方で、我が国における芸術文化の創造と発展、国民の美的感性の育成を使命とし、美術振興の中心拠点として、高いマネジメント能力やリーダーシップに加え、高度な専門性が求められる。
理事においてもこれら多岐に渡る業務を遂行する理事長の職務を補佐するにあたり、相当の能力と専門性が求められる。
以上により役員報酬の設定にあたっては、国家公務員の指定職、文化分野の保存・活用等を図ることを主要な業務とする他法人の長を参考とした。

② 令和5年度における役員報酬についての業績反映のさせ方（業績給の仕組み及び導入実績を含む。）

独立行政法人国立美術館役員報酬規則により、役員に支給される報酬のうち、期末特別手当においては、文部科学大臣が行う業績評価、役員としての業務に対する貢献度等を総合的に勘案して理事長が決定する評価に基づき、期末特別手当の額の100分の10の範囲内で、これを増額し、又は減額した額とすることができるものとしている。 令和5年度においては、業績反映という観点では、特に顕著な業績や失態がなかったと判断し、役員報酬の増減は行っていない（ただし人事院勧告に基づく報酬額の引上げは実施した）。

③ 役員報酬基準の内容及び令和5年度における改定内容

法人の長

役員報酬支給基準は、月額及び期末特別手当から構成されている。月額については、独立行政法人国立美術館役員報酬規則に則り、俸給月額（965,000円）及び地域手当の月額、並びに俸給月額及び地域手当の月額に100分の20を乗じて得た額、並びに俸給月額に100分の25を乗じて得た額の合計額に、6月に支給する場合においては100分の162．5、12月に支給する場合においては100分の167．5を乗じて得た額としている。また、文部科学大臣が行う業績評価の結果を勘案して、前項の規定による期末特別手当の額の100分の10の範囲内で、これを増額し、又は減額した額とすることができることとしている。
なお、令和5年度においては、人事院勧告に基づき、国家公務員指定職俸給表と同等の報酬額及び期末特別手当支給割合の改定（引上げ）を実施した。

理事

役員報酬支給基準は、法人の長と同様である。月額については、独立行政法人国立美術館役員報酬規則に則り、俸給月額（706，000円から965，000円の範囲内）及び地域手当の月額、並びに俸給月額及び地域手当の月額に100分の20を乗じて得た額、並びに俸給月額に100分の25を乗じて得た額の合計額に、6月に支給する場合においては100分の162．5、12月に支給する場合においては100分の167．5を乗じて得た額としている。また、文部科学大臣が行う業績評価の結果を勘案して、前項の規定による期末特別手当の額の100分の10の範囲内で、これを増額し、又は減額した額とすることができることとしている。
なお、令和5年度の報酬額等改定についても法人の長と同様である。

理事（非常勤）

独立行政法人国立美術館役員報酬規則に則り、非常勤役員手当として月額120,000円としている。なお、令和5年度においては改定は行っていない。

監事（非常勤）

独立行政法人国立美術館役員報酬規則に則り、非常勤役員手当として月額120,000円としている。なお、令和5年度においては改定は行っていない。

２ 役員の報酬等の支給状況

役名	令和5年度年間報酬等の総額				就任・退任の状況		前職
		報酬(給与)	賞与	その他(内容)	就任	退任	
法人の長	千円 19,671	千円 11,616	千円 5,562	千円 2,493 (地域手当) (通勤手当)			※
A理事	千円 13,719	千円 7,466	千円 4,711	千円 1,542 (地域手当) (通勤手当)		R6.1.5	◇
B理事	千円 2,750	千円 2,209	千円 0	千円 541 (地域手当) (通勤手当)	R6.1.6		◇
C理事	千円 11,388	千円 7,386	千円 2,430	千円 1,572 (地域手当) (通勤手当)	R5.7.1		※
D理事 (非常勤)	千円 1,440	千円 1,440	千円 0	千円 0 (　　)			
A監事 (非常勤)	千円 1,440	千円 1,440	千円 0	千円 0 (　　)			※
B監事 (非常勤)	千円 1,440	千円 1,440	千円 0	千円 0 (　　)			

注1:「その他」欄には手当等が支給されている場合は、例えば通勤手当の総額を記入する。
注2:「前職」欄には、役員の前職の種類別に以下の記号を付す。
退職公務員「*」、役員出向者「◇」、独立行政法人等の退職者「※」、退職公務員でその後独立行政法人等の退職者「＊※」、該当がない場合は空欄

3　役員の報酬水準の妥当性について

【法人の検証結果】

法人の長

国立美術館は、美術館を設置して、美術（映画を含む。）に関する作品その他資料を収集し、保管して公衆の観覧に供するとともに、これに関連する調査及び研究並びに教育及び普及の事業等を行うことにより、芸術その他の文化の振興を図ることを目的としている。
そうした組織の中で、理事長は、法人全体の活動を総括する一方で、我が国における芸術文化の創造と発展、国民の美的感性の育成を使命とし、美術振興の中心拠点として、高いマネジメント能力やリーダーシップに加え、高度な専門性が求められる。
また、理事長の年間報酬額は、事務次官の年間給与額（2,323万円）と比較してもそれを下回っている。文化分野の保存・活用を図ることを主要な業務とする他法人の長の年間報酬額（約1,700万円）と比すると200万円超上回っているが、これは地域手当の差に起因するものであって俸給額としては同水準であるため、こうした職務内容の特性や他法人等との比較を踏まえても、報酬水準は妥当であると考えられる。なお、令和5年度報酬総額は令和4年度に比べ増となったが、これは令和5年度人事院勧告に基づき国家公務員指定職と同等の報酬額の改定を行ったためである。

理事

理事の職務においては、上記理事長の多岐に渡る業務を補佐するにあたり、相当の専門性を求めている。その報酬は、国家公務員における指定職俸給表をベースとして算定しており、文化分野の保存・活用等を図ることを主要な業務とする他法人の理事の年間報酬額（約1,600万円）とも同水準となっている。こうした職務内容の特性や他法人等との比較を踏まえると、報酬水準は妥当であると考えられる。

理事（非常勤）

理事（非常勤）については、国家公務員における指定職俸給表1号俸相当をベースに、業務内容、想定勤務日数、勤務状況等を総合的に勘案し算出している。また、文化分野の保存・活用を図ることを主要な業務とする他法人の理事（非常勤）の報酬額との比較を踏まえると、報酬水準は妥当であると考えられる。

監事（非常勤）

監事（非常勤）については、国家公務員における指定職俸給表1号俸相当をベースに、業務内容、想定勤務日数、勤務状況等を総合的に勘案し算出している。また、文化分野の保存・活用を図ることを主要な業務とする他法人の監事（非常勤）の報酬額との比較を踏まえると、報酬水準は妥当であると考えられる。

【主務大臣の検証結果】

職務内容の特性や国家公務員指定職適用官職、他の同規模の独立行政法人、民間企業との比較などを考慮すると、役員の報酬水準は妥当であると考えられる。

4 役員の退職手当の支給状況（令和5年度中に退職手当を支給された退職者の状況）

区分	支給額（総額）	法人での在職期間		退職年月日	業績勘案率	前職
法人の長	千円 該当なし	年	月			
理事	千円 該当なし	年	月			
理事 （非常勤）	千円 該当なし	年	月			
監事 （非常勤）	千円 該当なし	年	月			

注：「前職」欄には、退職者の役員時の前職の種類別に以下の記号を付す。
退職公務員「*」、役員出向者「◇」、独立行政法人等の退職者「※」、退職公務員でその後独立行政法人等の退職者「＊※」、該当がない場合は空欄

5 退職手当の水準の妥当性について

【主務大臣の判断理由等】

区分	判断理由
法人の長	該当なし
理事	該当なし
理事 （非常勤）	該当なし
監事 （非常勤）	該当なし

注：「判断理由」欄には、法人の業績、担当業務の業績及び個人的な業績の検討結果を含め、業績勘案率及び退職手当支給額の決定に到った理由等を具体的に記入する。

6 業績給の仕組み及び導入に関する考え方

当法人においては、期末特別手当について、独立行政法人国立美術館役員報酬規則に則り、文部科学大臣が行う業績評価の結果を勘案して、前項の規定による期末特別手当の額の100分の10の範囲内で、これを増額し、又は減額した額とすることができることとしている。

Ⅱ 職員給与について

1 職員給与についての基本方針に関する事項

① 職員給与の支給水準の設定等についての考え方

独立行政法人通則法第50条の10第3項に基づき、業務の実績を考慮し、かつ、社会一般情勢（国家公務員の給与水準）に適合するよう、学歴、試験、経験及び職務の責任の度合いを基に給与水準を決定している。

② 職員の発揮した能率又は職員の勤務成績の給与への反映方法についての考え方（業績給の仕組み及び導入実績を含む。）

勤務評定等の結果を踏まえた勤務成績を考慮し、昇格、昇給の実施及び勤勉手当の成績率の決定を行っている。

〔能率、勤務成績が反映される給与の内容〕

給与種目	制度の内容
俸給月額（昇格）	従事する職務に応じ、かつ、総合的な能力の評価により1級上位の級に昇格させることができる。
俸給月額（昇給）	昇給期間における勤務成績等に応じて、上位の号俸に昇給させることができる。
賞与：勤勉手当（査定分）	基準日以前6箇月以内の期間における、勤務成績に応じて決定される支給割合（成績率）に基づき支給される。

③ 給与制度の内容及び令和5年度における主な改定内容

独立行政法人国立美術館職員給与規則に則り、俸給及び諸手当（扶養手当、地域手当、住居手当、通勤手当、単身赴任手当、超過勤務手当、休日出勤手当、夜勤手当、管理職手当、主任研究員手当、期末手当及び勤勉手当）としている。
期末手当については、期末手当基準額（俸給＋扶養手当＋地域手当＋役職段階別加算額＋管理職加算額）に支給割合を乗じ、さらに基準日以前6箇月以内の期間におけるその者の在職期間に応じた割合（在職期間別割合）を乗じて得た額としている。
勤勉手当については、勤勉手当基準額（俸給＋地域手当＋役職段階別加算額＋管理職加算額）に成績率を乗じ、さらに基準日以前6箇月以内の期間におけるその者の在職期間に応じた割合（期間率）を乗じて得た額としている。
なお令和5年度は、国家公務員の給与改定に準拠し、①人事院勧告による官民較差等の状況を踏まえ、俸給水準を平均1.1％引き上げ（令和6年1月期において令和5年4月に遡及して引き上げを実施）、②期末手当支給割合及び勤勉手当成績率の引き上げ（年間0.1ヶ月分※各手当に0.05ヶ月分ずつ配分）の改定等を実施した。

2 職員給与の支給状況

① 職種別支給状況

区分	人員	平均年齢	令和5年度の年間給与額(平均)			
			総額	うち所定内	うち通勤手当	うち賞与
	人	歳	千円	千円	千円	千円
常勤職員	104	45.9	8,020	5,917	153	2,103
事務・技術	49	42.2	6,605	4,852	169	1,753
研究職種	55	49.3	9,281	6,867	138	2,414
技能・労務職種	—	—	—	—	—	—
任期付職員	9	48.4	10,180	7,378	119	2,802
研究職種	5	33.3	6,115	4,491	89	1,624
指定職種	4	67.3	15,262	10,987	158	4,275
再任用職員	—	—	—	—	—	—
研究職種	—	—	—	—	—	—
非常勤職員	44	47.3	6,138	6,116	129	22
事務・技術	19	47.8	5,194	5,143	116	51
研究職種	25	47	6,856	6,856	140	0

注1: 常勤職員については、在外職員、任期付職員及び再任用職員を除く。

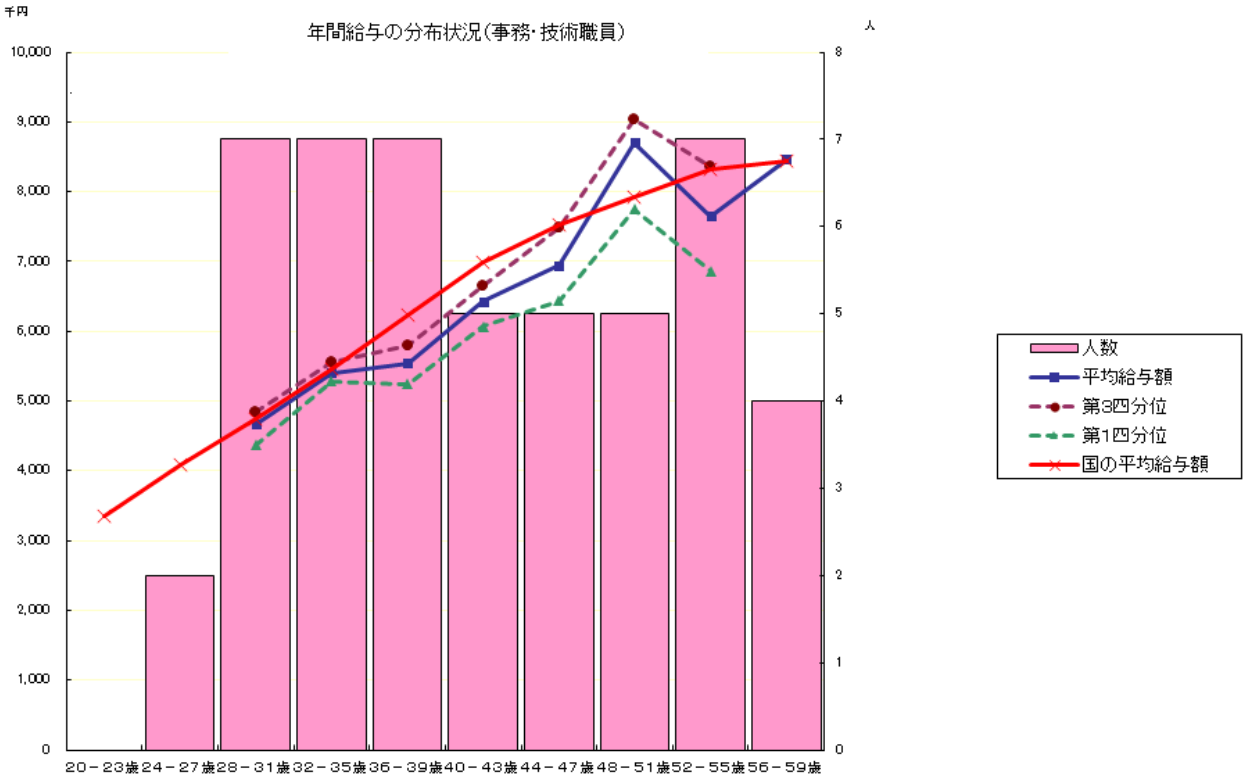
注2: 技能・労務職種とは、守衛の業務、又は映写技術に関する業務に従事する職種をいう。

注3: 技能・労務職種の該当者は2人以下の為、当該個人に関する情報が特定されるおそれのあることから、職種のみ記載している。

注4: 再任用職員の該当者は2人以下の為、当該個人に関する情報が特定されるおそれのあることから、該当者のいる職種のみ記載している。

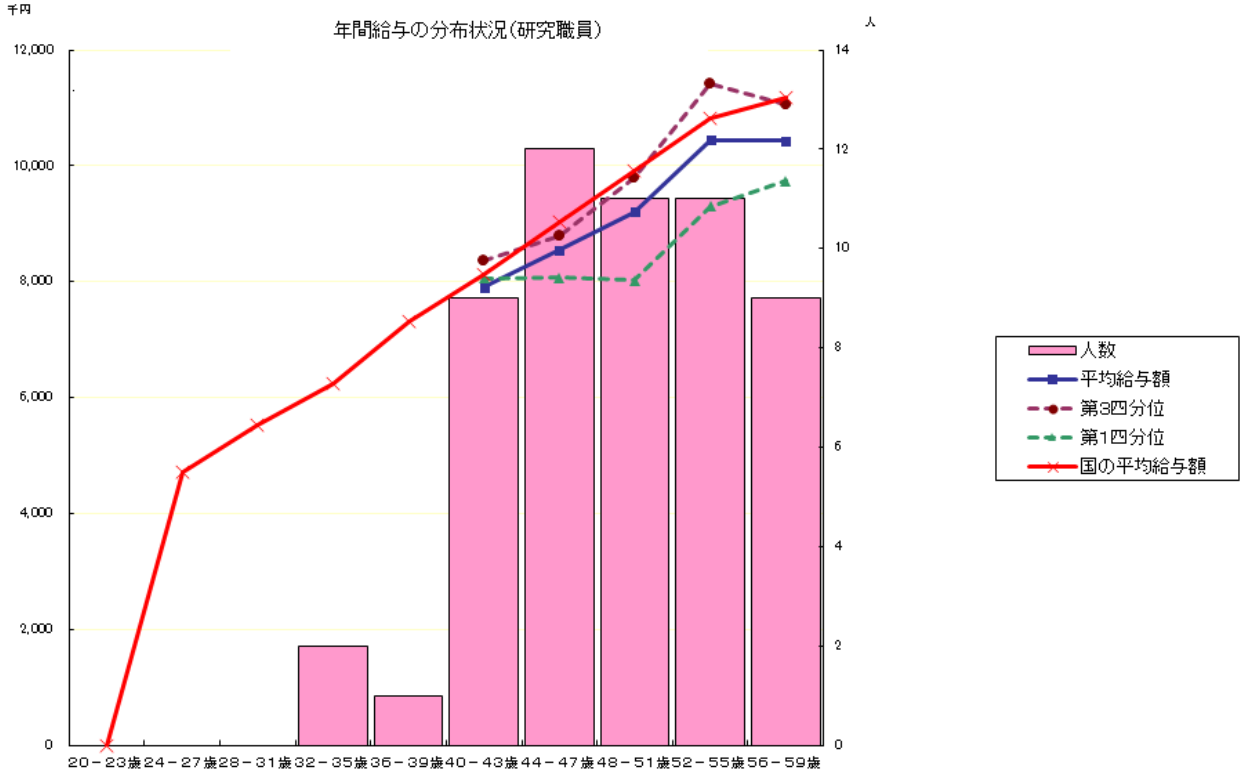
注5: 常勤職員、非常勤職員のうち医療職種(病院医師)、医療職種(病院看護師)及び教育職種(高等専門学校教員)、在外職員については、該当する者がないため欄を省略した。

② 年齢別年間給与の分布状況（事務・技術職員／研究職員〔在外職員、任期付職員及び再任用職員を除く。以下、④まで同じ。〕



注1：①の年間給与額から通勤手当を除いた状況である。以下、④まで同じ。

注2：年齢24-27歳及び56歳-59歳の該当者については4人以下のため、当該個人に関する情報が特定されるおそれがあることから、第1・第3四分位を表示していない。



注3：32歳-35歳、36歳-39歳の該当者については4人以下のため、当該個人に関する情報が特定されるおそれがあることから、第1・第3四分位を表示していない。

③ 職位別年間給与の分布状況（事務・技術職員／研究職員）

（事務・技術職員）

分布状況を示すグループ	人員	平均年齢	年間給与額		
			平均	最高～最低	
	人	歳	千円	千円	千円
代表的職位					
本部部長	2				
本部室長	3	54.5	7,833		
本部係長	5	42.9	6,191	6,859	5,557
本部主任	4	35.8	5,540		
本部係員	7	31.6	4,816	5,361	4,241
地方課長	3	49.5	8,821		
地方室長	4	50.5	8,031		
地方係長	12	47.1	6,690	8,066	5,440
地方主任	4	35.5	5,239		
地方係員	5	31.1	4,505	5,118	4,128

注1：本部部長の該当者は2人以下のため、当該個人に関する情報が特定されるおそれがあることから、平均年齢以下の項目を記載していない。

注2：本部室長、本部主任、地方課長、地方室長、地方主任の該当者は4人以下のため、当該個人に関する情報が特定されるおそれがあることから、最高～最低を記載していない。

（研究職員）

分布状況を示すグループ	人員	平均年齢	年間給与額		
			平均	最高～最低	
	人	歳	千円	千円	千円
代表的職位					
本部学芸担当課長	1				
副館長	2				
学芸課長	7	53.6	11,130	12,290	8,271
主任研究員	42	49.0	8,813	10,080	7,365
研究員	3	37.5	5,656		

注1：本部学芸担当課長、副館長の該当者は2人以下のため、当該個人に関する情報が特定されるおそれがあることから、平均年齢以下の項目を記載していない。

注1：研究員の該当者は4人以下のため、当該個人に関する情報が特定されるおそれがあることから、最高～最低を記載していない。

④ 賞与（令和5年度）における査定部分の比率（事務・技術職員／研究職員））

（事務・技術職員）

区分		夏季（6月）	冬季（12月）	計
管理職員	一律支給分（期末相当）	% 45.6	% 45.9	% 45.7
	査定支給分（勤勉相当）（平均）	% 54.4	% 54.1	% 54.3
	最高～最低	% 56.2～52.4	% 54.7～53.5	% 54.9～53.6
一般職員	一律支給分（期末相当）	% 54.6	% 54.4	% 54.5
	査定支給分（勤勉相当）（平均）	% 45.4	% 45.6	% 45.5
	最高～最低	% 49.8～42.4	% 48.6～43.0	% 47.3～42.9

（研究職員）

区分		夏季（6月）	冬季（12月）	計
管理職員	一律支給分（期末相当）	% 45.0	% 45.3	% 45.2
	査定支給分（勤勉相当）（平均）	% 55.0	% 54.7	% 54.8
	最高～最低	% 56.2～53.6	% 55.9～53.5	% 54.9～54.8
一般職員	一律支給分（期末相当）	% 54.6	% 54.2	% 54.4
	査定支給分（勤勉相当）（平均）	% 45.4	% 45.8	% 45.6
	最高～最低	% 49.8～43.2	% 49.8～43.1	% 49.8～43.8

3 給与水準の妥当性の検証等

事務・技術職員

項目	内容
対国家公務員 指数の状況	・年齢勘案　96.4 ・年齢・地域勘案　90.0 ・年齢・学歴勘案　94.3 ・年齢・地域・学歴勘案　88.3
国に比べて給与水準が高くなっている理由	該当なし
給与水準の妥当性の検証	【国からの財政支出について】 支出予算の総額に占める国からの財政支出の割合　79.8% (国からの財政支出額　8,523百万円, 支出予算の総額　10,677百万円:令和5年度予算) 累積欠損額　0円(令和5年度決算) 支出総額に占める給与・報酬等支給額の割合　11.2% (支出総額(令和5年度決算ベース)　10,948,805千円, 給与・報酬等支出総額　1,227,552千円) 管理職の割合　4%(常勤職員数49名中2名) 大卒以上の割合　93.8%(常勤職員数49名中46名) (法人の検証結果) 俸給表、諸手当等の給与体系は国家公務員に準拠しており、国からの財政支出の割合は大きいものの、対国家公務員指数(年齢勘案は国を3.6ポイント下回っており、令和5年度の事務職員の給与水準は適切なものであると認識している。 (主務大臣の検証結果) 法人の職員の給与水準は、職務の特性や国家公務員、民間企業の従業員の給与等を勘案し、設定の考え方を明らかにすることが求められており、国家公務員と比べて給与水準が高い法人は、その合理性及び妥当性について、説明責任を果たすべきこととされている。(独立行政法人改革等に関する基本的な方針(平成25年12月24日閣議決定)) 当該法人は、国家公務員の給与及び業務の実績等を総合的に勘案したうえで、職員の給与水準を設定しており、法人における給与水準の妥当性の検証結果から、適切な対応が執られていると考える。引き続き、適切な給与水準の設定に努めていただきたい。
講ずる措置	引き続き適正な給与水準を維持する。

研究職員

項目	内容
対国家公務員 指数の状況	・年齢勘案　94.9 ・年齢・地域勘案　94.0 ・年齢・学歴勘案　94.7 ・年齢・地域・学歴勘案　93.9
国に比べて給与水準が高くなっている理由	該当なし
給与水準の妥当性の検証	【国からの財政支出について】 支出予算の総額に占める国からの財政支出の割合　79.8% (国からの財政支出額　8,523百万円, 支出予算の総額　10,677百万円:令和5年度予算) 累積欠損額　0円(令和5年度決算) 支出総額に占める給与・報酬等支給額の割合　11.2% (支出総額(令和5年度決算ベース)　10,948,805千円, 給与・報酬等支出総額　1,227,552千円) 管理職の割合　3.6%(常勤職員数55名中2名) 大卒以上の割合　100%(常勤職員数55名中55名) (法人の検証結果) 俸給表、諸手当等の給与体系は国家公務員に準拠しており、国からの財政支出の割合は大きいものの、対国家公務員指数(年齢勘案は国を5.1ポイント下回っており、令和5年度の研究職員の給与水準は適切なものであると認識している。 (主務大臣の検証結果) 法人の職員の給与水準は、職務の特性や国家公務員、民間企業の従業員の給与等を勘案し、設定の考え方を明らかにすることが求められており、国家公務員と比べて給与水準が高い法人は、その合理性及び妥当性について、説明責任を果たすべきこととされている。(独立行政法人改革等に関する基本的な方針(平成25年12月24日閣議決定)) 当該法人は、国家公務員の給与及び業務の実績等を総合的に勘案したうえで、職員の給与水準を設定しており、法人における給与水準の妥当性の検証結果から、適切な対応が執られていると考える。引き続き、適切な給与水準の設定に努めていただきたい。
講ずる措置	引き続き適正な給与水準を維持する。

4 モデル給与

（扶養親族がいない場合）
○ 22歳（大卒初任給）
月額 196，200円 年間給与 2，749，000円
○ 35歳（本部主任）
月額 322，680円 年間給与 5，369，000円
○ 50歳（本部室長）
月額 445，080円 年間給与 7，504，000円
※扶養親族がいる場合には、扶養手当（配偶者6，500円、子1人につき10，000円）を支給

5 業績給の仕組み及び導入に関する考え方

昇格、昇給の実施及び勤勉手当の成績率の判定については、規則に基づく勤務の評定、または業務において特に優秀な成績を修めた職員の勤務成績を考慮している。

Ⅲ 総人件費について

区　分	令和3年度	令和4年度	令和5年度
給与、報酬等支給総額 (A)	千円 992,509	千円 1,083,746	千円 1,227,552
退職手当支給額 (B)	千円 112,376	千円 61,742	千円 48,913
非常勤役職員等給与 (C)	千円 585,488	千円 637,048	千円 739,188
福利厚生費 (D)	千円 239,529	千円 247,110	千円 303,419
最広義人件費 (A＋B＋C＋D)	千円 1,929,902	千円 2,029,646	千円 2,319,072

注：中期目標管理法人及び国立研究開発法人については中期目標期間又は中長期目標期間の開始年度分から当年度分までを記載する。行政執行法人については当年度分を記載する。

総人件費について参考となる事項

法人内に令和4年3月28日付けで設置された国立アートリサーチセンターの運営のため、採用等人員の拡充が行われたため、常勤職員・非常勤職員ともに増となり、「給与、報酬等支給総額」は対前年度比113%、「非常勤役職員給与」は対前年度比116%となった。
また、これに伴い社会保険料額等による「福利厚生費」の増加があった（前年度比123%）。
「退職手当支給額」は、前年度に比べ退職者が少数となったため減じた（前年度比79%）。
これらを総合して、「最広義人件費」は対前年度比114%となった。

Ⅳ その他

事務・技術職員及び研究職員の定年年齢は65歳であり、令和5年4月1日に定年年齢を60歳から65歳に引き上げた（ただし段階的な引上げのため、令和13年度に制度完成予定）。定年年齢の引上げに伴い、60歳に達した管理監督職の職員は非管理監督職に降任する制度を設けているほか、職員の基本給について60歳に達する年度から7割水準とすることとした。